天理市埋蔵文化財調査概報

平成17年度（2005）

2010

天理市教育委員会

例　言

1．本書は、天理市教育委員会が平成17年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。本概報には目次に示した遺跡についての調査概要を収録している。

2．調査は天理市教育委員会文化財課文化財係が実施し、青木勘時（技術吏員・現係長）、北口聡人（技術員・現主事）、清岡廣子（嘱託・現香芝市教育委員会）がそれぞれの現地調査を担当した。

また、現地調査、遺物整理から本書の作成に至るまでに下記の整理補助員、学生諸氏の御助力を得た。記して謝意を表する。

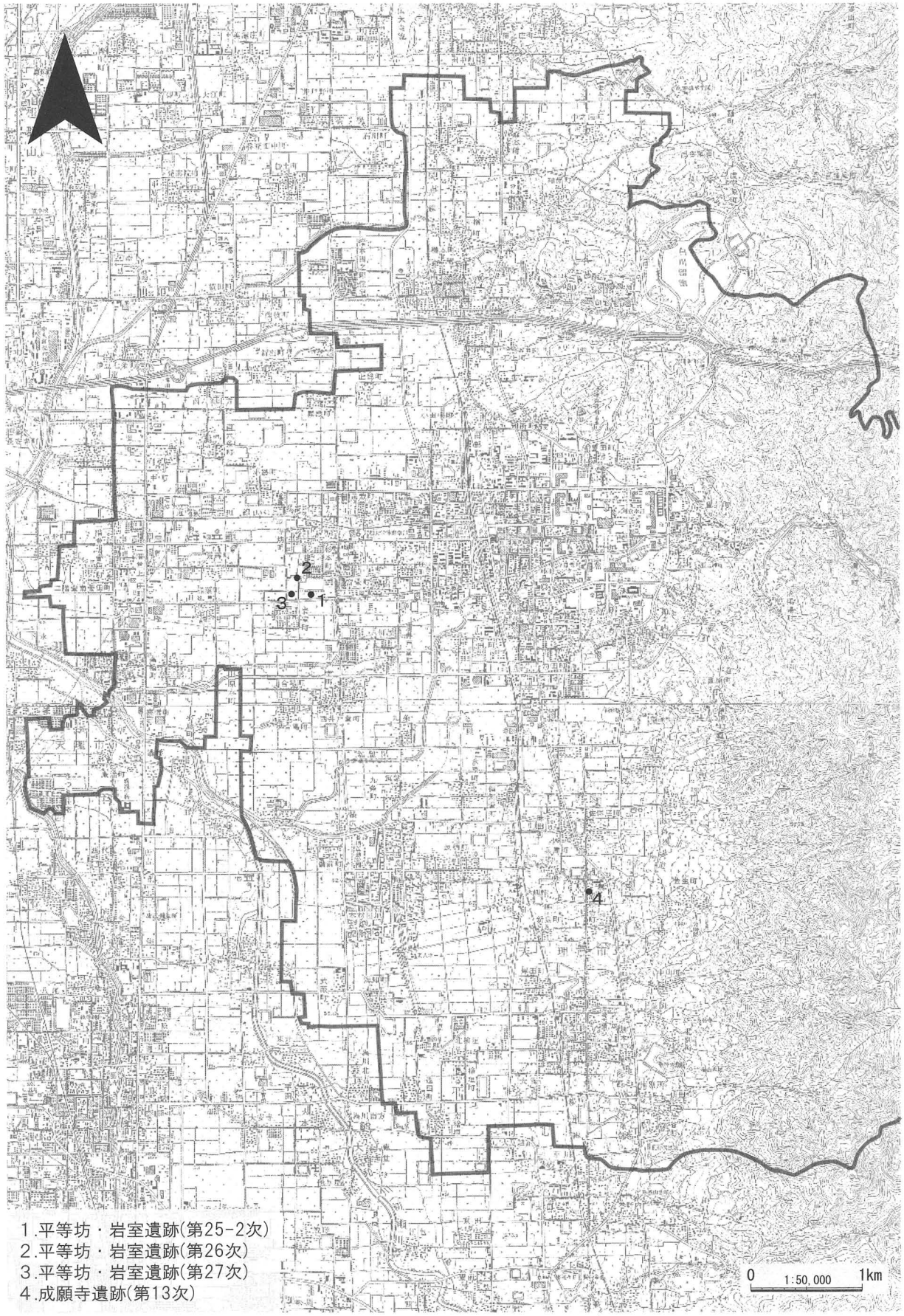
芳村信芳　中森軍之介　中森冨美代　河喜多淑子　藤岡早紀
松本真並（天理大学卒業生）　福家恭（天理大学・現桜井市教育委員会）
安原貴之（天理大学・現奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）
石田大輔（京都大学大学院・現天理市教育委員会）
今井和代（天理大学・現奈良女子大学大学院）
島田智子（天理大学）　村下博美・中西宏昌（天理大学）
伊東由実（奈良大学卒業生）

3．本概報の執筆は、それぞれの調査担当者が分担し、編集は青木がおこなった。

4．遺構図の座標表示は、日本測地系による。

目　次

□平成17年度調査地点位置図
■平成17年度（2005年）
1．平等坊・岩室遺跡（第25-2次）……（青木・今井）… 1
2．平等坊・岩室遺跡（第26次）……（青木・今井）… 37
3．平等坊・岩室遺跡（第27次）……（北口）… 69
4．成願寺遺跡（第13次）……（青木）…101



平成15年度　発掘調査地点位置図

1．平等坊・岩室遺跡（第 25-2 次）－平等坊町

Ⅰ．はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代から古墳時代にかけての拠点集落遺跡である。地理的には盆地東部山麓の谷筋から派生して市内中央部を西流する布留川によって形成した扇状地下方に展開する沖積平野上に立地する。

遺跡の範囲は東西約 400m、南北約 600m と推定され、これまでに遺跡北半部を中心に実施された発掘調査の成果により弥生環濠集落の出現から終焉、あるいは古墳時代集落への移行に至るまでの集落変遷と動態が把握されつつある。

当遺跡においては、平成３（1991）年実施の第８次調査以降に宅地造成、店舗建設などの開発行為が相次ぎ、急激かつ大幅な景観の変化が近年までに見られている。

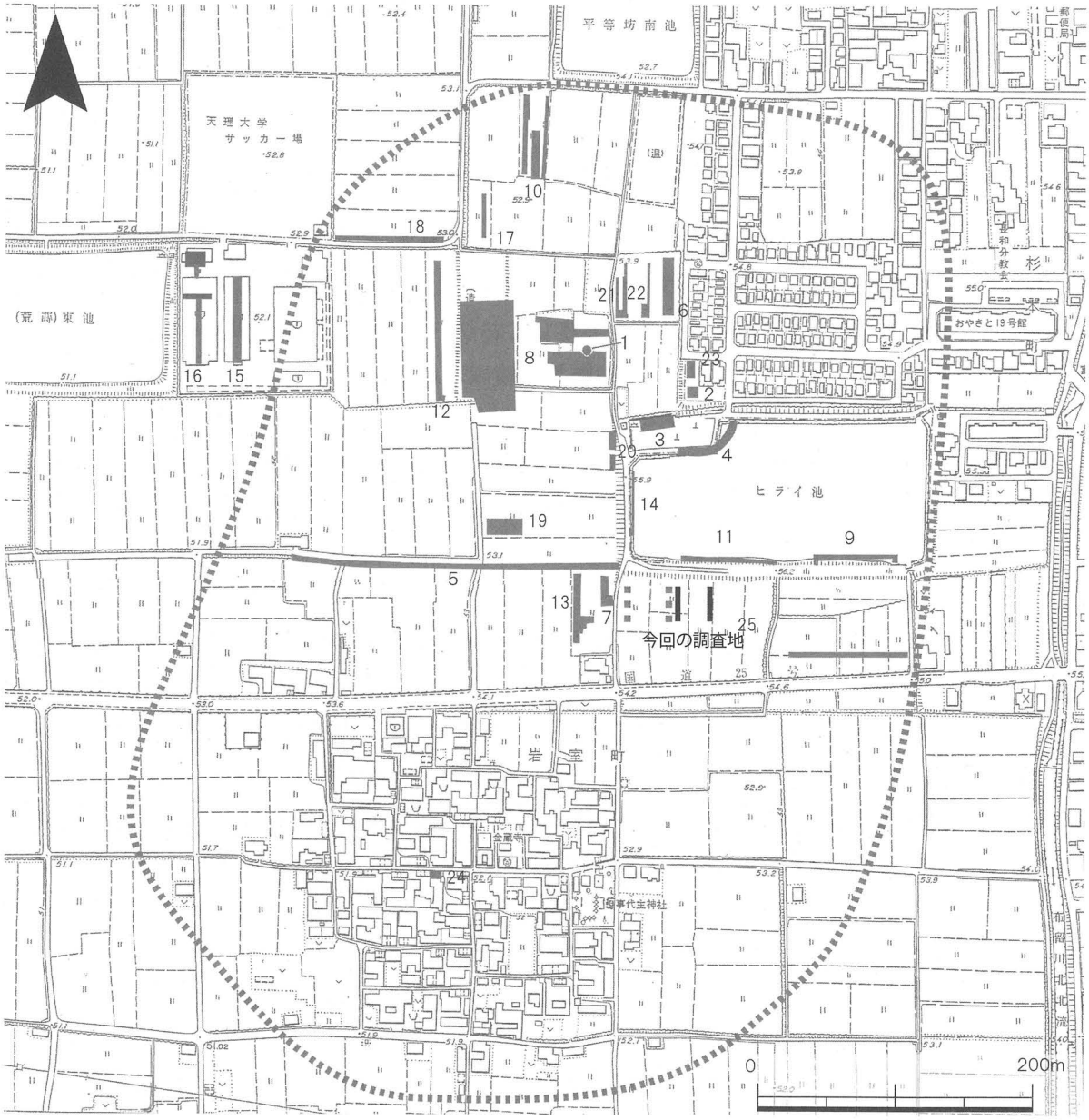


図１　今回の調査地と既往の調査地点位置図（S＝1/5000）

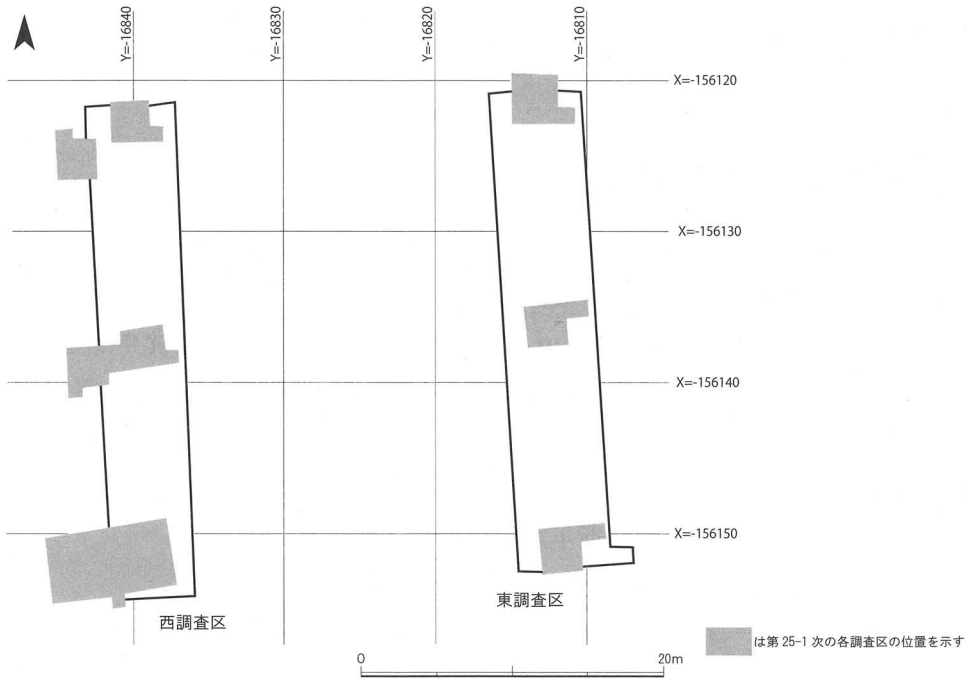


図２　今回の調査区配置と第 25-１次調査区（S＝1/500）

Ⅱ．調査の契機と経過

１．調査の契機

今回の調査は、平等坊・岩室遺跡の西縁辺において計画された商業店舗建設の事前調査として実施したものである。しかしながら、当該開発対象地内においては、前年度末の平成 17 年１月～３月に同一の契機による発掘調査（第 25-1 次・註１）を実施しており、その際に弥生前期～古墳前期にかけての時期に帰属する多くの溝、河川状堆積に伴う砂層等が検出されている。

今次の調査では、第 25-1 次調査時の開発対象地東側北部の店舗建設予定地についての建物基礎工事内容に設計変更が生じたため、新たに調査が必要と判断された部分での補足的な発掘調査を実施した。そのため今次調査区の位置は第 25-1 次調査時の調査区（グリッド）と重複した位置関係にあり、調査次数についても第 25-2 次調査としておこなった。

２．調査の方法と経過

調査区の設定にあたっては、基礎工事内容に計画変更があった店舗建物の東西側縁に南北方向のトレンチ調査区を２ヶ所配置し、それぞれ西調査区、東調査区として調査を進行した。

調査対象地では、既に前回の第 25-1 次調査後には敷地内の造成工事をおこなっていたため、各調査区における重機掘削時には、この造成土および旧耕作土下面の現地表面下 1.5m付近までの排土、掘削を進め、以下の遺物包含層、遺構検出面については人力掘削とベルトコンベアによる排土排出により調査を進行するものとした。その際、各調査区内における前次の調査区（グリッド）の再掘削はおこなわず、結果的に各グリッド調査区間を掘削、拡張することにより遺構、遺構検出面等の連続性の把握に努めた。

なお、調査の進行にあたり、東西両調査区の重機掘削後はほぼ同時進行で堆積層序、遺構間の繋がりを検証しつつ進めるように心掛けた。

現地における調査は平成 17 年４月 11 日より開始し、同年５月 27 日にすべての調査にかかる作業を終了した。総調査面積は 172 ㎡であった。

Ⅲ．層序と検出遺構

１．西調査区

（１）層序

西調査区における基本層序は以下の通りである。なお、以下に示す層序の上位には先行工事により造成工事の際の盛土が存在した。

第Ⅰ層：旧耕作土

第Ⅱ層：床土および上部堆積層

第Ⅲ層：黒褐～灰褐色シルト・粘質土（遺物包含層）

第Ⅳ層：にぶい黄褐～淡褐色シルト（下層遺物包含層）

第Ⅴ層：浅黄～灰褐・黒褐色粘土（基盤層・地山）

近年までの耕作に伴う上位の第Ⅰ・Ⅱ層以下では、標高52.2mから52.6m付近までに残る弥生前期～中期末頃までの遺物を含む第Ⅲ層が遺存する。上部からの耕作痕跡による削平が著しく、低い標高値で遺構検出面となる調査区南半においては層厚0.15～0.25mと薄く堆積するが、調査区北半北部付近では段差をもって高い位置で検出され、層厚も0.4mと厚くなっていた。

この第Ⅲ層の下面では主要な遺構群の検出面となるが、調査区北半では自然河道WNR01および大溝WSD01の上部に微砂混じりの砂質土・シルトを基調とした覆土相当層を介在し、以下が第Ⅴ層（基盤層）となる。また、調査区南半の南端付近にのみ基盤層となる第Ⅴ層の上部に堆積し弥生前期～中期初頭までの遺物を微量に含み下層遺物包含層となる第Ⅳ層が標高51.0m前後まで層厚0.2m程で見られた。

（２）検出遺構

大溝２条、自然河道１条のほかに土坑、井戸、溝、小穴等を検出している。

調査区北半では、自然河道WNR01（弥生前期）と大溝WSD01（弥生中期前半）を重複して検出し、自然河道WNR01の多量の洪水砂による埋没後に大溝WSD01が開削されたことが窺えた。また、調査区南端においても大溝WSD02（弥生中期前半）を検出しており、先述の大溝WSD01とともに北東～南西に弧状に巡ることから多重環濠を形成したものと思われる。

他にも自然河道と大溝の埋没以降の遺構として、底部を打ち欠いた土器（甕）の口縁を合わせ口にして大型甕の井戸枠転用による井戸WSK003（弥生中期後半）や土坑WSK002（弥生中期後半～末）を検出している。

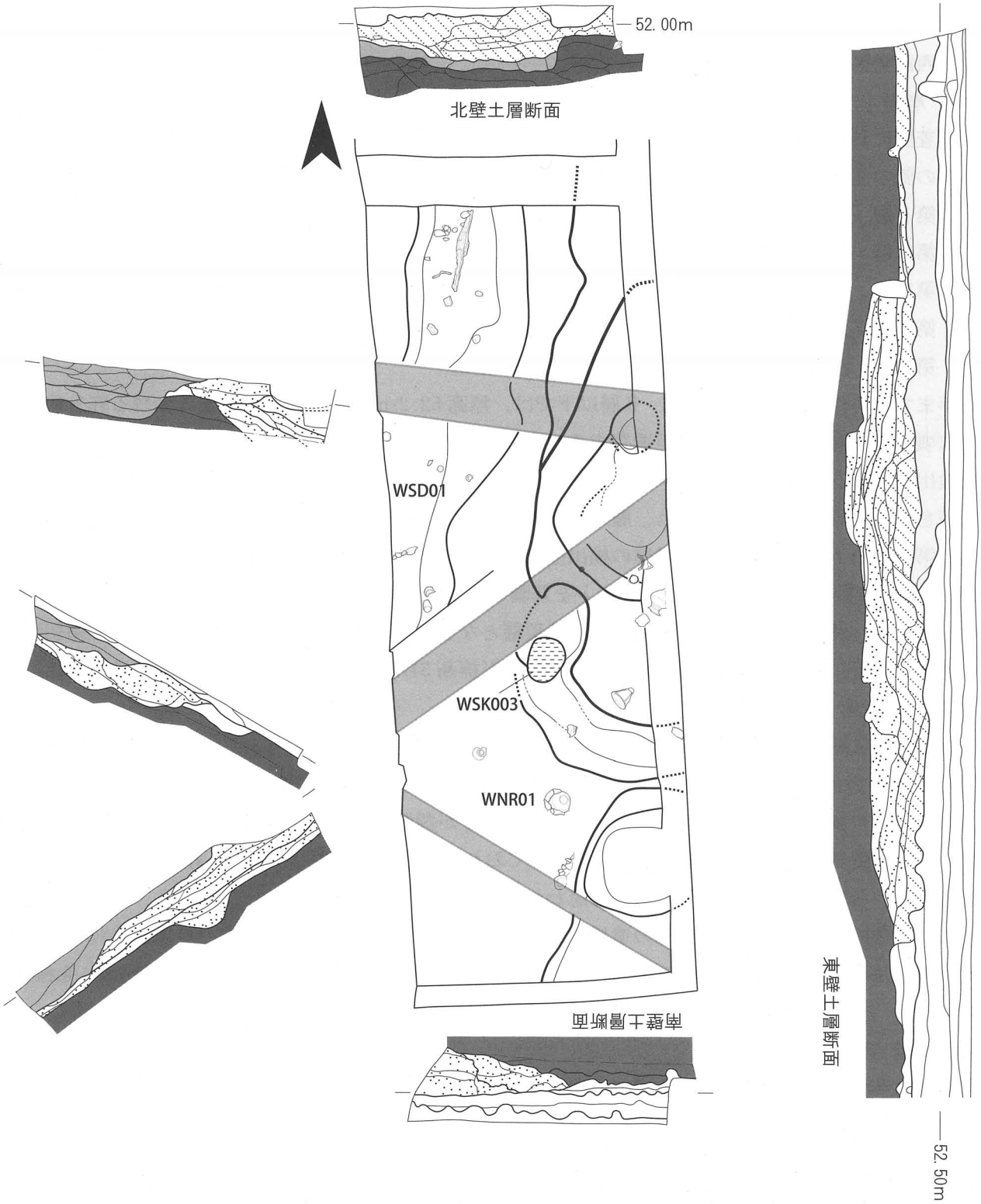
自然河道WNR01

調査区北半南東の大半を占める位置で検出しており、上面の一部に後述の大溝WSD01の南端が重複する。調査区北半の東壁と南壁の土層断面にそれぞれ北辺と南辺の岸が確認され、河道幅は推定５m前後と考えられる。深さは検出面から最深部までで約1.2mであり南西方に向かって深くなっている。

埋土は上部が灰色シルト・細砂であり、肩部付近にのみ黒褐色砂質土のブロックが見られた。下部は基盤層の見える底面までに灰白～黄褐色微砂・細砂と灰色粗砂の互層が堆積する。全体としては流れ込みに伴う灰白～褐灰色の砂層堆積が主体となり、完形土器を含む多くの弥生前期土器が出土している。

大溝WSD01

調査区北半北西寄りの位置で検出しており、重複関係から前述の自然河道WNR01埋没後に開削された溝であることがわかる。上面検出時の溝幅は約２m前後で、深さは最深部までで0.6m程度である。断面形状は基本的に逆台形であるが、中位から上方にかけては外方に拡張して段状を成す。



第Ⅲ層（遺物包含層）

自然河道 WNR01 および
大溝 WSD01 上面の覆土

大溝 WSD01 埋土

自然河道 WNR01 埋土

第Ⅴ層（地山）

図３　西調査区北半の平面・土層図（S＝1/80）

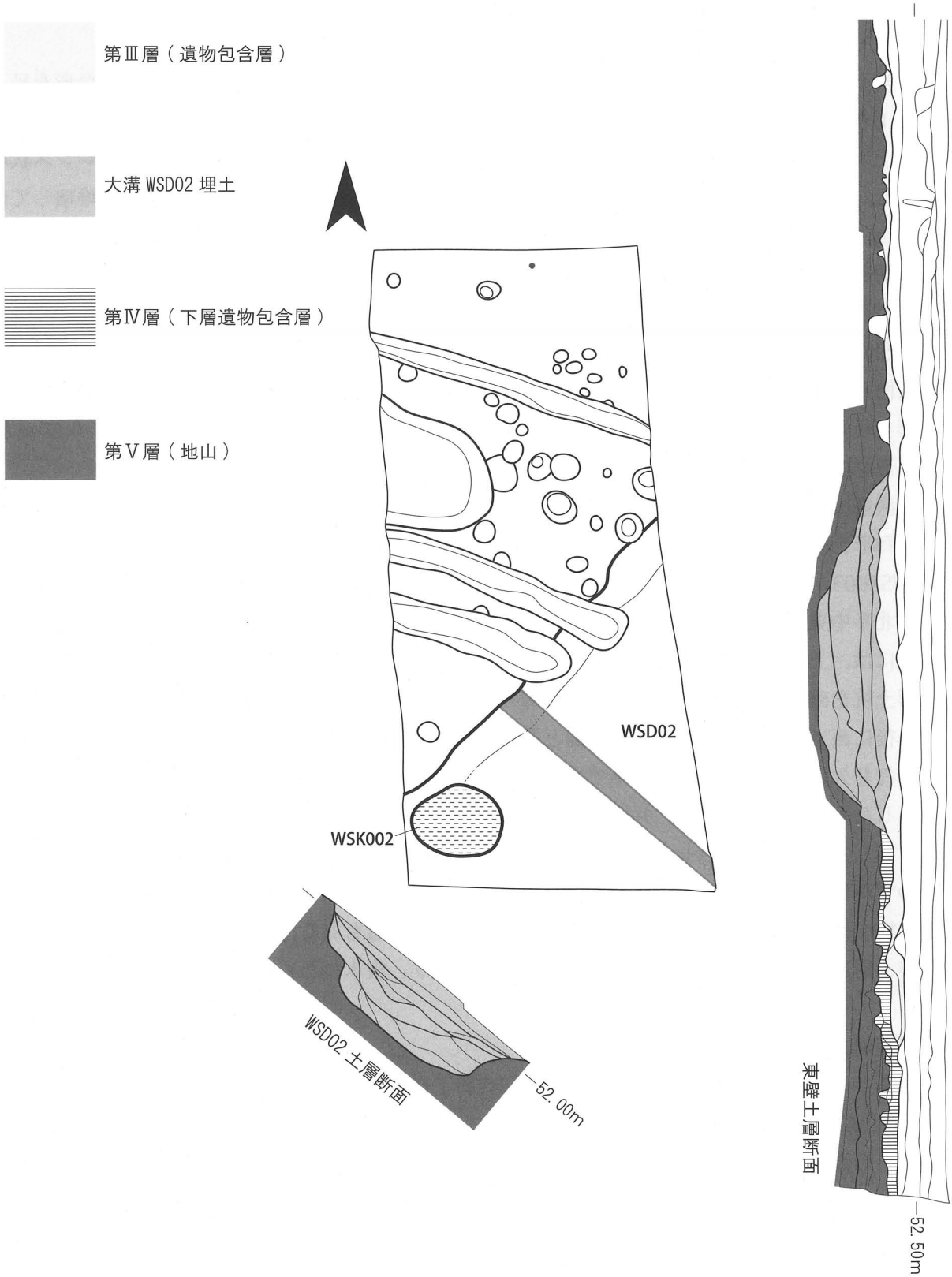


図４　西調査区南半の平面・土層図（S＝1/80）

埋土は上層が暗褐～黒褐色砂質土、下層が黒褐色砂混じり粘質土～粘土である。遺物は上層の下部付近から下層上半にかけて弥生中期前半の土器や石庖丁等の石器類が出土しているが、全体量は多くはなかった。

大溝 WSD02

調査区南半の南東隅で北岸辺のみ検出した北東～南西方向の大溝である。断面形状は逆台形を呈し、深さは約 1.0mである。土層断面から溝幅は３m前後と考えられる。

埋土は上半が灰黄褐～暗褐色砂質土で、その下部には遺物を比較的多く含む黒色粘土のレンズ状堆積が見られた。また、下半では褐灰～黒褐色の砂・シルト混じり粘質土を基調して底面から堆積していたが遺物の出土はわずかであった。こうした堆積状況より、溝の再掘削がおこなわれたことが窺える。

遺物は溝肩部から法面にかけての埋土上半を主体として出土しており、弥生中期前半～後半にかけての土器片が見られたが数量的にはさほど多くなかった。

土坑 WSK002

調査区南西隅で検出している。前述の大溝 WSD02 埋没後の上面より掘り込まれた土坑である。平面形は楕円形を呈し、東西長辺幅 1.2m、南北短辺幅 1.0mの規模をもつ。深さは、検出面より 0.25mと浅く、断面形状は浅い半円形を呈する。埋土は暗褐色粘土のほぼ単層であった。

遺物は溝底面より検出時の上面まで密に出土しており、弥生中期後半～末の凹線文、簾状文施文の壺、高杯や大和形、瀬戸内形の甕等が出土している。

井戸 WSK003

調査区北半中央で検出している。前述の自然河道 WNR01 埋没後の上面検出遺構の一つである。

検出時には、上面において倒立させた大型甕を据付けた状況が見られ、その掘り方となる径 0.6m前後の円形土坑を確認した。当初は上部の甕内部の埋土を除去しつつ下部の甕口縁部の存在を確認したため、その後に西半部の断ち割りにより断面と据付け状況の観察をおこなった。その結果、上下ともに底部のみを打ち欠いて胴部から口縁部までを残す大型甕を２点使用し、両者の口縁部を合わせ口にして井筒に利用したものと判断できた。井筒となる合わせ口の甕の上端から掘り方土坑の底面までは約 0.75mあり、掘り方埋土は黒褐色シルトであった。井筒となる甕内部の埋土はほぼ細砂や砂質土に限られ、遺物はわずかに小片で含まれていたのみである。

この遺構の性格については、下部に湧水層となる河道砂礫層もあるために一応は井戸状遺構として判断したが、周辺にはこの遺構と連なるような弧状溝があり、集水のための遺構とも考えられるものである。

下層遺構面

調査区南半においてのみ、上層検出遺構面の調査終了後に第Ⅳ層（下層遺物包含層）の掘削と第Ⅴ層（基盤層）上面での遺構精査、検出をおこなったが、小規模な小穴、自然地形の凹凸を検出したに留まり、南西方向への傾斜地形を確認するに至った。遺物量も微量であったが、概ね弥生前期の範疇と思われた。

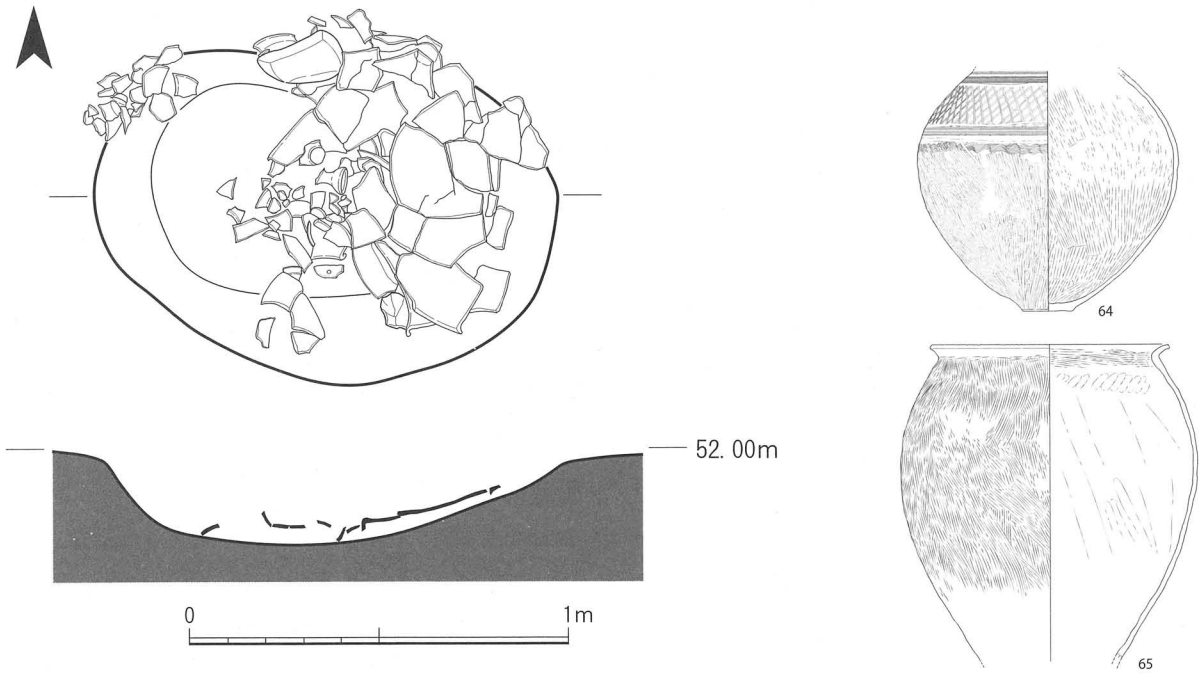
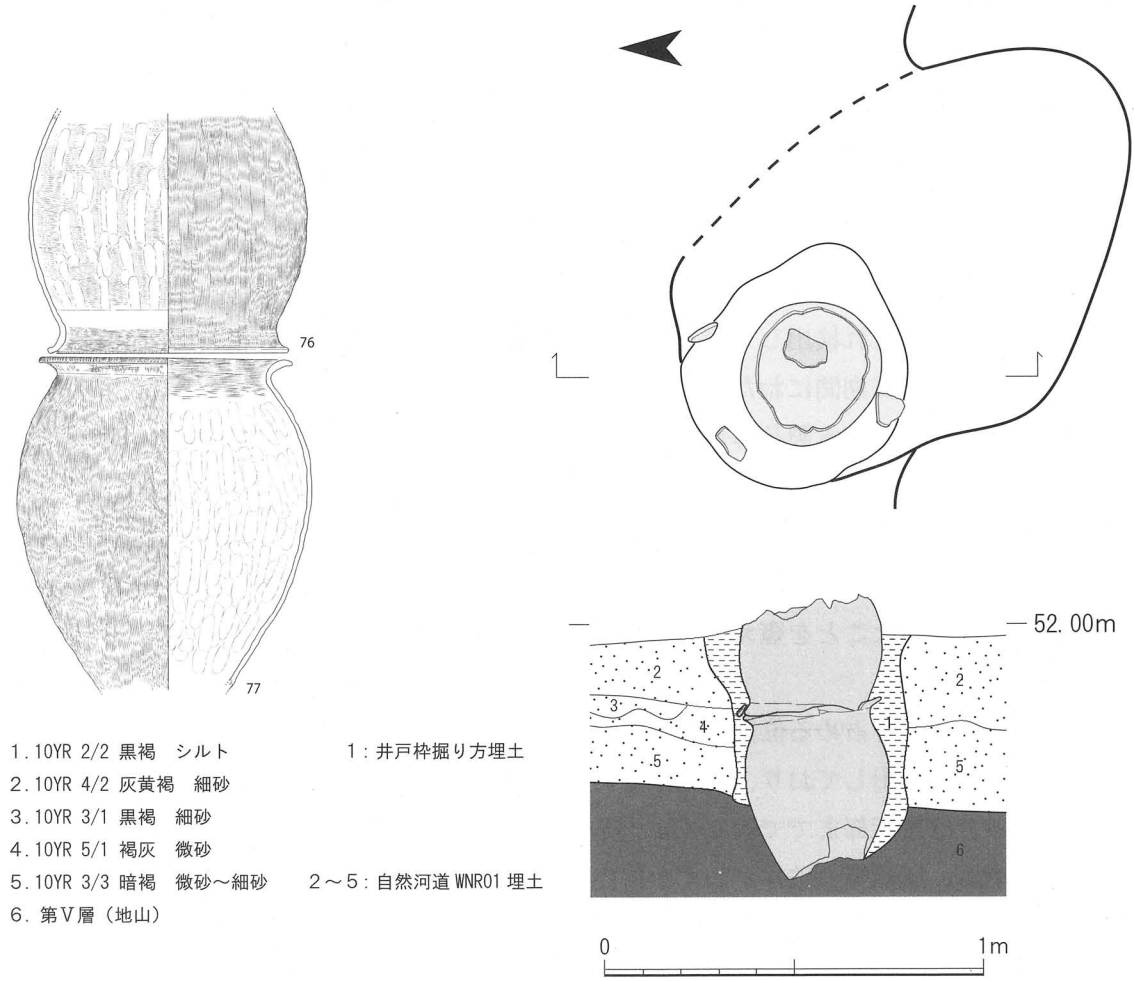


図７　土坑 WSK002 平面・断面図（S＝1/20・土器図 S＝1/10）



1. 10YR 2/2 黒褐　シルト
2. 10YR 4/2 灰黄褐　細砂
3. 10YR 3/1 黒褐　細砂
4. 10YR 5/1 褐灰　微砂
5. 10YR 3/3 暗褐　微砂～細砂
6. 第Ⅴ層（地山）

1：井戸枠掘り方埋土

2～5：自然河道 WNR01 埋土

図８　井戸 WSK003 平面・土層断面図（S＝1/20・土器図 S＝1/10）

２．東調査区

（１）層序

東調査区における基本的な層序は以下の通りである。西調査区と同様に上位には造成土の盛土が存在した。また、西調査区と比べて全体に南東方向に向けて標高が低く、そのためか第Ⅲ層および第Ⅳ層の層相は異なる状況を呈している。

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：床土

第Ⅲ層：黒褐色砂質シルトおよび褐灰～褐色粗砂混じりシルト（遺物包含層）

・下部は褐灰～褐色粗砂・シルト・粘土の互層

第Ⅳ層：にぶい黄橙～暗褐色シルト・粘質土（下層遺物包含層）

第Ⅴ層：黄灰～黒褐色粘土（基盤層・地山）

調査区北半では、近年までの耕作に伴う第Ⅰ・Ⅱ層直下の標高52.3m付近の遺構面で古墳周濠SX01と墳丘盛土を検出するに至った。これらの遺構が存在したため、ここでは第Ⅲ層（遺物包含層）は見られず墳丘盛土層の下位では微量に遺物を含む第Ⅳ層が層厚0.4～0.5mで介在し、下面の標高51.7m付近で第Ⅴ層（基盤層）となる。

調査区南半でも第Ⅰ・Ⅱ層直下の標高52.3m付近で遺構検出面となる。北端にのみ層厚0.1～0.15mと薄く第Ⅲ層（遺物包含層）が遺存するが、下位では遺物の包含が希薄な第Ⅲ層下部の互層堆積が層厚0.3m前後で調査区南半全域に見られた。以下、標高52.0m付近で第Ⅴ層（基盤層）となるが、南方に向けて下降、傾斜し、上部には部分的に第Ⅳ層（下層遺物包含層）が徐々に厚く堆積する状況を呈した。

（２）検出遺構

大溝３条、古墳墳丘痕跡および周濠相当の大溝を検出している。

調査区北半では、東西方向の大溝ESD03（弥生中期後半～後期初頭）を、また調査区中央では北東～南西方向の大溝ESD01（弥生中期前半～中葉）、調査区南半でも同様に北東～南西方向の大溝ESD02（弥生中期前半）をそれぞれ検出している。このうち大溝ESD03は最上部の堆積層に至るまでに２、３度の再掘削が認められ、長期間にわたって維持されてきた環濠であったと考えられる。なお、この溝からは多量の土器片、自然木、木製品等が出土しており、その中では当遺跡では初の出土例となる銅鐸形土製品も含まれていた。

弥生時代以降の遺構では、調査区北半の古墳周濠ESX01が検出されており、埋土から須恵器、埴輪片等の古墳後期の遺物が出土している。おそらく近在する岩室池古墳とともに群形成を成し、かつては小古墳が複数で存在したことを窺える事例となる。

古墳周濠ESX01

調査区北半の大半を占める位置で検出した周濠状の落ち込みである。調査区内では、L字上に墳丘隅を巡る部分のみを検出しており、溝幅は東西での検出長約2.5m、両岸肩の残る南辺溝の南北幅が3.2mである。深さは最深部までで約0.4mと残りは浅い。

遺物は須恵器、埴輪等の破片がわずかに出土している。

なお、北東側にのみ墳丘盛土痕跡となる土層の堆積が層厚0.3m程度で遺存した。

大溝ESD01

調査区北半南端と南半北端に跨って検出した北東～南西方向の大溝である。北岸の北東方延長部分の

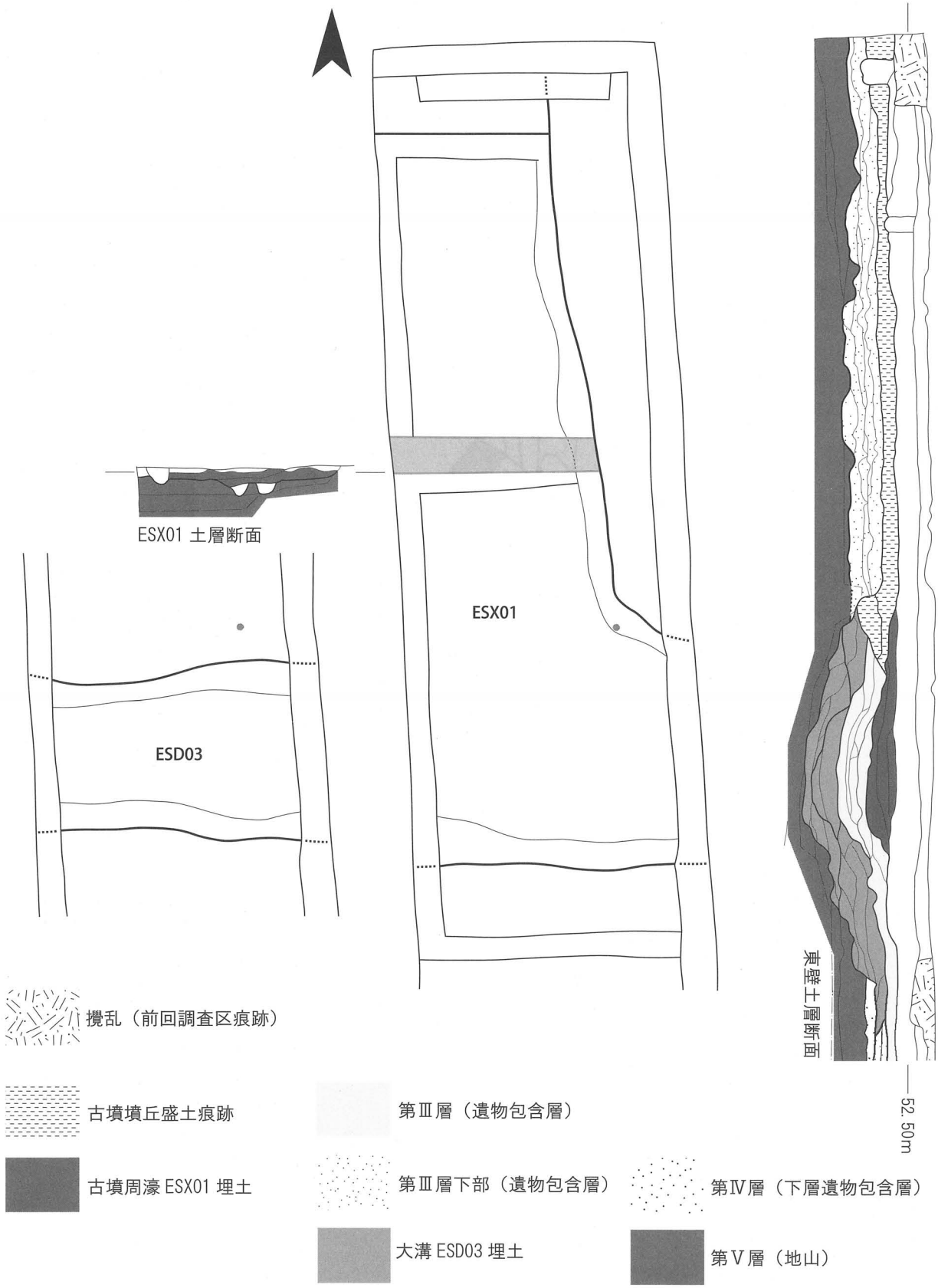


図５　東調査区北半の平面・土層図（S＝1/80）

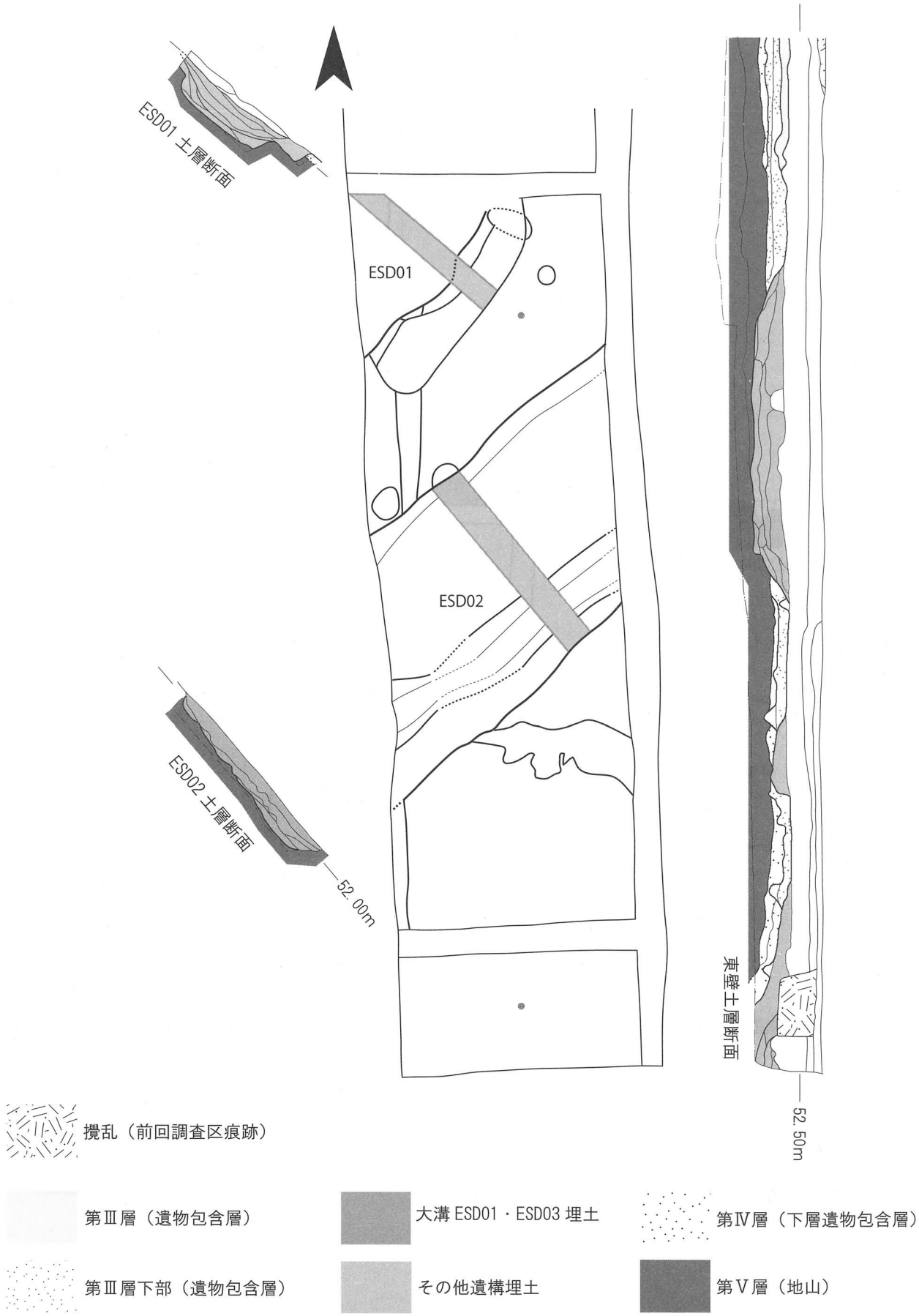


図６　東調査区南半の平面・土層図（S＝1/80）

一端を後述する大溝 ESD03 に切られている。南辺側にはテラス状の段が残り、調査区南半北端では上面検出幅約 2.6mとなっている。おそらく溝幅はテラス部分を含めても 3.0m前後と思われる。断面形状は逆台形を呈し、深さは 0.6mと浅く、埋土は黄褐～褐灰色の砂質シルトである。

遺物は埋土上半を中心に、弥生中期初頭～前半の土器片がわずかに出土したに過ぎない。

大溝 ESD02

調査区南半中央で検出した北東～南西方向の大溝である。溝幅は約 3.0m前後で、断面形状は皿状を呈しており、深さも検出面から南辺の最深部で0.4mと浅い溝である。埋土は上面が黄灰色砂質土ブロックの混じる黒褐色シルトであり、以下は黄灰色粘質土である。底面南辺のみ黒色シルトを埋土とする溝状に深い窪みが見られた。

遺物は埋土上部からわずかに出土しており、概ね弥生中期後半頃の土器片が主体となっている。

大溝 ESD03

調査区北半南部で検出した東西方向の大溝である。上部を古墳周濠 SX01 により重複、削平されているが、検出面での溝上面幅は 2.1 ～ 2.5mである。深さは最深部までで約 1.2mを測り、断面形状は半円形を呈する。埋土は上部に第Ⅲ層（遺物包含層）等の上部覆土と粘質土による窪みへの堆積があり、下位では南寄りに溝埋土中層の灰黄～褐灰色砂質土が層厚 0.5mが溝中央に向かい下降して堆積を見せた。また、溝埋土下層では中央付近で植物遺体を包含する黒色粘質土・粘土堆積層を挟み、底面から下部にかけては灰～黒褐色の砂混じり粘質土・シルトが 0.6m前後と厚く見られた。

遺物は、今回の調査で検出した大溝中で最も多く、埋土中層および下層から土器、木器等を含めてコンテナ 15 箱分ほどが出土している。土層断面観察による重複関係と中層および下層での遺物出土状況の推移からは２ないし３時期程度の再掘削が考えられる。

下層遺構面

西調査区と同様に上層遺構面調査後に第Ⅳ層の除去と第Ⅴ層上面での下層遺構確認をおこなったが、ここでも下層包含層の遺物は希薄であり、遺構もほとんど検出されなかった。

調査区南端付近では、水流による小穴状の凹凸を検出したのみであり、南東方向に下降する第Ⅴ層（基盤層）上面の状況から旧地形の想定材料が得られたと言える。

以上のように、東調査区では環濠大溝の存在は確認されたものの、生活痕跡となる小遺構はほとんど見られなかった。従って、この辺りでは弥生中期末～後期初頭のムラの最縁辺であったと言えよう。

Ⅳ．出土遺物

今回の調査では、東西両調査区において遺物包含層、自然河道、大溝や土坑などの遺構埋土より弥生前期～後期初頭の土器類を中心に多くの出土遺物が得られている。その内訳としては大多数が遺構出土の土器類となっており、多量の弥生前期土器を含む砂層堆積が見られた自然河道 WNR01 や埋土中に弥生中期土器がまとまって出土した大溝 ESD03 からの出土品がその多くを占めている。他にも須恵器や埴輪片の出土を見た古墳周濠 ESX01 のように古墳後期の遺構、遺物もわずかながら含まれている。また、石器、木製品など弥生集落としては通有な遺物も微量ながら含まれ、全体としての出土遺物総数はコンテナにして約 50 箱近くの量となる。

ここでは、図示した土器類、石器類を中心に技法、形態等での特徴的な部分について触れつつ概観するものとし、各遺物の色調、胎土、法量等については観察表を参照されたい。

１．土器類

自然河道 WNR01 出土土器（図９～図 12 上段 / 表１～４）

１・２はともに河道埋土の砂層堆積中に混在した縄文土器の小片である。１は口縁部外端面の斜行縄文施文を特徴とする後期縁帯文土器である。２は、頸部付近に沈線区画文様の一部が残るもので晩期後半以降の土器と思われる。ともに深鉢の器形を成すものと考えられる。ともに胎土は粗く、器面の摩滅が著しい。これら２点の土器片は、今回の調査による出土遺物中で最も時期的に遡る遺物である。

３～ 15・17 の破片資料はいずれも弥生前期の壺形土器である。

頸部や胴部張り出し部付近に特徴が看取され、５では、削出による段が、その他は１、２条から数条の多条化したヘラ描沈線文かあるいは削出突帯文が施されている。

４・６の削出突帯は、２条のヘラ描沈線を施文して突帯幅を予め設定した後に沈線の上下端部をヘラミガキすることにより削出している。そのためか、突帯高は低くなっている。

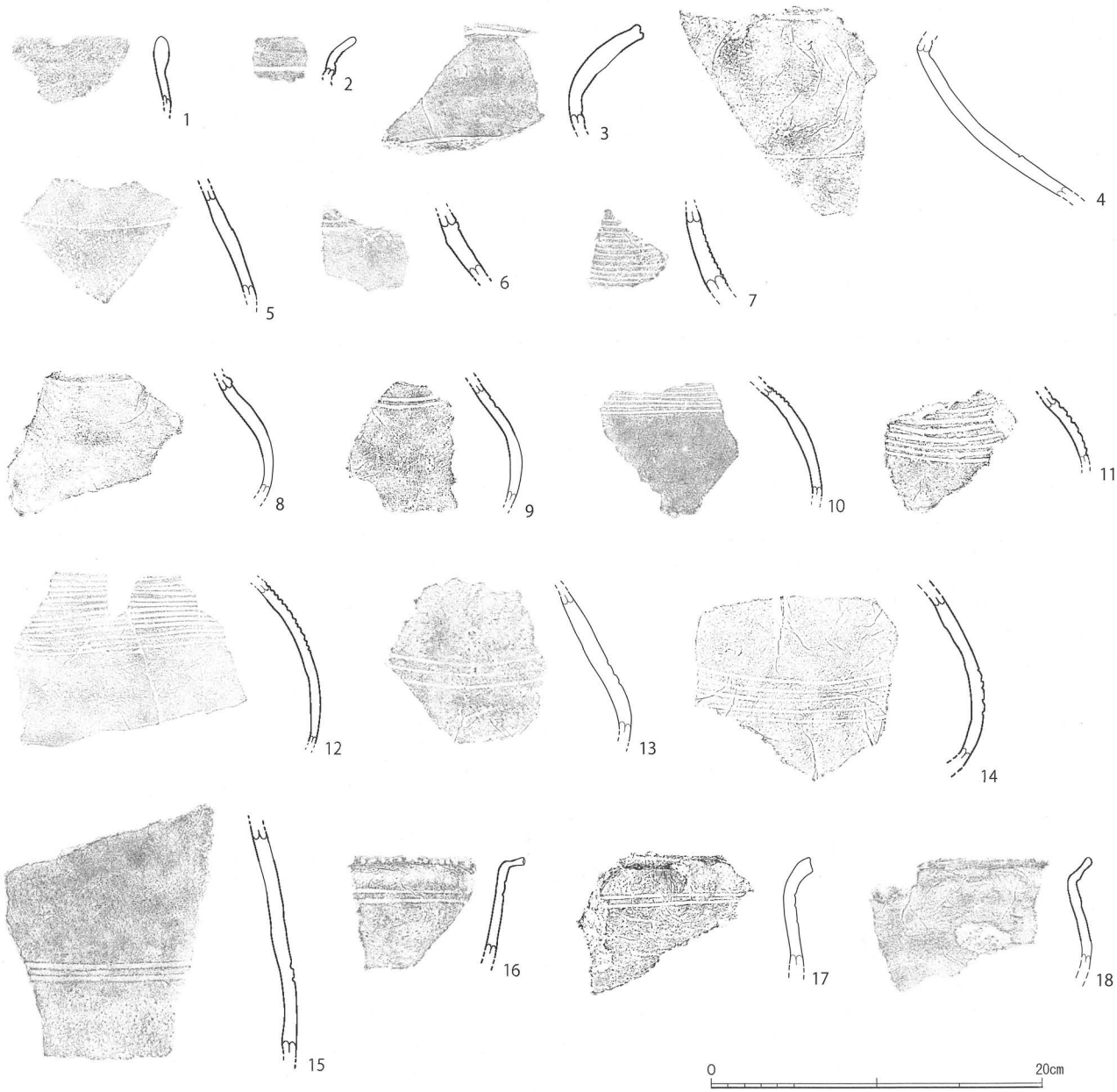


図９　出土遺物実測図１（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
1	縄文深鉢	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	縄文後期縁帯文土器
2	縄文浅鉢	10YR 4/1 褐灰	密	良好	—	—	—	縄文晩期土器 (外)ナデ、ヘラ描沈線１条 (内)ナデ
3	壺	7.5YR 8/4 浅黄橙	粗	良好	—	—	—	(外)ヨコナデ、口縁部および胴部にヘラ描沈線１条 (内)ヨコナデ
4	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや粗	良好	—	—	—	(外)ヨコ･ナナメ方向にミガキ、頸部削出突帯１条、胴部にヘラ描沈線１条 (内)ヨコ･ナナメ方向にミガキ
5	壺	10YR 7/2 にぶい黄橙	やや粗	良好	—	—	—	(外)胴部に削出による段、ミガキ (内)ヨコ･ナナメ方向にミガキ
6	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヨコ方向にミガキ、削出突帯２条 (内)ヨコ･ナナメ方向にナデ
7	壺	10YR 5/8 赤	やや密	良好	—	—	—	(外)肩部にヘラ描沈線12条 (内)タテ･ナナメ方向にナデ、ヨコ･ナナメ方向にナデ
8	壺	7.5YR 4/2 灰褐	密	良好	—	—	—	(外)ヨコ方向にミガキ、ヨコ方向にハケ、頸部に削出突帯１条 (内)ヨコナデ
9	壺	7.5YR 8/4 浅黄橙	粗	やや軟	—	—	—	(外)ヨコ･ナナメ方向にミガキ、頸部にヘラ描沈線２条 (内)器面剥離のため調整不明
10	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)ヨコ･ナナメ方向にミガキ、頸部にヘラ描沈線６条 (内)ヨコ･ナナメ方向にミガキ
11	壺	10YR 6/4 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	(外)ヨコ･ナナメ方向にミガキ、頸部にヘラ描沈線８条 (内)器面剥離のため調整不明
12	壺	2.5YR 6/6 橙	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、頸部にヘラ描沈線13条 (内)ヨコ方向にミガキ
13	壺	2.5YR 6/8 橙	粗	やや良好	—	—	—	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、胴部にヘラ描き沈線３条 (内)器面剥離のため調整不明
14	壺	7.5YR 5/8 明褐	粗	良好	—	—	—	(外)ヨコ･ナナメ方向にミガキ、胴部にヘラ描沈線５条 (内)ヨコ･ナナメ方向にハケ
15	壺	10YR 8/3 浅黄橙	粗	良好	—	—	—	(外)ヨコ・ナナメ方向にナデ、胴部にヘラ描沈線２条 (内)器面剥離のため調整不明
16	甕	10YR 6/3 にぶい黄橙	やや粗	やや良好	—	—	—	(外)ヨコナデ、口縁端部に刻目、頸部にヘラ描沈線２条 (内)ヨコナデ
17	壺	10YR 8/2 灰白	粗	良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、ヨコ･ナナメ方向にミガキ、頸部にヘラ描沈線２条 (内)口縁部ヨコナデ, ヨコ･ナナメ方向にミガキ
18	甕	7.5YR 6/6 橙	やや粗	やや良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、頸部ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)口縁部ヨコナデ

表１　出土遺物観察表１

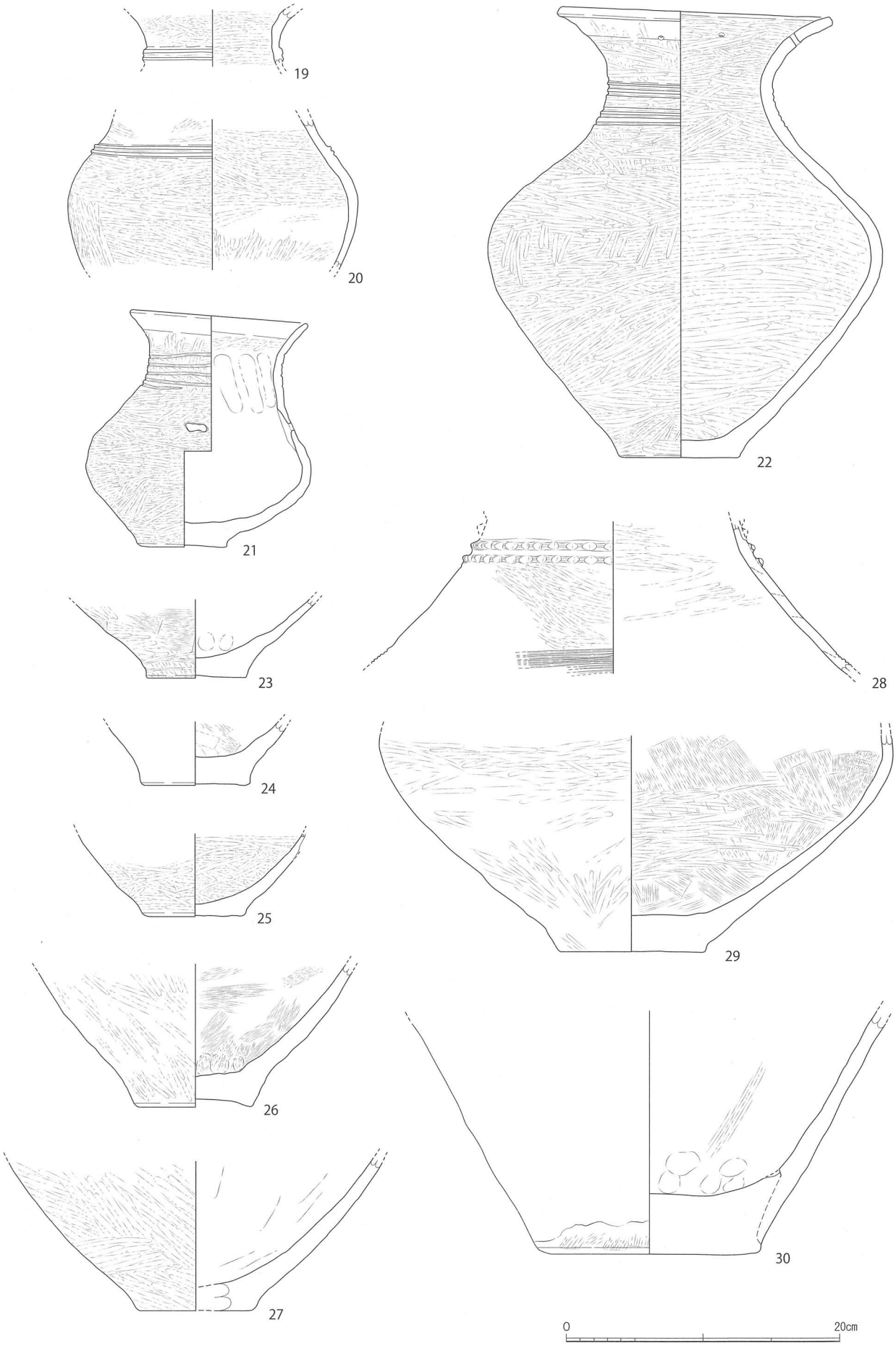


図 10　出土遺物実測図２（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
19	壺	5YR 5/6 明赤褐	密	良好	—	4.1	頸部1/6	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、削出突帯 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
20	壺	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	—	10.9	胴部1/3	(外)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ、削出突帯
21	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	密 (石英・雲母含む)	良好	口径 12.6 底径 6.4	17.3	ほぼ完形	(外)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ、口縁部ヨコナデ、頸部ヘラ描沈線3条、穿孔有り (内)口縁部ヨコナデ、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ナデ
22	壺	10YR 7/4 にぶい黄橙	密	良好	口径 19.4 底径 8.2	32.9	ほぼ完形	(外)タテ・ヨコ・ナナメ方にミガキ、頸部にヘラ描沈線5条、削出突帯、紐孔となる円孔一方のみ残存、口縁部ヨコナデ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
23	壺　底部	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや密 (石英含む)	良	7.0	6.7	底部完存	(外)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ヨコ・ナナメ方向にハケ (内)磨滅により調整不明
24	壺　底部	7.5YR 7/6 橙	粗 (石英含む)	やや軟	7.6	4.6	底部完存	(外)磨滅により調整不明 (内)ナナメ方向にハケ
25	壺　底部	10YR 4/1 褐灰	密 (石英含む)	良好	7.2	6.0	底部完存	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
26	壺　底部	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや密 (石英含む)	やや軟	8.2	10.4	底部完存	(外)タテ・ナナメ方向にミガキ (内)タテ・ヨコ方向にハケ
27	壺　底部	7.5YR 6/6 橙	粗	良好	8.2	10.9	底部1/3	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)タテ方向に板ナデ
28	壺	2.5YR 5/6 明赤褐	密	良好	—	11.1	肩部1/8	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、貼付突帯、ヘラ描沈線6条 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ナデ
29	壺　底部	10YR 6/4 にぶい黄橙	密	良好	10.5	15.8	底部2/3	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、黒斑 (内)タテハケのち胴部下半にミガキ
30	壺　底部	10YR 7/4 にぶい黄橙	粗 (多量の石英含む)	やや軟	13.8	17.3	底部のみ完存	内外面調整不明

表２　出土遺物観察表２

17は、短く外反する口縁部形態を成す大型壺の破片である。

16・18は甕形土器である。16は胴部の張りが少なく倒鐘形の形態となり、18は胴部の膨らむ形態となるものである。

19～30はいずれも壺形土器である。

19・20の頸部、肩部の突帯部分では、丁寧なミガキにより削出されているため突帯高が高くなっている。

頸部のみ多条に沈線を巡らす完形の小型壺21には、胴部中ほどに外側からの焼成後穿孔が見られる。

完形品の壺22は、内外面ともに丁寧なミガキが施され、口縁部と頸部の境目付近の沈線施文部上下端を削出により低く突出させている。これも4・6と同様な手法により削出されているようである。

23～27・29の壺底部では、どれも外面側に丁寧なミガキ調整が施されている。

28は、頸部に多条の貼付突帯、胴部に多条化したヘラ描沈線が施文されている。貼付突帯上には布を巻いた棒状工具を原体として使用したと考えられる刻目が施される。

図 11　出土遺物実測図３（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
31	甕	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	口径 25.4 底径 6.8	22.4	ほぼ完形	(外)口縁部ヨコナデ、ナデ、板ケズリ様の強い板ナデ (内)口縁部ヨコナデ、ナデ
32	甕	10YR 6/3 にぶい黄橙	やや粗 (石英、雲母含む)	やや良好	15.4	4.2	1/4	(外)タテ方向にミガキ、口縁部ナデ、刻目、ヘラ描沈線1条 (内)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ
33	甕	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗	良好	22.4	15.0	1/2	(外)口縁部ヨコナデ、煤化、刻目、タテ・ナナメ方向にハケ、ヘラ描沈線3条 (内)口縁部ヨコナデ、ナデ
34	甕	7.5YR 6/6 橙	密	良好	25.0	13.3	1/8	(外)口縁部ヨコナデ、刻目、胴部タテハケ、ヘラ描沈線3条 (内)口縁部ヨコナデ
35	甕	7.5YR 6/4 にぶい橙	やや粗	やや良好	29.6	14.9	1/8	(外)口縁部ヨコナデ、刻目、ヘラ描沈線2条、波状のヘラ描沈線2条、ヘラ状工具圧痕 (内)口縁部ヨコナデ、板ナデ
36	甕 蓋	7.5YR 6/6 橙	やや粗 (石英含む)	やや良好	5.6	4.2	天井部完存	(外)天井部ナデ、タテ・ヨコ方向にミガキ (内)指頭圧痕
37	甕	10YR 3/3 暗褐	やや粗	良好	33.2	6.7	1/8	(外)ナデ、瘤状の貼付、ヘラ描沈線4条 (内)ヨコナデ
38	甕	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好	42.2	10.0	1/8	(外)口縁部ヨコナデ、ナナメ方向にミガキ (内)調整不明

表3　出土遺物観察表3

30は、大型壺の底部である。粘土紐積み上げの接合面で剥離しており、製作手法が明確に看取可能なものである。

31～35・37・38は甕形土器である。

31の外面底部付近では、強い板ナデ調整により削り様の痕跡としての砂粒の移動が見られた。

35は、32・33・34などに甕に見られる一般的なヘラ描沈線施文に加えて下部に波状のヘラ描沈線を装飾的に施文した甕である。

36はおそらく甕蓋で、笠形の形態を成すものとなる。

39～42は、前期自然河道埋没後に掘削、機能した大溝WSD01の埋土中に混入していた弥生前期土器である。

39の壺には、ヘラ描沈線2条・貼付突帯2条・ヘラ描沈線2条からなる文様が見られる。

40の壺では、多条化したヘラ描沈線のため頸部が長くなり、施文とともに形態的にも新しい様相を示すものである。

41・42はともに壺蓋となるものであり、扁平な形態を呈する。41の蓋には中央に貫通した円孔が穿たれ、上面にはそれを囲むかのように角状突起が3箇所に付されている。

以上のように、これら弥生前期土器類の様相からは単一時期のものとは思われず従来の佐原真氏分類の前期中段階から新段階にかけての混交資料となる。時期的には、概ね弥生前期後半を主体とする土器群となるものである。

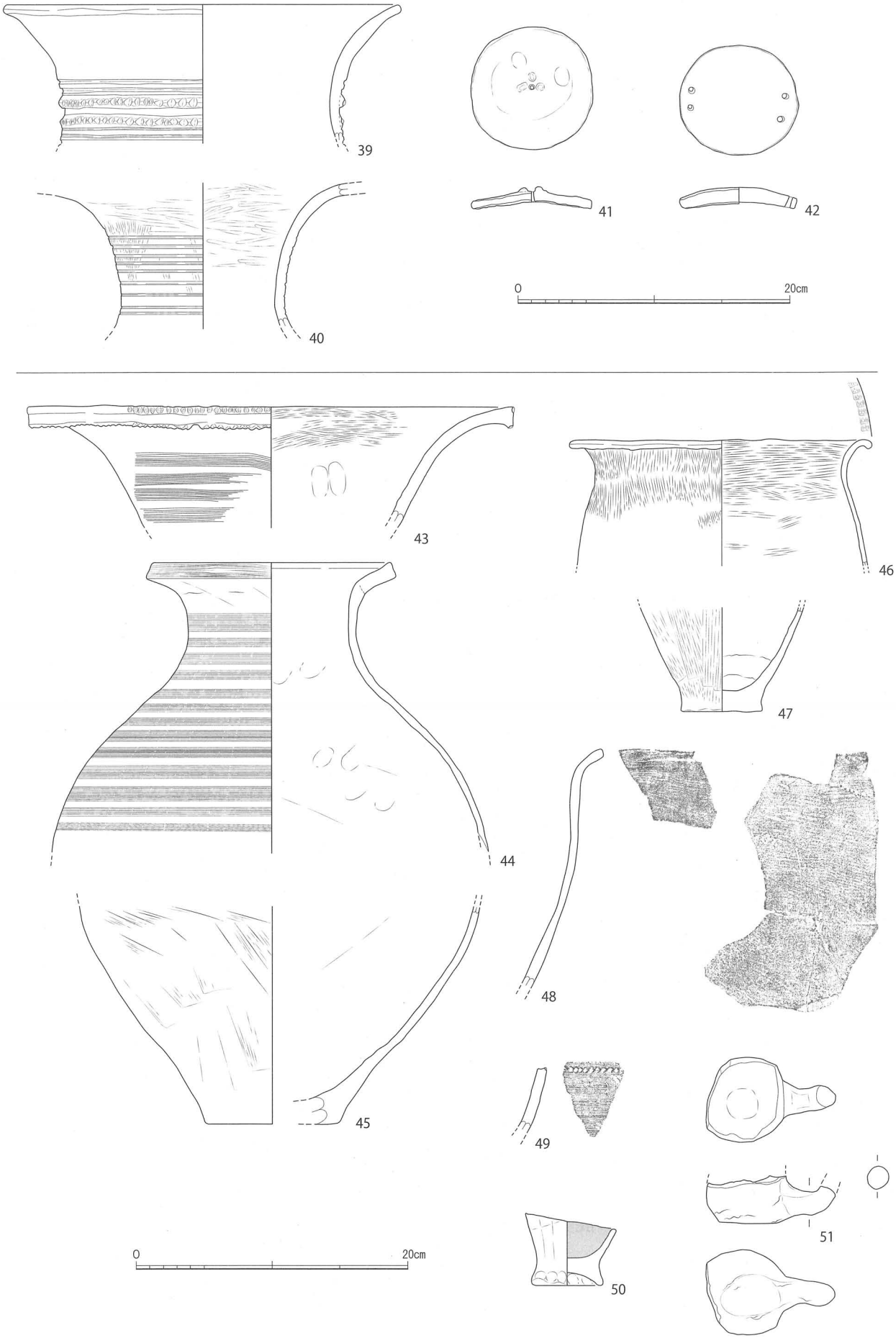


図 12　出土遺物実測図４（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
39	壺	5YR 7/6 橙	密	良好	28.8	10.2	口縁部1/4	接合面で剥離 (外)ナデ、ヘラ描沈線４条、貼付突帯２条に刻目 (内)ナデ
40	壺	7.5YR 7/3 にぶい褐	密	良好	—	10.7	頸部1/3	(外)ヨコ方向にミガキ、タテ・ナナメ方向にハケ、ヘラ描沈線９条 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ナデ
41	壺 蓋	5YR 5/4 にぶい赤褐	やや粗	良好	8.8	1.1	完形	３箇所の角状突起、中央に円孔 (外)ナデ (内)ナデ
42	壺 蓋	5YR 6/6 橙	やや粗	良好	8.8	1.1	完形	対向する位置に２孔１対の円孔 (外)ナデ (内)ナデ
43	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	35.4	8.9	口縁部1/8	(外)口縁部ヨコナデ、刻目、櫛描直線文４条 (内)口縁部ヨコハケ、ユビナデのちヨコナデ
44	壺	7.5YR 7/6 橙	やや密	やや軟	17.4	21.3	口縁部～肩部1/3	接合面で剥離 (外)板ナデ、口縁部櫛描文１条、頸部～胴部櫛描直線文13条 (内)口縁部ヨコナデ、ナデ、磨滅・剥離が著しい
45	壺 底部	7.5YR 7/3 にぶい橙	やや密	やや軟	10.0	15.9	底部1/3	(外)強い板ナデ (内)剥落・磨滅のため調整不明
46	甕	7.5YR 5/3 にぶい褐	やや密	良好	21.1	9.2	口縁部～胴部上半1/4	(外)口縁端部ナデ、口縁部～頸部粗いタテハケ (内)口縁部～胴部上半に粗いヨコハケ、口縁端部内面側にハケ目原体による刺突
47	甕	2.5Y 6/6 橙	密	良好	5.9	7.6	底部完存	(外)タテハケ (内)ヨコナデ
48	甕	10YR 6/2 灰黄褐	やや密	良好	—	—	—	伊勢湾沿岸系 (外)口縁端部ナデ、口縁部～胴部上半条痕 (内)口縁部条痕、頸部～胴部上半ナデ
49	鉢	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)口縁端部刻目、櫛描流水文 (内)ナデ
50	小型鉢	5YR 7/3 にぶい橙	やや密	良好	口径6.6 底径4.9	4.7	完形	ゆがみ有り (外)ヘラナデ、底部指頭圧痕 (内)磨滅、赤彩有り
51	把手付鉢	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	手ずくね

表４　出土遺物観察表４

大溝 WSD01 出土土器（図 12 下段～図 13/ 表４・５）

43 は外側に大きく拡張する口縁が特徴的な広口壺の小片である。口縁部端面の上下両端には小さく刻目を施している。形態的に見て多条の櫛描文様をもつ長頸壺と思われる。

44 は、口縁を短く外上方に外反屈曲させ、内傾する口縁端面をもつ広口壺である。頸部から胴部上半にかけて多条の櫛描直線文を施文している。

45 の底部は、図上復元により若干の大きさの違いはあるものの、44 の壺の下半に連続する同一個体であると思われる。

46・52 ～ 54・57 は粗いハケ目調整を特徴とする大和形甕である。これらの甕片のうち 46・52・53 はいずれも頸部の屈曲が緩やかな形態的特徴から大和形甕でも古相を呈するものである。

48 の甕形土器の断片的な破片には、口縁部内外面と胴部外面に貝殻条痕が施されている。おそらく伊勢湾沿岸地域からの搬入品の甕である。

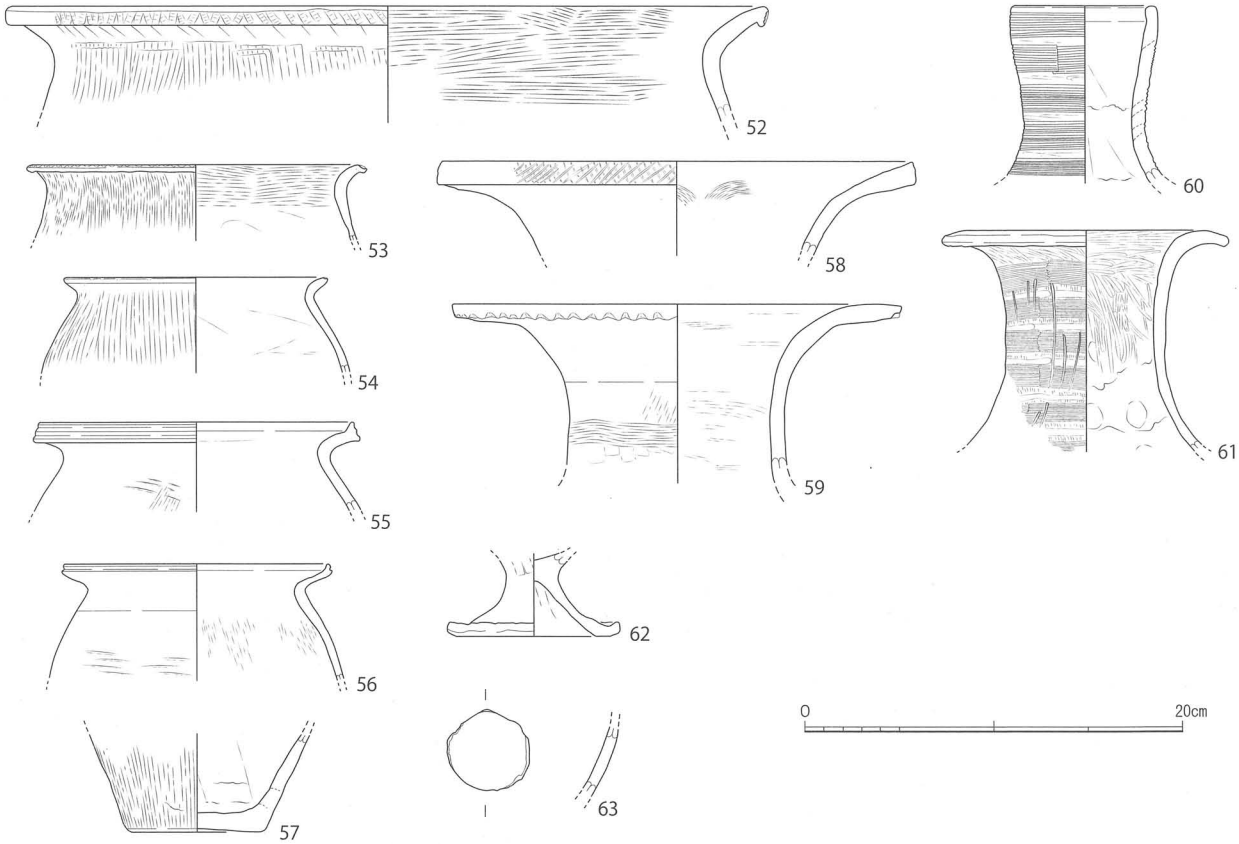


図 13　出土遺物実測図５（S＝1/4）

49 は、口縁外側端部に刻目、外面に櫛描流水文を施す小片である。器形的には椀形の鉢となるものである。

50 の小型鉢は口縁が傾斜する盃状の土器である。内面には全面に赤色顔料の塗布あるいは付着が見られ、特殊な用途が考えられる。また底部とのバランスが悪く、口縁端残存部の形状も不明瞭なため破損品の再利用とも思われる。

51 は、平底の把手付鉢の下半部残片である。全形については把手の形状からコーヒーカップ状を呈するものと考えられる。

55・56 はともに瀬戸内形口縁の甕である。55 は幅広の内傾した口縁端面に凹線文が巡らされた口縁部をもつ甕である。56 も同様な形状であるが、外面には水平方向のタタキ調整痕跡がわずかに認められる。いずれの甕も形態的に畿内第Ⅳ様式の典型的な甕である。

58 の広口壺には、口縁外端面に斜格子状の刻目、口縁部内面には円弧状の櫛描文による装飾が施されている。

59 は、口縁端下部に刻目を施した広口壺である。頸部には櫛描直線文が巡らされている。

60 は、頸部に明瞭な稜をもたず、胴部上半より連続的に延びた口縁部をもつ細頸直口壺である。筒状の口縁部は立ち気味に拡張した後にやや緩く内湾し端部には面を成している。

61 も胴部より連続して延びた後に立ち上がり、口縁端部付近で短く水平方向に外反する形状の広口壺である。口縁直下付近より胴部にかけて櫛描直線文の多条施文が見られる。

62 は、裾部が外反拡張した後に屈曲して面を成した低脚脚部片である。おそらく台付鉢の脚部となるものである。

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
52	甕	7.5YR 5/3 にぶい褐	密	良好	40.4	6.1	口縁部1/6	(外)口縁端部刻目、強いヨコナデ、粗いタテハケ (内)粗いヨコハケ、ナデ
53	甕	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	17.8	4.0	口縁部1/4	(外)ハケ、煤化 (内)口縁端部～内面刻目、粗いハケ、ナデ
54	甕	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	13.6	5.1	口縁部1/2	全体的に磨滅している (外)粗いヨコハケ (内)口縁端部～内面刻目、ヨコナデ
55	甕	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	16.6	4.7	口縁部1/4	全体的に煤化 (外)口縁部凹線文、ヨコナデ、タタキのちハケ (内)口縁部ヨコナデ、ナデ
56	甕	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	13.9	6.1	口縁部1/5	(外)口縁端部凹線文、ヨコナデ、タタキ (内)口縁端部強いヨコナデ、ヨコナデ、タテハケ
57	甕 底部	5YR 5/4 にぶい赤褐	密	良好	7.2	5.2	底部完存	(外)粗いハケ (内)ナデ
58	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	24.8	4.9	口縁部1/8	(外)口縁部格子状の刻目、ヨコナデ (内)ヨコナデ、一部に櫛描文による装飾が見られる
59	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	やや密	良好	23.8	9.4	口縁部1/5	(外)口縁端部刻目、頸部ヨコナデ、タテハケ、櫛描直線文１条 (内)ヨコハケ
60	壺	5YR 5/3 にぶい赤褐	密	良好	7.6	9.4	口縁部～頸部1/3	(外)口縁部ヨコナデ、櫛描直線文５条、ミガキ、磨滅 (内)口縁部ヨコナデ、ナデ
61	壺	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	12.6	11.6	口縁部1/3	(外)口縁部ハケのちミガキ、タテハケのち櫛描直線文６条、ミガキ (内)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ
62	台付鉢	7.5YR 6/6 橙	密	良好	9.2	4.4	脚部ほぼ完存	(外)板ナデ、ヨコナデ (内)板ナデ
63	土製円盤	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	土器を再利用している (外)磨滅のため調整不明 (内)磨滅のため調整不明

表５　出土遺物観察表５

63 の土製円盤は、土器片を再利用したものである。弥生集落では通有な出土遺物である。

これら大溝 WSD01 出土土器の主体となるのは弥生中期前半の畿内第Ⅲ様式までの土器である。一部に中期後半～末の第Ⅳ様式の土器も埋土中に含まれるが埋没にかかる上面覆土および第Ⅲ層（遺物包含層）等の上部堆積層からの混入とも思われる。

大溝 WSD02 出土土器

出土した土器も少なく、小片が主体であったためここでは図示し得たものが無かった。調査時の際には概ね弥生中期前半～後半にかけての土器片が出土しており、大溝の続きとなる第 25-1 次調査時の第４区 SD4-2 大溝の出土土器の様相と同様である。

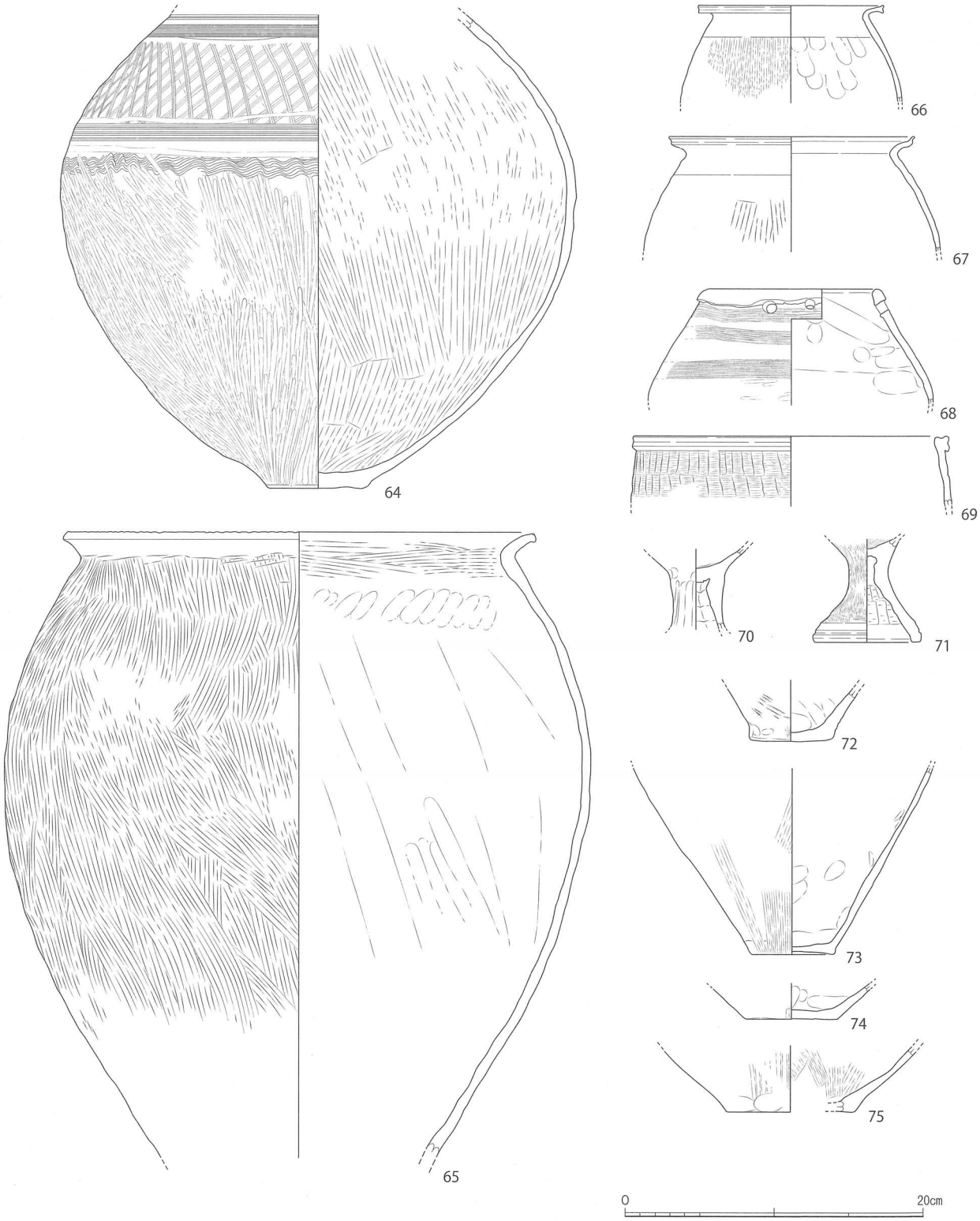


図 14　出土遺物実測図６（S＝1/4）

土坑 WSK002 出土土器（図 14/ 表６）

64 は大型細頸壺の下半部で、肩部には櫛描の直線文、斜格子文、波状文による装飾が豊富に施されている。

65 は大型の大和形甕である。短く屈曲外反した口縁部の端部上端に刻目を施す。

66・67 ともに口縁外端面に凹線を施文した瀬戸内形口縁の甕である。ともに外面はハケ調整であり、

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾形	器高(現存高)		
64	壺	7.5YR 6/6 橙	やや密(石英・雲母を含む)	良	6.1	31.8	1/3	(外)斜格子状の櫛描直線文、櫛描波状文、ミガキ (内)粗いタテ・ナナメ方向のハケ
65	甕	2.5YR 6/6 橙	密	良好	32.0	44.0	底部を欠くがほぼ完存	(外)口縁端部刻目、ナデ、頸部下半～胴部粗いタテ・ナナメ方向にハケ (内)口縁部ナデ、頸部ヨコハケ、胴部ナデ
66	甕	7.5YR 7/6 橙	密	良好	12.4	6.5	1/8	(外)口縁部ヨコナデ、胴部タテハケ (内)口縁部ヨコナデ、胴部ナデ
67	甕	5YR 6/6 橙	やや密(石英含む)	良好	16.4	7.7	1/5	(外)口縁部ヨコナデ、胴部タテハケ (内)口縁部ヨコナデ、胴部ナデ
68	鉢	7.5YR 6/4 にぶい橙	やや密(石英含む)	良	11.1	7.8	1/3	2孔1対の円孔有り (外)口縁部ナデ内、胴部櫛描直線文3条 (内)指頭圧痕・ナデ
69	鉢	5YR 6/6 橙	やや粗(石英含む)	良	21.0	4.5	1/3	磨滅が激しい (外)口縁部ヨコナデ、胴部櫛描簾状文2条 (内)ナデ
70	高杯	10YR 6/6 明黄褐	やや密(石英をやや多く含む)	良	—	5.4	脚部完存	(外)ナデ (内)絞りの痕跡がわずかに残る、ナデ
71	高杯	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや粗(石英含む)	良好	7.0	6.9	脚部完存	(外)ハケ、裾部ヨコナデ (内)ケズリ、ナデ
72	甕　底部	5YR 5/6 明赤褐	粗(石英・長石を多く含む)	良	5.2	3.5	底部完存	(外)タタキ、指頭圧痕・ナデ、一部ハケ状の痕跡 (内)指頭圧痕・ナデ
73	甕　底部	7.5YR 6/8 橙	粗(石英・長石を多く含む)	やや良	5.4	12.5	底部完存	(外)タテハケ、ナデ (内)指頭圧痕・ナデ、約半分煤化
74	壺　底部	7.5YR 6/4 にぶい橙	密(石英・長石を多く含む)	良	6.2	2.4	底部完存	(外)ミガキ、磨滅、ヘラキリか (内)指頭圧痕・ナデ
75	壺　底部	7.5YR 6/6 橙	やや密(石英・長石を多く含む)	良好	8.3	4.4	1/3	(外)タテ方向にミガキのち指頭圧痕・ナデ (内)左上がりハケ、タテハケ

表6　出土遺物観察表6

67は口縁上端のつまみ上げが顕著である。

内傾無頸の鉢形土器68には外面に櫛描直線文による施文、口縁部付近には2孔1対の円孔があり、有蓋の鉢である。

69の鉢は、口縁上端および外端面に凹線を、外面には櫛描簾状文による施文を施している。

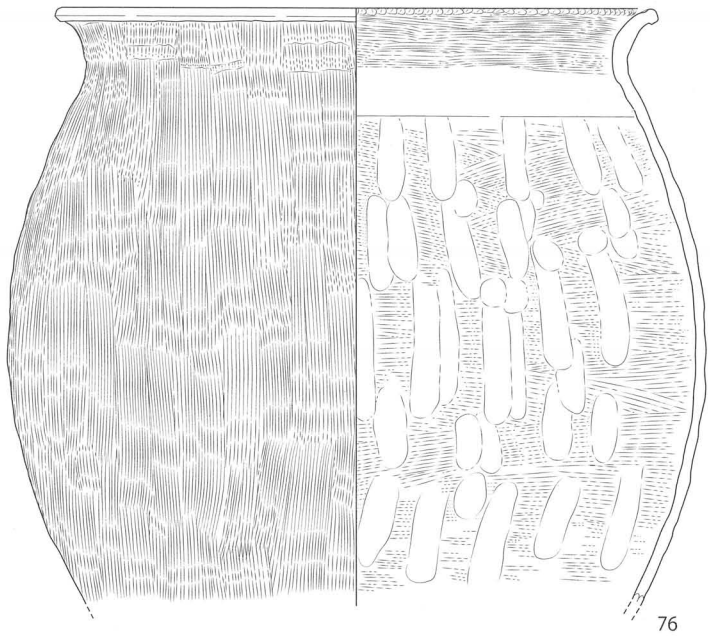
70・71は高杯の脚部である。71の小型品は脚部裾の外面に凹線を巡らし、内面をヘラケズリする第Ⅳ様式の典型的な手法による脚部である。

72～75では、それぞれ72・73が甕、74・75が壺の底部である。

72の外面には左上がりのタタキ、73にはタテハケが施されている。

74・75の壺底部にはともにタテ方向ミガキが施されている。

以上のように、土坑WSK002埋土出土土器では弥生時代中期後半～末に位置づけられる土器群が中心となっている。



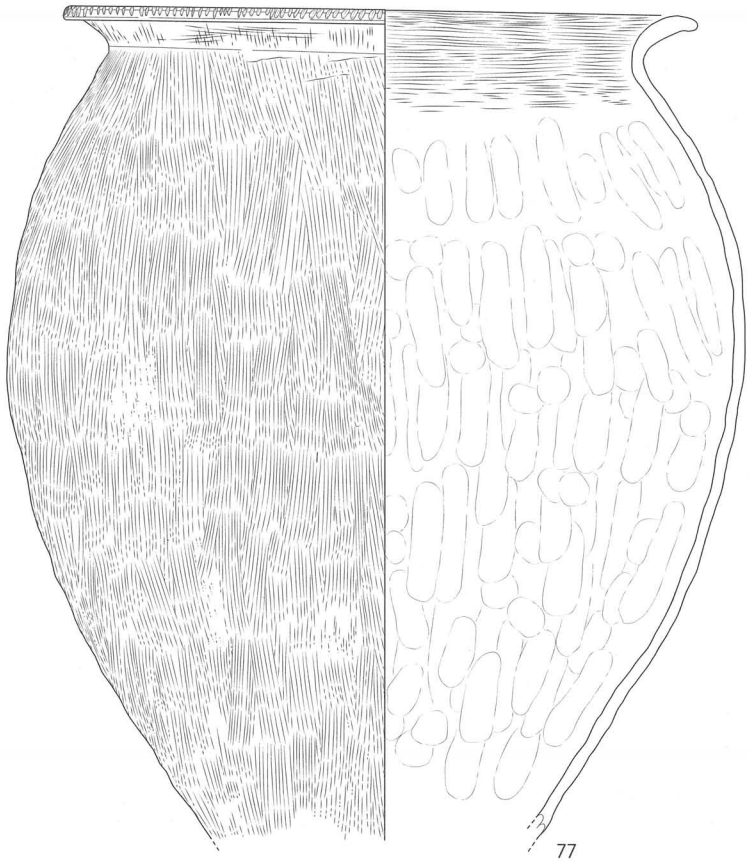


図 15　出土遺物実測図７（S＝1/4）

井戸 WSK003 出土土器（図 15/ 表７）

76・77 は両者ともに大型の大和形甕で、井戸枠に転用、再利用が成されていたものである。

76 の甕は井戸枠上部に使用された土器である。上半部のみ残る土器であるが、倒立させ下部の甕の口縁と合わせ口にしていたため口縁部は全周が残されている。口縁内面上端には刻目を施し、胴部外面側から頸部、それに頸部から口縁端付近にかけて連続した粗いタテハケを施しているため、頸部の稜は緩やかとなっている。このような外面調整の手法と口頸部の形態は、第Ⅱ様式より見られるものである。

井戸枠下部に使用された 77 の甕では、口縁端面に刻目を施し、口縁部から頸部までの粗いタテハケは不連続であり、頸部の稜も明確である。こうした調整手法からは形態的にも 76 の甕より後出する要素と考えられており、畿内第Ⅲ様式の頃に多いものとされている。そのため井戸枠への転用は弥生中期中葉以降の時期と考えられる。

古墳周濠 ESX01 出土土器（図 16 上段 / 表８）

78 は須恵器杯身である。口径が大きく底部の回転ケズリ調整部分の割合も少ない。

79 は須恵器台付き壺の脚部片である。短脚２段透かしの脚台部であり、欠損する上部にはおそらく直口壺が付されていたものと思われる。

80 は須恵器平瓶である。口縁および底部を欠くが胴部のみ残る。胴部上面の頸部付近には口縁部を挟んで２ヶ所に扁平な浮文状の貼付が見られ、把手部分の痕跡として残るものである。

81 の埴輪片は朝顔形埴輪の口縁部残片である。外面には鋸歯文による装飾が残る。

82 の土器小片は、古墳周濠 ESX-01 に囲郭された墳丘盛土痕跡となる堆積層の下面より出土しており、第Ⅳ層（下層遺物包含層）の遺物と考えられるものである。突帯を付す点が特徴となるが、全体として器面の摩滅が著しくその他の調整は不明である。おそらく縄文晩期突帯文土器の口縁付近の破片と思われる。

これら須恵器、埴輪等の形態的な特徴より、古墳周濠 SX01 を巡らした古墳の時期については概ね６世紀後半～末に帰属するものと考えられる。

大溝 ESD01 出土土器（図 16 中段 / 表８）

大溝 ESD01 埋土からは遺物出土量は少なく図示したものも破片資料から幾つか提示したに過ぎない。

83 は外面を丁寧にヘラミガキした壺の胴部下半である。胴部付近には櫛描直線文が施文されている。

84・85 の底部片は、前者が大型壺、後者が粗いタテハケにより大和形甕の一部であることがわかる。

86 の甕は、やや扁平な形態となることから鉢とも考えられる。当遺構出土土器では、その他の土器より若干新しい時期のものである。

これらの土器からは遺物量も少なく明確に遺構の時期を知ることは困難であるが、第 25-1 次調査時検出の第 11 区 SD11-1 出土土器の所見も加えて考えると概ね弥生中期前半以降のものであると言える。

大溝 ESD02 出土土器（図 16 下段 / 表８）

87 は大型の直口壺で、口縁端部付近の外面に円形浮文を３段に貼付する。

88 ～ 90 の底部はいずれも小片である。88 が壺、89・90 が大和形甕の底部となる

91 は、内傾気味に立ち上がる口縁の鉢である。折り返した外端面には細長い櫛羽列点による刻目を

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
76	甕	10YR 5/3 にぶい黄褐	密	良好	30.9	31.5	底部を欠くがほぼ完存	(外)口縁端部ヨコナデ、頸部～胴部タテハケ (内)口縁部刻目・ヨコハケ、ナデ、胴部ヨコ・ナナメ方向にハケ、一部ユビナデ
77	甕	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	32.0	44.0	底部を欠くがほぼ完存	(外)口縁端部刻目、ナデ、頸部タテハケのちナデ、胴部タテハケ (内)口縁部ヨコハケ、胴部ユビナデ・ナデ

表７　出土遺物観察表７

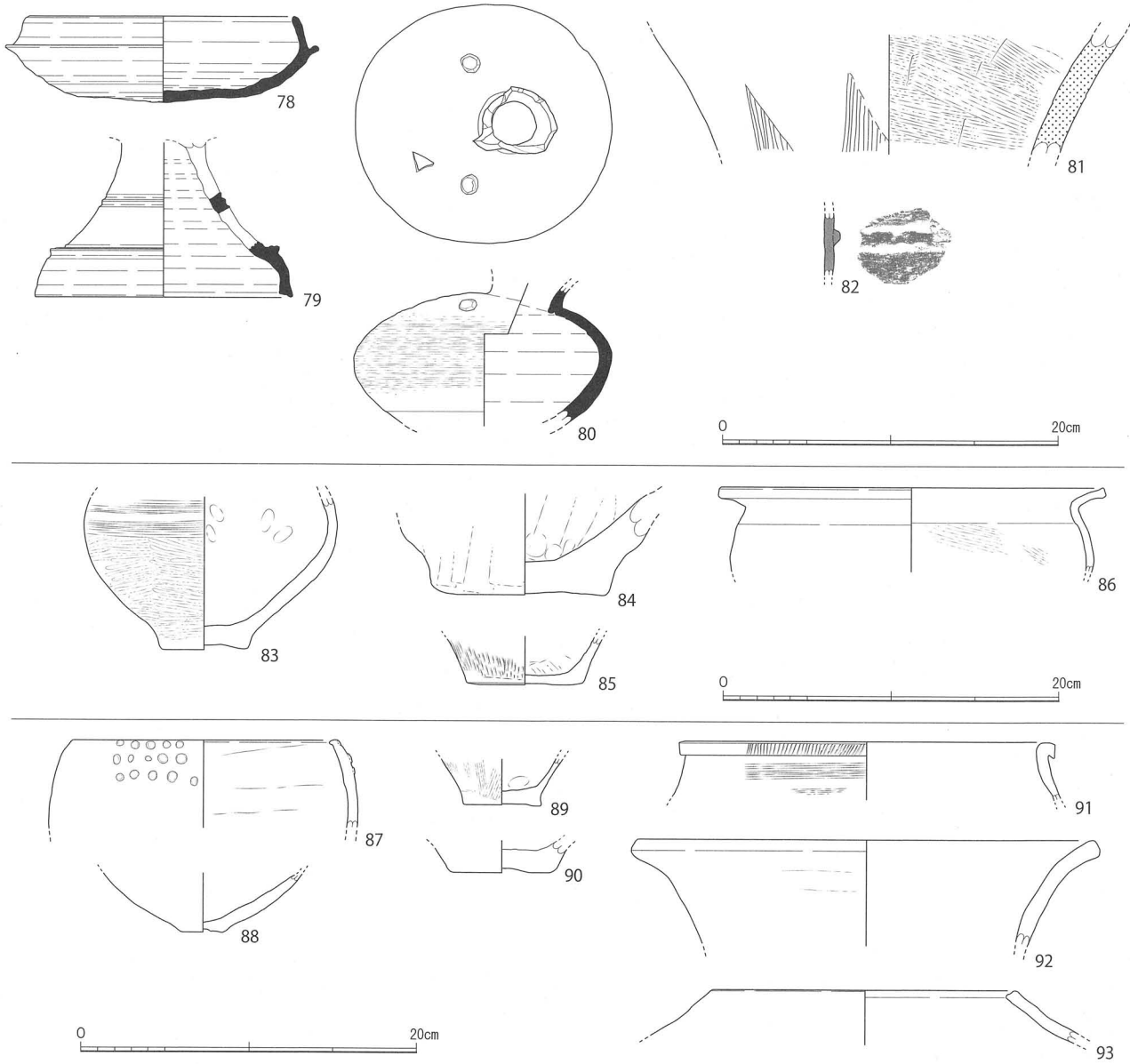


図 16　出土遺物実測図８（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
78	須恵器 杯身	N 5/6 灰	密	良好	7.4	5.1	2/3	(外)ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ
79	須恵器 高杯	N 6/0 灰	密	良好	13.5	10.3	1/8	復元により３方または２方の透孔が考えられるが、不明瞭 (外)ロクロナデ (内)ロクロナデ
80	須恵器 平瓶	N 6/0 灰	密	良好	—	8.3	胴部1/2	(外)ロクロナデ、回転ケズリ (内)ロクロナデ
81	埴輪	7.5YR 7/6 橙	密	良	—	7.0	—	(外)磨滅、鋸歯文線刻有り (内)ヨコ・ナナメ方向にハケ
82	縄文深鉢	10YR 5/2 灰黄褐	やや粗	良好	—	—	—	縄文晩期突帯文土器 内外面ともに摩滅により調整不明

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
83	壺　底部	10YR 5/2 灰黄褐	密	良	5.0	9.8	底部完存	(外)胴部ヨコミガキ、底部ヨコ・ナナメミガキ、煤化 (内)ナデ、指頭圧痕
84	壺　底部	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗 (石英・雲母含む)	やや軟	10.3	6.0	底部完存	内外面ともに煤化のため調整不明
85	甕　底部	7.5YR 6/6 橙	やや密	良好	6.8	3.1	1/2	(外)タテハケ (内)ハケ
86	甕	5YR 7/6 橙	密	良	22.6	5.0	1/8	(外)口縁部ヨコナデ、煤化のため調整不明 (内)口縁部ヨコナデ、ナナメ方向にハケ

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
87	壺	7.5YR 8/1 灰白	密	良	15.6	5.2	1/8	(外)ヨコナデ、円形浮文貼付、黒斑 (内)ヨコナデ
88	壺　底部	7.5YR 7/4 にぶい橙	やや密	やや良好	2.7	3.3	1/2	(外)ナデ (内)煤化のため調整不明
89	甕　底部	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	4.6	2.7	2/3	(外)タテハケ (内)ナデ
90	甕　底部	10YR 7/4 にぶい黄橙	密	やや軟	6.0	2.0	底部ほぼ完存	(外)ナデ (内)調整不明
91	鉢	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	22.2	3.4	1/8	(外)口縁端部刻目、櫛描直線文２条 (内)調整不明
92	壺	10YR 7/6 明黄褐	密	良好	26.8	6.4	1/8	内外面ともにナデ
93	無頸壺	2.5YR 5/6 明赤褐	やや粗	良好	17.8	3.2	1/8	内外面ともにナデ

表８　出土遺物観察表８

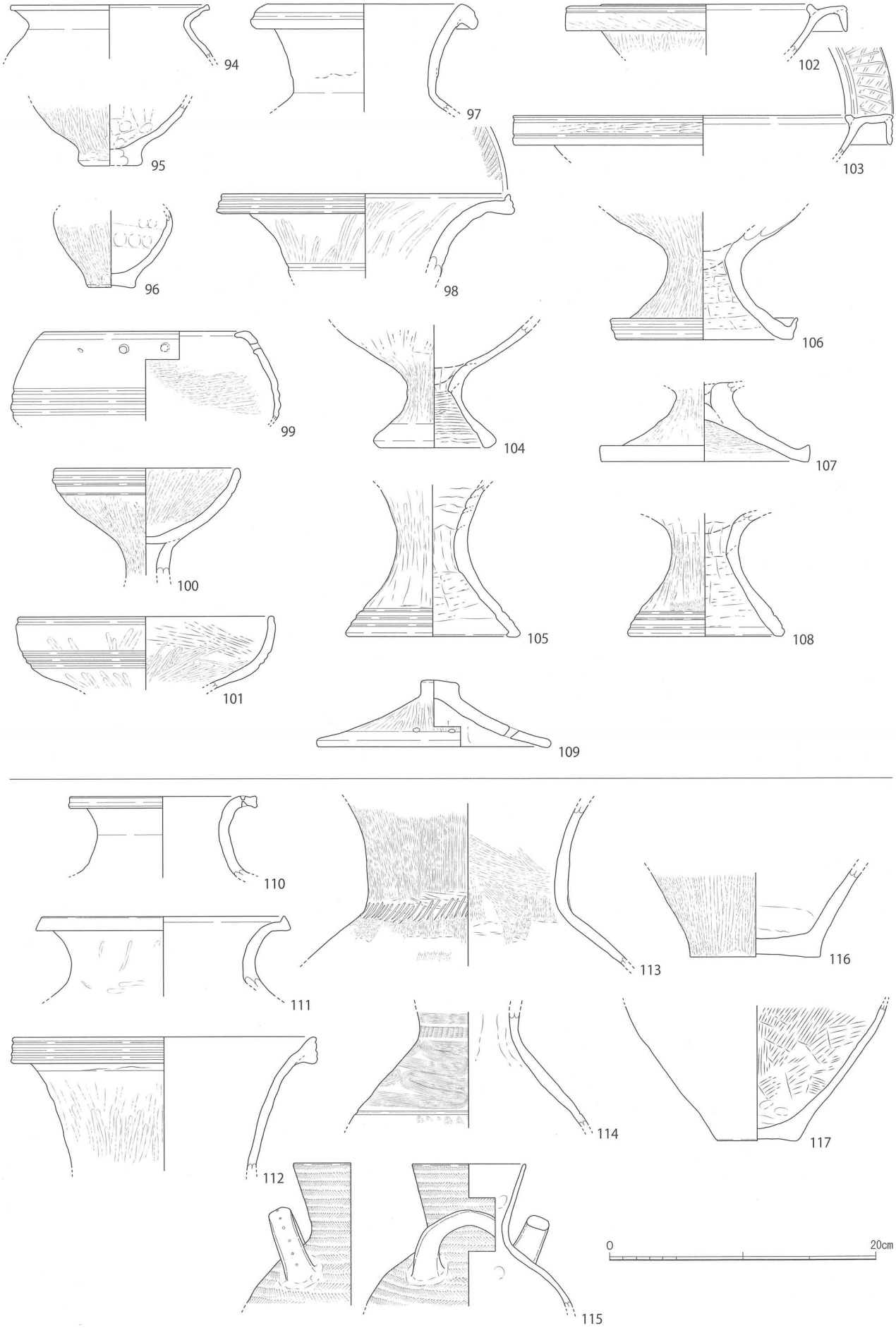


図 17　出土遺物実測図９（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
94	甕	5YR 7/6 橙	密	良好	14.6	4.0	1/4	(外)口縁部ヨコナデ、煤化のため調整不明 (内)口縁部ヨコナデ
95	壺　底部	5YR 5/4 にぶい赤褐	やや粗(石英含む)	良好	4.8	4.6	1/2	(外)ミガキ、ヨコナデ (内)板ナデ、指頭圧痕
96	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	3.4	5.7	底部完存	(外)タテ方向にミガキ、ナデ (内)ヨコナデ、指頭圧痕
97	壺	10YR 4/2 灰黄褐	密(角閃石・雲母を多く含む)	やや良好	14.2	7.8	口縁部～頸部1/2	河内・生駒西麓産 (外)口縁部ヨコナデ、指頭圧痕 (内)口縁部ヨコナデ
98	壺	10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好	21.4	6.3	1/6	(外)口縁部ヨコナデ、タテ・ナナメ方向にミガキ (内)口縁部刺突文、ミガキのちヨコナデ
99	鉢	10YR 6/4 にぶい黄橙	密	良好	15.0	6.7	1/8	(外)２孔１対の円孔、凹線文３条、磨滅のため調整不明、籾状圧痕 (内)口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、ヨコ方向にミガキ
100	高杯	2.5YR 7/6 橙	密	やや良好	13.5	8.2	口縁部のみ完存	(外)黒斑、ケズリのちタテミガキ (内)放射状にミガキ
101	高杯	7.5YR 6/6 橙	密	良好	18.8	5.5	1/6	(外)口縁端部凹線文１条、杯部凹線文３条 (内)口縁端部ヨコナデ、ヨコ・ナナメ方向にハケ、ナナメ方向にミガキ
102	高杯	5YR 7/6 橙	密	良好	15.4	3.8	口縁部1/4	(外)口縁端部凹線文１条、ナデ、ミガキ (内)ヨコナデ
103	高杯	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	21.8	3.0	1/2	(外)口縁部上端面に暗文による斜格子文、口縁端部凹線文２条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ヨコナデ (内)ヨコナデ
104	台付鉢 脚部	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	やや良好	8.0	9.2	底部1/2	(外)底部ケズリ、脚部タテヘラケズリのちミガキ・ハケ、ヨコナデ、黒斑 (内)ナデ、脚部絞り目、粗いハケ
105	台付鉢 脚部	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	12.0	11.3	脚部ほぼ完存	(外)タテヘラナデのちミガキ、裾部に凹線文３条、磨滅、黒斑 (内)ケズリ、ヨコナデ、絞り目
106	台付鉢 脚部	2.5YR 6/3 にぶい橙	密	良好	15.0	9.5	1/2	(外)脚部タテ方向にミガキ、脚裾部ヨコナデ、凹線文２条 (内)ナデ、ケズリ、ヨコナデ
107	台付鉢 脚部	10YR 8/2 灰白	密	やや良好	16.6	5.9	1/8	(外)ミガキのちナデ、ヨコナデ、黒斑 (内)ヨコ方向にミガキ、ヨコナデ
108	台付鉢 脚部	2.5Y 5/2 暗灰黄	密	良好	11.8	9.2	1/4	(外)タテ方向にハケのち面取り後にミガキ、脚裾部に明瞭な凹線文２条、不明瞭な凹線文１条、黒斑 (内)絞り目、ケズリ
109	蓋	2.5Y 7/2 灰黄	密	良好	16.7	5.0	完形	(外)タテ・ナナメ方向にミガキ、ヨコナデ、２孔１対の円孔、黒斑 (内)板ナデ、黒斑

表９　出土遺物観察表９

施し、口縁部以下の外面には櫛描直線文を施文する。

92 の広口壺は、器壁が厚く大型の壺となるものである。

93 は、小片からの復元によるが形態的特徴から無頸壺であると思われる。

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
110	壺	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	13.6	6.1	1/3	(外)ヨコナデ、ナデ、2孔1対の穿孔が施されているが未完成 (内)ヨコナデ、ナデ
111	壺	5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	17.9	6.0	口縁部1/2	(外)ヨコナデ、タテ方向にヘラナデ、板ナデ (内)ヨコナデ
112	壺	10YR 6/2 灰黄褐	粗 (1～6mm程度の石英を含む)	軟	22.2	10.0	1/4	(外)口縁端部ヨコナデ、口縁部タテ方向にミガキ (内)磨滅
113	壺	10YR 6/4 にぶい黄橙	密	良好	—	12.2	頸部1/2	(外)タテ方向にハケ、頸部ヘラ状工具圧痕上に刻目 (内)タテ・ヨコ・ナナメ方向にハケ
114	壺	5YR 6/6 橙	密	やや良好	—	8.7	頸部1/3	(外)櫛描直線文、櫛描廉状文、櫛描流水文、凹線1条、櫛描扇形文 (内)絞り目
115	水差し壺	10YR 5/4 にぶい黄褐	密 (角閃石・雲母を多く含む)	良好	8.2	10.1	口縁部1/2	河内・生駒西麓産 (外)羽状文、把手部分に刺突文 (内)ヨコナデ、指頭圧痕
116	甕 底部	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	9.6	6.2	底部完存	(外)タテ方向にミガキ (内)ナデ、ヨコナデ
117	壺 底部	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良	5.8	10.1	底部完存	(外)ナデ (内)タテ・ナナメ方向にハケ、指頭圧痕

図10　出土遺物観察表10

大溝ESD03出土土器（図17・18/表9～11）

94～109は大溝ESD03埋土の上半部に相当する上層下部～中層より出土した土器群である。

94は、単純屈曲口縁で外面にタタキ調整は見られない。

95・96の壺底部はともに外面のミガキ調整が顕著な土器で、96は胴部の形態から畿内第Ⅴ様式に通有な長頸壺であると思われる。

97は口縁端付近で屈曲垂下させる形態の壺で口縁外端面には凹線が巡らされている。角閃石を含む胎土と色調より河内・生駒西麓産であることがわかる。

98は、口縁外端面および頸部に凹線を巡らす広口壺で口縁内面上端には刺突列点文の施文が見られる。

99は、端部を内側に突出させた内傾口縁の鉢である。胴部屈曲部には凹線が巡る。

100～103は高杯杯部である。100・101は皿状杯部、102・103は水平縁口縁の高杯でありともに外面各所に凹線施文が見られる。103の高杯では水平縁口縁の上面に斜格子状の暗文ミガキによる装飾がある。これら高杯はいずれも第Ⅲ様式からの系統のものである。

104～107は、台付鉢あるいは高杯の脚部である。上部との接合面においては円盤充填技法によるつくりが見られいずれも脚裾端部が発達している。

104は、小さくハの字状に脚裾が広がる脚部で、底部から脚台にかけて連続的なヘラケズリが施されている。

105・108は、脚部内面にヘラケズリを施す。また、外面ではタテ方向にヘラケズリまたは板ナデ、ハケ調整した後にタテミガキ調整を施す製作工程が窺える。

106・107は、裾端部を折り返して面を成すものであり、106では外端面に凹線施文、内面には丁寧

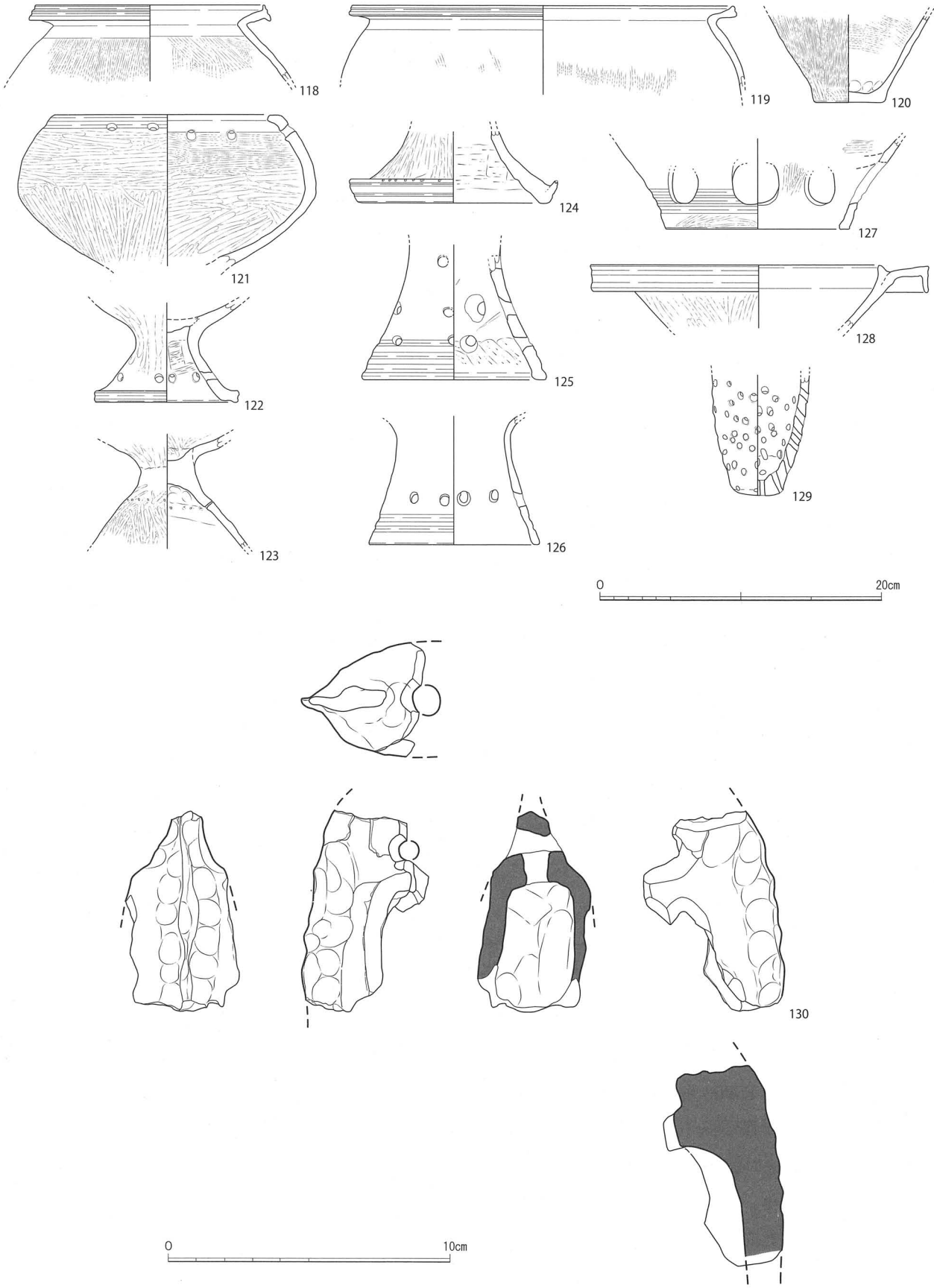


図 18　出土遺物実測図 10（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
118	甕	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	16.0	5.4	口縁部1/4	(外)口縁部ナデ、凹線文２条、胴部上半タテ方向にハケ (内)口縁部ナデ、胴部上半タテ・ナナメ方向にハケ
119	甕	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	26.8	6.3	1/10	(外)口縁端部凹線文２条、ヨコナデ、ナデ (内)タテ方向にハケ
120	甕 底部	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	4.7	6.2	底部完存	(外)タテ方向にハケ、タテ方向にミガキ (内)ヨコ方向にハケ、指頭圧痕
121	鉢	10YR 5/2 灰黄褐	やや密	良好	13.8	10.7	1/4	(外)口縁部ヨコナデ、胴部上半ヨコ方向にミガキ、胴部下半タテ方向にミガキ、２孔１対の円孔有り (内)口縁部～胴部上半ヨコナデ、胴部下半ヨコ・ナナメ方向にミガキ
122	台付鉢 脚部	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	10.0	7.0	脚部完存	(外)タテ方向にミガキ、脚裾部ナデ、円孔有り (内)ナデ、ケズリ、
123	台付鉢 脚部	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	—	8.1	脚部完存	(外)タテ・ナナメ方向にミガキ、穿孔有り (内)ヨコナデ
124	台付鉢 脚部	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	12.2	5.0	1/2	(外)タテ方向にミガキ、脚裾部ヨコナデ、刺突文、凹線文２条 (内)ケズリ
125	台付鉢 脚部	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	12.8	9.5	1/3	(外)円孔３段６方に円孔(８個残存)、脚裾部凹線文２条、ヨコナデ (内)ナデ、ケズリ、ヨコナデ、工具圧痕
126	台付鉢 脚部	5YR 6/6 橙	やや密	良	13.8	9.1	1/2	(外)円孔有り、凹線文２条 (内)磨滅
127	台付鉢 底部	2.5YR 6/2 黄灰	密	良好	12.8	6.4	1/4	(外)ナナメ方向にミガキ、透孔有り、凹線文３条 (内)ミガキ、ヨコナデ
128	高杯	10YR 6/2 灰黄褐	やや密	やや軟	23.8	4.4	1/4	(外)ヨコナデ、ミガキ (内)ヨコナデ、磨滅
129	多孔鉢	10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好	2.9	8.5	底部完存	(外)ナデ、多数の円孔を穿つ (内)ナデ
130	銅鐸型土製品	10YR 5/2 灰黄褐	やや粗	良好	—	7.0	1/2	内外面指頭圧痕、紐孔有り

表 11　出土遺物観察表 11

なケズリが施されている。107 は低脚で脚部内面をミガキ調整する。

109 は完形の蓋形土器で２孔１対の円孔が見られるものである。壺、鉢等の蓋と思われる。

110 ～ 130 は大溝 ESD03 埋土の下半に相当する中層下部～下層出土の土器群である。

110 ～ 113 は広口壺である。110 の内傾外反口縁の壺は口縁部に両面穿孔の円孔が見られるものの未貫通である。111 は口縁端に面をもち端部をつまみ上げた口縁形状を成す。112 の壺にも口縁端に凹線を巡らした面をもつ。形態的には広口長頸壺となるものである。口縁端を欠く 113 は、頸部の稜付近のハケ調整工具圧痕上に連続した刻目を施し装飾効果を加えている。

114 は、櫛描流水文による装飾に加えて簾状文、凹線文による施文が見られる壺である。

115 の水差し壺では、口縁から胴部にかけての外面を櫛描列点文の羽状施文により装飾性を高めている。把手部分の接合は貼付によるもので外縁側には櫛状工具による連続的な刺突が巡る。また、角閃石を含む胎土から河内・生駒西麓産の搬入品であることがわかる。

底部片116・117では、外面に丁寧なミガキを施す116が甕、胴部下半の残る117は壺と思われる。

118・119は、いずれも口縁端に凹線が２条めぐる甕であり、119は若干大型のものである。

120は、外面ハケ調整後にミガキを加えた甕の底部である。

121は、内湾する口縁の鉢形土器で、外端面を含む口縁近辺に凹線を施す。口縁部には対向位置に２孔１対の円孔を穿っている。

122～127は、台付鉢の脚部である。低脚の122には脚裾外端面の凹線施文と５方の円孔があり、内面にヘラケズリが見られる。123は、脚部の上位に櫛状工具による小さな貫通孔が全周するように巡る。124では、外反する脚裾の外端面に凹線が２条めぐり上端には刻目が施されている。125は、脚部裾外面に凹線が４条巡り、３段６方の円孔が見られる。126の脚部裾外面にも凹線施文があり、不規則な位置に２つの円孔を穿つ。127は内湾口縁鉢に付された脚台部である。脚部裾外面には凹線が３条巡り、円形透孔により装飾されている。

128は、水平縁口縁の高杯である。外面ミガキ調整が顕著であり、口縁外端面には凹線が巡る。

129は、多数の円孔を穿つ多孔鉢である。弥生集落では稀に出土を見る遺物であるが、用途等は不明である。

130も希少な遺物とされる銅鐸形土製品で、鰭部分を手捏ねで薄く突出させたものである。また、紐の部分と鐸身天井部に円孔を穿っている。内外面ともにナデ、指頭圧のみで調整され、線刻等による装飾も無く、写実性に欠ける土製品である。いめん破片資料ではあるが、当遺跡では初の出土例となる。

これらの遺物から、大溝ESD03では古くは弥生中期前半の土器を若干含むものの主体となるのは弥生中期後半～末の凹線文盛行段階であることがわかる。また、弥生後期初頭～前半のものも微量に含まれ大溝埋没までにかかる時間幅を窺い知ることができる。（今井和代）

２．石器類（図19・20）

遺物包含層、遺構等の埋土よりサヌカイト製の剥片、石鏃、石槍などの打製石器や石包丁、石斧などの磨製石器が出土している。ここでは遺構出土品のみを図示した。

131～134は結晶片岩製の石包丁の破片である。いずれも刃部付近の研磨による加工が見られるが、131・132が両面に、133・134が片面のみとなっている。出土地点では131が大溝ESD03埋土中層下部、132が大溝ESD01埋土南辺溝底面付近の下層、133・134はいずれも大溝WSD01埋土中層出土である。

135～137は自然河道WNR01埋土粗砂層出土の石器類である。135のやや大きめの石包丁は２孔の穿孔が残る耳成山安山岩製のものである。ほぼ弥生前期に限定される時期に存在し、出土遺構の時期とも矛盾しない。136・137は太型蛤刃石斧の残片である。ともに石材は未鑑定のため不明である。136は基部側のみ残る折損品と思われる。基端側の片面には数度の敲打による器面剥離が見られることから刃部としての使用も考えられる。137は先端および側縁に明瞭な稜を残す刃部付近の断片である。丁寧な研磨調整により左右対称な断面形状となっている。

石鏃は２点のみ出土している。ともに石材はサヌカイトである。138は無茎の石鏃である。両面ともに押圧剥離により整形、刃部加工をおこなっているが基部付近の整形加工は認められない。自然河道WNR01埋土粗砂層出土である。139は凸基有茎を意識したつくりの石鏃である。整形については138の石鏃と同様の加工によるが、先端は突出気味に整形加工されている。形態的にも138より後出するものである。大溝ESD03南岸中層上部より出土している。

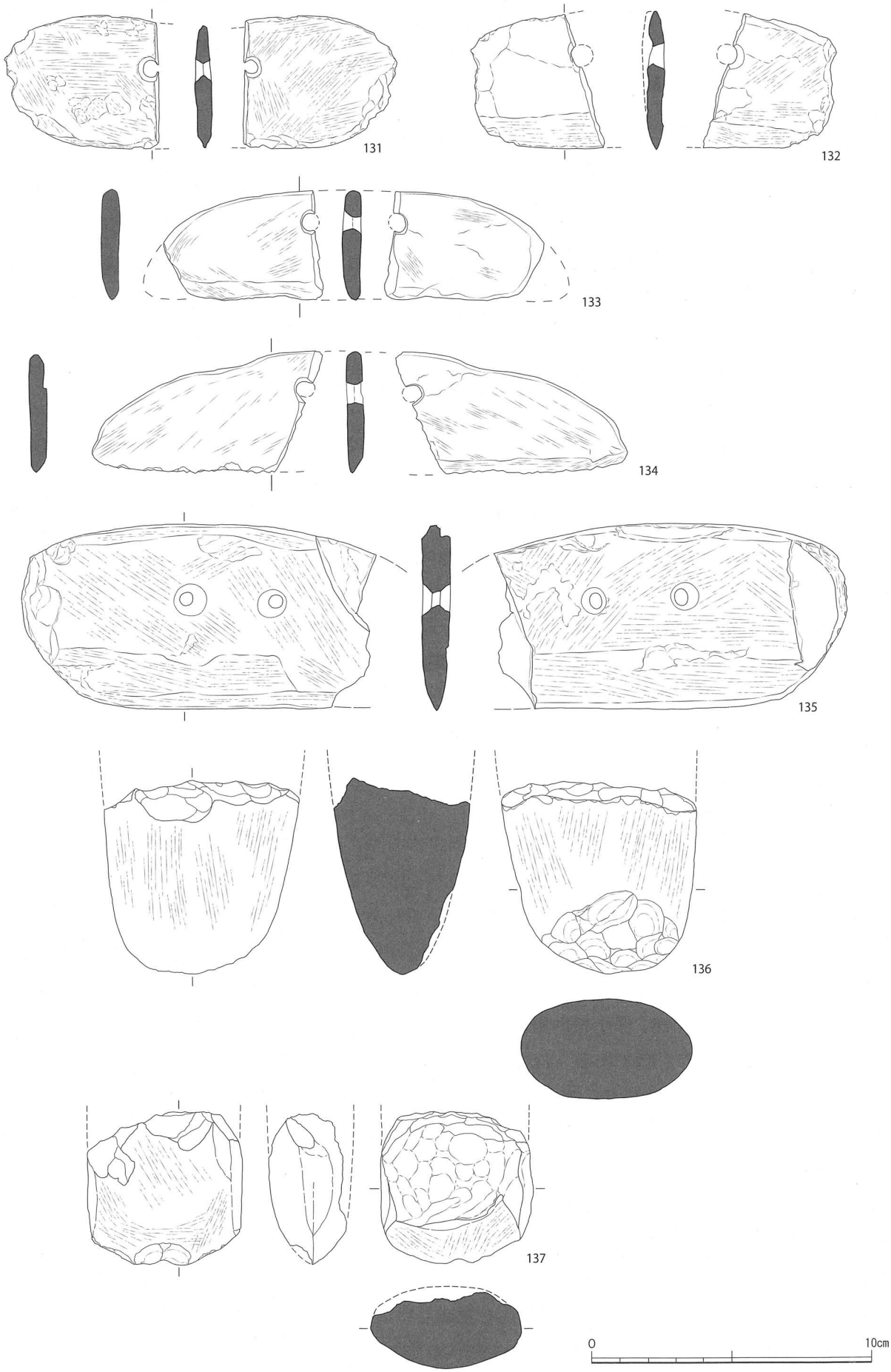


図 19　出土遺物実測図 11（S＝1/2）

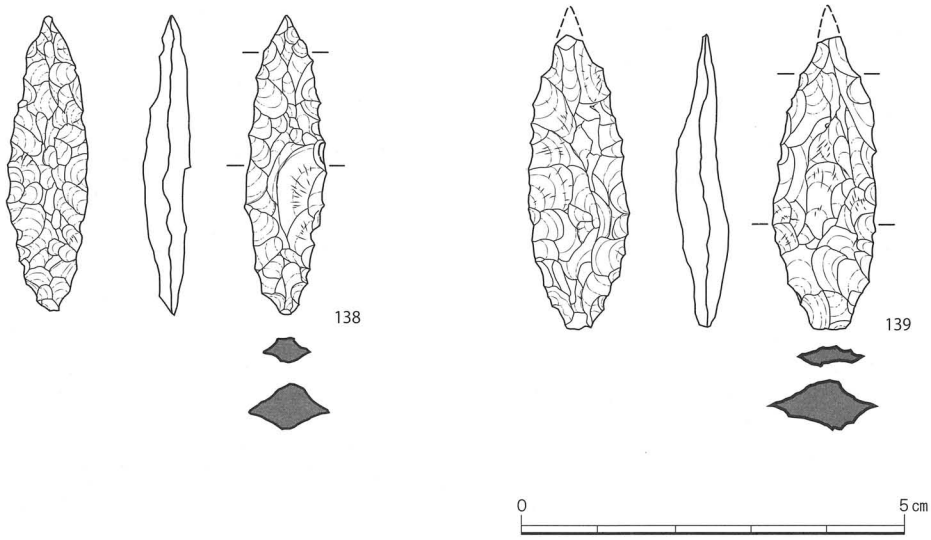


図 20　出土遺物実測図 12（S＝1/1）

V．まとめ

今回の調査では、弥生前期の自然河道と中期の環濠となる大溝等の存在から集落東縁部の状況を明らかにすることができた。

また、弥生前期～中期中葉と中期末葉～後期初頭、後期後半～古墳前期の各時期幅における土地利用の変遷が明瞭に把握されることとなり、平等坊・岩室遺跡における集落形態と規模の変遷過程を考えるうえでの多くの検討材料が得られたものと言える。

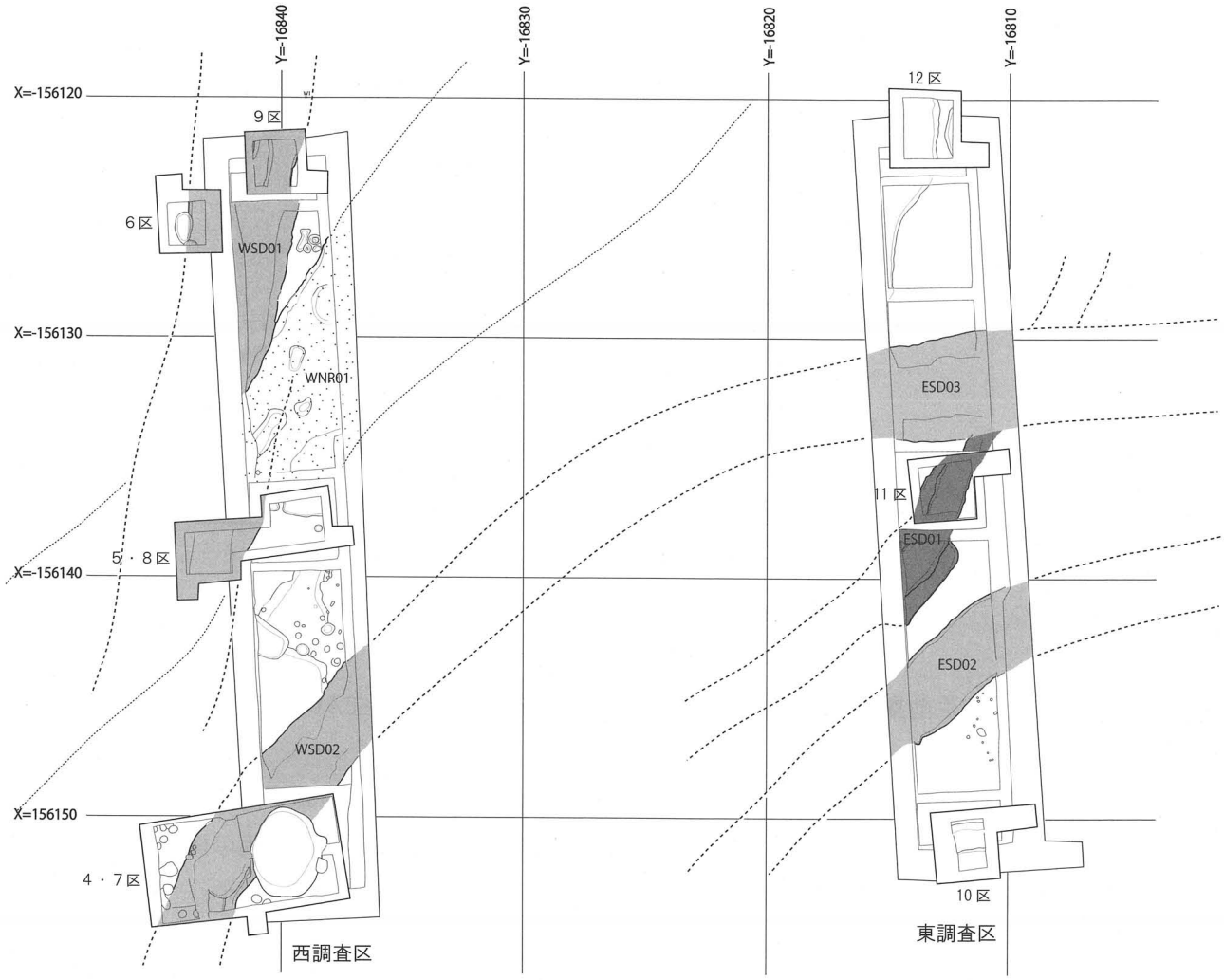


図 21　第 25 次各調査区の配置と検出遺構の位置関係（S＝1/300）

2．平等坊・岩室遺跡（第 26 次）－平等坊町

Ⅰ．はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代から古墳時代にかけての拠点集落遺跡である。地理的には盆地東部山麓の谷筋から派生して市内中央部を西流する布留川によって形成した扇状地下方に展開する沖積平野上に立地する。

遺跡の範囲は東西約 400m、南北約 600mと推定され、これまでに遺跡北半部を中心に実施された発掘調査の成果により弥生環濠集落の出現から終焉、あるいは古墳時代集落への移行に至るまでの集落変遷と動態が把握されつつある。

当遺跡においては、平成３（1991）年実施の第８次調査以降に宅地造成、店舗建設などの開発行為が相次ぎ、急激かつ大幅な景観の変化が近年までに見られている。

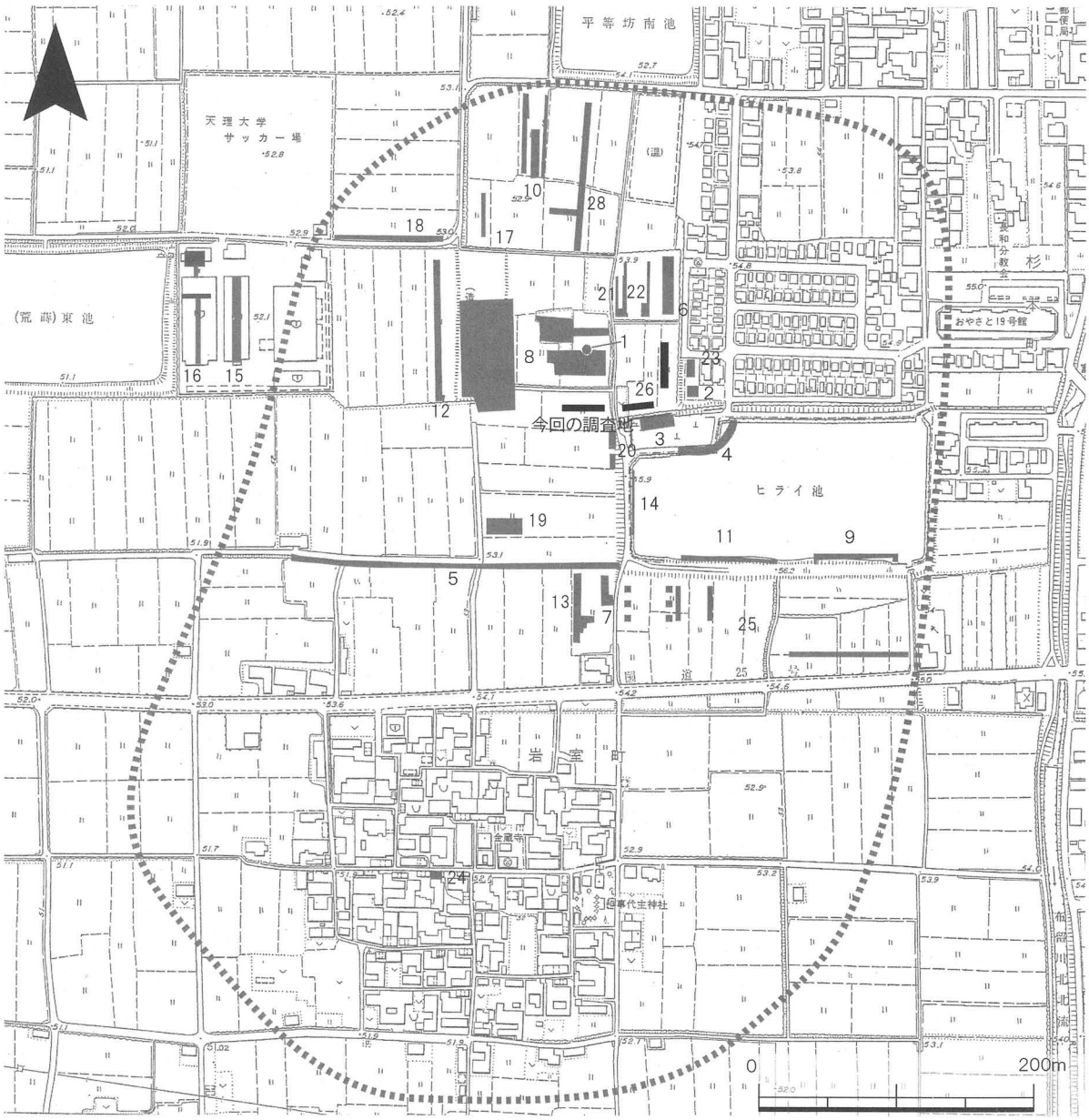


図１　今回の調査地と既往の調査地点位置図（S＝1/5000）

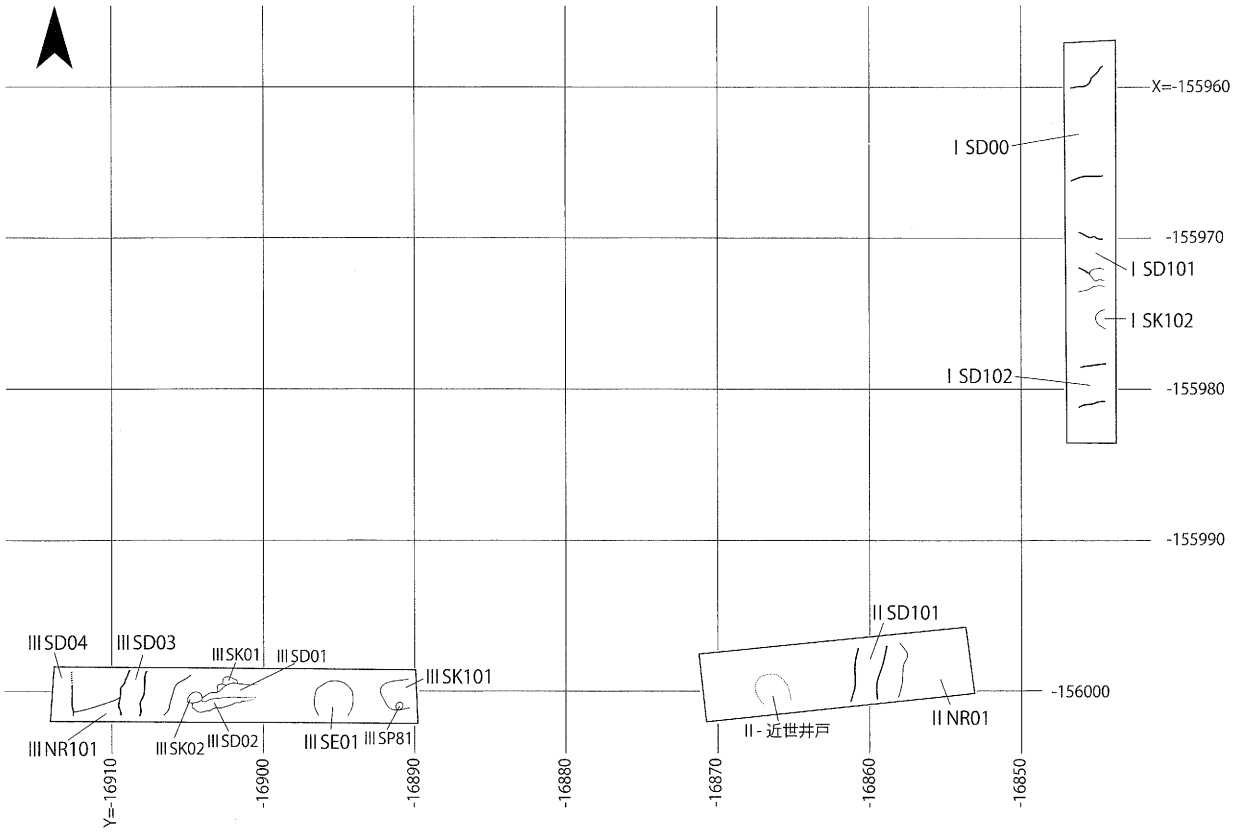


図２　今回の調査における調査区配置図（S＝1/500）

Ⅱ．調査の概要

今回の調査は、弥生拠点集落である平等坊・岩室遺跡の集落域北東辺に該当する地点において計画された民間の宅地造成工事に伴って実施した。

調査は、盛土造成による宅地開発を主体とするため対象地における道路敷地部分に限定し、南北方向の第Ⅰ調査区と東西方向の第Ⅱ・第Ⅲ調査区の計３箇所のトレンチ調査区を設定して進めた。現地調査にかかる諸作業は、平成 17 年 10 月３日より開始し、同年 11 月 29 日にすべての作業を終了した。なお、今次調査における総調査面積は約 300 ㎡であった。

１．第Ⅰ調査区

弥生前期～古墳前期までの上層、下層の二面にわたる遺構検出面を確認している。

検出遺構では環濠相当の大溝３条の他に重複関係の著しい土坑、溝、小穴等を多く検出している。

調査区北端では、北東～西方への大溝 SD00 があり、埋土上部より弥生後期末～布留式初頭の土器類が出土している。この大溝を境に北へは安定した基盤層が続くが、南方では傾斜面を成し遺物包含層の堆積が厚く認められた。この間においては複数の重複遺構面が見られた。

調査区南半から南端では、東西方向に並行する大溝Ⅰ SD101、大溝Ⅰ SD102 の２条の環濠大溝を検出し、ともに弥生中期前半を主体とする時期が考えられた。また、これらの大溝群より南方へ向けては下面に細砂・粗砂や砂質土を基調とした最下層包含層の落ち込みが見られ前期～中期初頭の土器片が含まれていた。

大溝ⅠSD00

第Ⅰ調査区北半の遺物包含層直下の地山面で検出した皿状の断面形を呈した大溝である。

南北幅6.0～8.0mと広い溝幅の大溝であるが、深さは約0.4m程度と浅かった。埋土は褐灰～黒褐色微砂・シルト～砂質土で、上部のみ粘質を帯びる黒色土が南岸付近に厚く堆積していた。遺物はほとんどが埋土上半部の堆積層から出土しており、完形土器を含む弥生後期末の土器類が大溝南岸付近の法面に局所的な偏りを見せつつ検出された。

大溝ⅠSD101

第Ⅰ調査区中央やや南付近の地山面で検出した北西～南東方向の大溝である。南岸のみ下層遺物包含層上面を検出面とした。

南北溝幅2.0m前後、深さは検出面から約0.6mであり断面形状は半円形を呈する。埋土は上下層に明瞭に区分され、上層がにぶい黄～黄灰色の粗砂混じり砂質土で下部のみ粘質土となり、下層は暗灰黄～灰黄色細砂～粗砂である。上層埋土のレンズ状堆積の状況から再掘削等による継続利用が窺える。遺物は上下層ともに弥生中期初頭～前半の土器片が出土しているが、出土量は少ない。

大溝ⅠSD102

第Ⅰ調査区南端付近の地山面で検出したやや南西～北東に傾く東西方向の大溝である。北岸のみ弥生前期土器片を含む下層の自然河道埋土上面を検出面とした。

南北溝幅3.0m前後、深さは検出面から最深部までで約0.6mであるが、底面には凹凸が多く見られ、断面形状は浅い半円形を呈する。埋土は北寄りに堆積した上半部が黒褐～褐灰粘質土・粘土で土器片を多く包含し、下部は底面直上まで黄灰～黒褐色のシルト質粘土となり土器片は少量である。埋土の堆積状況から判断して、自然埋没にかかる過程を示すものと思われる。

土坑ⅠSK102

第Ⅰ調査区中央南寄り東側の地山面で検出したほぼ円形の平面形を成す土坑である。

調査区内では全体の半分近くを検出しており、直径は約1.3m程度の規模と思われる。検出面よりの深さは約0.3mで、断面形状は半円形である。埋土は多量の炭や粘土ブロックを含む灰黄褐～褐灰色微砂・シルト混じり粘質土であり、遺物はほぼ完形に復元可能な弥生中期前半の広口長頸壺が1個体のみ出土している。

２．第Ⅱ調査区

調査区の東西では層序が大きく異なり、西端のみ安定した基盤層が認められ東方へ向けて下降する地形も確認された。ここでも遺構面の重複関係は著しく、下層遺構面では自然河道ⅡNR01、大溝ⅡSD101と上部に重複する大溝ⅡSD102がともに南北方向に検出された。

また、これらの埋没後には西端の安定基盤上と同一面を成す砂層および砂質土堆積層の上面に土坑、柱穴群の重複する上層遺構面が形成されていた。

自然河道ⅡNR01

第Ⅱ調査区東端で検出した砂層堆積の落ち込みである。

調査区内では5.0m近くの川幅を検出しており、深さは北側でのみ約1.3mで川底を確認することができたが、南側では1.5mまで掘り下げても底面には至らずさらに深くなることが予想された。埋土は上部に厚さ0.4m前後の弥生前期～中期前半の土器片を含む黒褐色細砂・粗砂の堆積があり、以下は灰黄褐～灰白色微砂・細砂・粗砂の堆積が続いていた。ここでも川底付近までの砂層中には弥生前期～中

期初頭の土器片がまばらに含まれていた。

大溝ⅡSD101

第Ⅱ調査区中央東寄りの基盤層上部の砂質土・粘土層による無遺物層堆積により形成された地山面で検出した南北方向の大溝である。検出時の溝幅は最大で約2.2mを測り、深さも深さは0.3m程度と残りは浅い。埋土は黄褐～黒褐色砂混じり粘質土・粘土で、断面形状はほぼ皿状に近い半円形である。弥生前期土器がわずかに含まれていた。

この大溝の検出位置からは、かつて南側隣接の墓地造成に伴って1978（昭和53）年に実施された第３次調査（註1）の際に確認された弥生前期溝に連続する溝と考えられるものである。

大溝ⅡSD102

前述の大溝ⅡSD101の西肩上部から調査区西側の安定基盤を成す地山面までにかけて遺存した下層遺物包含層による北西～南東方向の大溝状落ち込みである。東西幅８mほどにわたり黄灰～褐灰色微砂・シルト混じり粘質土～粘土の堆積が深さ0.4～0.6m程度で続き、途中の層理面においても柱穴などの遺構群の掘り込み面が確認されている。遺物は弥生中期初頭～前半にかけての土器片がわずかに出土しており、この間の地形変化を示す自然堆積として理解できる。

なお、調査では時間的な制約のため遺構面の断ち割りによる土層断面観察のみに留まり、そのために充分な検討ができなかった点が悔やまれる。

Ⅱ-近世井戸

第Ⅱ調査区中央西寄りの南側で検出した径2.0mほどの円形井戸である。耕作土直下で検出しており、深さは約1.0m近くとなる。埋土はほとんどがブロック混じりの撹乱土であったため、使用停止の後、廃棄後には人為的に埋められていたものと思われる。底面付近で信楽焼摺鉢に納めたかたちで灯明皿としての使用痕が残る土師質小皿２枚が出土している。これらの遺物により近世の井戸であることがわかる。

石庖丁集積遺構

後述の近世井戸のすぐ北側の位置で上層遺構検出面において、複数の石庖丁の重なりを縦位に置く状況を検出している。出土状況からはおそらく小穴状の遺構内に埋納されたものと思われるが、調査時においては遺構輪郭等の確認は困難な状態であったため一応集積遺構として観察をおこなったものである。弥生中期後半以降の遺構検出面となる土層、遺構埋土中より出土したため、帰属時期については概ね弥生中期前半～後半以前となる。石庖丁は全部で６個体あり、すべて石材は結晶片岩であった。

３．第Ⅲ調査区

調査区全域が安定基盤層の微高地に該当し、耕作土直下で弥生前期～近世の遺構の混在する遺構検出面となっていた。調査区東半では第Ⅱ調査区の西端から続く柱穴群が東西30mの間の限定された範囲に拡がり、弥生中期末～後期の掘立柱建物群が数時期にわたって営まれた様子が窺えた。調査区西半では1991（平成３）年の第８次調査（註2）西調査区検出の南北方向の区画溝（弥生後期）の延長となる溝ⅢSD03および溝ⅢSD04の２条の溝が確認され、東側微高地上での土地利用の変遷を知ることとなった。ここでは弥生前期から後期にかけての井戸、土坑などを含め多数の遺構が存在したが、最も時期が遡るのは調査区西半を北東～南西方向に斜行する自然河道ⅢNR101（弥生前期前半）であった。

井戸ⅢSE01

調査区中央東側で検出した径3.4m前後の円形井戸である。深さは中央最深部で約0.8mであり、断面形状は半円形を呈する。埋土は上下２層に大別可能であり、上部上層が完形品に近い土器類と炭など

の炭化物を多く含み深さ約0.5mほど続くレンズ状堆積を成す暗褐～黒褐色砂混じり粘質土、以下、底面直上までの下層が黒褐色微砂・シルト混じり粘質土となっている。遺物は上部上層に多く集中し、出土状況は土坑中央に向かって逆円錐状の位置に出土する状況が見られた。また、底面は湧水層まで達しておらず、検出時の平面形より井戸として調査を進めたが、底面の形状や埋土上部への土器の廃棄状況から本来は大型土坑であったと思われる。なお、出土土器の大半は弥生後期後半～末に帰属時期が求められる土器群である。

溝ⅢSD03および溝ⅢSD04

第Ⅲ調査区西、西端で検出した平行する南北溝である。いずれも断面形状はV字状を呈した溝で、北側の第８次調査時に検出した区画溝の続きとなる。ⅢSD03は幅２m前後、深さ0.8m。埋土は黒褐～暗褐色粘質土である。遺物は上半部を主体に弥生後期後半の土器が出土している。ⅢSD04は東肩のみを検出し、土層断面観察より幅２m弱、深さは1.1mほどである。褐灰～黒褐色粘質土・粘土の埋土の中位から上部にかけて完形品を含む多量の弥生後期土器が出土し、ⅢSD03より遡る時期が主体となる。

小穴ⅢSP81

第Ⅲ調査区東端で検出した径0.5m前後の小穴である。断面形は片側に段を残す逆台形であるため、本来は柱穴であったことが窺える。第Ⅱ調査区西から第Ⅲ調査区東にかけて拡がる安定基盤上に遺存した柱穴を含む小穴群中にある遺構で、黒色粘土の埋土中に弥生後期初頭の高杯形土器の埋納が見られた。

調査では同様な状況で土器出土の柱穴を複数確認しており、弥生中期後半～末に時期が限定される。

第Ⅲ調査区弥生前期遺構群

これらは、第Ⅲ調査区全域に拡がる黄灰～黄褐色粘土を基調とする安定基盤層上に残された当遺跡における集落初現期の遺構群である。以下に概観するのは弥生前期土器等の多くの遺物出土を見た遺構であるが、ほかにも微細な土器片を含む砂質土、シルト等を埋土とした不整形な土坑状の落ち込みも多数検出している。

溝状落ち込みⅢSD01・ⅢSD02はともに調査区東半に東西方向に重複した状況で検出した落ち込み状遺構である。上部のⅢSD01では、深さは検出面より約0.1～0.25mで断面形が半円形を成し、下部のⅢSD02は深さ0.25～0.4mで断面形はほぼ逆台形となっていた。埋土はどちらも炭を混じる黒褐色微砂混じり粘質土で類似するが、ⅢSD01底面付近で炭化物がレンズ状に堆積し、これを境にシルト質土壌の埋土へと変化が見られたため区分できた。いずれも底面のレベルは東に向かい下降していた。遺物は両落ち込みともに弥生前期後半までの土器が出土している。

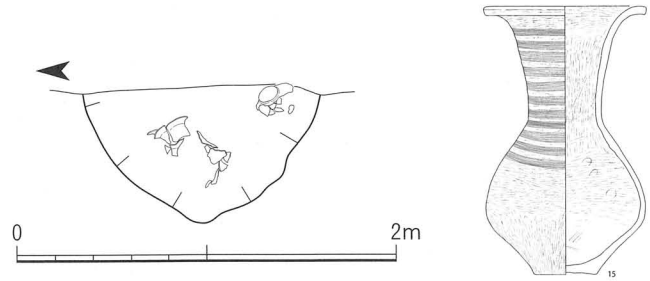
土坑ⅢSK101は、調査区東端の弥生中期後半～後期初頭の小穴群下面に重複して検出した土坑である。調査区内では隅丸方形の平面の半分以上を検出した。南北幅最大2.0m、東西長約2.0mの規模で、深さは0.35m前後が残り、断面は逆台形である。埋土は上部が黒褐色砂混じり粘質土で、下部には黄色粘土ブロックが混じる。遺物は多条沈線や貼付突帯のある弥生前期土器が出土している。

土坑ⅢSK01・ⅢSK02は、それぞれ溝状落ち込みⅢSD02の北縁と西端付近に重複して検出した浅い土坑である。ⅢSK01は径1.0mほどのやや菱形に近い平面形の土坑で、断面は皿状を成し中央で深さ0.25mとなっていた。埋土は黒褐色粘質土で炭や焼土塊が混じる。底面の焼けて堅く締まる状況から土器焼成土坑とも考えられる。ⅢSK02は径0.8mの不整円形で深さ0.2mほどの浅い土坑である。埋土は炭混じりの灰黄褐色粘質土である。これらの土坑からも破片主体で弥生前期後半の土器が出土している。

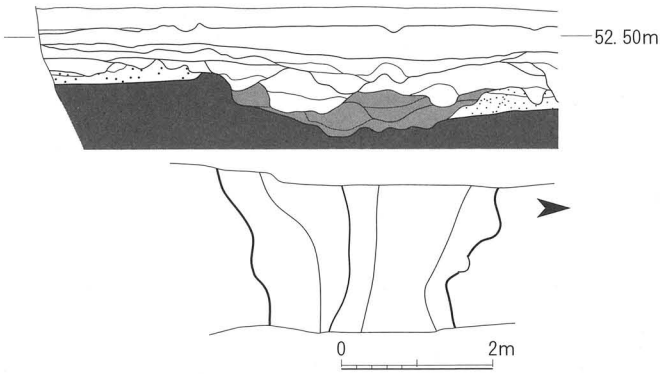
自然河道ⅢNR01は調査区西半の下層で検出した北東～南西方向の河道である。河道幅は6.0m弱、

深さは0.5～0.6m程度で河岸の西側で深くなっており、河底面付近に多量の弥生前期前半土器片が集中して出土した。埋土は黄灰～灰黄褐色微砂～粘土質シルトを基調とするが、肩部は砂質である。

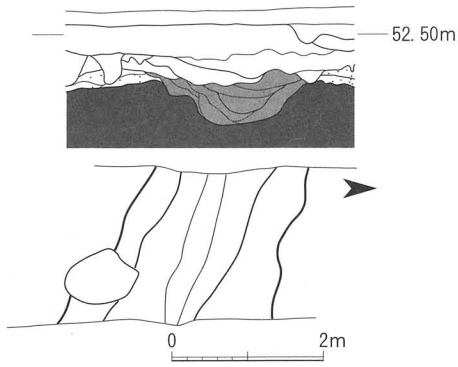
出土した土器群は当遺跡最古の弥生土器となり、環濠集落出現以前の集落様相を知るうえでの好材料となる資料が得られた。



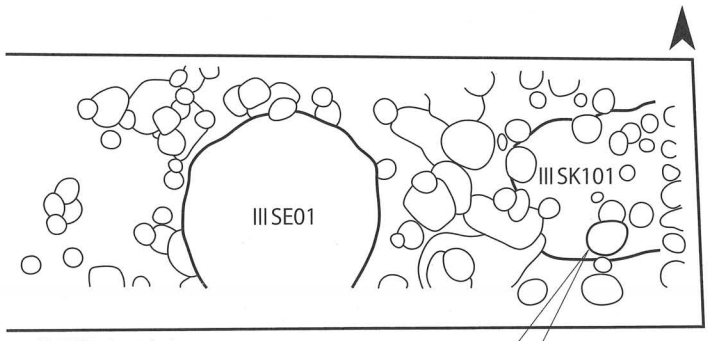
土坑ⅠSK102 平面図（S=1/40）と出土土器（S=1/10）



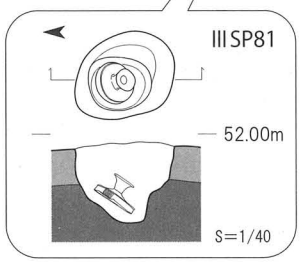
大溝ⅠSD102 平面・土層図（S=1/100）

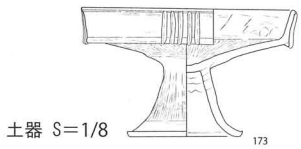


大溝ⅠSD101 平面・土層図（S=1/100）

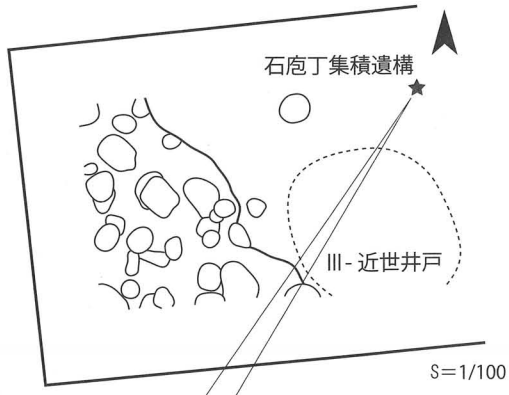


第Ⅲ調査区東半

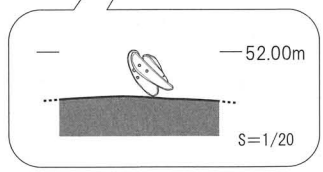


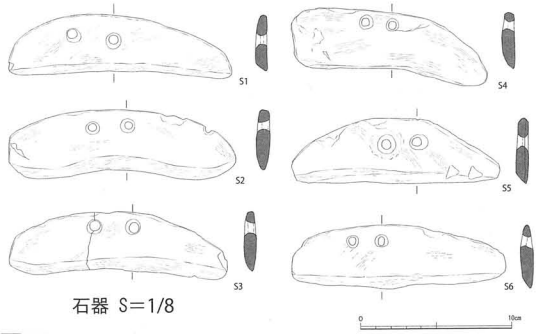


土器 S=1/8



第Ⅱ調査区西半

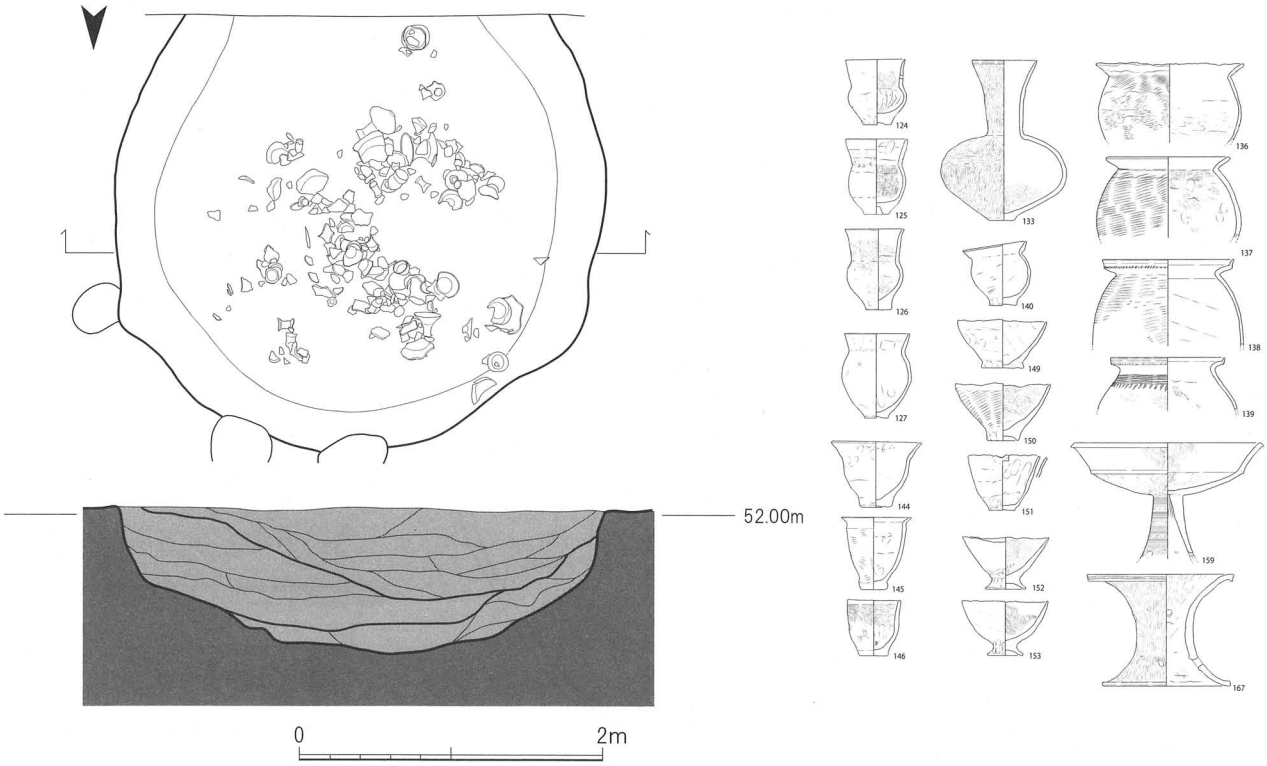




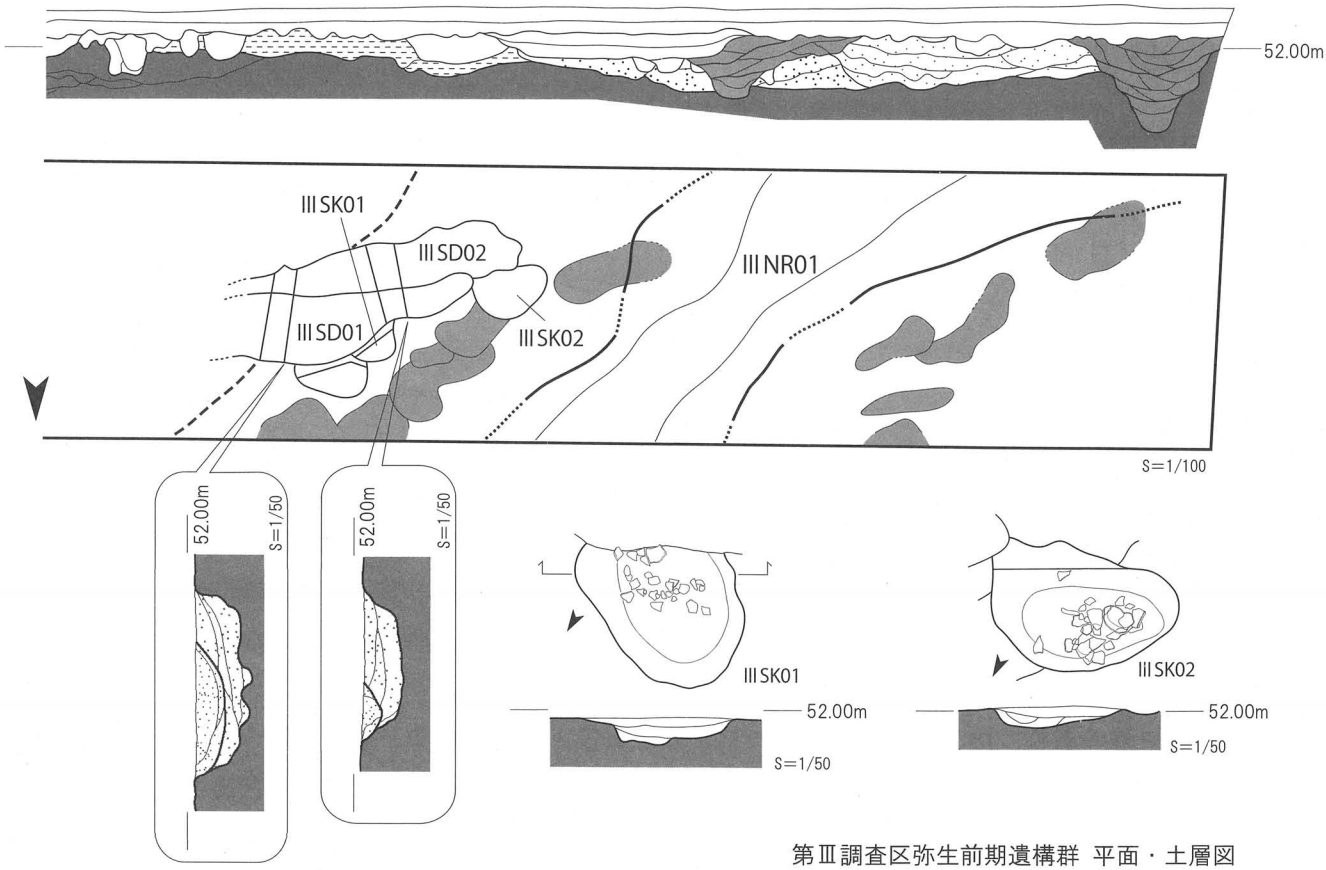
石器 S=1/8

第Ⅱ・第Ⅲ調査区間の安定基盤上の遺構群と出土遺物

図３　主要遺構平面・土層図１



土坑ⅢSE01 平面・土層図（S＝1/50）と出土土器（S＝1/10）



第Ⅲ調査区弥生前期遺構群 平面・土層図

図４　主要遺構平面・土層図２

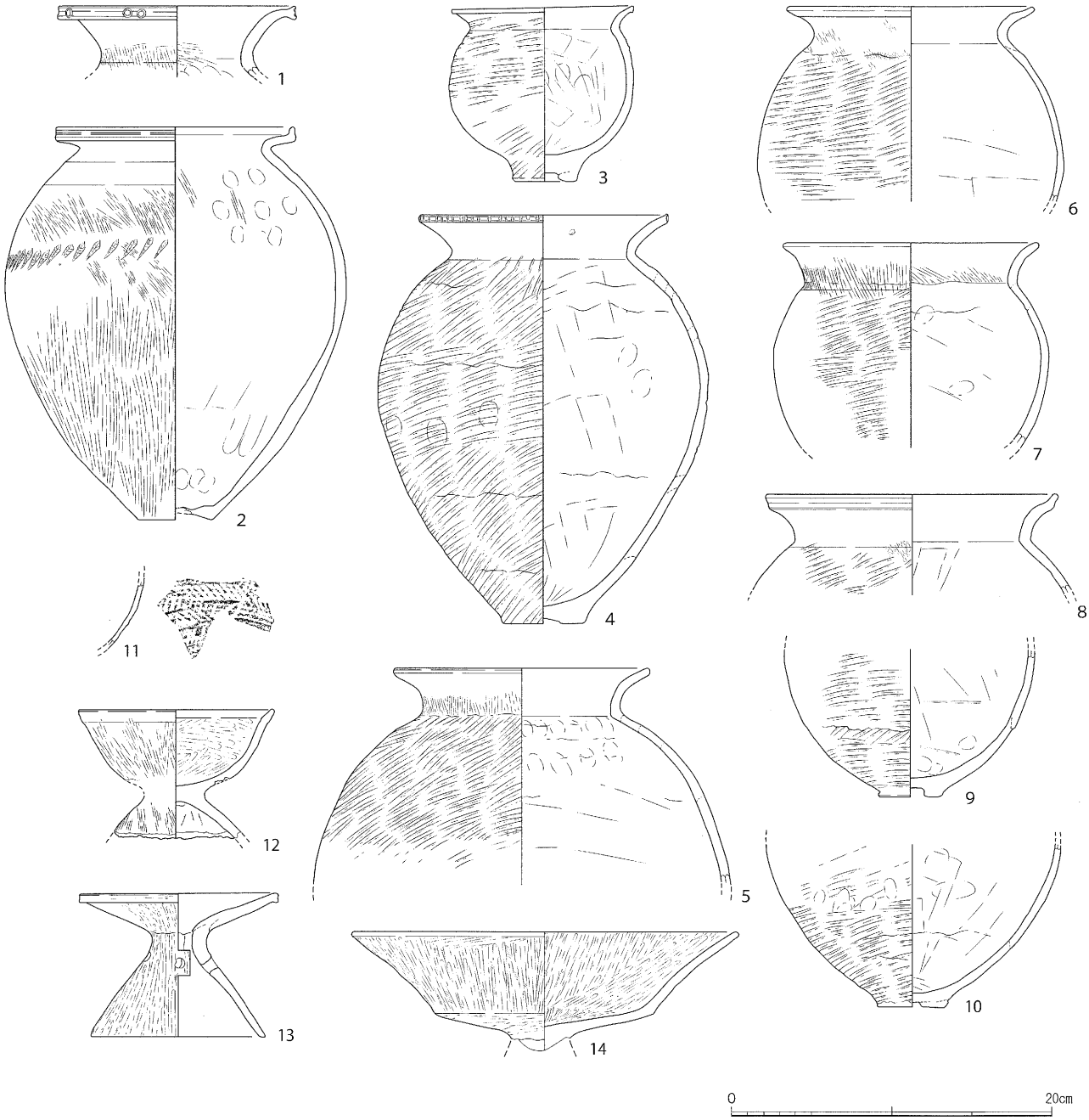


図５　出土土器実測図１（S＝1/4）

Ⅲ．主要な出土遺物

今回の調査では、各調査区において遺物包含層および遺構埋土より弥生前期～後期の土器類を中心に多くの遺物が出土している。多量の破片資料の出土を見た第Ⅲ調査区の弥生前期遺構群や弥生後期の井戸、溝等からの完形土器を含む豊富な出土土器があり、その大半を占める遺物量となっている。これらの総数は、コンテナにして約 100 箱近くにおよぶ。

また土器以外の遺物では、第Ⅱ調査区西で検出した石包丁集積遺構など遺構に伴う在り方を示す石器類も出土している。他にも打製、磨製の石器や木製品など弥生集落に通有な遺物も含まれている。

ここでは、図示した遺物を中心に特徴的な点についてのみ概観するものとしたい。なお、各遺物の色調、胎土、法量等については観察表を参照されたい。

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高(現存高)		
1	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	14.6	4.4	口縁部1/6 頸部ほぼ完存	(外)口縁部竹管文・凹線文、ヨコナデ、タテ方向にハケ、指頭圧痕 (内)ヨコナデ、ヨコ・ナナメ方向にハケ、指頭圧痕
2	甕	7.5YR 7/6 橙	密	良好	14.6・4.6	24.4	3/4	(外)口縁部凹線文、ヨコナデ、胴部刺突文、タテ・ナナメ方向にハケ、黒斑 (内)一部ハケ、板ナデ、指頭圧痕
3	甕	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	11.2・4.0	10.9	完形	(外)口縁部ヨコナデ、タタキのちナナメ方向にハケ、黒斑 (内)板ナデ、指頭圧痕、黒斑
4	甕	10YR 5/3 にぶい黄褐	密 (角閃石・雲母含む)	良好	15.8・5.0	25.4	4/3	(外)右上がりタタキ、口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、黒斑 (内)口縁部ヨコナデ、板ナデ、指頭圧痕、黒斑、籾状圧痕
5	甕	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	15.8	13.4	口縁部2/3 頸部ほぼ完存	(外)口縁部下半タテ方向にハケ、タタキ (内)黒斑、ヨコナデ、板ナデ、指頭圧痕
6	甕	7.5YR 8/4 浅黄橙	密	良好	15.0	12.1	口縁部～腹部 1/3	(外)口縁部ヨコナデ、口縁部下半ナナメ方向にハケ、タタキ (内)板ナデ
7	甕	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	16.0	12.7	口縁部1/2	(外)口縁部ヨコナデ、口縁部下半タテ・ナナメ方向にハケ、タタキ、黒斑 (内)板ナデ、指頭圧痕、黒斑
8	甕	7.5YR 6/6 橙	密	良好	18.2	6.2	口縁部1/2	(外)口縁部凹線文、頸部ヨコナデ、タタキ一部ナナメ方向にハケ (内)板ナデ
9	甕	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	4.0	9.2	底部1/2	(外)タタキ、黒斑 (内)板ナデ、工具圧痕、指頭圧痕
10	甕	10YR 6/3 にぶい黄橙	密	良好	底径4.2	10.0	底部2/3	(外)タタキ、指頭圧痕 (内)板ナデ、指頭圧痕、工具圧痕
11	甕	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	—	—	—	(外)矢羽根状タタキ (内)ナデ
12	台付鉢	5YR 7/6 橙	やや密	良好	12.0	8.0	口縁部～頸部 ほぼ完存	(外)口縁端部ヨコナデ、杯部タテ方向にハケのちタテ・ナナメ方向にミガキ、脚部タテ方向にハケ (内)杯部ヨコ・ナナメ・タテ方向にミガキ、脚部ナデ、工具圧痕
13	小型器台	5YR 6/6 橙	密	良好	底径10.8	8.9	受部1/2 脚部完存	東海系 (外)4方に円孔、受け部タテ・ナナメ方向にミガキ、黒斑 (内)磨滅のため調整不明
14	高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	24.0	7.4	口縁部1/4～ 杯部ほぼ完存	(外)ナナメ方向にハケのちタテ・ナナメ方向にミガキ (内)ミガキ、黒斑

表１　出土遺物観察表１

１．土器類

第Ⅰ調査区大溝ⅠSD00 出土土器（図５/表１）

１は、広口壺である。口縁端面に凹線が１条めぐり、凹線上に２個１単位の竹管文が施文されている。

２は、口縁外端面に凹線を施文した瀬戸内系口縁の甕である。さらに、胴部の張り出したところに刺突列点文で装飾している。ほぼ完形の形に復元することができた。これらの特徴は、ⅠSD00 出土土器の中では古い特徴を成している。

３～８はタタキ甕である。３・４の口縁は、外反が強く頸部の稜が明瞭である。３は小型の完形品であり、４は完形に復元することができ、口縁端外面に刻目を施している。５～８は、口縁から胴部にかけての破片資料である。頸部から胴部を連続したタテハケを施しているため、頸部が少し長くなっている。また８は、瀬戸内形口縁をもつ。

タタキ甕の底部９・10は、球形を呈している。11は小片であるが、矢羽根状タタキを施すタタキ甕である。器壁が薄くなっている。

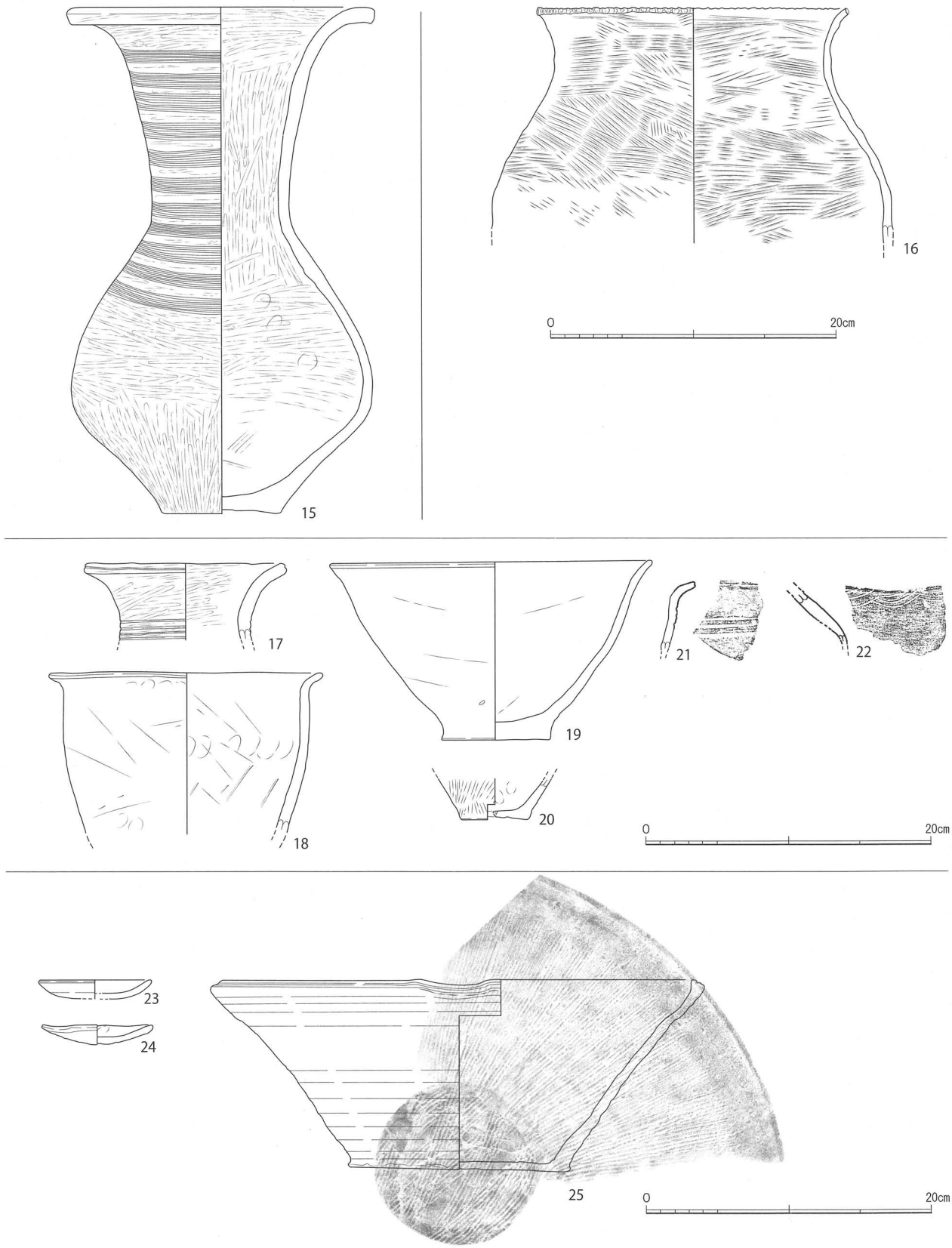


図６　出土土器実測図２（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高		
15	壺	5YR 6/6 橙	密	良好	21.4・35.4	35.4	口縁部～頸部ほぼ完存 底部3/4	(外)櫛描き直線文11条、タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ、黒斑 (内)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕、工具圧痕
16	甕	10YR 7/3 にぶい黄橙	粗い	やや良	21.4	16.5	口縁部1/6	伊勢湾沿岸系 (外)口縁端部刻目、タテ・ナナメ方向に条痕 (内)ヨコ・ナナメ方向に条痕
番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高		
17	壺	10YR 7/4 にぶい黄橙	密	良好	13.6	5.4	口縁部1/4	(外)口縁端部ヘラ描沈線1条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、頸部ヘラ描沈線4条 (内)ナナメ方向にミガキ
18	甕	10YR 5/2 灰黄褐	密	良好	19.0	11.2	口縁部1/3	(外)口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、強い板ナデ、煤化 (内)板ナデ、指頭圧痕、工具圧痕
19	鉢	7.5YR 8/4 浅黄橙	密	やや軟	22.4・7.6	12.5	3/4	(外)口縁部ヨコナデ、黒斑、籾状圧痕 (内)ナデ、黒斑
20	甕	2.5YR 5/1 黄灰	密	良好	底径4.5	2.9	底部3/8	底部穿孔 (外)タテ方向に粗いハケ、指頭圧痕 (内)摩滅のため調整不明、指頭圧痕
21	甕	5YR 6/6 橙	やや密	良好	—	—	—	(外)口縁端部ヘラ描沈線1条、指頭圧痕、ヘラ描沈線2条、削出による段 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕
22	壺	7.5YR 7/3 にぶい橙	やや密	良好	—	—	—	(外)貼付突帯、ヘラ描連弧文、ヨコ方向にミガキ (内)ナデ
23	土師質小皿	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好	口径7.8	1.3	1/3	内外面ともにナデ、指頭圧痕
24	土師質小皿	10YR 7/2 にぶい黄橙	密	良好	口径7.9	1.4	2/3	内外面ともにナデ、指頭圧痕、油煙付着
25	摺り鉢	10R 4/2 灰赤(泥粧) 10YR 8/3 浅黄橙(露胎)	密	良好	33.0・15.2	15.2	ほぼ完形	注口部残る、信楽焼、擂り面7条1単位、泥粧 内外面ロクロナデ

表２　出土遺物観察表２

12・13は脚部が内湾しているため、形態的に東海系の影響を受けていると考えられる。

12は椀形を呈し、底部付近を意図的に打ち欠いている可能性がある。13には外面が丁寧なヘラミガキが施され、中空となっている。14は、丁寧なヘラミガキが施された高杯の杯部である。外反口縁で深皿状になっており、中実である。

第Ⅰ調査区土坑ⅠSK102出土土器（図６上段左／表２）

15は、広口長頸壺である。櫛描直線文の多条化により頸部が長く発達している。内外面ともに丁寧なヘラミガキがなされている。ほぼ完形に近い形に復元することができた。こうした形態的特徴から、弥生時代中期前半に通有する壺である。

第Ⅰ調査区南部下層遺物包含層出土土器（図６上段右／表２）

16は、口縁から胴部上半にかけて残る甕の破片である。胴部から頸部にかけて緩やかに内湾した後に外反する口縁形状を呈した粗製の甕である。内外面ともにヨコ、ナナメ方向の貝殻条痕の調整をなしている。また、口縁外端面に同一原体と思われる工具で刻目を有する。これらの調整面の特徴から伊勢湾沿岸地域からの搬入土器であることがわかる。第Ⅰ調査区東端の下層遺物包含層より出土している。

第Ⅱ調査区大溝ⅡSD101 出土土器（図６中段／表２）

弥生前期の環濠と思われる大溝ⅡSD101 では、弥生時代前期の遺物が中心である。17 は、口縁から頸部にかけての広口壺の破片である。口縁から頸部にかけての破片で、ヘラ描沈線が口縁外端面に１条、頸部に４条以上めぐる。内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。

18 は、無文の甕である。口縁から胴部にかけての破片であるが、胴部の張りが少なく倒鐘形を呈し、器壁は厚い。

19 は、口縁部がわずかに外反する無文の大型鉢である。底部外面には籾状圧痕が見られた。

20 は、大和形甕の底部小片である。外面には粗いハケ調整が施され、底部には穿孔が認められる。

21 は、甕の小片である。口縁外端面にヘラ描沈線１条、頸部にヘラ描沈線２条が施されている。さらに、頸部の沈線下位には頸部と胴部の間を区画するかのように削出による段を成す。そのため、段の高さは低い。

22 は、壺の胴部片である。貼付突帯の直下に３条１単位のヘラ描沈線による連弧文が描かれている。

これらの土器から、ⅡSD101 出土土器では弥生前期前半頃を主体とする時期が考えられる。中期初頭～前半の土器もわずかに含まれるが、埋没にかかる上部堆積層からの混入とも思われる。

第Ⅱ調査区西近世井戸出土土器（図６下段／表２）

23・24 は土師質小皿である。24 のみ口縁付近に油煙の付着が見られる。どちらも指頭圧、ヨコナデにより成形され、灯明皿としての使用が窺える。

25 は、信楽焼の摺り鉢である。口縁部の一端には注口部が残り、内面の摺り面の櫛目は７条１単位である。外面には赤褐色の泥粧が施されている。

これらの雑器類については、概ね江戸時代前半期頃の時期が考えられる。

第Ⅲ調査区自然河道ⅢNR101 出土土器（図７・８／表３・４）

26 ～ 28 は壺形土器である。26 は頸部付近に、28 には肩部付近に粘土紐接合時にできた高低差を段とし、内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。この段の成形方法は古く、前期の遺物の中ではより古いと言える。

27・29・30 は、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。27 は、頸部にヘラ描沈線２条がめぐる。29 は１方の円孔が残っている。削出による段を頸部に作り、その下にヘラ描沈線が１条めぐり帯状の区画が成されている。30 は、口縁外端面にヘラ描沈線が１条めぐる。

31・32 は大型の広口壺である。31 は、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施され、外面頸部に粘土紐を貼付し、両端をヘラミガキで削出して突出させた突帯を成す。内面にも突帯が貼付されている。この内面突帯は、貼付突帯とは異なるものである。

甕 33 ～ 36 は、胴部の張りが少ない倒鐘形を呈する。34 以外は口縁端面に刻目が施されており、34 は無文で器壁が厚く、口縁部がわずかに外反する。

37・38 は蓋で、37 はヘラ描沈線３条１単位で直線と円弧文が描かれている。一方 38 は、摘み部上端面にヘラ描沈線が１条めぐり、残存部分は少ないが裾にヘラ描沈線による装飾が成されていることがわかる。

39 は小型鉢である。口縁は外反せず直口し、盃形を呈している。40 ～ 44 は壺の底部で、すべて内

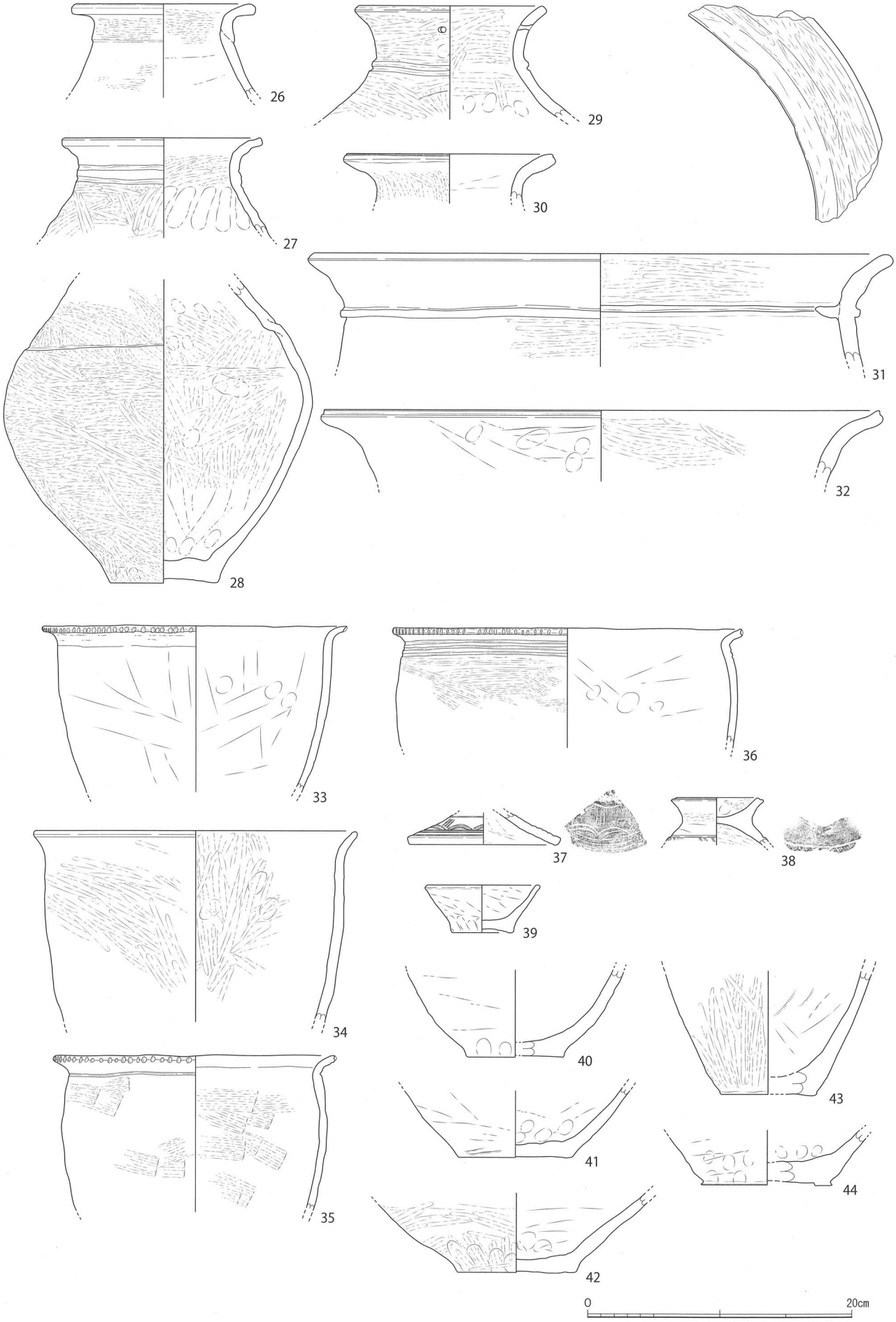


図７　出土土器実測図３（S=1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高		
26	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや粗	良好	12.8	7.1	口縁部3/8	(外)段、ヨコ方向にミガキ (内)口縁部ヨコ方向にミガキ、ナデ
27	壺	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗	良好	14.4	7.5	口縁部完形	(外)口縁部ヨコナデ、ヘラ描き沈線2条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕
28	壺	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗	軟	8.0	22.4	底部～胴部ほぼ完形	(外)段、ヨコ・ナナメ方向にミガキ一部ナデ、指頭圧痕、黒斑 (内)胴部タテ・ナナメ方向にミガキ一部ナデ、底部ナデ、指頭圧痕
29	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや密	良好	13.4	8.6	口縁部1/2	(外)1方のみ円孔、削出突帯、ヘラ描沈線1条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕、工具圧痕 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕、黒斑
30	壺	7.5YR 6/6 橙	密	良好	15.0	3.7	口縁部1/4	(外)口縁部ヨコナデ、口縁端部ヘラ描沈線1条、タテ・ナナメ方向ミガキ (内)ナデ
31	壺	10YR 7/4 にぶい黄橙	粗	やや良好	42.4	8.5	口縁部1/8	(外)削出突帯、口縁部ヨコナデ、ヨコ方向にミガキ (内)削出突帯、ヨコ方向にミガキ、黒斑、指頭圧痕
32	壺	2.5Y 7/3 浅黄	やや密	良好	41.4	5.3	口縁部1/8	(外)口縁端部ヘラ描沈線1条、ナデ、指頭圧痕 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
33	甕	7.5YR 7/6 橙	やや粗	良好	22.2	12.4	口縁部～胴部1/3	(外)口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、ナデ、煤化 (内)ナデ、指頭圧痕
34	甕	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや密	やや良好	23.6	14.3	口縁部1/4	(外)口縁部ヨコナデ、ナナメ方向にミガキ (内)タテ・ナナメ方向ミガキ、指頭圧痕、黒斑
35	甕	7.5YR 6/6 橙	やや密	良好	20.8	11.6	1/5	(外)口縁部ヨコナデ、口縁端部刻目、ヘラ描沈線1条、ヨコ・ナナメ方向にハケ (内)ヨコ・ナナメ方向にハケ
36	甕	5YR 6/6 橙	やや密	良好	25.4	8.9	口縁部1/4	(外)口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、ヘラ描沈線3条、ヨコ・ナナメ方向にハケ (内)ナデ、指頭圧痕
37	蓋	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや密	良好	11.2	2.2	1/6	(外)ヘラ描沈線で装飾 (内)ナデ
38	蓋	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗	良好	5.9	3.5	天井部完存	(外)ヨコ方向にミガキ、摘み部端部ヘラ描沈線1条、工具圧痕、ヘラ描沈線で装飾 (内)ヨコ方向にミガキ
39	小型鉢	7.5YR 6/3 にぶい褐	やや密	良好	8.0	3.6	1/3	(外)ナデ、底部連続した指頭圧痕 (内)ナデ
40	壺　底部	5YR 6/6 橙	やや密	良好	7.0	6.3	底部3/8	(外)ナデのちヨコ方向にミガキ、煤化、指頭圧痕 (内)ナデ
41	壺　底部	10YR 6/2 灰黄褐	やや粗	良好	8.2	5.0	底部ほぼ完存	(外)ナデ、工具圧痕 (内)ナデ、指頭圧痕
42	壺　底部	7.5YR 6/4 にぶい黄橙	やや密	良好	8.8	5.8	底部完存	(外)ヨコ・ナナメ方向ミガキ、底部連続した指頭圧痕 (内)ナデ、指頭圧痕
43	壺　底部	5YR 7/6 橙	やや密	良好	7.0	9.2	底部1/2	(外)タテ・ナナメ方向にミガキ、黒斑 (内)ナデ、工具圧痕
44	壺　底部	10YR 6/4 にぶい黄橙	やや密	良好	9.4	4.1	底部1/8	(外)ナデ、指頭圧痕 (内)指頭圧痕

表3　出土遺物観察表3

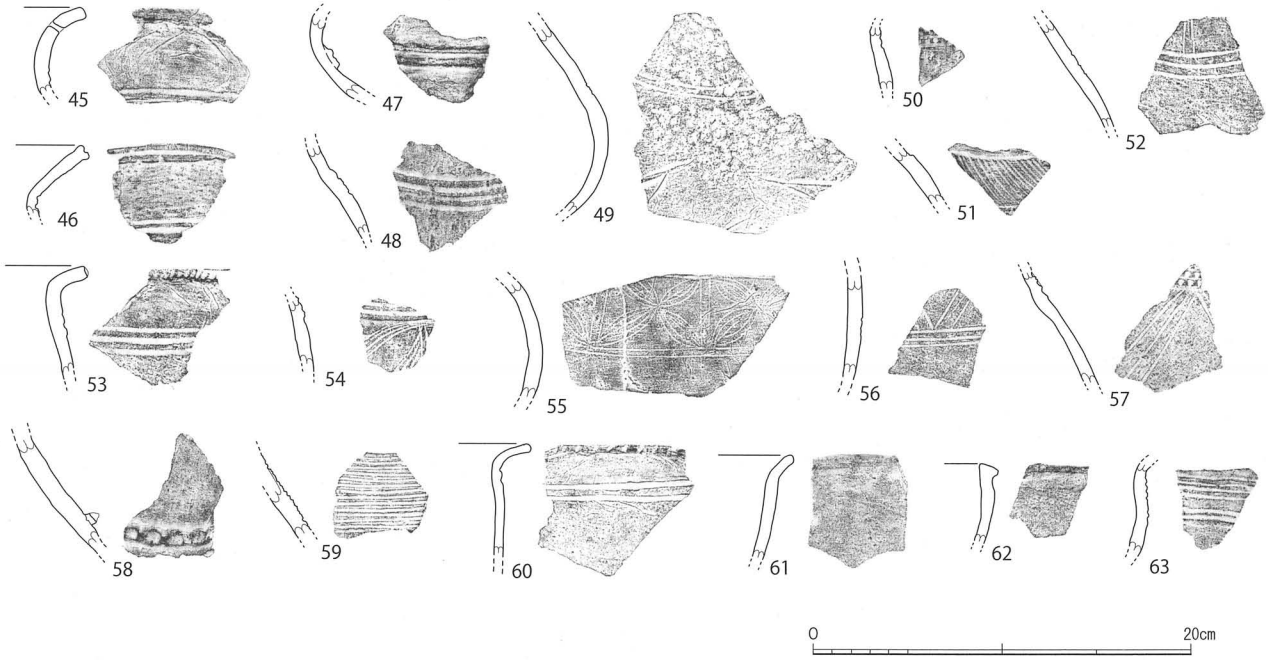


図８　出土土器実測図４（S＝1/4）

外面ともに連続した指頭圧痕が認められる。

45･46は広口壺の口縁である。45には円孔があり、46は口縁外端面にもヘラ描沈線が施文されている。

47～59は壺の破片である。47は、太い貼付突帯上にヘラ描沈線が１条めぐり、２条の突帯を形成している。48には、削出による段より下にヘラ描沈線が３条めぐる。49は壺の胴部が張り出した部分の破片で、ヘラ描沈線が２条めぐり、丁寧なヘラミガキが施されている。50にはヘラ描沈線が２条めぐり、この沈線間に円形の刺突が施文されている。

51は、段とヘラ描沈線間に斜線文が施文されている。これは、山口県の響灘沿岸に多く、遠賀川式土器の影響がより強いものである。

52はヘラ描沈線が２条めぐり、タテ方向にヘラ描沈線が施されているが、装飾的要素か区画的要素かは不明である。53は、大型の広口壺の口縁と考えられる。35の甕のように口縁外端面に刻目が施され、頸部にヘラ描沈線が３条めぐる。

54・55は、壺胴部の破片で、ともに木葉文が施文されている。56は、ヘラ描沈線で三角形になるように装飾が成されている。

57は、ヘラ描沈線間に円形の刺突をめぐらせ、ヘラ描沈線でナナメ方向に装飾を施している。

58はヘラ描沈線を引いてから、沈線上に貼付突帯を成している。これは貼付位置を示しつつ、貼付部分を補強している製作工程が窺える。59は、ヘラ描の多条沈線がめぐる。

60・61は甕である。60は口縁端外面に刻目が施され、頸部にヘラ描沈線がめぐる。一方61は、無文である。

62・63はともに鉢で、62の口縁は外傾している。

これらの土器群から、ⅢNR101出土土器の多くは弥生前期土器類の中でも古い様相を呈している。従来の佐原真氏分類の前期古段階から新段階にかけての時期に帰属すると思われる。

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高		
45	壺	10YR 5/3 にぶい黄褐	やや密	良好	—	—	—	(外)紐孔有り、ヘラ描沈線２条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
46	壺	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗	良好	—	—	—	(外)口縁端部ヘラ描沈線１条、頸部ヘラ描沈線２条、ヨコナデ (内)ヨコナデ、黒斑
47	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	やや密	やや良好	—	—	—	(外)貼付突帯上にヘラ描沈線１条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ナデ
48	壺	10YR 7/2 にぶい黄橙	やや粗	やや柔	—	—	—	(外)削出による段、ヘラ描沈線３条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ナデ
49	壺	10YR 6/3 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線２条、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ナデ、指頭圧痕
50	壺	2.5Y 3/1 黒褐	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線２条、刺突文 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
51	壺	10YR 7/2 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	(外)削出による段、ヘラ描沈線１条、斜線文、黒斑 (内)ナデ
52	壺	5YR 6/6 橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線２条、ヘラ描沈線で装飾、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
53	壺	7.5YR 6/6 橙	やや密	やや良好	—	—	—	(外)口縁端部刻目、ヘラ描沈線３条 (内)ナデ
54	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線２条、削出による段、木葉文、一部赤彩残る (内)ナデ
55	壺	10YR 5/3 にぶい黄褐	やや密	良好	—	—	—	(外)木葉文、ヨコ方向にミガキ、一部赤彩残る (内)ヨコ方向にミガキ
56	壺	7.5YR 4/2 灰褐	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線３条、ヘラ描沈線で装飾 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
57	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや粗	やや良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線３条、刺突文、ヘラ描沈線で装飾、ヨコ・ナナメ方向にハケ (内)ナデ
58	壺	7.5YR 6/6 橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線１条の上に貼付突帯、貼付突帯に刻目、ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
59	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)多条ヘラ描沈線(14条現存) (内)ナデ
60	甕	7.5YR 6/4 にぶい橙	やや密	良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、ヘラ描沈線２条、タテ方向にミガキ (内)ナデ
61	甕	10YR 5/2 灰黄褐	やや密 (石英・雲母含む)	良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕 (内)ナデ
62	甕	10YR 4/3 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	内外面ともにヨコ・ナナメ方向にミガキ
63	鉢	7.5YR 5/4 にぶい褐	やや粗	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線６条、ナデ、指頭圧痕 (内)ナデ、指頭圧痕

表４　出土遺物観察表４

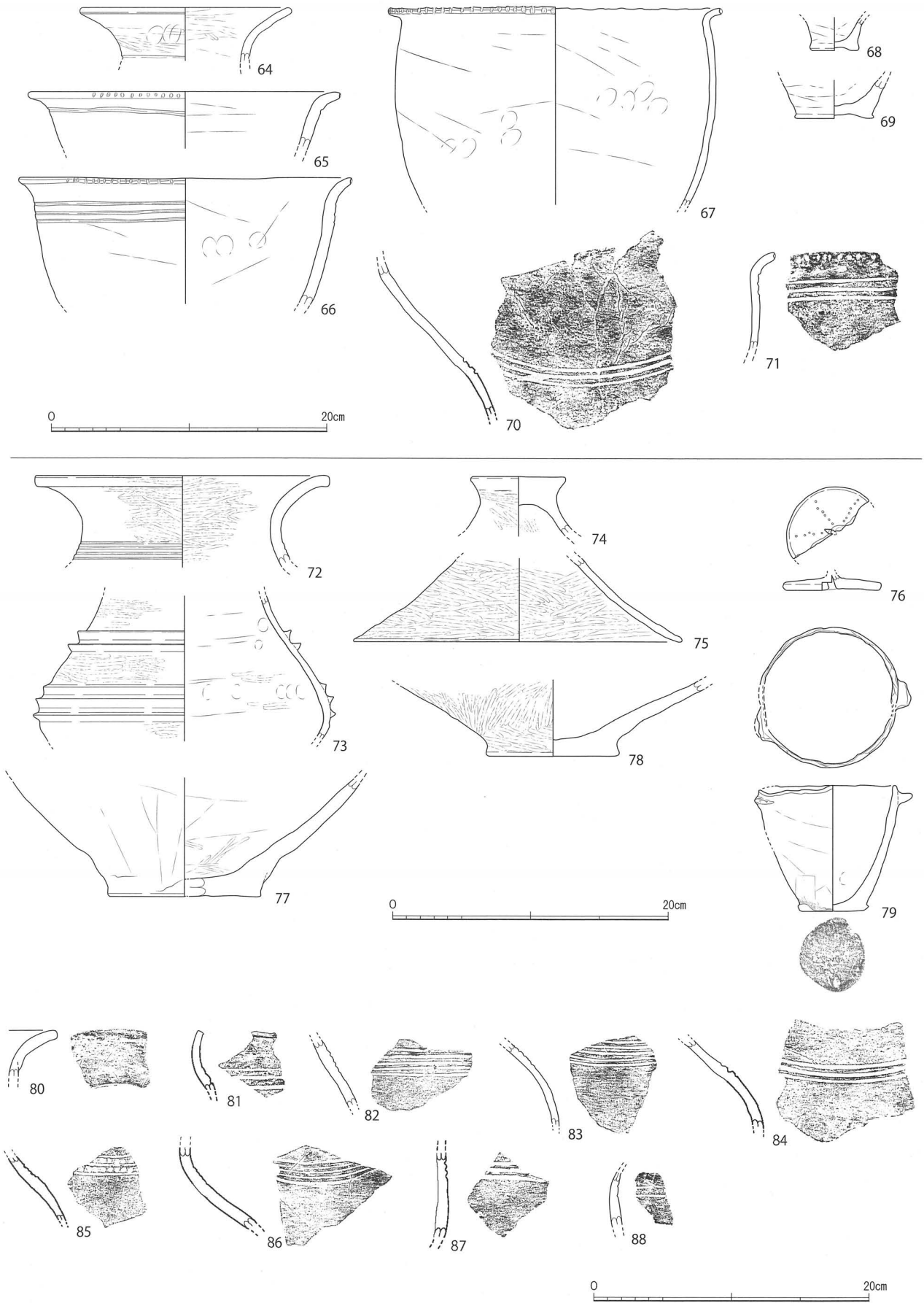


図９　出土土器実測図５（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
64	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	15.2	3.9	口縁部のみ 1/4	(外)ヘラ描沈線1条、口縁部ヨコナデ、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
65	甕	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	22.0	4.1	口縁部のみ 1/8	(外)ヘラ描沈線1条、口縁端部刻目、 (内)口縁部ヨコナデ、ナデ
66	甕	7.5YR 5/4 にぶい褐	やや密	やや良好	24.0	9.1	口縁部のみ 1/6	(外)口縁端部刻目、ヘラ描沈線3条、口縁部ヨコナデ、ナデ (内)ナデ、指頭圧痕
67	甕	5YR 5/6 明赤褐	やや粗	良好	24.0	14.4	口縁部～胴部 1/2	(外)口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、ナデ、煤化、指頭圧痕 (内)ナデ、指頭圧痕
68	甕　底部	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	3.6	2.4	底部のみ 1/2	内外面ともにナデ
69	甕　底部	5YR 6/6 橙	やや密	良好	5.8	2.7	底部のみ 1/2	内外面ともにナデ
70	壺	7.5YR 5/4 にぶい褐	密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線3条、ヨコ方向にミガキ (内)頸部ミガキ、ナデ、指頭圧痕
71	甕	10YR 5/3 にぶい黄褐	粗	やや良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、口縁端部刻目、ヘラ描沈線3条、ナデ (内)ナデ、指頭圧痕

表5　出土遺物観察表5

第Ⅲ調査区Ⅲ溝状落ち込みSD01出土土器（図9上段／表5）

64は広口壺である。頸部にヘラ描沈線が施されていると考えられるが、途中で欠損しているため、削出による段になる可能性もある。

65～67・71は口縁端面に刻目を施す甕である。67だけがヘラ描沈線を有せず、やや胴部が膨らんだ形態を呈している。68・69は甕の底部でともにナデ調整である。70は、壺胴部の破片でヘラ描沈線がめぐり、丁寧なヘラミガキが施されている。

破片資料ばかりであるが、これらの特徴から、ⅢSD01出土土器は弥生前期中葉頃に帰属すると考えられる。

第Ⅲ調査区溝状落ち込みⅢSD02出土土器（図9下段／表6）

72は、広口壺である。削出突帯上に沈線が3条残る。頸部が非常に短く、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施している。73は、壺の胴部片である。内外面ともに丁寧なヘラミガキがなされ、貼付突帯が2条1対と3条1対で貼付されている。この突帯は刻目がなく、断面が三角形で高く突出している。

74～76は蓋である。74・75は丁寧なヘラミガキを施し、笠形を呈している。一方76は扁平な形態を呈する。中央に紐孔があり、外面天井部中央より放射状の刺突列点文で施文されている。

77・78は壺の底部である。78は丁寧なヘラミガキが施されている。

79は把手付鉢である。口縁が外反せず直口で、対向する位置に把手を貼り付けているが、正しい対向位置ではなく、やや偏りをもっている。また、底部底面には籾圧痕が看取される。

80～88は壺の破片資料である。80は、頸部に粘土紐接合時にできた高低差の段がある。82～85・87は壺胴部の破片資料で、すべて3条以上のヘラ描沈線がめぐる。85は、ヘラ描沈線間に円形の刺突が施文されている。86は、削出突帯上にヘラ描沈線3条をなす。88は、ヘラ描沈線によるタテまたはナナメ方向の装飾が施されている。

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
72	壺	7.5YR 6/2 灰褐	密	良好	20.6	6.7	口縁部1/8	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、削出突帯上にヘラ描沈線３条残る (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
73	壺	7.5YR 5/2 灰褐	やや密	良好	—	10.3	胴部のみ1/8	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、貼付突帯、黒斑 (内)ナデ、ヨコ方向にミガキ、指頭圧痕
74	蓋	10YR 6/2 灰黄褐	やや密	良好	—	4.2	つまみ部分ほぼ完存	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ヘラナデの圧痕 (内)タテ方向にミガキ、指頭圧痕、煤化
75	蓋	7.5YR 6/4 にぶい橙	やや密	良好	23.2	6.0	1/3	(外)ヨコ・ナナメ方向ミガキ、裾部ヨコナデ (内)ヨコ・ナナメ方向ミガキ
76	蓋	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	6.6	1.0	口縁部1/2	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、紐孔有り、刺突文 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
77	壺　底部	5YR 7/6 橙	やや密	良好	10.8	8.6	底部のみ1/2	(外)ナデ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
78	壺　底部	10YR 7/4 にぶい黄橙	粗	良	9.4	5.5	底部のみ完存	(外)タテ・ヨコ・ナナメ方向にミガキ (内)調整不明
79	把手付鉢	10YR 5/3 にぶい黄橙	やや密	良好	9.6・4.6	9.1	完形 (一部欠損)	(外)ナデ、底部タテ方向にハケ (内)摩滅のため調整不明、指頭圧痕
80	壺	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	—	—	—	(外)段、摩滅 (内)ナナメ方向にミガキ、黒斑
81	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	(外)ナデ、ヘラ描沈線３条 (内)ナデ
82	壺	7.5YR 5/2 灰褐	やや密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、ヘラ描沈線５条 (内)摩滅のため調整不明
83	壺	10YR 5/1 褐灰	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、ヘラ描沈線５条 (内)ナナメ方向にミガキ
84	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、ヘラ描沈線３条 (内)ナデ、指頭圧痕
85	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、ヘラ描沈線３条、刺突文 (内)ナデ、指頭圧痕
86	壺	7.5YR 3/2 黒褐	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、削出突帯上にヘラ描沈線３条 (内)ナナメ方向にミガキ、摩滅
87	壺	7.5YR 6/2 灰褐	やや粗	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線３条、摩滅のため調整不明 (内)ヨコ・ナナメ方向にナデ、指頭圧痕
88	壺	10YR 6/3 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線２条、ヘラ描沈線で装飾、磨滅のため調整不明 (内)摩滅のため調整不明

表６　出土遺物観察表６

以上のように、これら弥生前期土器類の様相からは単一の時期のものとは思われず、前期中葉から後半の混交資料となる。時期的には概ね前期後半を主体となるものである。

第Ⅲ調査区土坑ⅢSK01 出土土器（図 10 上段 / 表 7）

破片資料で図示したものが少ないが、89・90 は壺の肩部、胴部にヘラ描沈線がめぐる。91・92 は甕で、ともにヘラ描沈線をなしている。

わずかな資料であるが、これらの特徴から弥生前期の範疇に位置付けられる。

第Ⅲ調査区土坑ⅢSK02 出土土器（図 10 下段 / 表 7）

93・94 は広口壺で、93 は無文で、94 は口縁端面にヘラ描沈線がめぐり、頸部に削出突帯があり、突帯上にヘラ描沈線を成している。95 は壺の底部で内外面ともに連続した指頭圧痕が残る。

96 は大型の甕である。口縁端面に刻目を施し、頸部にヘラ描沈線が５条めぐる。頸部から胴部にかけてやや丸みをおびた形態を呈している。

97 ～ 100 は壺の頸部から肩部にかけての破片資料である。97・99 は頸部または肩部にヘラ描沈線がめぐる。98・100 は頸部と肩部ともに突帯をなす。98 は、貼付突帯上にヘラ描沈線が２条が成す。一方 100 は、削出突帯上にヘラ描沈線が２条以上施されている。これらの土器から、ⅢSK02 出土土器は弥生前期の範疇であることがわかる。

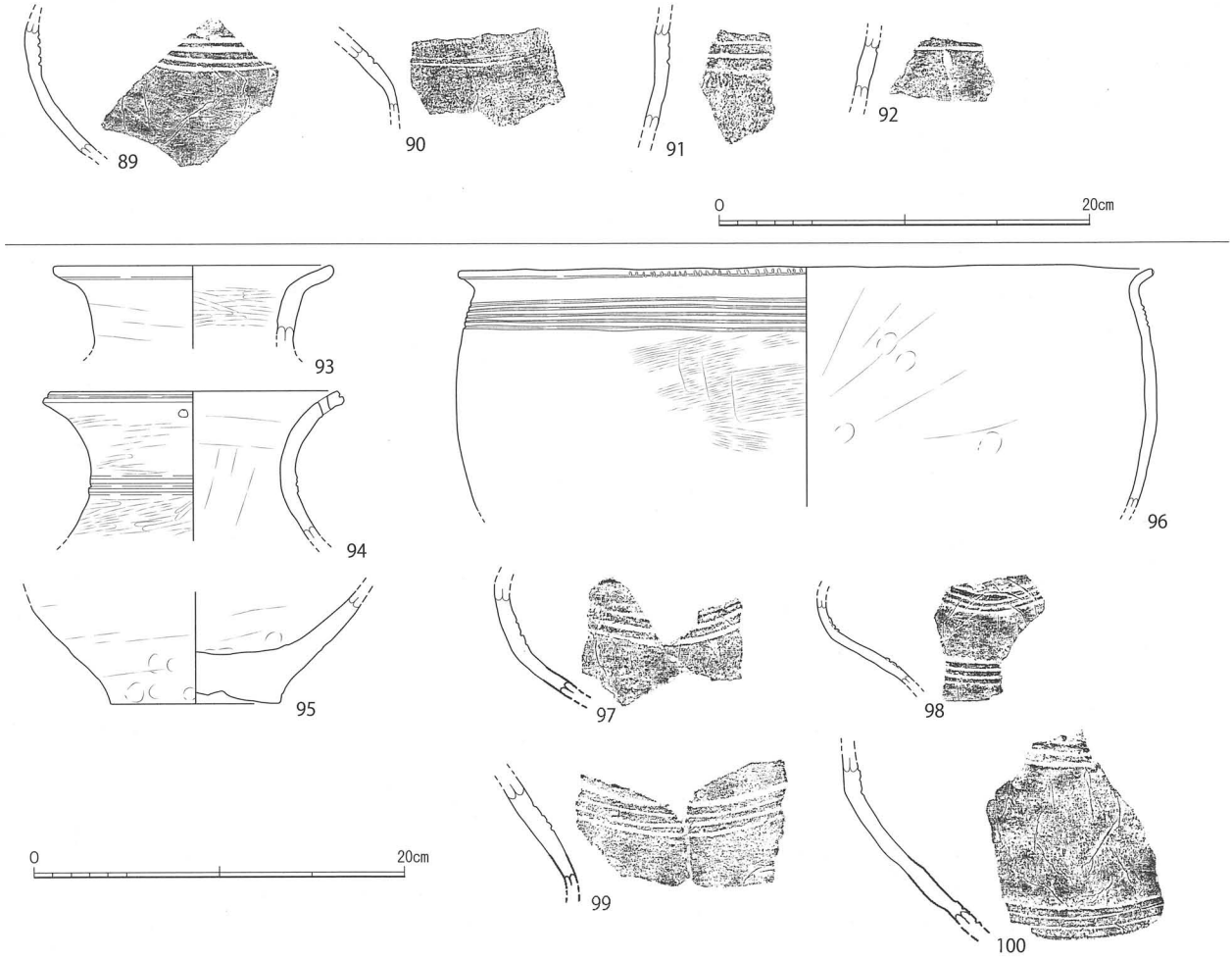


図 10　出土土器実測図６（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
89	壺	5YR 6/6 橙	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、ヘラ描沈線４条現存 (内)ナナメ方向にミガキ、摩滅
90	壺	7.5YR 7/6 橙	やや粗	良好	—	—	—	(外)ナデ、ヘラ描沈線２条現存 (内)ナデ
91	甕	5YR 6/6 橙	やや粗	やや軟	—	—	—	(外)ヘラ描沈線３条現存、摩滅のため調整不明 (内)ナデ、指頭圧痕、摩滅
92	甕	7.5YR 7/4 にぶい橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線１条現存、ナデ (内)ナデ
番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
93	壺	10YR 8/4 浅黄橙	やや密	良好	15.0	4.4	口縁部のみ 1/4	(外)口縁部ヨコナデ、ナデ (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
94	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや密	良好	15.3	8.0	口縁部～頸部 1/4	(外)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、口縁端部ヘラ描沈線１条、削出突帯上にヘラ描沈線１条、円孔有り、黒斑 (内)ナデ
95	壺　底部	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや密	良好	9.0	6.0	底部のみ1/2	(外)ナデ、指頭圧痕 (内)ナデ、指頭圧痕
96	甕	10YR 8/4 浅黄橙	やや粗	良好	37.0	13.0	口縁部1/6	(外)口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、ヘラ描沈線５条、ヨコ・ナナメ方向にハケ (内)ナデ、指頭圧痕
97	壺	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線３条現存、ナデ (内)ナデ、指頭圧痕
98	壺	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや密	良好	—	—	—	(外)頸部と胴部に貼付突帯、突帯上にヘラ描沈線２条、ナデ (内)ナデ、指頭圧痕、摩滅
99	壺	10YR 8/3 浅黄橙	やや粗	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線４条現存、ナナメ方向にミガキ、摩滅 (内)ナデ
100	壺	2.5Y 7/3 浅黄	やや粗	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、頸部と胴部に削出突帯、突帯上にヘラ描沈線 (内)ナナメ方向にミガキ、指頭圧痕、摩滅

表７　出土遺物観察表７

第Ⅲ調査区土坑ⅢSK101 出土土器（図 11/ 表８）

101・102 は広口壺である。102 は頸部に貼付突帯が１条残っている。突帯上に刻目を施し、原体には甕の口縁端部を刻む際と同様のものを用いている。

103 は、広口壺の頸部で太く深めのヘラ描沈線が５条めぐる。104 は壺の胴部で胴部がやや張り出し、その付近に４条のヘラ描沈線をなしている。

105 は無文の甕で、器壁は厚く口縁の外反も弱い。106 は鉢である。口縁の屈折が強く、丁寧なハケ調整が施されている。

107・108 は笠形の蓋で、108 は摘み部の稜は不明瞭である。109 ～ 113 は壺の底部で、器壁が厚くなっている。

114 ～ 123 は破片資料である。114 は口縁の外反が強い広口壺で、ヘラ描沈線が４条以上めぐる。115 は壺の頸部で、頸部の稜に貼付突帯を貼付し、稜が緩やかになっている。116 は多条の貼付突帯を貼付している。突帯は細く、突帯上には刻目が施してあり、原体は 102 と同様である。117 は壺胴部の破片で、削出による段の下にヘラ描沈線が７条めぐる。118 は壺胴部の破片で、多条のヘラ描沈線を引いてから、１条のヘラ描沈線上に細い貼付突帯を成している。また、突帯上には刻目が施されている。

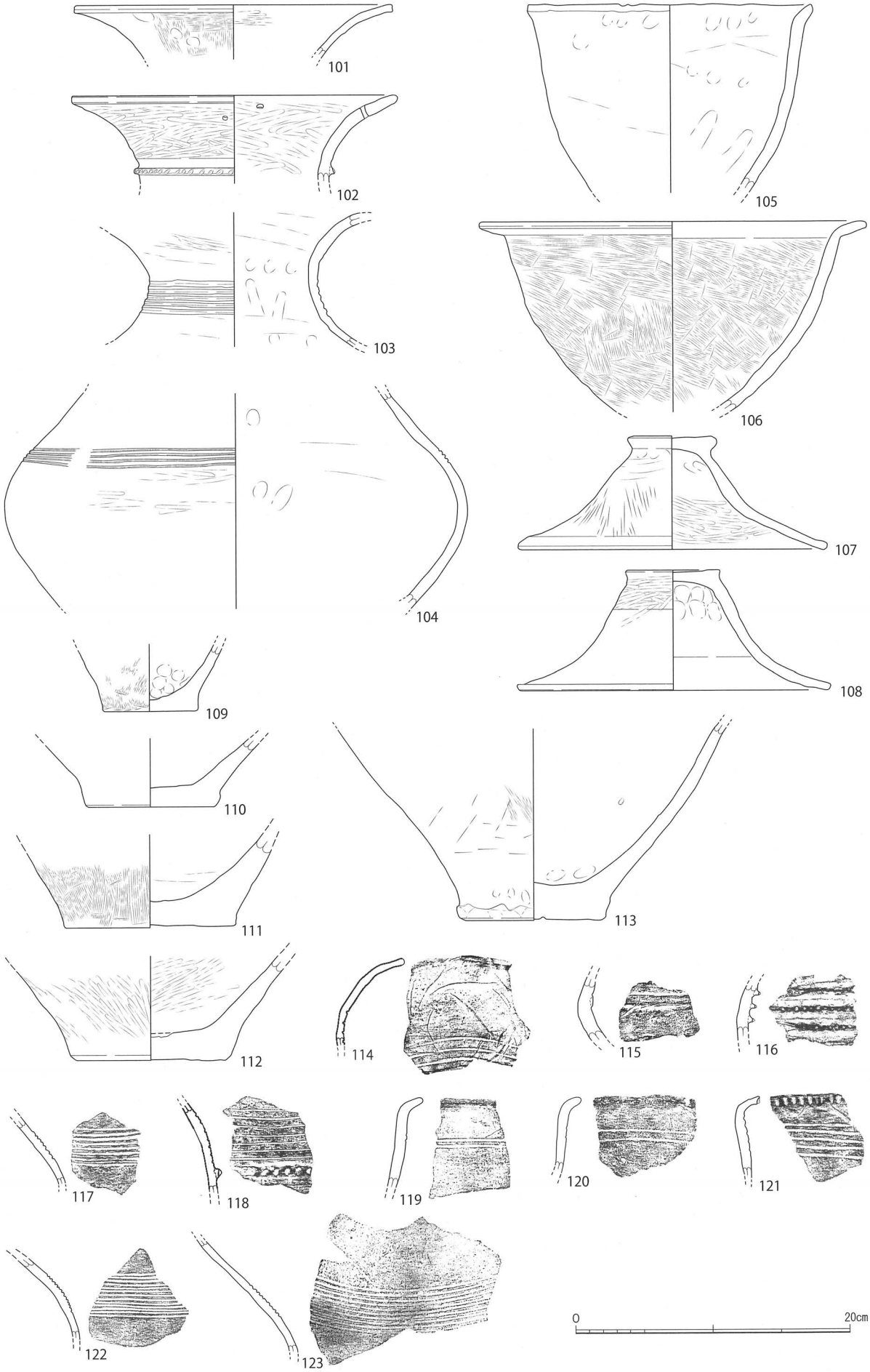


図 11　出土土器実測図７（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
101	壺	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好	23.0	3.9	口縁部のみ 1/8	(外)タテ・ヨコ方向にハケ、指頭圧痕 (内)ヨコ方向にミガキ、摩滅
102	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	23.4	6.4	1/4	(外)口縁端部ヨコナデ、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、貼付突帯・刻目、ヨコナデ、２方に円孔有り (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ
103	壺	5YR 6/6 橙	やや密	良好	—	9.7	頸部のみ完存	(外)ヘラ描沈線５条、一部ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ナデ、 (内)ナデ、ユビナデ、指頭圧痕、黒斑
104	壺	5YR 6/6 橙	密	良好	—	15.6	胴部のみ1/4	(外)ヘラ描沈線４条、一部ヨコ方向にミガキ、黒斑、摩滅 (内)ナデ、指頭圧痕、摩滅
105	甕	2.5YR 6/6 橙	やや密	良好	20.4	13.6	口縁部のみ 3/8	(外)板ナデ、指頭圧痕 (内)ナデ、指頭圧痕、指頭圧ナデ
106	鉢	2.5YR 6/6 橙	やや密	良好	27.6	13.8	1/8	(外)口縁部ヨコナデ、ヨコ・タテ・ナナメ方向にハケ (内)ヨコ・ナナメ方向にハケ
107	蓋	10YR 5/3 にぶい黄褐	密	良好	21.8	8.2	1/2	(外)摘み部ヨコナデ、タテ・ナナメ方向にハケ、裾部ヨコナデ、黒斑 (内)ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ナデ、煤化
108	蓋	10YR 7/4 にぶい黄橙	やや密	良好	22.0	8.7	摘み部のみ完存	(外)摘み部ミガキ、ヨコ・ナナメ方向にミガキ、ヨコナデ (内)ナデ、指頭圧痕
109	壺　底部	5YR 6/6 橙	やや密	やや軟	6.6	4.8	底部のみ完存	(外)タテ・ナナメ方向にハケ (内)指頭圧痕、煤化
110	壺　底部	7.5YR 8/3 浅黄橙	粗	軟	9.1	4.9	底部のみ完存	(外)ヨコナデ、黒斑、摩滅 (内)煤化のため調整不明
111	壺　底部	7.5YR 6/6 橙	やや密	良好	6.1	6.2	底部のみ完存	(外)タテ・ナナメ方向にハケ、黒斑 (内)ナデ
112	壺　底部	2.5YR 6/8 橙	密	良好	10.8	7.5	底部のみほぼ完存	(外)ナナメ方向にミガキ、摩滅 (内)ナナメ方向にミガキ、黒斑、一部剥離
113	壺　底部	2.5YR 7/4 淡赤橙	粗	良好	9.7	13.9	底部～胴部完存	(外)一部ナナメ方向にハケ、板ナデ、指頭圧痕、工具圧痕、底部面取り、黒斑 (内)指頭圧痕、籾状圧痕、摩滅のため調整不明
114	壺	5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線４条現存、口縁部ヨコナデ、ナナメ方向にミガキ (内)ナナメ方向にハケ、ナナメ方向に粗いハケ
115	壺	10YR 4/1 褐灰	密	良好	—	—	—	(外)ナデ、摩滅、貼付突帯 (内)一部ナナメ方向にミガキ、ナデ、摩滅
116	壺	10YR 8/2 灰白	やや粗	良好	—	—	—	(外)貼付突帯・刻目、ナデ (内)ナナメ方向にミガキ
117	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、削出による段、ヘラ描沈線７条、煤化 (内)ナデ
118	壺	7.5YR 8/6 浅黄橙	やや粗	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線７条現存、貼付突帯・刻目 (内)ヨコ・ナナメ方向にナデ、指頭圧痕
119	甕	10YR 6/4 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、ヘラ描沈線２条、ハケ (内)ナナメ方向にミガキ
120	甕	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	—	—	—	(外)口縁部ヨコナデ、ヘラ描沈線２条、ナデ、摩滅 (内)ナデ、摩滅
121	甕	7.5YR 5/3 にぶい褐	やや密	良好	—	—	—	(外)口縁端部刻目、ヘラ描沈線５条、ナデ (内)口縁部ヨコナデ、ユビナデ、ヨコ・ナナメ方向にナデ
122	壺	7.5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	—	—	—	(外)ナナメ方向にミガキ、ヘラ描沈線13条 (内)ナデ、指頭圧痕
123	壺	7.5YR 5/4 にぶい褐	密	良好	—	—	—	(外)ヘラ描沈線10条、ナナメ方向にミガキ、黒斑、摩滅 (内)ナデ

表８　出土遺物観察表８

122・123 は壺の胴部破片で、ともに多条のヘラ描沈線が施文されている。

以上の特徴からⅢSK101 出土土器群は弥生前期の中でもヘラ描沈線や貼付突帯の多条といった新しい要素をもったものが目立つことから、前期後半～末頃に位置付けられる。

第Ⅲ調査区井戸ⅢSE01 出土土器（図 12・13 上段 / 表 9 ・10）

124 ～ 129 は小型の長頸壺である。外面の頸部から肩部にかけてハケ調整で仕上げているため、頸部の稜は不明瞭である。124 には円孔があり、125 の頸部には竹管文が施文されている。

130 は直口壺で口縁が大きく外傾する。131・132 は広口壺で、132 の口縁端部には凹線がめぐる。

133 は完形の細頸壺である。口縁が大きく外反し、外面は丁寧なヘラミガキが施されている。134 は壺の底部で砲弾形を呈しているが、口縁がどのような形になるのかは不明である。135 は笠形の蓋で、対向する位置に円孔がある。

タタキ甕 136・137・140 は頸部の稜が明瞭で胴部の張りが強い。

138・139 は近江地域の影響を受けており、受け口状口縁をもつ。こうした形態は、奈良盆地東南部における在来の土器には多くあるものである。141 は、台付甕である。これは、東海地域の影響を受けた器種形態を呈している。

142・143 は鉢底部で、142 は底部中央が穿孔されている。

144 ～ 151 は、鉢である。144・145・148 は外反した口縁をもち、145 はタタキ調整をなしている。148 は、胴部にヘラ状工具のようなもので描いた記号文が施文されている。146 は、直口した口縁で、底部内面は連続したユビナデが施されている。147 は椀形の形態を呈した鉢である。149 ～ 151 は外傾した直口の鉢で、150 の外面はタタキ調整で、151 の口縁一端には注口が認められる。

152・153・156・157 は台付鉢である。152・153 は、脚部を連続したユビナデで接合している。154 は、鉢で 139 と同様の要素をもつ。これも 138・139 と同様に近江地域の影響を受けた土器である。155 も内傾した直口の口縁をもつ鉢であるが、東海系の高杯になる可能性もある。

158 ～ 165 は高杯である。156・157 は、外反口縁で皿状である。156 は口縁端面に凹線がめぐる。157 は、口縁がやや大きめで深い。脚部外面はヘラ描沈線が 6 条 1 単位で装飾されている。160 も同様な装飾をもつ脚部だが、低脚である。161 ～ 163 は、ともに外面がタテハケの後にタテヘラミガキを成している。164・165 は丁寧なタテハケが施されている。

166・167 は、口縁端面に凹線がめぐる無文の器台である。ともに丁寧なタテヘラミガキが施され、167 は上・下段ともに 3 方の円孔がある。

これらの遺物からⅢSE01 出土土器は、弥生後期の範疇に位置付けることができる。

第Ⅲ調査区溝ⅢSD04 出土土器（図 13 中段左・表 11）

168・169 はともに甕である。168 はタタキをなし、口縁が大きく外反している。169 は無文の甕で、胴部が長くなっている。

170 は口縁が大きく外反し、口縁外端面に凹線がめぐる鉢である。頸部に三日月形の刺突列点文が施文されている。図示したすべての土器は、完形に復元することができた。

以上の特徴から、弥生後期に帰属すると思われる。

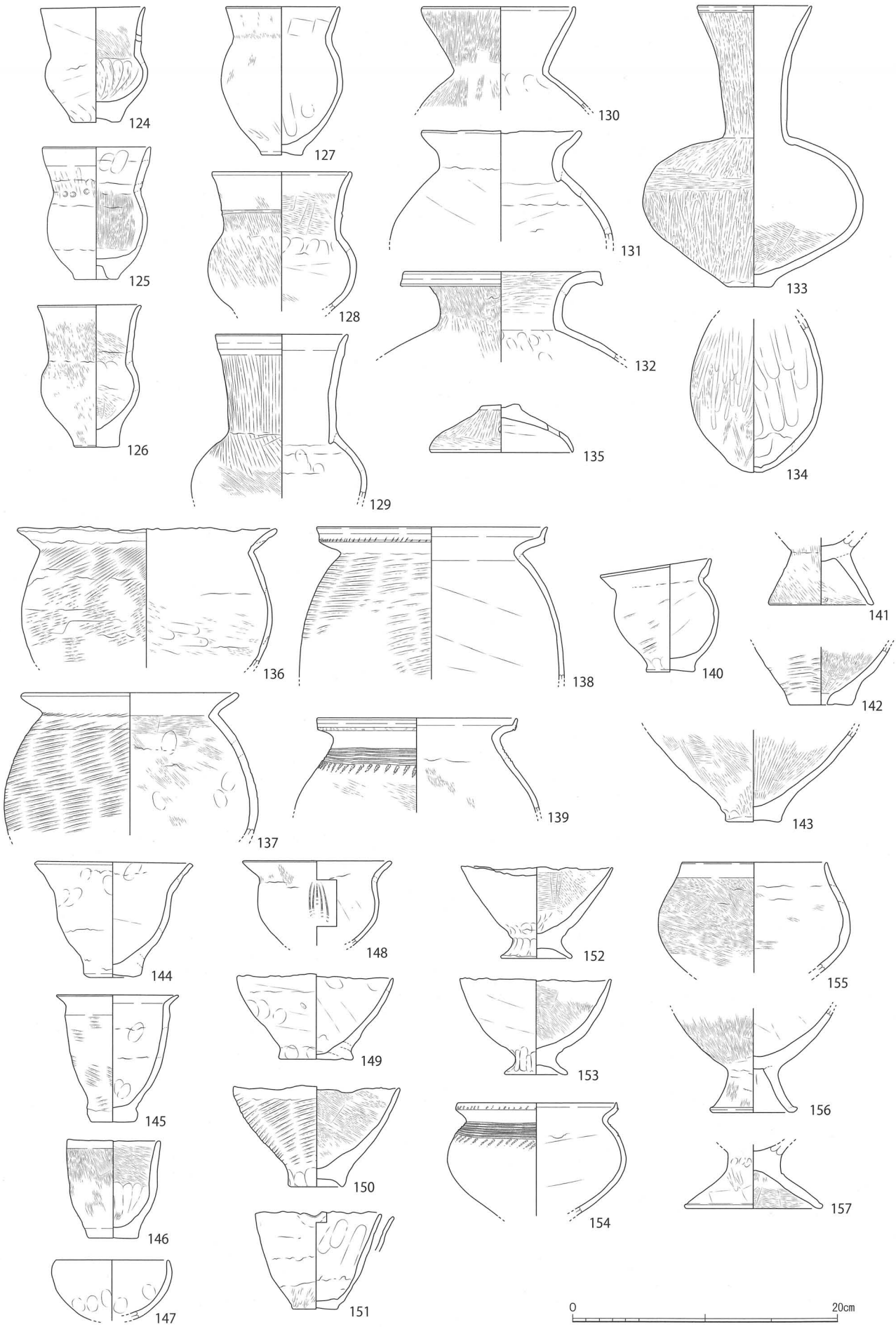


図 12　出土土器実測図８（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高		
124	壺	5YR 5/6 明赤褐	密	良好	7.8	8.6	2/3	(外)口縁端部ヨコナデ、籾状圧痕、接合痕、円孔、摩滅 (内)口縁部ヨコナデ、頸部ナナメ方向のハケ、胴部～底部タテ方向にハケのちユビナデ、接合痕
125	壺	10YR 7/4 にぶい黄橙	密	良好	8.2	10.0	完形	(外)口縁部ヨコナデ、頸部タテ・ナナメ方向にミガキ・竹管文、接合痕、摩滅 (内)口縁部～頸部ヨコナデ、胴部タテハケ、底部ナデ、接合痕、指頭圧痕
126	壺	2.5YR 7/6 橙	密	良好	7.8・3.4	10.7	完形	(外)頸部ヨコナデ、頸部～底部ナナメ方向にタテハケ、接合痕、工具圧痕、摩滅 (内)頸部ヨコナデのちナナメ方向にハケ、肩部指ナデ、底部ナナメ方向にハケ・ナデ、接合痕
127	壺	5YR 7/6 橙	密	良好	8.5・3.1	11.1	口縁部1/3 胴部～底部2/3	(外)口縁部～胴部タテ方向にハケのちヨコナデ、底部ナデ・ミガキ、黒斑 (内)口縁部ナデ、頸部板ナデ、胴部～底部ナデ、指頭圧痕、黒斑
128	壺	2.5YR 6/6 橙	密	良好	10.6	10.4	1/3	(外)頸部～肩部タテ・ナナメ方向にハケ・ヘラ描沈線1条、胴部タテナナメ方向にミガキ、摩滅 (内)口縁部ヨコナデ、頸部ヨコ・ナナメ方向にハケ、肩部～胴部ナデ、ハケ、指頭圧痕、接合痕
129	壺	5YR 5/4 にぶい赤褐	密	良好	10.0	12.3	口縁部～頸部 ほぼ完存	(外)口縁部凹線文、頸部～肩部タテ・ナナメ方向に粗いハケ、胴部ナナメ方向にハケ、接合痕 (内)口縁部ヨコナデ、頸部ナナメ方向に粗いハケ、胴部板ナデ、指頭圧痕、接合痕
130	壺	2.5YR 6/6 橙	密	良好	11.3	7.7	口縁部～頸部 ほぼ完存	(外)口縁部～肩部タテ方向にハケ (内)口縁部～頸部ナデ、指頭圧痕、黒斑、摩滅
131	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	12.2	8.3	口縁部完存 頸部～胴部 上半1/3	(外)口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、接合痕、黒斑、摩滅 (内)口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、接合痕
132	壺	5YR 7/6 橙	密	良好	14.4	6.8	口縁部2/3	(外)口縁端部凹線文、頸部タテ方向にハケ、胴部タテ方向にハケのちタテ方向にミガキ、接合痕 (内)口縁部ヨコ方向にミガキ、胴部ナデ、指頭圧痕、黒斑、一部剥離
133	壺	2.5YR 6/8 橙	密	良好	8.6・3.1	21.2	完形	(外)口縁端部ナデ、頸部～肩部タテ方向にミガキ、胴部ヨコ方向にミガキ、底部タテ方向にミガキ、黒斑 (内)頸部ナデ、胴部調整不明、底部ハケ、黒斑
134	壺	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	1.0	11.5	胴部～底部1/3	(外)胴部～底部ナナメ方向にハケのちタテ方向に粗いミガキ、黒斑 (内)胴部指頭圧ナデ、接合痕
135	蓋	5YR 6/6 橙	密	良好	10.8	3.6	完形	(外)タテ方向にミガキ、裾部ナナメ方向にミガキ、円孔が対向する位置に1孔ずつ (内)板ナデ、裾部ヨコナデ
136	甕	5YR 7/8 橙	密	良好	19.2	10.3	口縁部～胴部 1/4	(外)口縁部ヨコナデ、肩部～胴部右上がりのタタキ、黒斑、接合痕、煤化 (内)口縁部ヨコナデ、肩部～胴部ナナメ方向にハケ・ヨコ方向にユビナデ、接合痕
137	甕	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	16.4	10.7	口縁部1/3	(外)口縁部ヨコナデ、胴部右上がりのタタキ、煤化 (内)口縁部ヨコナデ、胴部ヨコ・ナナメ方向にハケ・ナデ、指頭圧痕、接合痕
138	甕	7.5YR 6/3 にぶい褐	密	良好	17.4	11.4	口縁部2/3	(外)口縁部凹線文・刻目、肩部ヨコナデ、胴部右上がりのタタキ、接合痕 (内)口縁部ヨコナデ、胴部強い板ナデ
139	甕	5YR 6/8 橙	密	良好	15.4	7.1	口縁部 ほぼ完存 頸部～胴部 上半1/2	(外)口縁部凹線文・刻目、頸部ヨコナデ、胴部ヘラ描沈線5条・竹管文、ナナメ方向にハケ、煤化 (内)口縁部～肩部ヨコナデ、胴部タテ方向にハケ、摩滅、接合痕、黒斑
140	甕	7.5YR 7/3 にぶい橙	密	良好	8.4・3.6	8.0	3/4	(外)胴部～底部タタキのちナデ、指頭圧痕、黒斑、接合痕 (内)口縁部ヨコナデ、胴部～底部板ナデ、接合痕
141	台付甕	2.5YR 5/8 明赤褐	密	良好	8.0	5.0	脚部のみ ほぼ完存	(外)タテ・ナナメ方向にハケ、接合痕、黒斑、摩滅 (内)ナナメ方向にハケ、籾状圧痕、摩滅
142	鉢	7.5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	4.8	4.3	底部のみ2/3	(外)底部タタキ、穿孔 (内)底部タテ・ナナメ方向にハケ
143	鉢	5YR 6/4 にぶい橙	密	良好	4.2	6.9	底部のみ3/4	(外)ナナメ方向にハケ、タテナナメ方向にミガキ、指頭圧痕、黒斑 (内)タテ方向にハケ
144	鉢	5YR 6/4 にぶい橙	密	やや良好	12.0・4.4	8.7	1/4	(外)口縁端部ヨコナデ、頸部～底部ナデ、指頭圧痕、接合痕、 (内)口縁部ヨコナデ、底部板ナデ、接合痕、指頭圧痕
145	鉢	10YR 7/3 にぶい黄橙	やや密	良好	9.2・3.4	9.6	ほぼ完形 口縁部1/4	(外)口縁部ヨコナデ、肩部～底部タタキ、摩滅 (内)口縁部ヨコナデ、肩部～底部板ナデ、指頭圧痕、接合痕、黒斑

表９　出土遺物観察表９

146	鉢	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	7.0・4.8	7.3	ほぼ完形	(外)口縁部ヨコナデ、胴部～底部タテ・ナナメ方向にハケ (内)胴部上半ヨコナナメ方向にハケ、底部ハケのちユビナデ
147	鉢	5YR 7/8 橙	密	良好	8.4	4.5	3/8	内外面ともに底部指頭圧のちナデ、黒斑
148	鉢	10YR 6/3 にぶい黄橙	密 (角閃石含む)	良好	11.2	6.3	口縁部ほぼ完存 頸部～胴部上半3/4	記号文有り (外)口縁部～胴部タテハケのちナデ、接合痕、黒斑 (内)口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、接合痕、黒斑
149	鉢	5YR 6/6 橙	密	良好	11.8・5.6	6.4	ほぼ完形	(外)ナデ、籾状圧痕、指頭圧痕、接合痕、黒斑、摩滅 (内)板ナデ、指頭圧痕、接合痕
150	鉢	5YR 5/6 明赤褐	密	良好	12.5・4.2	7.5	ほぼ完形	(外)右上がりのタタキ、指頭圧痕、接合痕 (内)ナナメ方向にハケ
151	鉢	10YR 8/3 浅黄橙	密	良好	9.4・3.3	7.2	ほぼ完形	注口有り (外)底部タテ方向にミガキ、摩滅、接合痕、 (内)口縁部～胴部指頭圧ナデ、接合痕
152	台付鉢	5YR 7/6 橙	密	良好	11.4	6.8	2/3	(外)口縁部～胴部ナデ、底部指ナデ、接合痕、摩滅 (内)口縁部～胴部ヨコ・ナナメ方向にハケ、底部ナデ
153	台付鉢	2.5YR 4/8 赤褐	密	良好	4.8	7.1	2/3	(外)ナデ、指頭圧痕 (内)タテ・ナナメ方向にハケ
154	鉢	7.5YR 7/3 にぶい橙	密	良好	12.0	8.5	口縁部1/2	(外)口縁部ヨコナデ・刻目、胴部ナデ、ヘラ描沈線7条、刺突列点文 (内)口縁部ヨコナデ、胴部板ナデ、一部剥離、接合痕、黒斑
155	鉢	5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	11.0	8.3	口縁部～胴部1/3	(外)口縁部ヨコナデ、胴部タテ・ヨコ・ナナメ方向にハケ、接合痕 (内)口縁部ヨコナデ、胴部ハケのちナデ、接合痕
156	台付鉢	5YR 7/4 にぶい橙	密	良好	6.2	7.8	底部1/3	(外)杯部～脚裾部タテ方向にハケ、接合痕、工具圧痕 (内)板ナデ、脚裾部ヨコナデ、黒斑
157	台付鉢	5YR 6/6 橙	密	良好	10.0	4.8	脚部ほぼ完存	(外)裾部板ナデ、ミガキ、指頭圧痕 (内)裾部ヨコ方向にハケ、指頭圧痕

表 10　出土遺物観察表 10

第Ⅲ調査区溝ⅢSD03 出土土器（図 13 中段右・下段左 / 表 11）

171・172 はともに完形土器である。171 は外反口縁で皿状の高杯である。丁寧なタテヘラミガキがなされ、脚裾部が広がっている。172 はやや長頸になる広口壺で、無文である。

これらの土器より、弥生後期に位置付けることができる。

第Ⅲ調査区小穴ⅢSP81 出土土器（図 13 下段右 / 表 11）

173 は、直口した口縁で皿状の高杯である。完形で出土した。丁寧なヘラミガキが施され、縦位に 5 個 1 単位の棒状浮文が 4 方に貼付している。低脚で他の高杯の脚部よりも裾がさほど広がらない。形態から外来系の要素が強く、おそらく瀬戸内地域の影響を受けている。時期としては、弥生後期初頭頃に帰属すると思われる。

（今井和代）

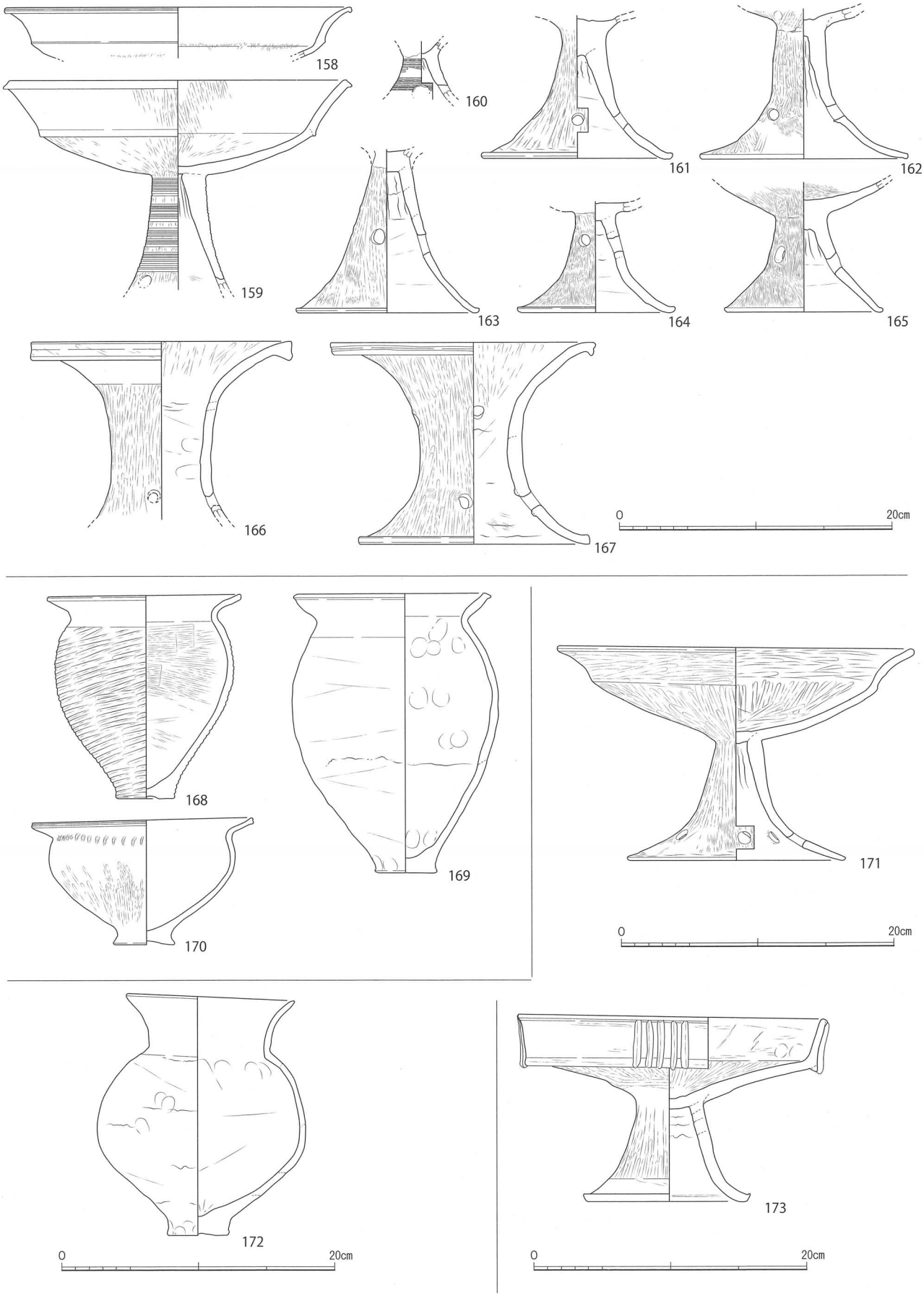


図 13　出土土器実測図９（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径	器高		
158	高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	24.9	3.8	1/8	(外)口縁端部凹線文、杯部ナデ・タテ方向にハケ、黒斑 (内)ナデ、タテ方向にハケ
159	高杯	2.5YR 5/8 明赤褐	密	良好	24.6	15.3	1/3	(外)口縁端部ヨコナデ、杯部タテ・ナナメ方向にミガキ、脚部タテ方向にミガキ・６条１単位のヘラ描沈線４条現存、３方の円孔、黒斑、摩滅 (内)杯部タテ・ナナメ方向にミガキ、脚部ナデ、黒斑
160	高杯	2.5YR 5/6 明赤褐	密	良好	—	4.3	頸部完存	(外)脚部ヘラ描沈線上部７条・下部6条、ミガキ、３方に円孔、黒斑 (内)杯部指頭圧痕、脚部絞り目、ユビナデ
161	高杯	7.5YR 7/3 にぶい黄橙	密	良好	14.4	10.4	脚部ほぼ完存	(外)タテ方向にハケのちタテ方向にミガキ、４方に円孔、摩滅、裾部ヨコナデ (内)板ナデ、絞り目、摩滅、一部剥離
162	高杯	7.5YR 7/6 橙	密	良好	15.0	11.0	脚部の底部1/3	(外)脚部タテ方向にミガキ、裾部ハケのちミガキ・ナデ、3方に円孔、接合痕、工具圧痕、指頭圧痕 (内)絞り目、摩滅、接合痕
163	高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	13.2	11.8	脚部3/4	(外)タテ方向にミガキ・一部ハケ、黒斑有り、指頭圧痕、一部剥離、３方に円孔、摩滅 (内)板ナデ、絞り目、黒斑、接合痕
164	高杯	5YR 6/6 橙	密	良好	11.6	8.1	脚部のみ2/3	(外)タテ方向にハケ・一部ミガキ、３方に円孔、裾部ヨコナデ (内)ミガキ、板ナデ、接合痕
165	高杯	7.5YR 8/4 浅黄橙	密	良好	11.4	9.5	脚部完存	(外)タテ方向にハケ、３方に円孔 (内)ハケ、板ナデ
166	器台	5YR 6/6 橙	密	良好	19.0	12.9	器台の上半分1/2	(外)口縁端部ミガキ・凹線文、体部ヨコナデ・タテ方向にミガキ、３方に円孔 (内)体部上半タテ方向にミガキ、下半ユビナデ、接合痕
167	器台	10YR 6/2 灰黄褐	密	良好	19.2・16.8	14.7	完形	(外)端部ヨコナデ・ヘラ描沈線１条、ハケのちタテ方向にミガキ、黒斑、上３方・下３方に円孔 (内)タテ方向にミガキ、ナデ、ハケのちヨコナデ、接合痕、摩滅
番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
168	甕	7.5YR 7/6 橙	密	良好	13.7・4.1	14.8	1/3	(外)口縁部ヨコナデ、胴部～底部右上がりのタタキ (内)口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヨコ・ナナメ方向にハケ
169	甕	5YR 7/6 橙	密	良好	13.4・4.5	20.4	ほぼ完形	(外)口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ、指頭圧痕、接合痕、黒斑 (内)口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ、指頭圧痕、接合痕
170	鉢	2.5YR 6/6 橙	密	良好	15.9・4.4	9.1	3/4	(外)口縁端部凹線文、口縁部ナデ、頸部刺突、肩部ナデ、胴部タテ・ナナメ方向にミガキ、黒斑 (内)ナデ
番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
171	高杯	7.5YR 6/4 にぶい黄橙	やや密(角閃石、雲母の細砂を含む)	やや良好	25.5・16.0	15.5	ほぼ完形	(外)杯部上半ヨコ方向および下半タテ・ナナメ方向にミガキ、脚部タテ方向にミガキ、裾部タテ方向にハケ、５方に円孔 (内)杯部上半ヨコ方向および下半タテ・ナナメ方向にミガキ、脚部絞り目、ヨコナデ
172	壺	10YR 7/3 にぶい黄橙	密	やや良好	12.2・4.4	17.5	完形	(外)口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ、接合痕、指頭圧痕、黒斑 (内)口縁部ヨコナデ、胴部～底部板ナデ、指頭圧痕
番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	調整・備考
					口径・底径・裾径	器高(現存高)		
173	高杯	2.5YR 5/6 明赤褐	密	良好	22.2・11.6	13.5	ほぼ完形	(外)口縁部ヨコナデ、杯部ヨコ・ナナメミガキのちヨコナデ、ヨコ・ナナメミガキ、脚部タテヘラナデのちタテミガキ、裾部ヨコナデ、黒斑、4方に棒状浮文5つ (内)杯部ヨコミガキのちヨコナデ、放射状にミガキ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ、指頭圧痕、接合痕、工具圧痕

表 11　出土遺物観察表 11

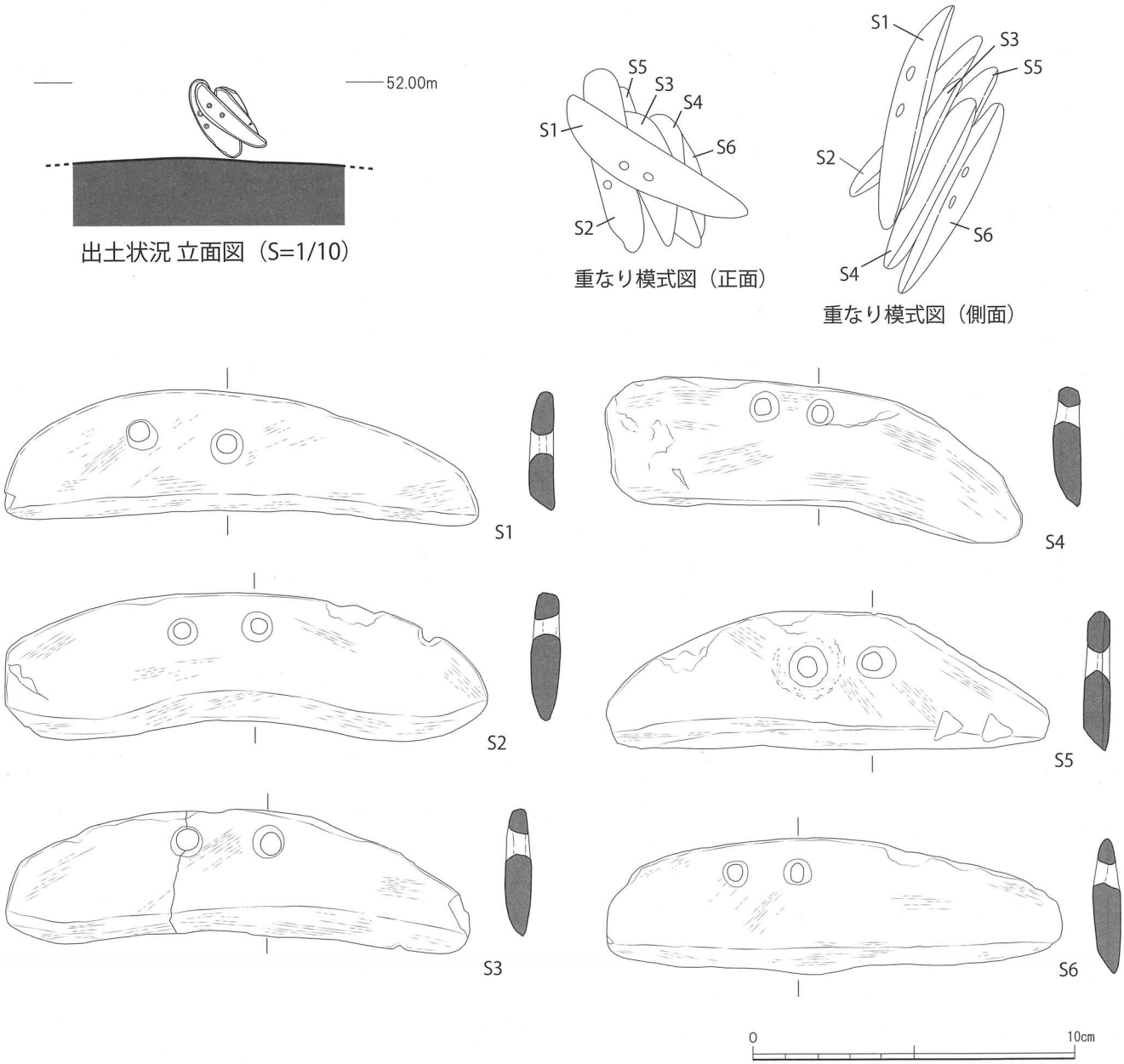


図 14　石庖丁集積遺構出土石器実測図（S＝1/2）

■石庖丁集積遺構　観察メモ

・すべての石庖丁は、ピットの円錐形に合うように、端部の細く尖っている方を下位にしてあった。
・石庖丁の刃部がある面は、不規則になって納められており、刃部面を揃えたり、交互に重ねてはいない。
・S3 の石包丁は、納められた後に割れた可能性が高い。
・S5 は土中で剥離により分離していた。
・すべての石庖丁は、使用された痕跡が明瞭に見られる。（よく使い込まれている）
・紐で束ねて埋納された痕跡はない。
・すべて弥生中期頃に帰属する。石材は結晶片岩で、両面穿孔される。

２．石器類

各調査区の遺物包含層、遺構埋土より弥生集落遺跡では通有な石鏃、石槍、剥片等のサヌカイト製打製石器および石庖丁、石斧等の磨製石器類が出土している。

遺構出土の石器としての明確な在り方を示すものは極めて少ないが、ここでは第Ⅱ調査区で検出した石庖丁集積遺構出土資料のみ図示し、その特徴等について記すものとする（図 14）。

石庖丁集積遺構として検出し、複数の重なりをもって出土した石庖丁はＳ１～Ｓ６の総数６点となる。いずれも緑灰色の色調を呈する結晶片岩を石材に用いて製作された成品である。

２孔１対の両面穿孔による円孔が穿たれ、Ｓ２にのみ上側縁端にも穿孔痕跡が見られた。また、形態的には半円形を呈するＳ１～Ｓ３･Ｓ６と台形に近い形態のＳ５、片刃鎌状のＳ４などの３種類が見られた。

刃部が内湾するＳ１～Ｓ３のように幾度にもわたる砥ぎ直しによる平面形状の変化が認められるほか、一側縁のみに偏る再研磨のためすべての刃部断面形状が片刃となっている。こうした特徴からＳ１～Ｓ６の石庖丁が日常的使用にかかるものであることが窺える。

これらの石庖丁については、集積遺構そのものが弥生中期後半～末の柱穴を含む小穴群に重複する隙間にあり、その検出遺構面直下が弥生前期～中期前半の遺構埋土と遺物包含層となることから概ね弥生中期中葉から後半の時期と考えられる。

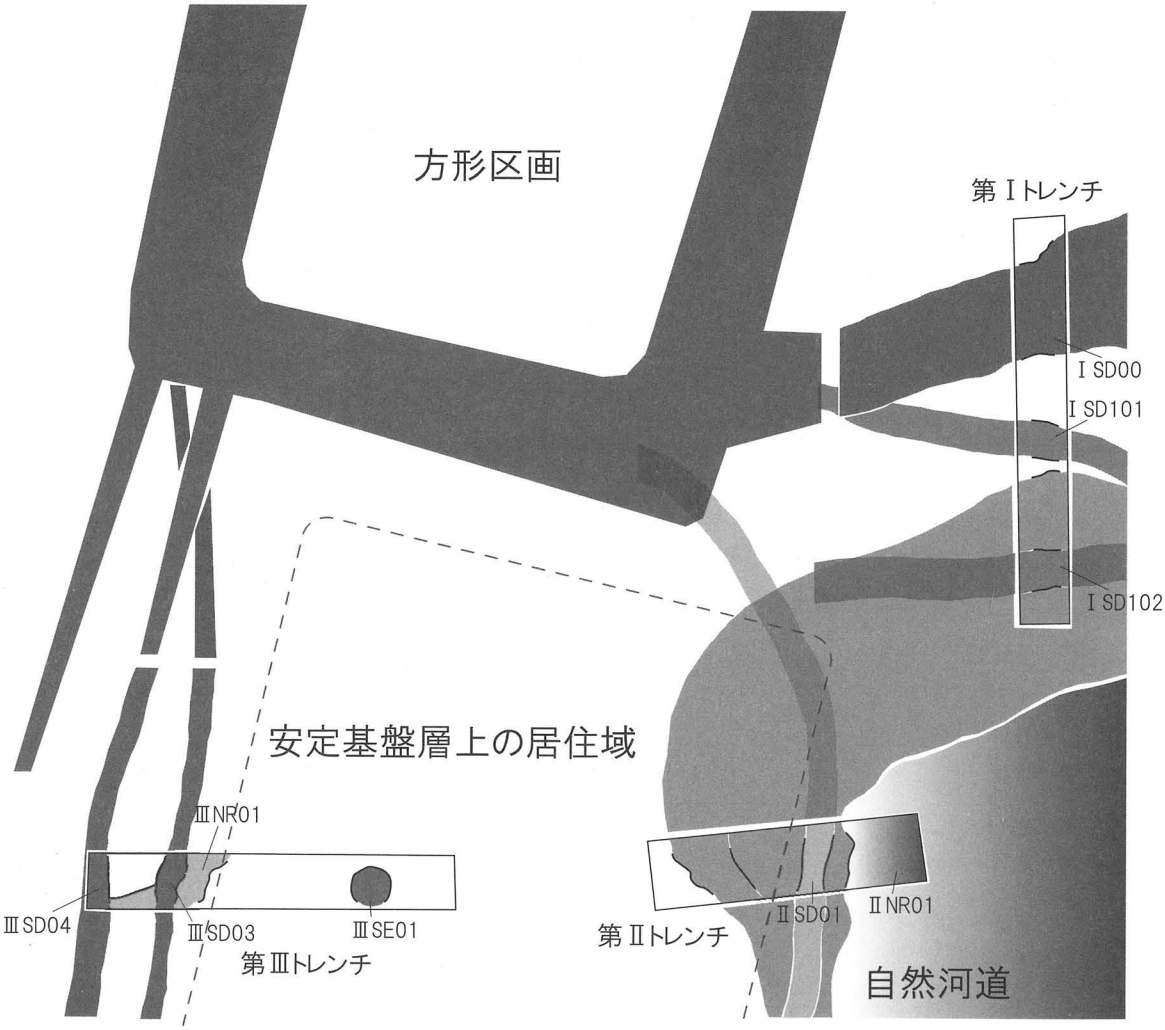


図 15　各調査区平面図と集落景観の復元（S＝1/500）

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、弥生集落北東辺における遺構群の在り方から集落の部分的な変遷の一端を知ることができた。調査地周辺では弥生後期後半以降に出現する方形区画が確認されているが、今回の調査ではそれを取り巻く周辺の状況を詳しく知ることが可能となった。以前の調査の際に知られた区画溝や方形区画大溝の周囲においては、微高地上の安定基盤に建物群の密集することが明らかとなり、集落内部における集住の様相を知る手がかりとなったといえる。

また、遡って当遺跡における環濠成立以前の弥生前期前半期の河道や土器等の遺物の在り方からも当該調査地周辺が集落形成上の中枢を担う地形的条件に恵まれていたことが強調されよう。

註１　松田真一 1979 「天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要」
『奈良県遺跡調査概報－昭和 53 年度－』奈良県立橿原考古学研究所編

註２　青木勘時 1996 「２．平等坊・岩室遺跡（第８・11・12 次）」
『天理市埋蔵文化財調査概報 平成４・５年度（1992・1993 年）』 天理市教育委員会

3．平等坊・岩室遺跡（第 27 次）－岩室町

Ⅰ．調査の契機と経過

1．調査の契機

今回の調査は、ファッションセンターしまむら（株）によるファッションモール天理の建設を契機として実施した。調査地は、弥生前期の環濠を検出した第 13 次調査地の南西側に近接する（図１）。調査前の地目は水田であり、店舗及び看板の基礎によって地下の埋蔵文化財が破壊されることが予想された。このため、原因者と協議を行い、店舗および看板の建設範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することとした。

2．調査の方法と経過

店舗建設予定地のうち、南側基礎の通りに沿って東西 50m・南北４ｍの第１トレンチを、その南西方に位置する広告塔建設予定地に南北５ｍ･東西４ｍの第２トレンチを、それぞれ設定した（図２）。

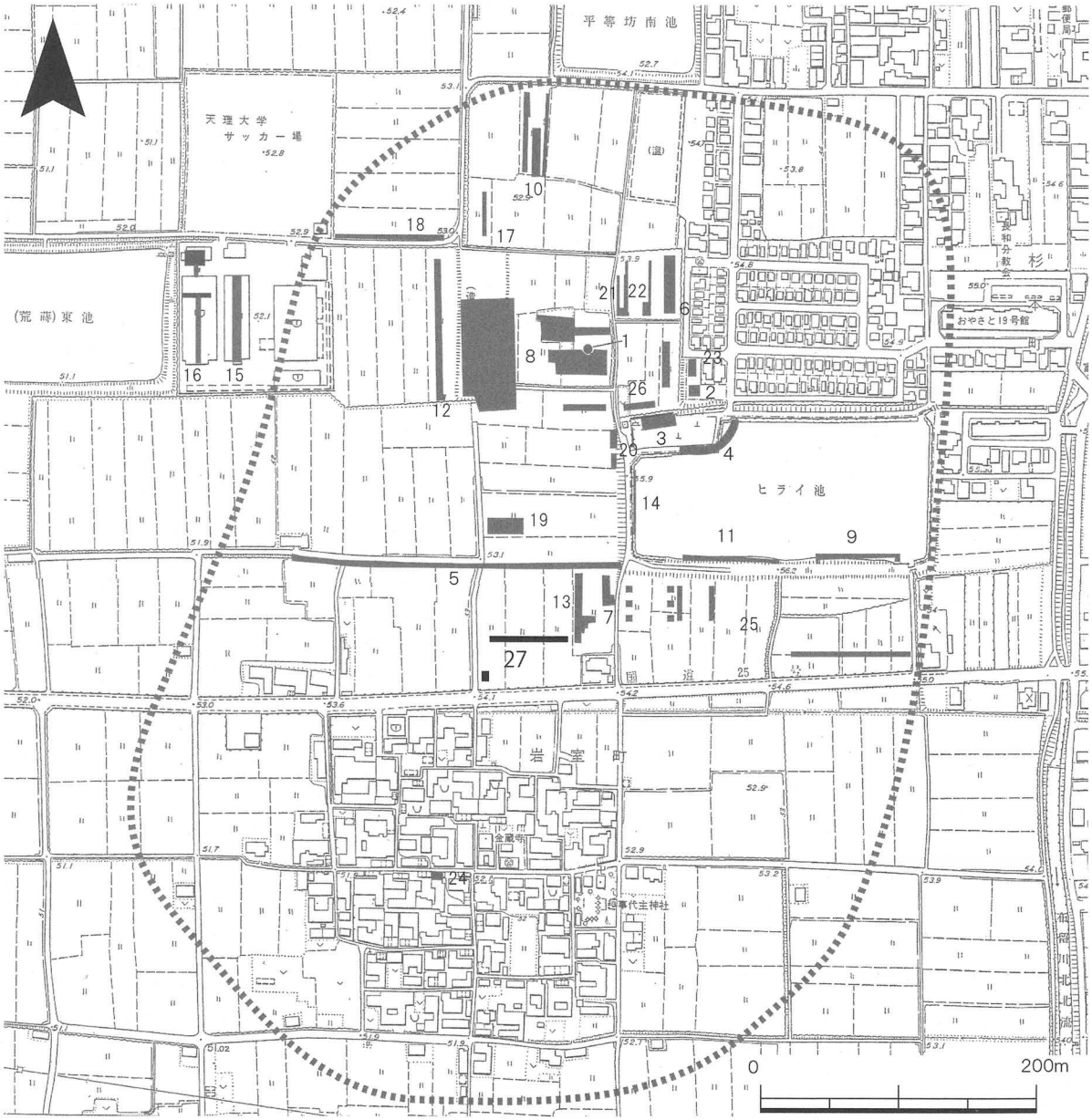


図１　今回の調査地と既往の調査地点位置図（S＝1/5000）

重機によって旧耕作土までを除去したのち、遺物包含層以下を人力で掘り下げつつ、層序確認と遺構検出に努めた。現地調査は平成17年11月25日に開始し、平成18年1月30日に終了した。総調査面積は220㎡であり、コンテナ換算で170箱の遺物が出土した。

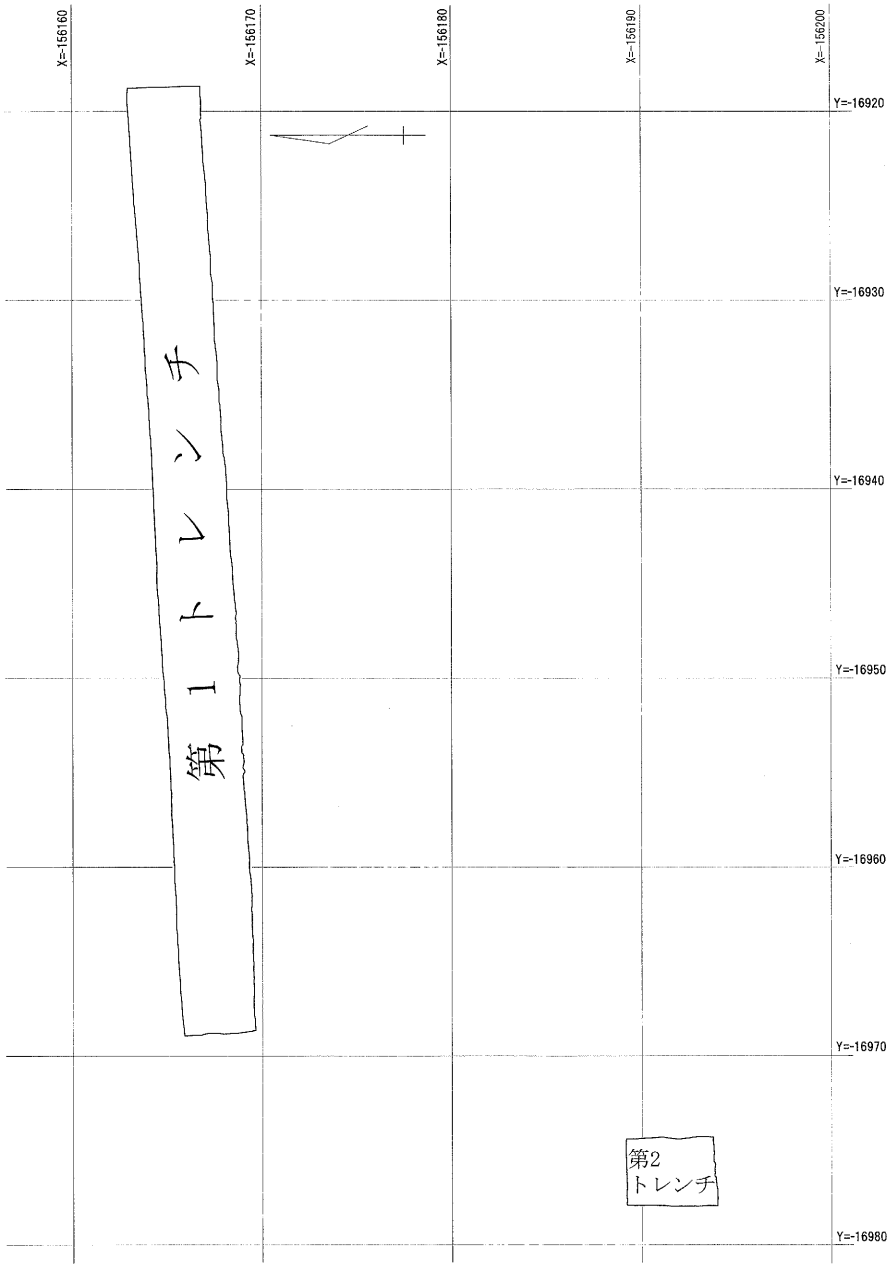


図２　調査区設定図（S＝1/400）

Ⅱ　調査の概要

１．基本層序（図４）

調査区における層序は、多少の凹凸を伴いつつ、おおむね水平堆積となる。調査区周辺の現地表面をなす水田面は標高52.2～52.5m前後であり、耕作土（Ⅰ層）の厚さは40～70cmを測る。

耕作土下部には灰黄色系シルトを主体とする、厚さ10～40cmのⅡ層（遺物包含層）が存在し、上面で中世段階の素掘溝や大溝を検出した。上面の標高は51.8～52.1mである。なお、調査区東端部では、耕作土直下で後述するSD3の埋土となり、Ⅱ層は確認できない。

Ⅱ層の下部には、浅黄色系のシルトを主体とする、厚さ10～40cmのⅢa層が存在し、上面で弥生時代中期～古代の遺構を検出した。上面の標高は51.5～51.8mである。なお、調査区西端部ではⅡ層の直下で後述するⅢb層となり、Ⅲa層は確認できない。

第Ⅲa層の下部には、浅黄色～淡黄色系シルトを主体とする、厚さ10～40cmの第Ⅲb層が存在し、上面で弥生時代前期の遺構を検出した。上面の標高は51.3～51.7cmを測る。

第Ⅲb層の下部は灰白色～灰オリーブ色の粘土を主体とする地山（第Ⅳ層）となる。第Ⅳ層中の層理線は比較的凹凸が大きく、下方では砂の堆積となることから、弥生時代以前の調査区周辺は地形的に不安定な立地条件を呈していたことがうかがえる。

２．主要な遺構と遺物

現地調査においては、第１トレンチと第２トレンチで個別に１～の順で遺構番号を付した。遺構数では第１トレンチに属するものが圧倒的に多いため、以後第１トレンチの遺構については特に注記せず「SK23」などと表記し、第２トレンチの遺構について「2trSD1」などと表記する。

（１）中世の遺構と遺物

第Ⅱ層上面で、中世の遺構を検出した。内訳は、東西方向の大溝１条と、東西方向および南北方向の素掘小溝多数である。調査期間の制約から詳細な記録は割愛したが、掘り込みがⅢa層以下に及ぶものについて図４に表示した。

遺構（図４）

大溝は、幅1.5m前後、検出面からの深さ0.4m前後を測り、長さ約35m分を検出した。走向はほぼ正東西であり、西延長は調査区外へのびる。この溝は、周辺の地割とあわせて考えると、坪界線と坪界線の中間付近に位置することから、調査地が属する坪を南北に二分する溝と考えられる。埋土は灰黄褐色～黒色の粘質土で、下方では砂質になる。

素堀小溝は南北方向のものと東西方向のものがあり、東西方向のものは少数である。

遺物（図３）

図３－１～５は瓦器椀である。１～４は大溝、５は南北素掘溝から出土した。

１は口縁内側に１条の沈線を施し、口縁端部は外側に肥厚して面を持つ。底部は高台によって中空仕上げとなり、高台は外傾状に突入した厚みのあるものである。やや丸みをおびた体部の内面には同心円状の暗文ヘラミガキを密に施し、見込みには平行線状の暗文を施す。外面は斜方向のミガキを疎に施す。２は口縁端部を内側傾斜で面取り成形され、沈線を持たない。底部は高台によって中空仕上げとなり、高台は逆三角形の細長いものである。丸みをおびた体部の内面には同心円状の暗文ヘラミガキを密に施し、見込みには平行線状の暗文を施す。外面は斜方向のミガキをやや疎に施す。３は口縁端部を円頭状に丸く成形され、沈線を持たない。底部は高台によって中空仕上げとなり、高台は逆三角形を呈する。やや丸みをおびた体部の内面には同心円状の暗文ヘラミガキを密に施し、見込みに平行線状の暗文を施す。外面は斜方向のミガキをやや疎に施し、体部および底部の外面に「×」状のヘラ記号を伴う。４は口縁端部を外湾状に成形し、沈線を持つ。逆三角形の底部を伴うが、床面に底部が接する。やや丸みをおびた体部の内面には同心円状の暗文ヘラミガキを密に施し、見込みには平行線状の暗文を施す。外面は斜め方向のミガキを疎に施し、一部に藁状の植物圧痕が認められる。５は口縁端部を円頭状に丸く成形し、沈線を持たない。逆三角形の底部を伴うが、床面に底部が接する。丸みをおびた体部の内面には

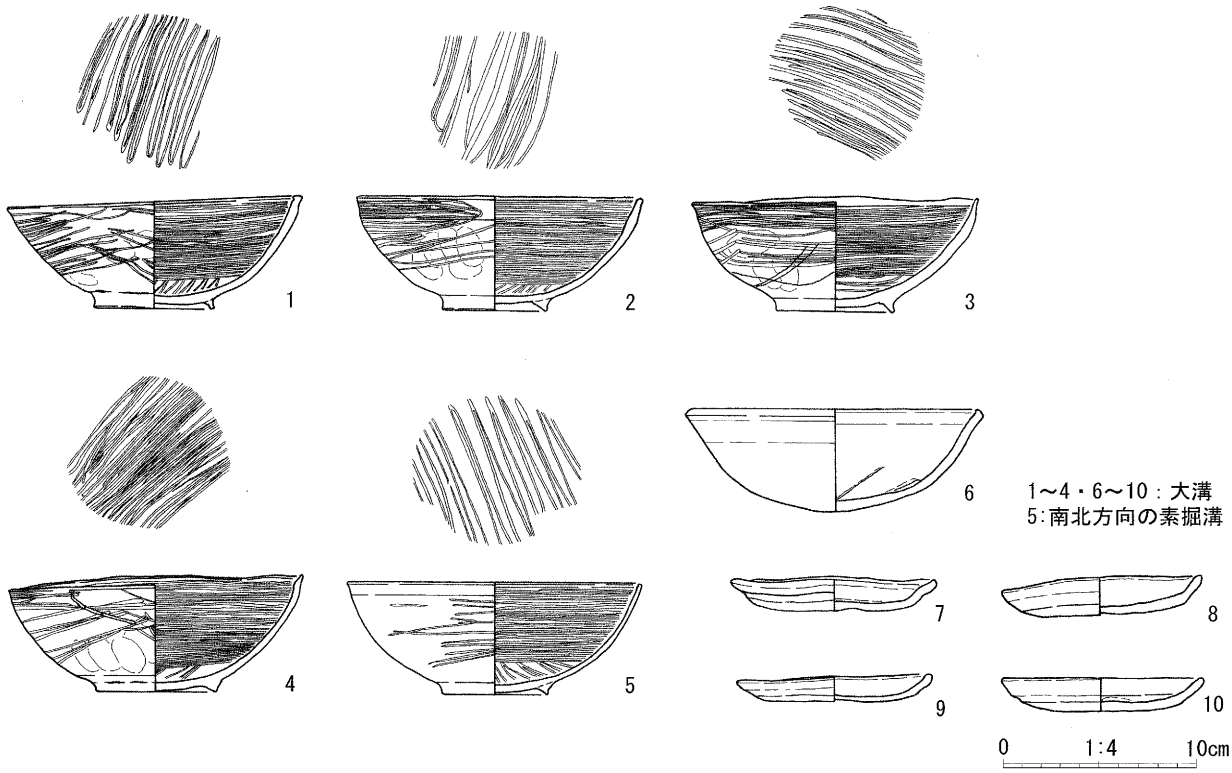


図３　中世遺構出土土器実測図（S＝1/4）

同心円状の暗文ミガキを施し、見込みに平行線状の暗文を施す。一方、外面には、暗文をもたない。

６は大溝から出土した土師器椀である。丸底で、全体的にもやや丸みをおびる。口縁部はやや外反し、端部はつまみ上げて端面を形成する。こうした器形は黒色土器に類例があるが、本例は黒色処理がなされておらず、土師器としては特殊な器形である。

７～10は大溝から出土した土師器皿である。７はいわゆる「ての字状口縁」を有するもので、口縁部はいったん外反したのち端部を内側に丸める。底面に多少の凹凸がみられるなど、歪みの大きい器形である。８～10は体部が直線的ないし内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。

これらの遺物は、いずれも11世紀末ないし12世紀初頭に属するもので、調査地周辺における条里の施行時期を考える一つの手がかりとなろう。

２．弥生時代中期～古代の遺構と遺物

遺構（図４）

Ⅲa層上面では多数の遺構が複雑に切り合って検出されたが、時期的には大半が弥生時代中期段階に属し、弥生時代後期に属する遺構は確認できない。弥生時代より後の時期の遺構としては、古墳時代前期に位置づけられる溝１条、ピット１基、古代に位置づけられる溝１条・ピット１基がある。

多くの遺構では、出土遺物が細片化しており詳細な時期の決定が困難であるが、溝６条・ピット５基が弥生時代中期初頭～前半、溝２条、井戸１基、土坑４基、ピット９基が中期後半、土坑１基、ピット１基が中期末に、それぞれ位置づけられる。確認できる範囲では中期後半段階の遺構が最も多いが、古墳時代の溝SD３には中期末段階の土器が一定量混入しており、実際には中期末に属する遺構もある程度存在する可能性がある。

井戸SE１（図18-１）　調査区中央付近で検出した大規模な土坑であり、安全確保のため、底面の検出は断念した。平面不整円形、断面不整逆台形を呈し、直径3.0m前後、検出面からの深さ1.3m以上を

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	備考
図3-1	瓦器椀	5G4/1暗緑灰	精良	良好	口径15.6 高台径6.0 器高5.7	3/5	大溝	外面指頭圧 内面ヨコナデ 内外面ヘラミガキ
図3-2	瓦器椀	5BG5/1青灰	精良	良好	口径15.4 高台径5.5 器高6.1	1/2	大溝	外面指頭圧 内面ナデ 内外面ヘラミガキ
図3-3	瓦器椀	5G5/1緑灰	精良	良好	口径15.0 高台径6.0 器高6.2	ほぼ完存	大溝	外面指頭圧 内面ナデ 内外面ヘラミガキ
図3-4	瓦器椀	10GY5/1緑灰	精良	良好	口径15.4 高台径6.1 器高6.0	ほぼ完存	大溝	外面指頭圧 内面ナデ 内外面ヘラミガキ
図3-5	瓦器椀	7.5GY5/1緑灰	精良	良好	口径(15.4) 高台径(5.5) 器高5.9	3/10	南北素堀溝	外面指頭圧 内面ヨコナデ 内外面ヘラミガキ
図3-6	土師器椀	2.5Y6/3にぶい橙	精良	良好	口径15.2 器高5.6	1/2	大溝	外面ヨコナデ 内面ナデ
図3-7	土師器皿	5YR8/4淡橙	精良	良好	口径10.6 底径5.9 器高1.8	1/2	大溝	体部ヨコナデ 底部指頭圧
図3-8	土師器皿	5YR8/3淡橙	精良	良好	口径10.4 底径5.0 器高2.2	完存	大溝	体部ヨコナデ 底部指頭圧
図3-9	土師器皿	10YR8/2灰白	精良	良好	口径10.2 底径6.8 器高1.4	完存	大溝	体部ヨコナデ 底部指頭圧
図3-10	土師器皿	2.5YR7/3淡赤橙	精良	良好	口径10.5 底径4.0 器高1.8	完存	大溝	体部ヨコナデ 底部指頭圧

表１　中世遺構出土土器観察表

測る。遺構内から弥生時代中期後半を中心とする土器が出土した。土層は上層が灰黄褐～褐灰色系の粘質土と砂質土の互層、中層は黒色～黒褐色系の粘質土と砂質土の互層でいずれもレンズ状堆積を示し、下層は褐灰～黒色系の砂質土と粘土の互層となる。底面が湧水層を掘り返して設けられていることから井戸と判断した。

溝SD３　調査区東端部で検出した溝状遺構である。幅2.5m以上、検出面からの深さ0.3m前後を測り、北に凸な弧状を呈する。西側の肩については、明瞭に検出することができなかった。遺構内から弥生時代中期末～古墳時代前期の土器が出土し、遺構の時期としては古墳時代前期に求められる。埋土は黒褐色系の土で、下方では粘性を帯びる。

土坑SK５　調査区中央付近で検出した土坑である。平面長円形、断面台形を呈するが、南半は調査区外にのびるため、全容を検出し得ていない。長軸1.0m以上、短軸0.7m以上、検出面からの深さ0.6m前後を測る。埋土中から弥生時代中期末を中心とする遺物が出土した。中でも、絵画土器が複数点出土していることが特筆される。

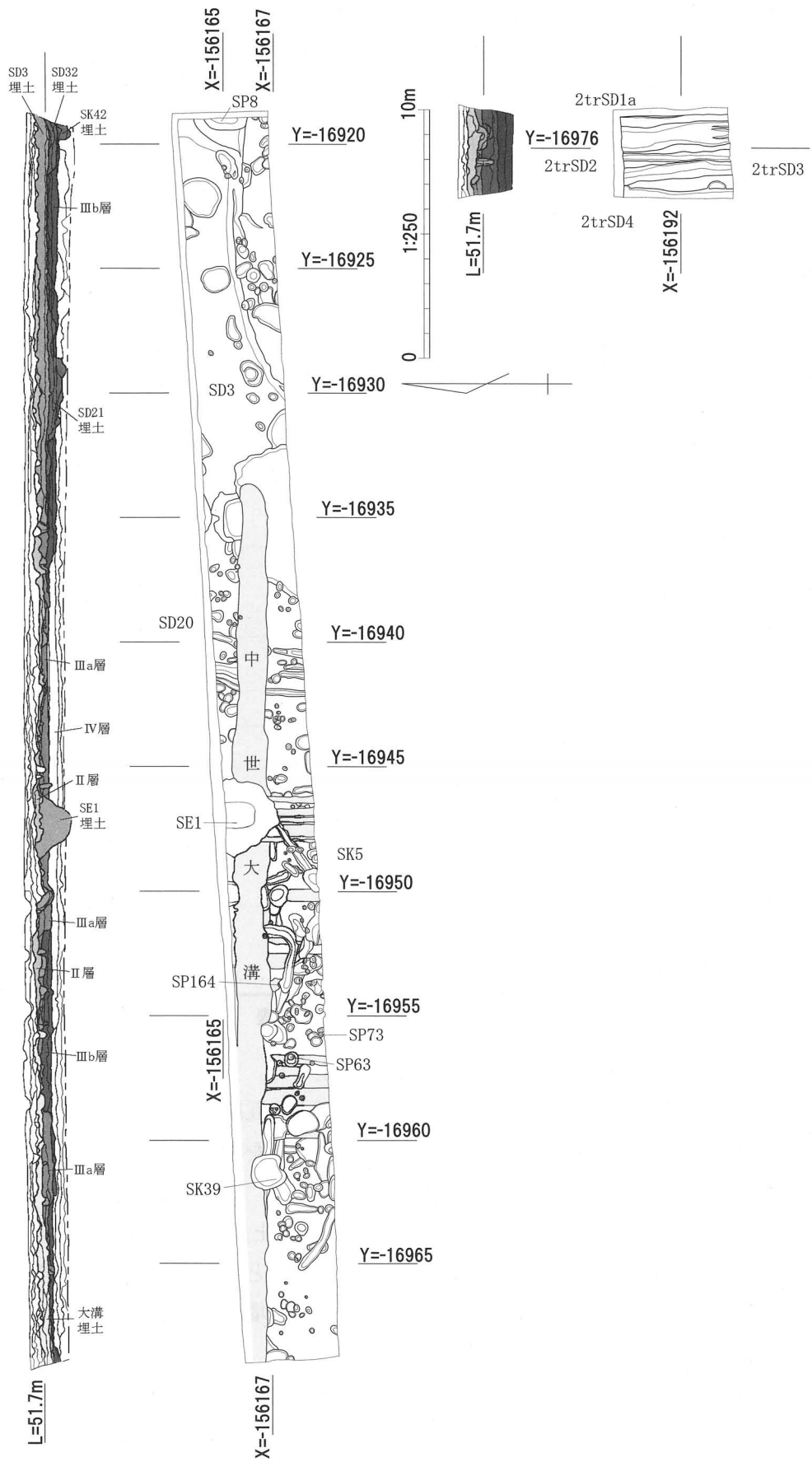


図４　Ⅲａ層上面遺構平面図およびトレンチ土層断面図（S＝1/250）

土坑 SK39（図 18-２）　調査区西方で検出した土坑である。平面不整円形、断面椀状を呈し、直径 1.4m 前後、検出面からの深さ 0.9m を測る。埋土は上層で灰黄褐～褐灰色系の砂質土、中～下層で灰白～灰黄褐色系の粘質土を主体とし、緩やかなレンズ状堆積を示す。埋土から弥生時代中期後半を中心とする遺物が出土した。

ピット SP63　調査区中央やや西寄りで検出したピットである。平面隅丸方形、断面逆台形を呈し、底面には平面円形の掘り込みを持つ。形状から柱穴跡と考えられる。遺物は土師器坏が出土しており、奈良時代末～平安時代初頭に属する。一辺の長さ 0.55m 前後、検出面からの深さ 0.2m 前後、円形掘り込みの直径 0.3m 前後、深さ 0.3m 前後を測る。

2tr 溝 SD１a　調査区東寄りで検出した溝である。走向は正南北よりやや北西に振れ、幅 1m 前後、検出面からの深さ 40 cm前後を測る。トレンチ南端では溝底に凹凸があり、３条に分かれるようにも見えるが、凹凸の比高差は 10cm に満たない。

2tr 溝 SD２　調査区中央付近で検出した溝である。走向はほぼ正南北で、幅 40 cm前後、検出面からの深さ 15 cm前後を測る。

2tr 溝 SD３　調査区中央やや西寄りで検出した溝である。走向は正南北よりやや北西に振れ、幅 65 cm前後、検出面からの深さ 30 cm前後を測る。

2tr 溝 SD４　調査区西端で検出した溝である。走向はほぼ正南北で、幅 40 cm以上、検出面からの深さ 15 cm前後を測る。

2tr 溝 SD１a ～４からは、いずれも弥生時代中期前半を中心とする時期の遺物が出土した。

出土遺物（図５～９･表２～５）

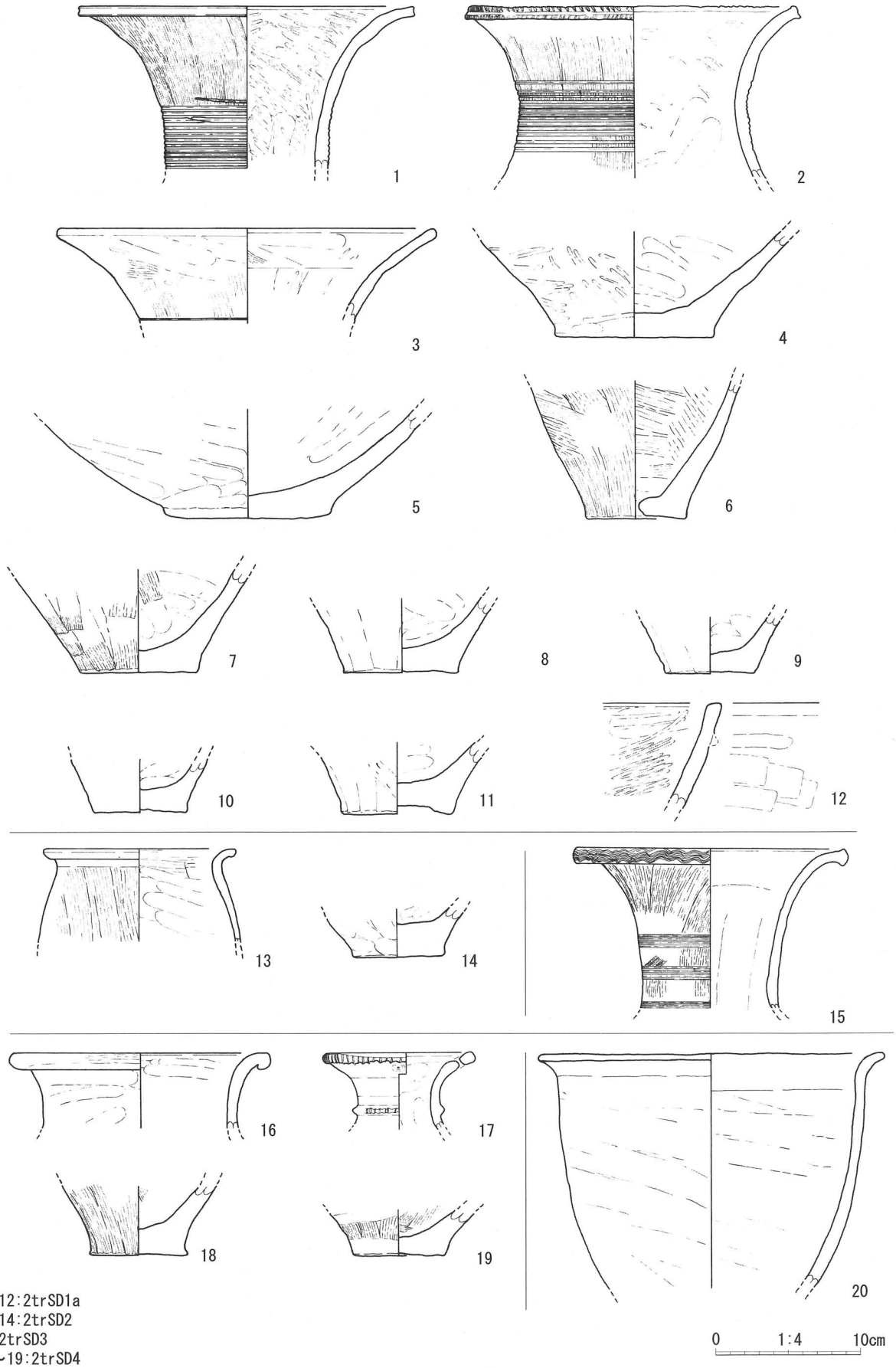
中期初頭～前半の遺物には図化し得るものが少ないが、ここでは SP８･2trSD１a･２･３･４出土土器を示す（図５･表２）。

図５－１～ 12 は 2trSD１a 出土土器である。１は広口長頸壺の口頸部である。口縁部が高く大きく開く器形で、口縁端部はやや凹状の面を持つ。頸部外面に 12 条以上のヘラ描沈線を施す。２は広口壺の口頸部である。径の大きい頸部から、口縁部が高く開く。口縁端部は両側に肥厚し、端面にヘラ描きによる綾杉状の文様を施すほか、頸部に 13 条のヘラ描き沈線を施す。３は広口壺の口縁部である。口縁端部は丸く終わり、頸部に１条以上のヘラ描き沈線を施す。４・５は壺底部である。４は直線的に立ち上がる胴部を持つ。５は突出した底部から、外湾する胴部が立ち上がり、底胴部界の外面に接合痕がみられる。６は甑底部である。中央に焼成後穿孔を持つ底部から、外湾する胴部が立ち上がる。７～ 11 は甕底部である。いずれも直線的に立ち上がる胴部をもつ。11 は底部中央が段を持って薄くなる。12 は直口鉢の口縁部片である。やや外湾する器形で、端部は面を持つ。口縁部端のやや下方に、把手の剥離痕がみられるほか、内面に藁圧痕がある。

これらの土器はいずれも、中期初頭頃の様相を示す。

図５－13･14 は 2trSD２出土土器である。13 は甕の口縁部～胴部上半である。やや丸みをおびた胴部から短く外反して口縁部に至る。口縁部端は下方にやや肥厚する。14 は壺底部か。分厚い底部から、胴部が直線的に立ち上がる。

15 は 2trSD３出土の広口長頸壺の口頸部である。長い頸部から口縁部が大きく外反し、口縁部端は上下に肥厚する。口縁部端面に櫛描波状文、頸部に３条以上の櫛描直線文を、それぞれ施す。口縁部内面



1～12:2trSD1a
13･14:2trSD2
15:2trSD3
16～19:2trSD4
20:SP8

図５　Ⅲａ層上面遺構出土土器実測図１（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図5-1	弥生壺	5YR7/3 にぶい橙	やや密	良好	口径(23.2) 現存高11.2	1/5	2tr SD1a	外面縦位ハケ後ヘラ描沈線 内面縦位ナデ後ミガキ
図5-2	弥生壺	2.5YR7/6 橙	やや密	良好	口径(22.2) 現存高12.2	2/5	2tr SD1a	外面縦位ハケ後ヘラ描沈線 内面右上がりナデ後左上がりミガキ 口縁端部綾杉文
図5-3	弥生壺	2.5YR7/6 橙	やや密	良好	口径(25.8) 現存高6.6	1/5	2tr SD1a	外面縦位ハケ・左上がりナデ後左上がりミガキ・ヘラ描き沈線 内面左上がりハケ・ナデ後右上がりミガキ
図5-4	弥生壺	5YR8/3 淡橙	やや密	やや良好	底径11.0 現存高7.4	底部 1/2	2tr SD1a	外面ミガキ 内面左上がりナデ
図5-5	弥生壺	5YR8/3 淡橙	やや粗	やや良好	底径11.4 現存高7.6	底部 完存	2tr SD1a	外面ナデ後ミガキ 内面縦位ナデ
図5-6	弥生甑	2.5YR7/6 明赤灰	やや密	やや良好	底径(7.0) 現存高4.8	底部 3/10	2tr SD1a	外面縦位ハケ 内面横位ハケ
図5-7	弥生甕	5YR8/3 淡橙	やや密	やや良好	底径8.0 現存高7.2	底部 完存	2tr SD1a	外面縦位板ナデ 内面ナデ・左上がりハケ
図5-8	弥生甕	7.5YR8/3 浅黄橙	やや密	やや良好	底径8.0 現存高5.2	底部 完存	2tr SD1a	外面縦位ヘラナデ 内面横位ナデ
図5-9	弥生甕	5YR7/4 にぶい橙	やや密	やや良好	底径6.2 現存高4.0	底部 完存	2tr SD1a	外面縦位ヘラナデ? 内面横位ナデ
図5-10	弥生甕	2.5YR7/6 橙	やや粗	やや良好	底径6.4 現存高3.8	底部 完存	2tr SD1a	外面被熱により調整不明 内面横位ナデ
図5-11	弥生甕	5YR8/3 淡橙	やや密	やや軟	底径7.6 現存高5.1	底部 完存	2tr SD1a	外面縦位ヘラナデ後左上がりケズリ 内面横位ナデ
図5-12	弥生鉢	5YR8/3 淡橙	やや粗	やや良好	現存高7.2	口縁部 破片	2tr SD1a	外面横位板ナデ 内面横位ナデ後横位ミガキ
図5-13	弥生甕	2.5YR7/3 淡赤橙	精良	良好	口径(13.0) 現存高6.4	口縁部 1/5	2tr SD2	外面縦位ハケ 内面横位ハケ・左上がりナデ
図5-14	弥生壺	5YR8/3 淡橙	やや密	良好	底径6.2 現存高3.4	底部 9/10	2tr SD2	内外面ナデ
図5-15	弥生壺	5YR8/3 淡橙	精良	良好	口径18.5 現存高11.0	1/2	2tr SD3	外面縦位ハケ後櫛描文 内面縦位ナデ・ヨコナデ
図5-16	弥生壺	2.5YR7/3 淡赤橙	精良	良好	口径(17.4) 現存高5.2	口縁部 1/5	2tr SD4	内外面横位ナデ 口縁部面取り
図5-17	弥生壺	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	口径(10.0) 現存高5.3	口縁部 3/10	2tr SD4	外面ヨコナデ・貼付突帯 内面ナデ
図5-18	弥生甕	2.5YR7/8 橙	やや密	やや良好	底径6.8 現存高4.7	底部 完存	2tr SD4	外面縦位ハケ 内面ハケ?
図5-19	弥生甕	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	やや良好	底径6.2 現存高3.2	底部 完存	2tr SD4	外面縦位ハケ後ヨコナデ 内面右上がりハケ
図5-20	弥生甕	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	口径24.0 現存高16.2	1/2	SP8	内外面左上がりハケ

表２　Ⅲａ層上面遺構出土土器観察表１

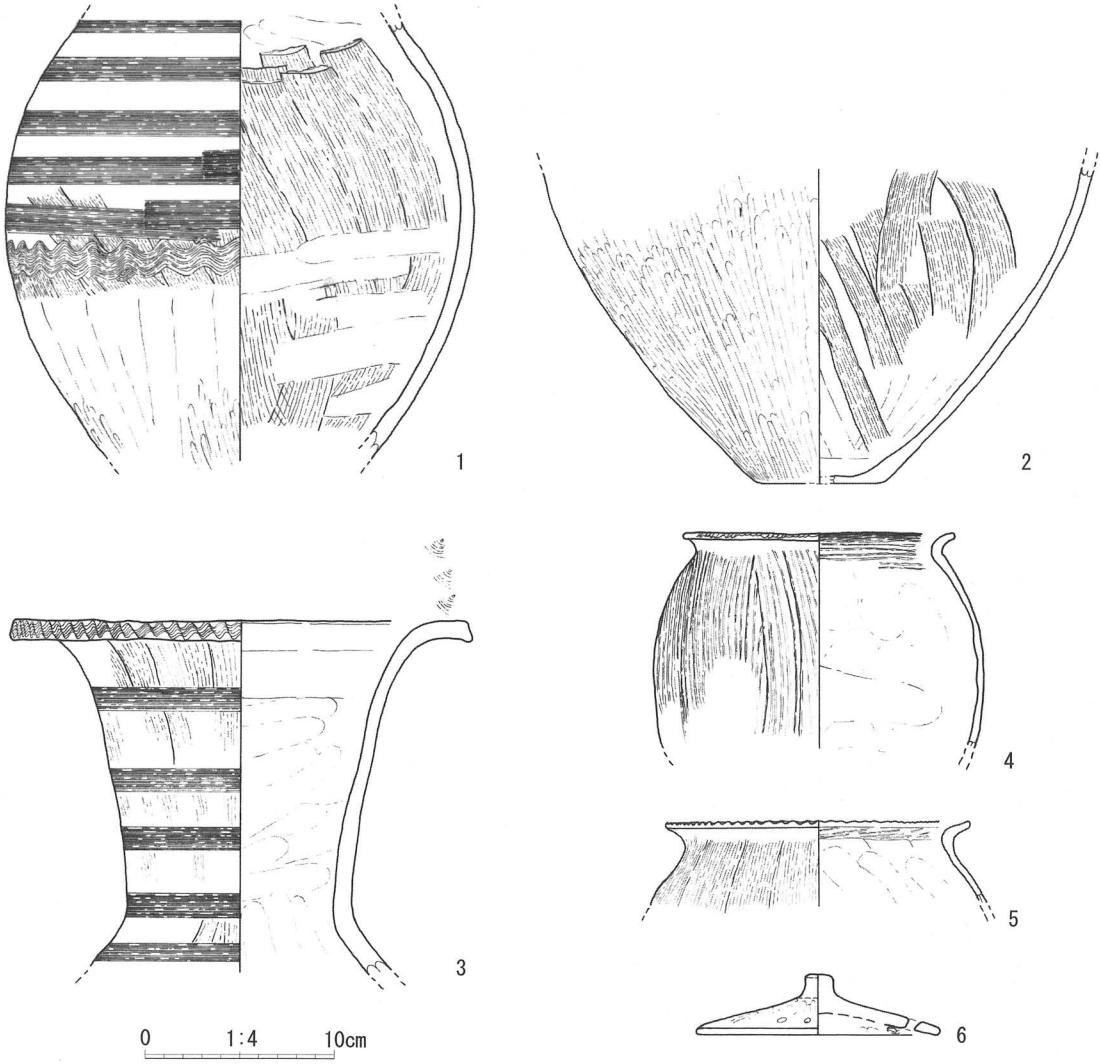
に混和材の圧痕がみられる。

16～19はSD４出土土器である。16は広口壺の口頸部である。短い頸部から口縁部が緩やかに外反する。口縁部端は下方へ折り曲げて丸め、部分的に板ナデ原体による面取りを施す。17は小形壺の口頸部である。貼付突帯１条をめぐらす短い頸部から、口縁部が大きく外反する。口縁部付近はやや肥厚し、焼成後穿孔による紐孔１孔がみられる。口縁部端は丸く終わり、口縁部端面および貼付突帯上に刻目を施す。18･19は甕の底部である。18は厚手の底部から胴部が外湾気味に立ち上がる。19は胴部が直線状に立ち上がるが、胴部は厚手である。

図５-20はSP８出土土器である。張りの弱い倒鐘形の胴部から口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。内面に炭化物が付着する。

中期後半の土器は、SE１･SK39などを中心に多く出土している（図６・７･図８-17､表３･表４-17)。

図６-１・２はSE１上～中層出土土器である。１は広口長頸壺の胴部である。縦長の球形で、胴部上半に櫛描直線文５条を、胴部最大径直下に櫛描波状文１条を施し、櫛描波状文が櫛描直線文を切る。下半には煤の付着がみられる。２は瀬戸内系と思われる甕の胴部下半～底部である。径の小さい底部から、胴部が外湾して立ち上がり、内面に炭化物の付着がみられる。



1･2:SE1上～中層
3～6:SE1下層

図６　Ⅲａ層上面遺構出土土器実測図２（S＝1/4）

図６－３～６はSE１下層出土土器である。３は広口長頸壺の口頸部である。頸胴部界は明瞭に屈曲し、口縁部は大きく外反して開き、ほぼ水平になる。口縁部端は下方にやや突出して面をなし、端面に櫛描波状文、上面に櫛描扇形文を施す。また、頸部から胴部にかけて櫛描直線文５条以上を施す。外面に煤の付着がみられる。４は大和形甕の口縁部～胴部である。球形の胴部から、口縁部が短く外反し、端部は丸く終わり、刻目を施す。５は大和形甕の口縁部～胴部である。４と同様、球形の胴部から口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わり、刻目を施す。６は無頸壺の蓋である。傘形を呈し、天井部に円筒状のツマミが突出する。口縁部は丸く終わり、口縁付近に二孔一対の紐孔を配する。

図７-１～３はSK39上～中層出土土器である。１は広口壺の口頸部である。頸胴部界から頸部が直線的に開き、口縁部は大きく外反してやや下向きになって終わる。口縁部端は平らな面をなし、端面に櫛描波状文、上面に扇形文を施す。また、頸胴部界に櫛描簾状文を施す。２は大和形甕の口縁部～胴部下半である。下膨れ状を呈する胴部から、口縁部が短く外反する。口縁部端は丸く終わり、刻目を施す。内面に混和剤の圧痕が見られ、外面には煤が付着する。３は大和形甕の口縁部～胴部上半である。球形の胴部から口縁部が短く外反し、端部は丸く終わり、刻目を施す。外面に煤の付着がみられる。

図７-４～15はSK39下層出土土器である。４～６および８は広口壺の頸部である。４は垂直に近い頸部から口縁部が外反してほぼ水平となり、端部は上下に肥厚する。口縁端面に櫛描波状文を、頸胴部界に櫛描直線文を施す。５はおおむね４と同様の形態を示すが、口縁部は水平になる。頸部内面に接合痕がみられる。６は４・５に比べ頸部が短く、口縁部は下向きになって終わり、端部は下方に肥大して面をなす。口縁部端面に櫛描波状文、上面に櫛描扇形文、頸胴部界に櫛描直線文をそれぞれ施す。８は口縁部がやや緩やかに外反し、口縁端部は下方に肥厚して面をなす。７は直口壺の口頸部である。口縁部はやや外反し、端部は内側に肥厚して平らな面をなす。頸部に櫛描直線文を施す。９は小型壺の胴部である。球形を呈するが、なで肩で張りがなく、なだらかに頸部へ移行する。10は壺底部である。幅広の底部から、胴部が直線状に立ち上がる。11は甕の口縁部～胴部下半である。細長い球形の胴部から、口縁部が短く外反する。口縁部はやや肥厚し、幅狭な端面を形成する。外面にところどころ煤の付着がみられる。12～14は甕口縁部～胴部上半である。12は瀬戸内系甕で、球形の胴部から口縁部が短く外反する。口縁部端は下方に肥厚し、端面はやや凹状を呈する。内面に混和材の圧痕がみられる。13は瀬戸内系甕で、球形の胴部から口縁部が短く外反する。口縁端は下方にやや肥厚して面をなす。端面はやや凹状を呈する。口縁部と胴部の境では外面に接合痕がみられる。14は張りの弱いなで肩状の胴部から口縁部が短く屈曲す、やや特異な器形である。口縁部内面に強いヨコナデが施され、口縁部端が上方に突出するように見える。15は鉢の口縁部～胴部である。胴部はやや外湾して立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立つ。口縁部端は丸く終わる。

以上の特徴から、SK39出土土器は、一部に中期前半代の土器が混入するものの、おおむね中期後半代に属するものである。

図８-17はSP164出土の台付鉢の鉢部である。鉢部はやや深みをもち、口縁部を下方に折り返す。口縁端部は丸く終わる。内外面とも上半を横位、下半を縦位のミガキで調整し、鉢部上半に櫛描直線文２条、口縁部に刻目文を施す。外面に黒斑がみられる。

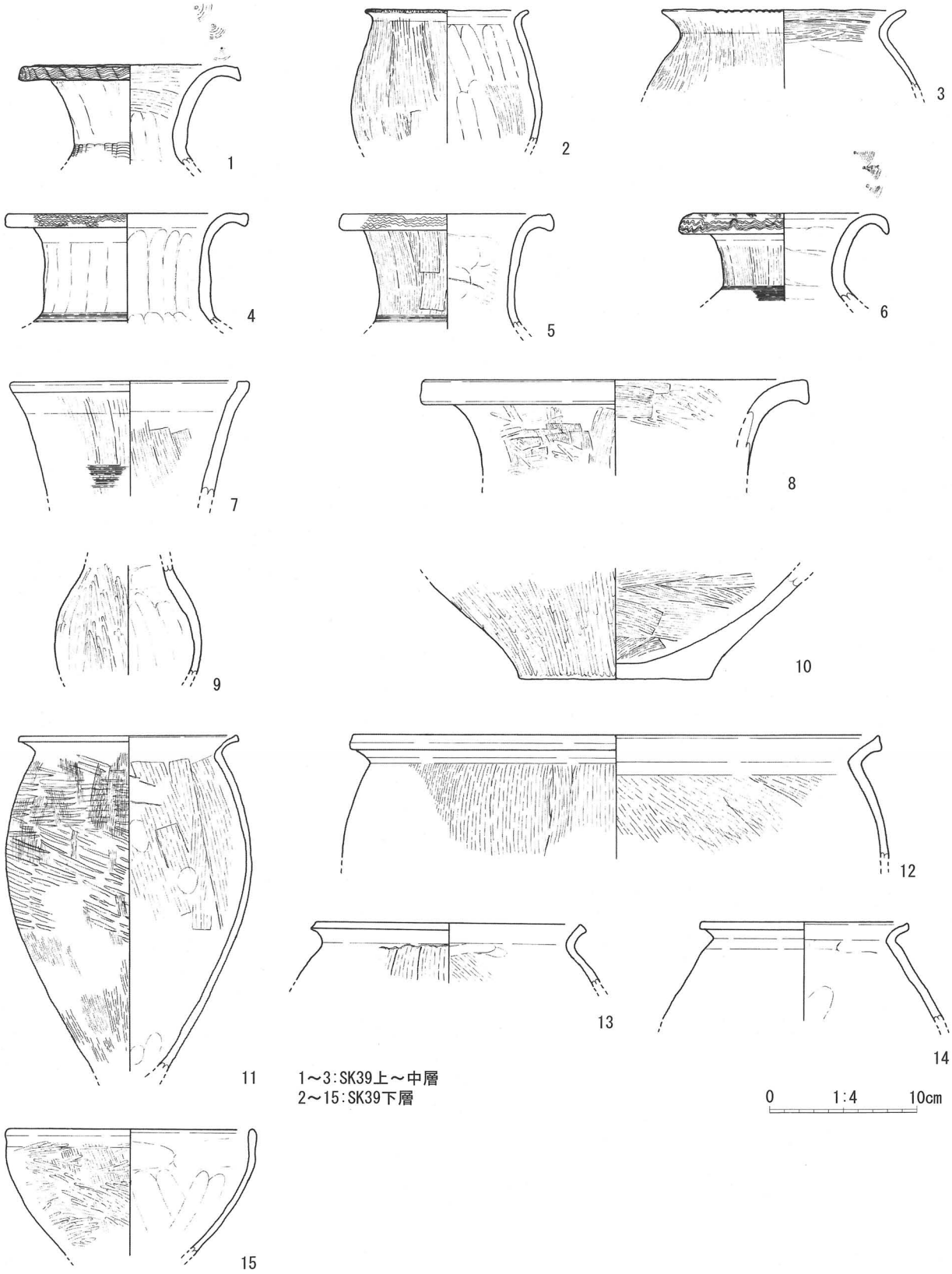


図７　Ⅲａ層上面遺構出土土器実測図３（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図6-1	弥生壺	2.5YR6/2 灰赤	精良	良好	胴部最大24.8 現存高25.2	胴部 1/2	SE1 上～中層	外面左上がりハケ後縦位ミガキ・櫛描文 内面左上がり～縦位ハケ後横位ナデ
図6-2	弥生壺	5YR5/1 褐灰	精良	やや良好	底径(6.5) 現存高16.7	底部 1/5	SE1 上～中層	外面ケズリ後縦位ミガキ 内面ナデ後左上がりハケ
図6-3	弥生壺	2.5YR7/4 淡赤橙	精良	良好	口径24.0 現存高18.7	4/5	SE1 下層	外面縦位ハケ 内面ヨコナデ・ナデ
図6-4	弥生甕	5YR4/1 褐灰	精良	良好	口径(14.4) 現存高11.4	1/4	SE1 下層	外面縦位ハケ 内面横位ハケ・ナデ
図6-5	弥生甕	2.5YR7/3 淡赤橙	密	良好	口径16.0 現存高4.4	1/2	SE1 下層	外面縦位ハケ 内面横位ハケ・左上がりナデ 口縁端部刻目
図6-6	弥生蓋	5YR8/3 淡橙	精良	良好	裾径(12.8) 器高3.2	2/5	SE1 下層	外面縦位ミガキ(ツマミ部ヨコナデ) 内面横位ミガキ 二孔一対の紐孔あり
図7-1	弥生壺	5YR8/4 淡橙	精良	良好	口径（14.6） 現存高6.8	1/3	SK39 上～中層	外面縦位ナデ後縦位ハケ・櫛描文 内面縦位ナデ後横位ハケ・扇形文
図7-2	弥生甕	2.5YR7/6 橙色	精良	良好	口径（10.9） 現存高9.1	1/4	SK39 上～中層	外面縦位ハケ 内面縦位ナデ後縦位ハケ
図7-3	弥生甕	5YR8/3 淡橙	精良	やや良好	口径（16.6） 現存高5.5	1/4	SK39 上～中層	外面縦位ハケ 内面横位ハケ・左上がりナデ
図7-4	弥生壺	2.5YR7/4 淡赤橙	精良	良好	口径（16.1） 現存高7.4	1/3	SK39 下層	外面縦位ヘラナデ後櫛描文 内面縦位ナデ・ヨコナデ
図7-5	弥生壺	5YR7/4 にぶい橙	やや密	良好	口径14.0 現存高7.8	1/2	SK39 下層	外面縦位ハケ後櫛描文 内面ナデ後ハケ
図7-6	弥生壺	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	口径12.4 現存高6.1	7/10	SK39 下層	外面縦位ハケ後ヨコナデ・櫛描文 内面横位ナデ後扇形文
図7-7	弥生壺	2.5YR6/4 にぶい橙	やや密	良好	口径（16.2） 現存高3.9	1/5	SK39 下層	外面縦位ハケ後櫛描文 内面縦位ハケ
図7-8	弥生壺	5YR8/2 灰白	やや密	良好	口径（26.0） 現存高6.5	1/5	SK39 下層	外面縦位ハケ後ミガキ 内面横位ハケ後横位ミガキ
図7-9	弥生壺	5YR8/2 灰白	精良	良好	胴部最大（9.9） 現存高7.6	胴部破片	SK39 下層	外面縦位ミガキ 内面ナデ
図7-10	弥生壺	5YR7/4 にぶい橙	やや密	良好	底径13.0 現存高7.4	底部完存	SK39 下層	外面縦位ミガキ 内面横位ハケ
図7-11	弥生甕	2.5YR5/4 にぶい赤褐	密	良好	口径（14.8） 現存高22.9	1/3	SK39 下層	外面タタキ後縦位ハケ 内面縦位ハケ
図7-12	弥生甕	7.5YR8/2 灰白	精良	良好	口径(35.6) 現存高8.3	1/5	SK39 下層	外面縦位ハケ 内面左上がりハケ
図7-13	弥生甕	5YR5/3 淡橙	精良	良好	口径（17.9） 現存高4.1	1/6	SK39 下層	外面縦位ハケ 内面左上がりハケ後横位ナデ
図7-14	弥生甕	5YR7/4 にぶい橙	精良	良好	口径（14.0） 現存高6.8	1/5	SK39 下層	内外面ナデ
図7-15	弥生鉢	5YR8/2 灰白	精良	良好	口径（16.5） 現存高8.6	1/4	SK39 下層	外面縦位ハケ後ミガキ 内面ナデ

表３　Ⅲａ層上面遺構出土土器観察表２

中期後半以降の遺物は、SD３で弥生中期後半～古墳時代、SP63 で古代の遺物をそれぞれ確認した。

図８-１～12 は SD３上～中層出土土器である。１は小形壺である。手捏ね成形されたもので、胴部以上の大きさに比べて底部が非常に大きい。縦長の球状の胴部から口縁部が短く外反し、端部は丸く終わる。胴部の内外面には接合痕が明瞭である。２は壺口頸部である。口縁部は大きく開き、口縁端部は凹線状を呈する面を持つ。頸胴部界付近に櫛描直線文を施す。３は壺頸部～胴部である。頸胴部界は屈曲が明瞭で、外面に接合痕がみられる。頸部上半は口縁部へ向かって開く。４～６は壺底部である。４はやや厚手の底部から、胴部が立ち上がる。５は胴部の立ち上がりが緩やかである。６は底胴部界が明瞭で、胴部は外湾して立ち上がる。７は高坏の坏部～脚部上半である。坏部は平坦な底部から外湾して立ち上がり、口縁端部は外反して丸く終わる。器壁は薄手である。坏部と脚部の境は明瞭でなく、緩やかに移行する。８は高坏脚柱部である。中空の柱状の脚部で、上下端は坏部、脚端部に向かって広がる。上端には、坏底部との接合面が残る。９は高坏脚裾部である。裾部は外反し、脚端部は丸く終わる。破片の上端に、図示不能なほどわずかではあるが、穿孔の痕跡が残る。外面には混和材の圧痕がみられる。

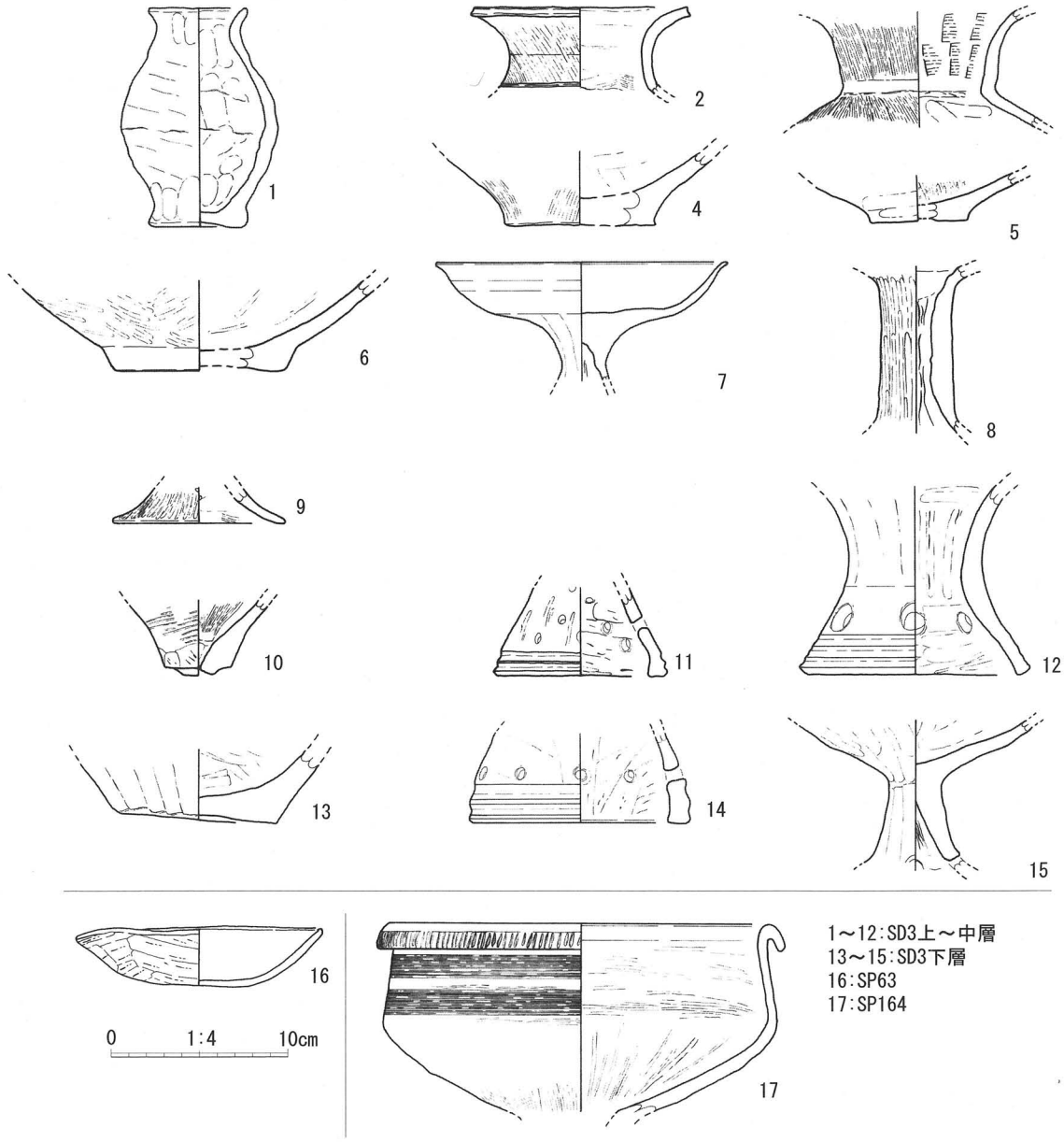


図８　Ⅲａ層上面遺構出土土器実測図４（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図8-1	弥生小型壺	5YR8/4淡橙	やや粗	やや良好	口径(5.6) 底径5.6 器高12.5	1/10 底部完存	SD3 上～中層	外面指頭圧・左上がりナデ 内面指頭圧
図8-2	弥生壺	2.5YR7/6橙	やや密	良好	口径(12.0) 現存高5.0	1/4	SD3 上～中層	外面左上がりハケ後ヨコナデ 内面ナデ・ハケ後櫛描文
図8-3	弥生壺	5YR8/3淡橙	精良	良好	頸部下端径8.5 現存高6.6	頸部下端 1/2	SD3 上～中層	外面左上がりハケ 内面横位ハケ・ナデ
図8-4	弥生壺	2.5YR6/6橙	精良	やや良好	底径(8.6) 現存高4.2	底部 1/5	SD3 上～中層	外面縦位ハケ 内面ナデ
図8-5	弥生壺	2.5YR6/2灰赤	やや粗	やや良好	底径(5.6) 現存高2.6	底部 1/5	SD3 上～中層	外面横位ナデ 内面縦位ミガキ
図8-6	弥生壺	5YR7/2明褐灰	やや密	やや良好	底径(9.4) 現存高5.1	底部 2/5	SD3 上～中層	外面ミガキ 内面右上がりミガキ
図8-7	土師高坏	2.5YR7/6橙	精良	良好	口径(16.5) 現存高6.7	2/5	SD3 上～中層	坏部内外面ヨコナデ 脚部外面縦位ヘラナデ・内面シボリ
図8-8	弥生高坏	5YR7/4にぶい橙	精良	良好	脚柱径4.5 現存高9.5	脚柱部 1/2	SD3 上～中層	外面縦位ミガキ 内面シボリ
図8-9	弥生高坏	2.5YR6/6橙	精良	良好	裾径(9.6) 現存高2.0	脚端部 1/4	SD3 上～中層	外面縦位ミガキ 内面横位ハケ後ナデ
図8-10	弥生甑	5YR8/2灰白	やや密	良好	底径3.9 現存高4.4	底部 完存	SD3 上～中層	外面縦位ハケ後横位タタキ・ケズリ 内面右上がりハケ
図8-11	弥生高坏	2.5YR7/4淡赤橙	精良	良好	裾径(9.4) 現存高5.0	脚端部 1/4	SD3 上～中層	外面縦位ミガキ後凹線文 内面横位ケズリ
図8-12	弥生器台	5YR8/3淡橙	精良	良好	裾径(12.0) 現存高10.6	裾部 1/4	SD3 上～中層	外面縦位ヘラナデ後ヨコナデ後凹線文 内面シボリ後ナデ、横位板ナデ
図8-13	弥生甕	2.5YR7/6橙	やや密	良好	底径8.8 現存高4.1	底部 完存	SD3 下層	外面縦位板ナデ 内面ハケ
図8-14	弥生高坏	2.5YR7/4淡赤橙	精良	良好	裾径(12.2) 現存高5.1	脚端部 1/5	SD3 下層	外面ナデ後凹線文 内面右上がりケズリ
図8-15	弥生高坏	5YR7/4にぶい橙	やや密	良好	坏部下端径(3.0) 現存高8.6	脚部 2/5	SD3 下層	坏部内外面ナデ 脚部外面縦位板ナデ・内面シボリ
図8-16	土師坏	10R6/8赤橙	精良	良好	口径13.9 底径5.4 器高3.3	7/10	SP63	外面横位ケズリ 内面ヨコナデ
図8-17	弥生台付鉢	2.5YR7/4淡赤橙色	やや密	良好	口径(21.6) 現存高10.6	1/4	SP164	外面縦位・横位ミガキ、櫛描文 内面縦位・横位ミガキ 口縁端部に刻目

表４　Ⅲａ層上面遺構出土土器観察表３

10は甑の底部片である。胴部は外反しつつ立ち上がる。底部中央を穿孔し、穿孔部付近は一段突出する。11は高坏脚部である。脚裾部は内側に肥厚し、端面は凹状を呈する。裾端直上に2条の凹線を施し、その上方に透孔を3段に穿つ。残存部の範囲では、透孔の配置に規則性を指摘できない。外面に黒斑がみられる。12は器台である。裾部端はやや平らな面をもち、その直上に3条の凹線を施す。凹線の直上に大きめの透孔が配され、それらの間隔からは5方向1段の透孔に復元できる。外面に黒斑、内面に混和材圧痕がみられる。

図8-13～15はSD3下層出土土器である。13は甕底部か。胴部は直線的に立ち上がる。14は高坏脚部である。外湾して立ち上がり、裾部は内側にやや肥厚して平らな端面をなす。端部の直上に幅広の凹線2条を施し、透孔を配する。それらの間隔から、8方向1段の透孔に復元できる。15は高坏の坏部下半～脚部上半である。坏部と脚部の境は明瞭である。脚部には現状で2孔の円形透孔が確認でき、その間隔から4方向の透孔に復元できる。

これらの遺物のうち、7は古墳時代前期、10・15は弥生時代後期後半の特徴を示すが、それ以外は弥

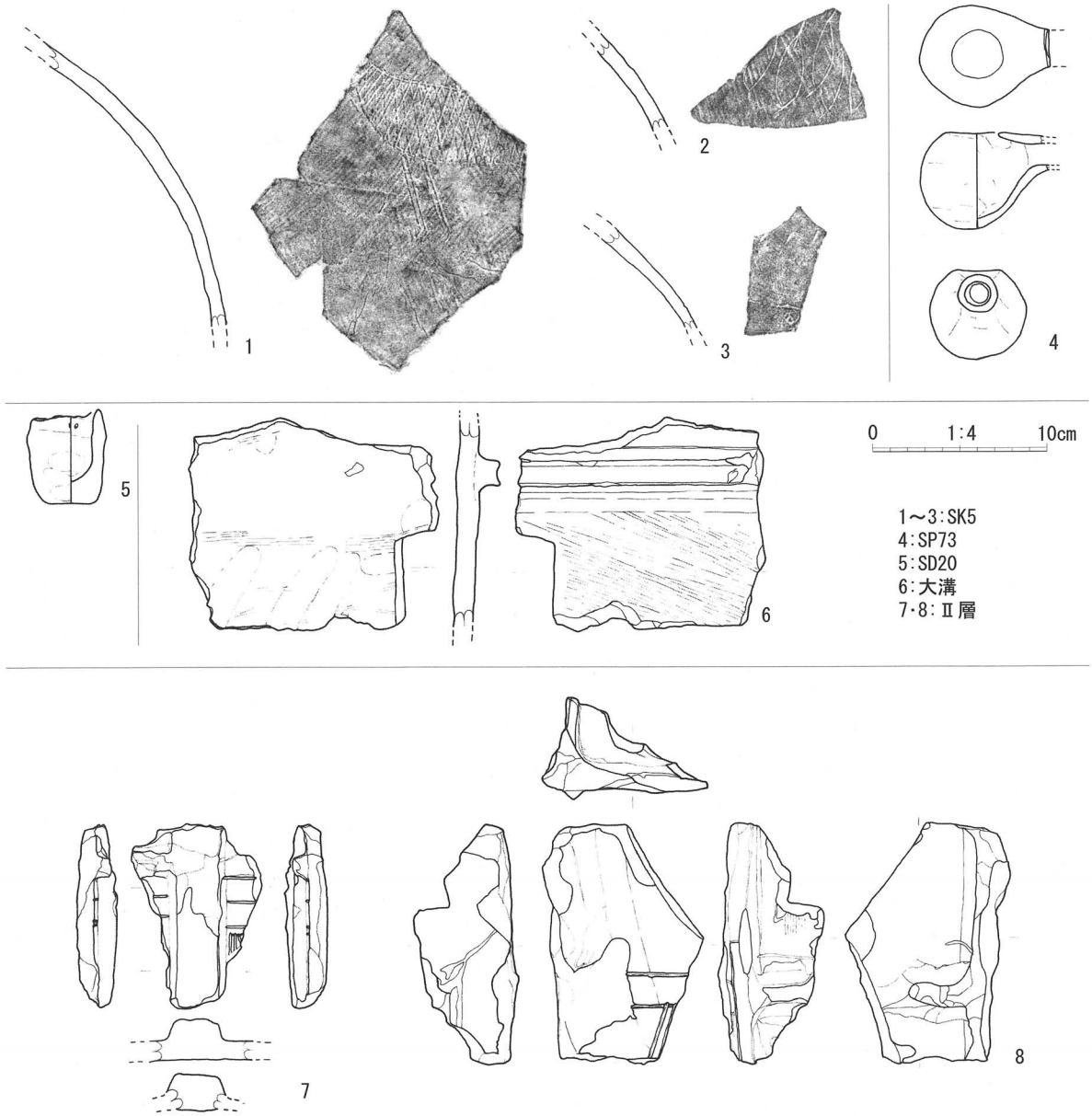


図9　Ⅲa層上面遺構出土土器実測図5（S=1/4）

生時代中期後半～末に属するものである。

図８-16は、SP63から出土した土師器坏である。底部は高台を伴わない平底で、体部はわずかに外湾する。口縁端部には面を持つ。内面のヨコナデは口縁部から見込みまでを１単位とし、内面器壁を１周したのち右上がりに跳ね上げて終わり、時計回り方向に施されたことが明らかである。口縁部に煤の付着が見られ、灯明具として使用された可能性がある。以上の特徴から、16は奈良時代末～平安時代初頭に属するものと考えられる。

また、今回の調査では、絵画土器やミニチュア土器など特殊遺物も一定量出土したほか、包含層や中世遺構に混入して埴輪片が出土した（図９）。

図９-１～３は、SK５出土の絵画土器である。いずれもヘラ描き沈線によって描かれる。１は左向きの四足動物を描いたもので、胴体の前半分と前肢が残る。胴体は三日月状の区画内を斜格子で埋め、前肢は各脚を２条の平行沈線で表現し、その先端に刺突によって蹄を表現する。鹿を描いたものと考えられる。２は凸レンズ状を呈する区画線の一方の端から沈線をのばす図案が５つ描かれている。船のオールを表現したものと思われる。３は１条の沈線の端が渦巻き状になって終わる図案である。建物屋根を表現したものかとも考えられるが、破片の範囲内では他の表現が確認できない。SK５からは、弥生時代中期末に属する土器片が出土している。

図９-４はSP73出土の瓢形土器である。球形の体部に円筒形を呈する中空の柄が付く器形で、柄は大半を欠損する。体部内の空間と柄の中の空間は一体になっている。手づくねで成形され、口縁部は丸く

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図9-1	弥生壺	5YR6/6 橙	密	良好	14.0×12.8	破片	SK5	外面縦位～ナナメハケ後線刻 内面縦位～ナナメハケ
図9-2	弥生壺	10YR6/3 にぶい黄橙	密	良好	10.0×6.6	破片	SK5	外面縦位～ナナメハケ後線刻 内面縦位～ナナメハケ
図9-3	弥生壺	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良好	7.6×3.2	破片	SK5	外面縦位～ナナメハケ後線刻 内面ナデ
図9-4	瓢形土器	10YR6/2 灰黄褐	密	やや良好	口径2.8 残存長7.5 高さ5.5	柄部除き完存	SP73	外面ナデ 内面ナデ・指頭圧
図9-5	ミニチュア土器	5YR7/4 にぶい橙	やや密	良好	口径4.0 底径2.6 器高5.5	完形	SD20	内外面ナデ・指頭圧 口縁端部刻目
図9-6	円筒埴輪	5YR6/6 橙	密	やや硬質	現存高12.0	破片	大溝	外面左上がりハケ、突帯付近ナデ 内面横位ハケ後右上がりナデ・指頭圧 方形スカシ
図9-7	家形埴輪	2.5YR6/6 橙	密	やや硬質	現存高10.2	破片	Ⅱ層	外面ナデ・線刻 内面ナデ
図9-8	盾形埴輪	5YR7/6 橙	密	やや硬質	現存高13.5	破片	Ⅱ層	前面縦位ナデ・線刻 背面ナデ・縦位ハケ

表５　Ⅲａ層上面遺構出土土器観察表４

仕上げられる。

図９－５はSD20出土のミニチュア土器である。手づくねで成形され、底部は非常に厚い。口縁部は徐々に厚さを減じて端部は丸く終わり、刻目を持つ。口縁部の対向位置に１孔ずつ穿孔する。なお、SD20からは弥生時代中期前半に属する土器片が出土した。

図９－６～８は埴輪片である。６は中世大溝埋土に混入して出土した円筒埴輪片である。方形スカシを有し、タガは断面M字状でやや高い。古墳時代前期に属する。７・８はⅡ層（遺物包含層）出土の形象埴輪片である。７は家形埴輪か。縦横に突帯を持ち、縦位の突帯が横位の突帯より幅広である。また、突帯間に横４条以上、縦３条以上の線刻を有する。８は盾形埴輪か。右上の斜辺が生きており、表面には横位２条、縦位１条の線刻がみられる。裏面には別部材との接合部分が突帯状に残る。

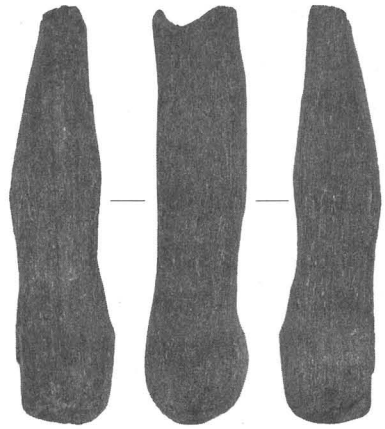


写真１　SK39上層出土棒状石製品

写真１はSK39上層から出土した棒状石製品である。不整球形の頭部から、断面正方形の軸部がのび、基部に向かって厚さを減じて断面長方形になる。基部は折損しているが、残存部の基部側端には穿孔の跡が残る。現存長8.7㎝、頭部径約1.9㎝。石材は未鑑定であるが、片岩系の石材を用いる。

３．弥生時代前期の遺構と遺物

Ⅲb層上面で検出した遺構群である。Ⅲa層上面と同様、多くの遺構が複雑に切り合って検出されたが、遺構密度はⅢa層上面より低い。弥生時代前期中頃～後半の遺構が分布する。

遺構（図10）

溝SD21（図18－３）　調査区東端部で検出した溝である。走向は北東－南西方向で、幅1.5m前後、検出面からの深さ0.3m前後を測り、断面逆台形状を呈する。遺物は弥生時代前期後半を中心とし、当該期の環濠の一部と考えられる。埋土は暗灰黄～黄灰色系の粘土で、下方では粗い砂粒を含む。

溝SD32（図18－４）　調査区東端部で検出した溝である。走向は北東－南西方向で、幅2.0m前後、検出面からの深さ0.8m前後を測り、断面逆台形状を呈する。埋土から弥生時代前期後半を中心とする土器が出土しており、当該期の環濠の一部と考えられる。SD21にほぼ平行するものであり、SD21と合わせて環濠の一部をなすと思われる。埋土は上層が褐灰～淡黄色系の微砂～細砂、下層は灰黄～灰褐色系の粘質土である。

土坑SK23　調査区中央やや東寄りで検出した土坑である。平面不整円形、断面隅丸逆台形を呈し、長軸0.95m、短軸0.9m以上、検出面からの深さ0.23m前後を測る。北端を中世大溝に切られる。弥生時代前期後半の大型壺が、倒立した状態で検出された（図11）ほか、同時期の土器類が数点出土している。

土坑SK42　調査区東端部で検出した土坑である。平面不整円形、断面逆台形を呈するとみられるが、大半が調査区外にあり、全容を検出し得なかった。長軸2.3m以上、短軸0.6m以上、検出面からの深さ1.4m前後を測る。SD32に切られており、環濠成立以前の土坑である。弥生時代前期中頃～後半を中心とする遺物が出土している。埋土は淡黄～黄灰色系の微砂である。

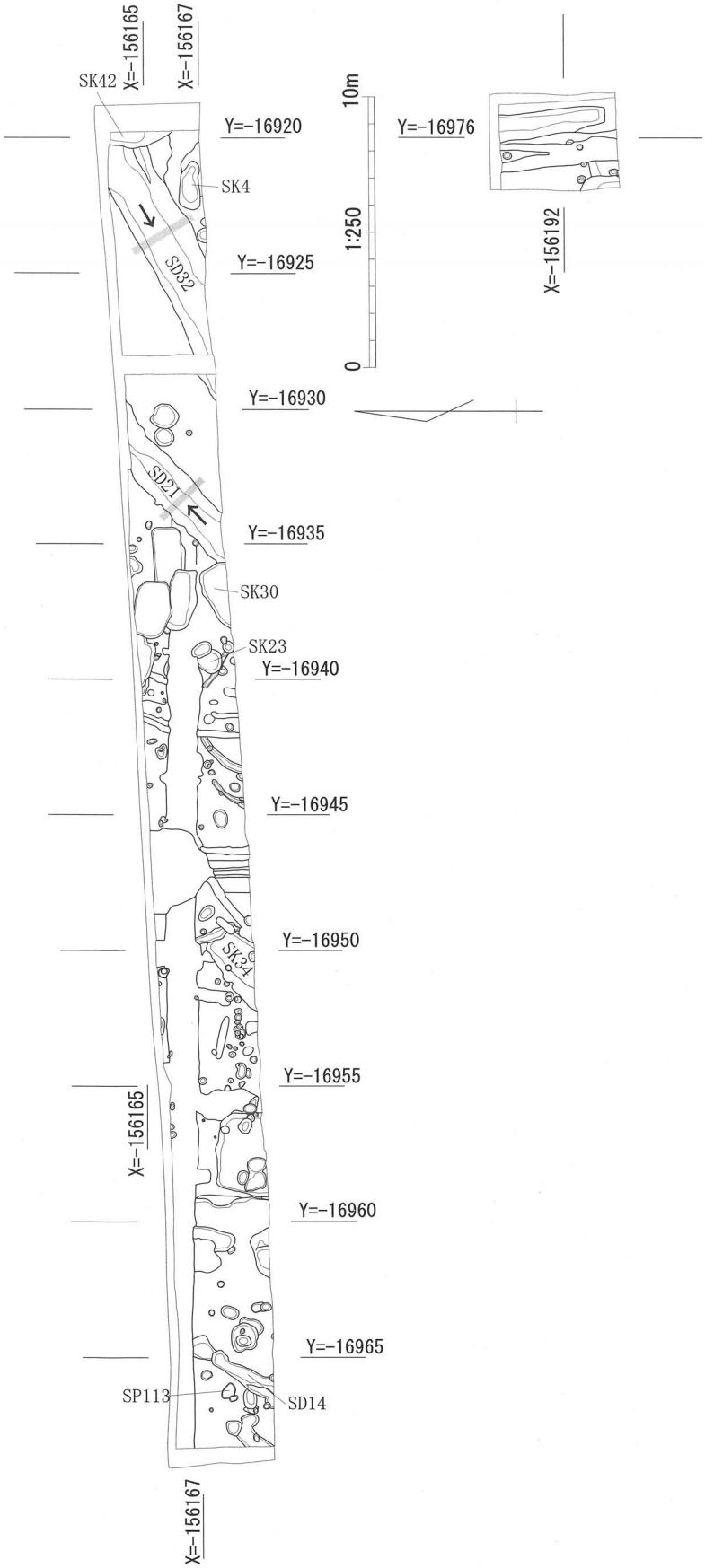


図10　Ⅲｂ層上面遺構平面図（S＝1/250）

出土遺物（図12～17）

図12-１～３はSD21上層出土土器である。１は広口壺の口頸部である。口縁部は短く外反し、口縁端部は丸く終わる。口頸部境を段で区画し、口縁部付近に１孔の紐孔を穿つ。口頸部界付近の内面に接合痕がみられる。２は広口壺の頸部である。口頸部界および頸胴部界を削出突帯で区画し、前者に２条以上、後者に３条のヘラ描き沈線を施す。頸胴部界付近の内面に接合痕がみられる。３は鉢である。胴部は外湾して立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反して口縁部端は丸く終わる。胴部下端の外面にはヘラナデ工具の圧痕がみられる。

図12-４・５はSD21上～中層出土土器である。４は広口壺の口頸部である。口縁部は高く大きく開き、端部は丸く終わる。口頸部界を３条以上のヘラ描き沈線で区画し、口縁部付近に１孔の紐孔を穿つ。穿孔は内面側（上側）から行われる。５は甕の口縁部～胴部である。倒鐘形の胴部から、口縁部が短く外反し、端部は丸く終わる。口縁端部に刻目を施すほか、口縁部と胴部の境を１条のヘラ描き沈線で区画する。

図12-６・７はSD21下層出土土器である。６は小形壺である。扁球形の胴部から頸部を経て、口縁部は大きく開き、口縁端部は丸く終わる。器高の割に底部径が非常に大きく、アンバランスな器形である。口頸部界を２条のヘラ描き沈線、頸胴部界を１条のヘラ描き沈線で区画する。７は甕の底部である。胴部は直線的に立ち上がる。

図 12-8・9 は SD21 最下層出土の広口壺の口頸部である。8 は口縁部がやや大きく開き、端部は丸く終わる。口頸部界を 2 条のヘラ描き沈線で区画する。9 は口縁部がやや大きく開き、端部は丸く終わる。口頸部界を 2 条のヘラ描き沈線で区画する。口縁部付近に 1 対の紐孔を穿つ。内外面に煤の付着がみられる。

図 12-10 は SD14 出土の壺蓋である。笠形を呈するもので、中央にツマミを持ち、裾部端は丸く終わる。ツマミの基部付近に紐孔を穿つ。穿孔は外面側（上側）から行われている。

写真 2 は SD14 出土の牙玉である。イノシシの牙を加工した製品で、尖った先端から基部へ向かうにつれて幅を増す。ごく粗い工具による研ぎ痕がみられる。基部は折損するが、現存する部分の基部端に裏側から穿孔される。現存最大長 9.3cm、最大幅 1.2 cm、最大厚 0.3 cmを測る。

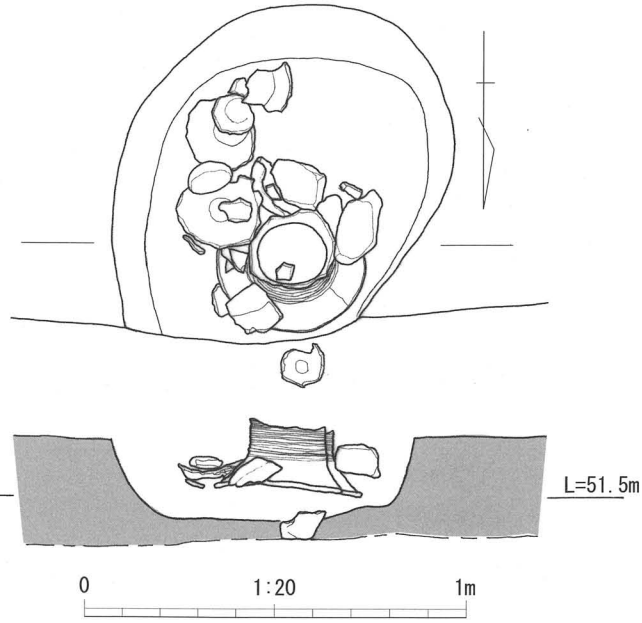


図 11　SK23 遺物出土状況図（S＝1/20）

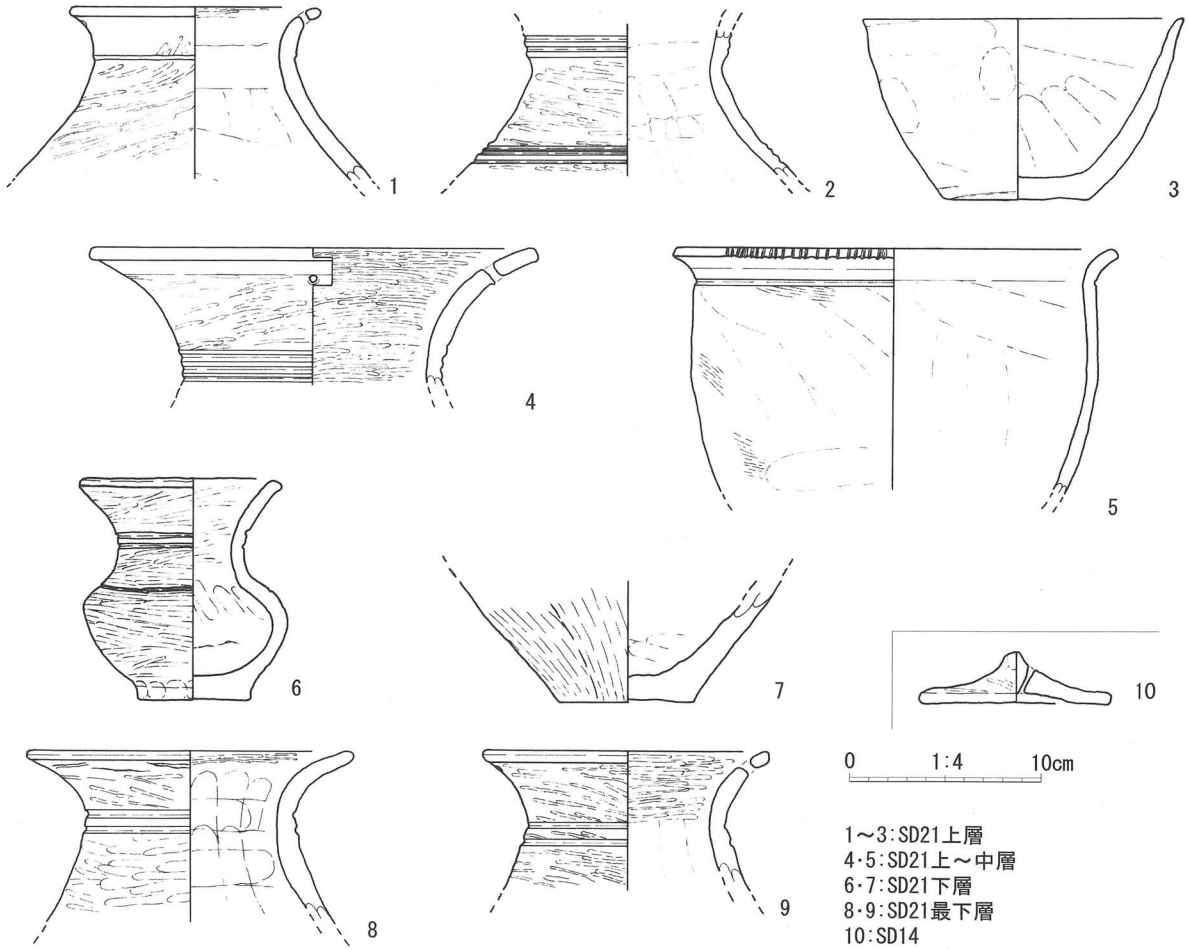


図 12　Ⅲｂ層上面遺構出土土器実測図 1（S＝1/4）

図13はSD32出土の壺類である。

図13-16はSD32上層出土の壺蓋である。笠形を呈し、口縁端部は丸く終わる。中央付近を挟んで断面三角形のツマミ2個をもち、その間に穿孔する。

図13-1～15はSD32下層出土の壺類である。1は広口壺の口縁部～胴部である。扁球形の胴部から内湾する頸部を経て、口縁部が高く広く開き、端部は丸く終わる。口頸部界を3条のヘラ描き沈線、頸胴部界を4条のヘラ描き沈線でそれぞれ区画する。口縁部付近に紐孔1孔を、内面側（上側）から穿つ。2は広口壺の頸部～胴部である。扁球形の胴部から、なだらかに頸部へと移行する。口頸部界を4条のヘラ描き沈線、頸胴部界を5条のヘラ描き沈線でそれぞれ区画し、胴部最大径直上にも5条以上のヘラ描き沈線を施す。外面

写真2　SD14出土牙玉

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図12-1	弥生壺	2.5YR6/3にぶい橙	密	良好	口径(12.7) 現存高9.1	1/10	SD21上層	外面右上がりミガキ後一部ヨコナデ 内面ナデ後一部ヨコナデ 紐孔あり
図12-2	弥生壺	2.5YR7/6橙	やや密	良好	頸部上端径9.8 現存高7.9	1/2	SD21上層	外面横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面ナデ
図12-3	弥生鉢	5YR8/3淡橙	やや密	良好	口径(16.8) 底径7.4 器高9.6	1/10 底部完存	SD21上層	外面ナデ、ヘラナデ、指頭圧 内面左上がりナデ
図12-4	弥生壺	2.5YR7/4淡赤橙	密	良好	口径(23.2) 現存高7.3	1/4	SD21上～中層	外面右上がりミガキ後ヘラ描き沈線 内面横位ミガキ 紐孔あり
図12-5	弥生甕	7.5YR8/2灰白	粗	良好	口径(22.8) 現存高14.0	1/6	SD21上～中層	外面左上がりハケ後ナデ、ヘラ描き沈線 内面ナデ 口縁端部刻目
図12-6	弥生壺	10YR8/3浅黄橙	やや密	良好	口径10.5 底径6.0 器高11.6	完形	SD21下層	外面横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面右上がりミガキ、指頭圧、ナデ
図12-7	弥生壺	2.5YR7/4淡赤橙	やや密	やや軟	底径7.1 現存高6.4	底部ほぼ完存	SD21下層	外面ナデ後左上がりハケ 内面ナデ
図12-8	弥生壺	2.5YR7/3淡赤橙	密	良好	口径(17.1) 現存高9.0	1/10	SD21最下層	外面横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面縦位ナデ後横位ナデ・横位ミガキ
図12-9	弥生壺	2.5YR7/4淡赤橙	密	良好	口径(14.6) 現存高7.3	1/4	SD21最下層	外面横位ミガキ後ヘラ描き沈線 内面縦位ナデ後横位ミガキ 紐孔あり
図12-10	弥生壺蓋	5YR6/8橙	やや密	良好	裾径9.8 器高2.8	ほぼ完形	SD14	外面左上がりミガキ・指頭圧 内面指頭圧 紐孔あり

表6　Ⅲb層上面遺構出土土器観察表1

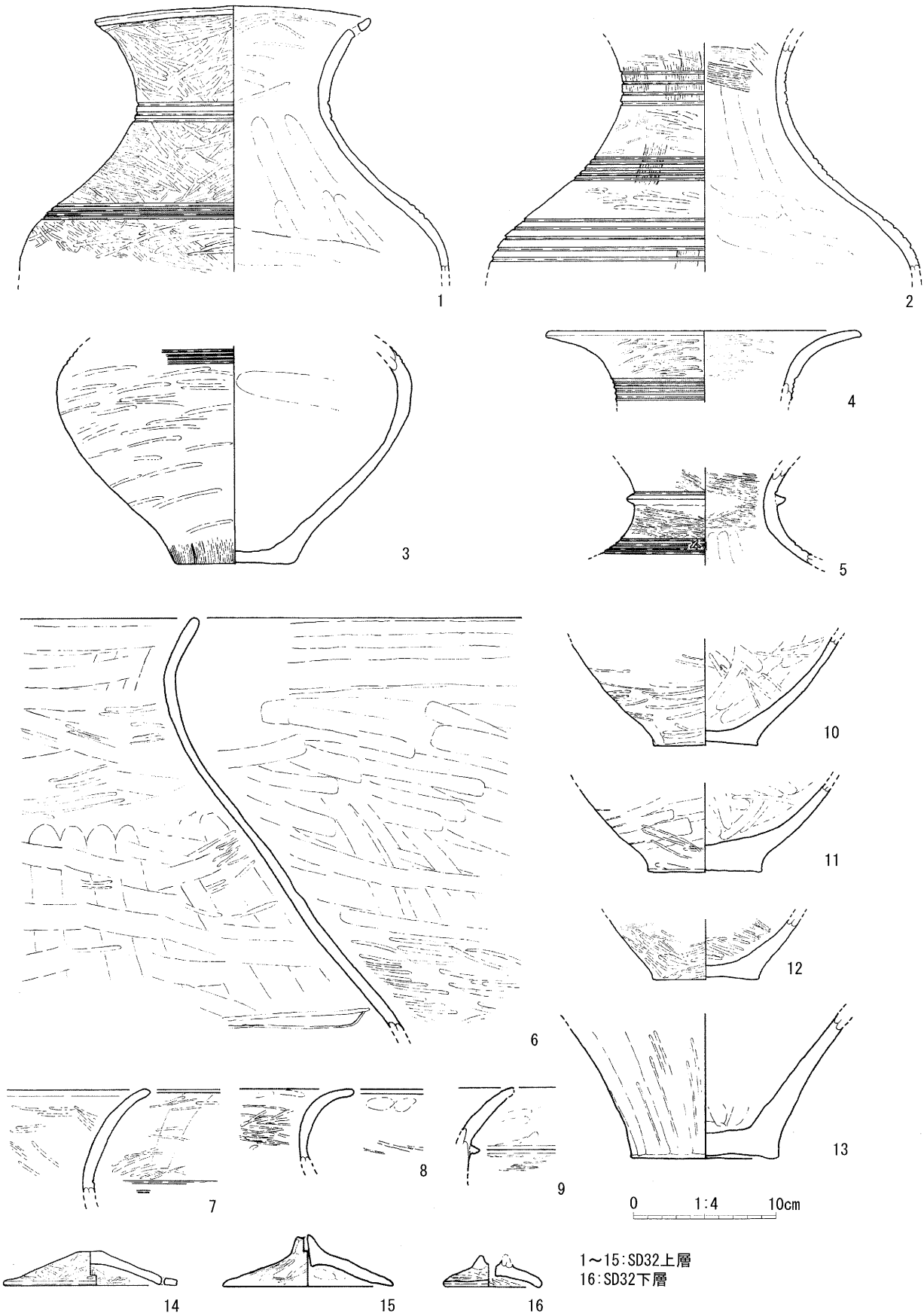


図13　Ⅲｂ層上面遺構出土土器実測図２（S＝1/4）

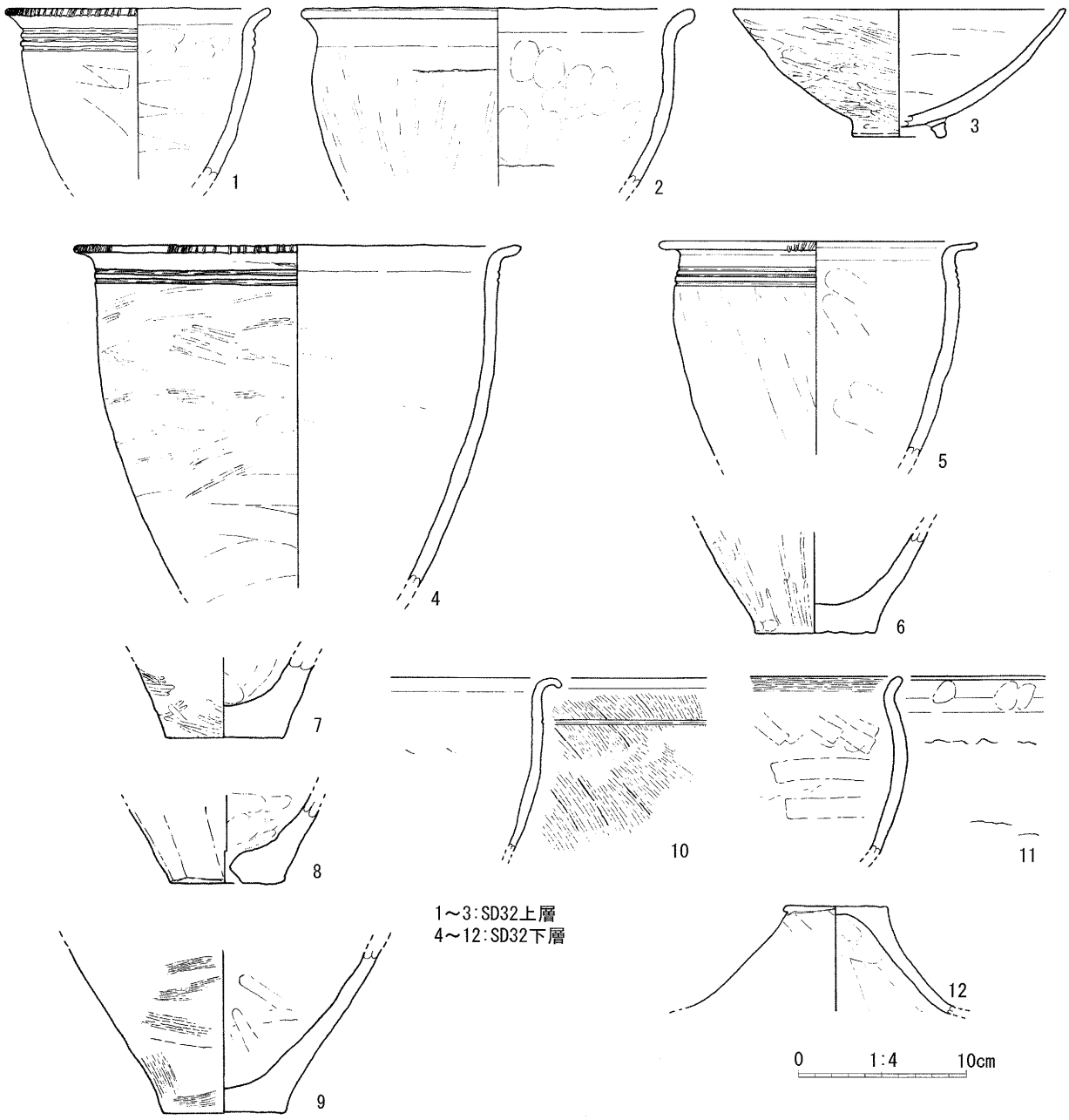


図 14　Ⅲｂ層上面遺構出土土器実測図３（S＝1/4）

に黒斑がみられる。３は壺の胴部～底部である。胴部は扁球形を呈し、胴部最大径よりやや上に４条以上のヘラ描き沈線を施す。４は広口壺の口縁部である。口縁部は大きく開き、端部は丸く終わる。口頸部界を４条以上のヘラ描き沈線で区画する。５は広口壺の頸部である。口頸部界を断面三角形の貼付突帯１条で区画し、その上端にヘラ描き沈線１条を施す。また、頸胴部界を４条のヘラ描き沈線で区画し、その上から１箇所、× 状の文様を刻む。貼付突帯下端には、突帯貼付けに伴う接合痕がみられる。６は大型壺の口頸部である。口縁部から頸部へはなだらかに移行し、段やヘラ描き沈線等は認められない。口縁部外面に粘土を貼り足した痕跡が認められるほか、外面に籾圧痕がみられる。７～９は広口壺の口縁部片である。７は口縁部が高く大きく開き、端部は丸く終わる。口頸部界を２条以上のヘラ描き沈線で区画する。８は口縁部が短く急に外反し、端部は丸く終わる。文様や段等は確認できない。内面に混和材の圧痕がみられる。

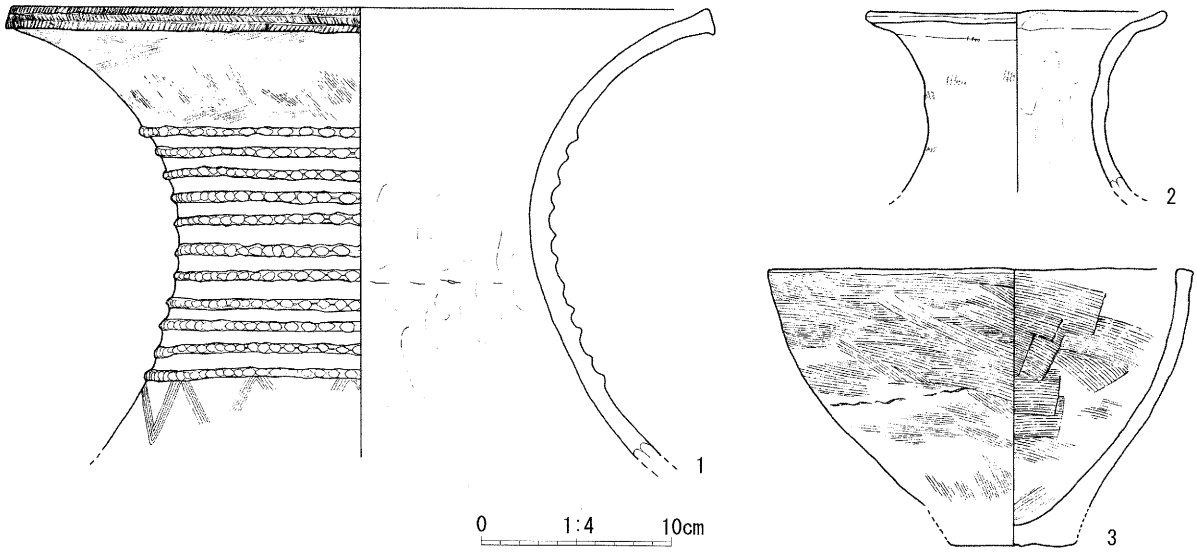


図 15　Ⅲｂ層上面遺構出土土器実測図４（S＝1/4）

９は口縁部が短く外反し、口頸部界を断面三角形の貼付突帯１条で区画する。10 ～ 13 は壺の胴部下半～底部である。10 ～ 12 は胴部が外湾して立ち上がり、底部は突出する。10 は内外面に混和材の圧痕がみられる。11 は底部の突出が著しく、厚みも大きい。底部外面に籾や稲藁の圧痕がみられるほか、外面に黒斑がある。13 は胴部がほぼ直線状に立ち上がるもので、内面においても底胴部界は明瞭に屈曲する。外面に黒斑、内面に混和材の圧痕がみられる。14･15 は壺蓋である。いずれも笠形を呈し、口縁部端は丸く終わる。14 はツマミを持たず、口縁部付近に焼成後穿孔による紐孔１孔を持つ。15 は断面台形のツマミを持ち、ツマミの中央に紐孔１孔を上から下へ穿つ。内外面に混和材の圧痕がみられる。

図 14-１～３は SD32 上層出土の甕･鉢類である。１は甕の口縁部～胴部である。倒鐘形の胴部から、口縁部が短く外反し、端部は丸く終わる。口縁端部に刻目文を施し、口縁部と胴部の境は３条のヘラ描き沈線で区画する。２は鉢の口縁部～胴部である。椀形の胴部から、口縁部が短く外反し、端部は丸く終わる。胴部の内外面に接合痕がみられる。３は鉢である。口縁部径に対して器高が低く、体部はやや外湾し、口縁部は直口状を呈して丸く終わる。底部付近には断面台形の高台が付き、高台には対向位置に１孔ずつの焼成後穿孔がみられる。また、高台内を含め内外面全てに赤彩される。

図 14-４～ 14 は SD32 下層出土の甕･鉢類である。４・５は甕の口縁部～胴部である。いずれも倒鐘形の胴部から口縁部が短く外反し、端部は丸く終わるが、５は胴部にやや張りがある。口縁端部には刻目を施し、口縁部と胴部の境は４では２条、５では３条のヘラ描き沈線で区画する。５の外面には煤が付着する。６・７・９は甕の、８は甑の、それぞれ底部である。６・９はやや外湾気味に、７・８は直線的に、胴部が立ち上がる。６は内面に炭化物が付着する。８は底部中央に焼成後穿孔を受ける。10･11 は外反口縁鉢の口縁部～胴部片である。10 は口縁部の屈曲が著しく、下向きになって終わる。口縁部と胴部の境を１条のヘラ描き沈線で区画する。外面に煤の付着がみられる。11 は張りのある胴部から口縁部が短く屈曲し、口縁端部は丸く終わるが部分的に面取りする。内外面に接合痕がみられるほか、外面には黒斑がみられる。12 は甕蓋である。平坦な天井部から、直線的な体部が下降し、外反して口縁部に至る。

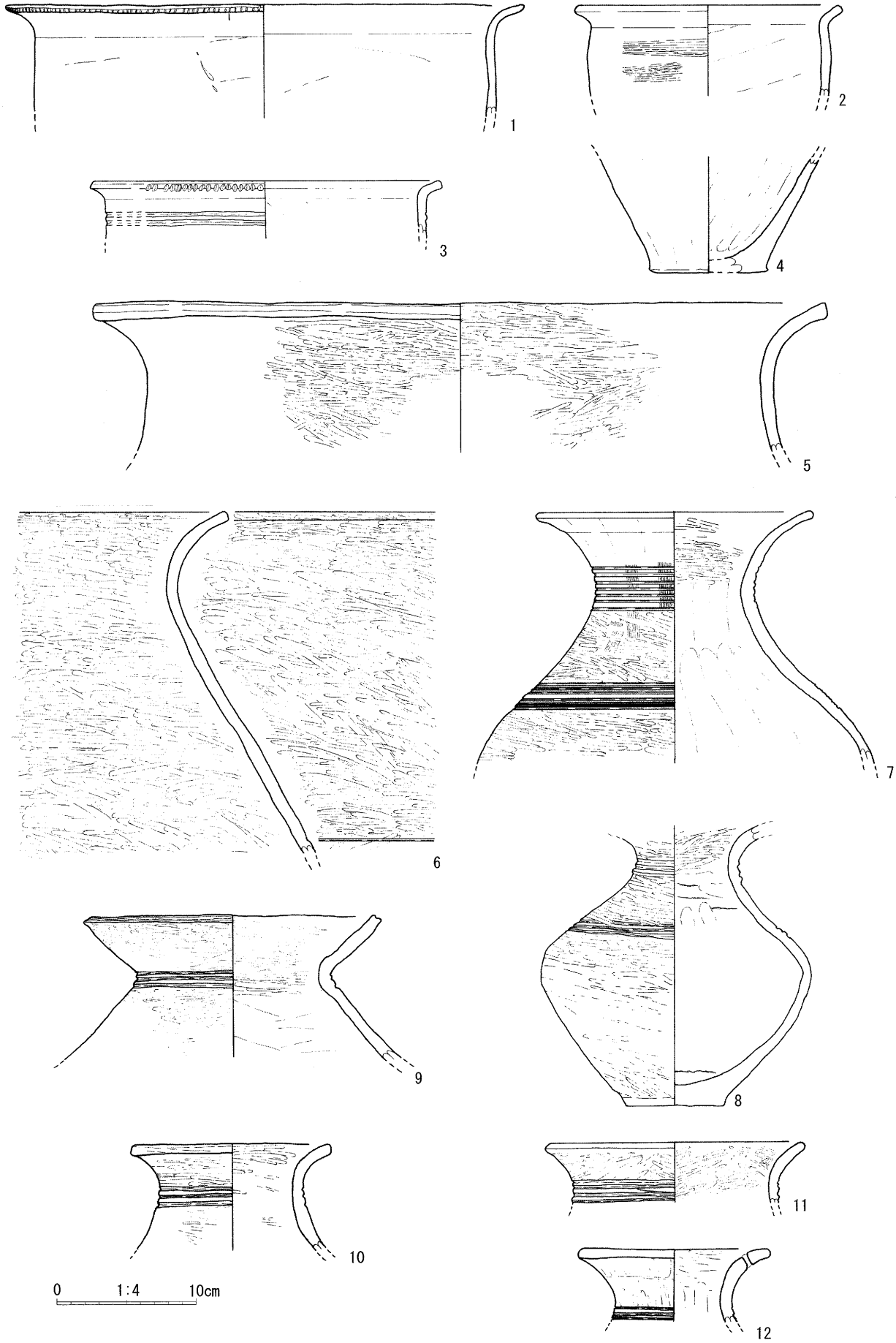


図16　Ⅲｂ層上面遺構出土土器実測図５（S=1/4）

図 15-１～３は SK23 出土土器である。１・２は壺口縁部～頸部である。１は胴部から頸部、頸部から口縁部へなだらかに移行し、口縁端部は両側に肥厚して面をなすが、下方への肥厚が顕著である。口縁部端面に綾杉状文様を 3 段に、頸部に断面三角形の貼付突帯 11 条を配し、突帯上は竹管状工具により刻目を施す。さらに、貼付突帯の下方に接して、平行する 5 条のヘラ描き沈線により連続三角形の文様を施す。外面は部分的に赤色顔料の付着が見られるほか、頸部内面に接合痕が、口縁部外面に籾状圧痕が見られる。２は頸部から口頸部へ緩やかに移行し、口縁部は丸く終わる。器面は凹凸がやや激しい。３は直口鉢である。胴部は外湾して立ち上がり、最大径の所で口縁部となり、口縁部端は平らな面をなす。胴部半ばの外面に接合痕がみられる。

図 16-１～ 12 は SK42 出土土器である。１～３は甕口縁部～胴部である。１は口縁部が短く外反し、端部は丸く終わり、刻目を施す。２は口縁部が明瞭な屈曲をもって短く外反し、端部はやや平らな面を持つ。外面に煤の付着がみられる。３は口縁部が明瞭な屈曲をもって短く外反し、口縁部はやや平らな面を持つ。口縁端部に刻目を施し、口縁部と胴部の境はヘラ描き沈線 2 条で区画する。外面および口縁部内面に煤の付着がみられる。４は甕底部である。底部から胴部が直線的に立ち上がる。５・６は大型壺の口頸部である。５は頸部から口縁部が緩やかに外反し、口縁部端は平らな面をなす。残存部位の範囲では、段やヘラ描き沈線等は見られない。内外面に黒斑がみられる。６は頸部から口縁部が緩やかに外反し、口縁端部はやや平らな面をなす。頸胴部界は 1 条以上のヘラ描き沈線で区画する。内外面に黒斑がみられる。７は広口壺の口縁部～胴部である。扁球形の胴部から頸部を経て、口縁部は高く大きく開き、口縁部端は丸く終わる。口頸部界は 7 条、頸胴部界は 3 条と少し間をおいて 4 条、計 7 条のヘラ描き沈線で、それぞれ区画する。外面に黒斑がみられる。８は壺の頸部～底部である。扁球形の胴部から短い頸部を経て、口縁部が外反する。口頸部界は削出突帯で区画し、突帯上に 2 条のヘラ描き沈線を施す。頸胴部界は 3 条のヘラ描き沈線で区画するが、最終調整のミガキが部分的に沈線を消す。底胴部界および頸胴部界付近の内面に接合痕がみられる。９・10 は広口壺の口縁部～頸部である。９は口縁部と頸部の境が「く」の字に屈曲する特異な器形を示し、口縁部端は面を持ち、口縁部端面にヘラ描き沈線 1 条を施すほか、口頸部界は 3 条のヘラ描き沈線で区画する。内面に煤の付着がみられる。10 は口縁部が短く外反し、口縁部端は平らな面を持つ。口頸部界は 3 条のヘラ描き沈線で区画する。11・12 は広口壺の口縁部である。11 は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。口頸部界は 4 条のヘラ描き沈線で区画する。12 は口縁部の広がりがやや大きく、口縁部端は丸く終わる。口縁部付近に 1 孔を穿ち、口頸部界は削出突帯で区画する。突帯上にはヘラ描き沈線 2 条を施す。

図 17-1 は SK4 出土の甕である。倒鐘形の胴部から口縁部が短く外反し、口縁部端は両側に肥厚して面をなす。口縁部端面には刻目を施す。底部は中央部が段をもって薄くなる。

図 17-２は SK30 出土の鉢である。椀形の胴部から口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く終わる。底部は、胴部の下端に粘土板を充填して形成される。

図 17-３は SK34 出土の壺胴部～底部である。小ぶりな底部から、胴部が丸みをもって立ち上がる。図 17-４・５は SP113 出土土器である。４は壺底部である。小ぶりでやや突出する底部から、胴部がわずかに外湾して立ち上がる。５は甕口縁部片である。口縁部は短く外反し、口縁部端は丸く終わる。口頸部界をヘラ描き沈線 1 条で区画する。内外面に混和材の圧痕がみられる。

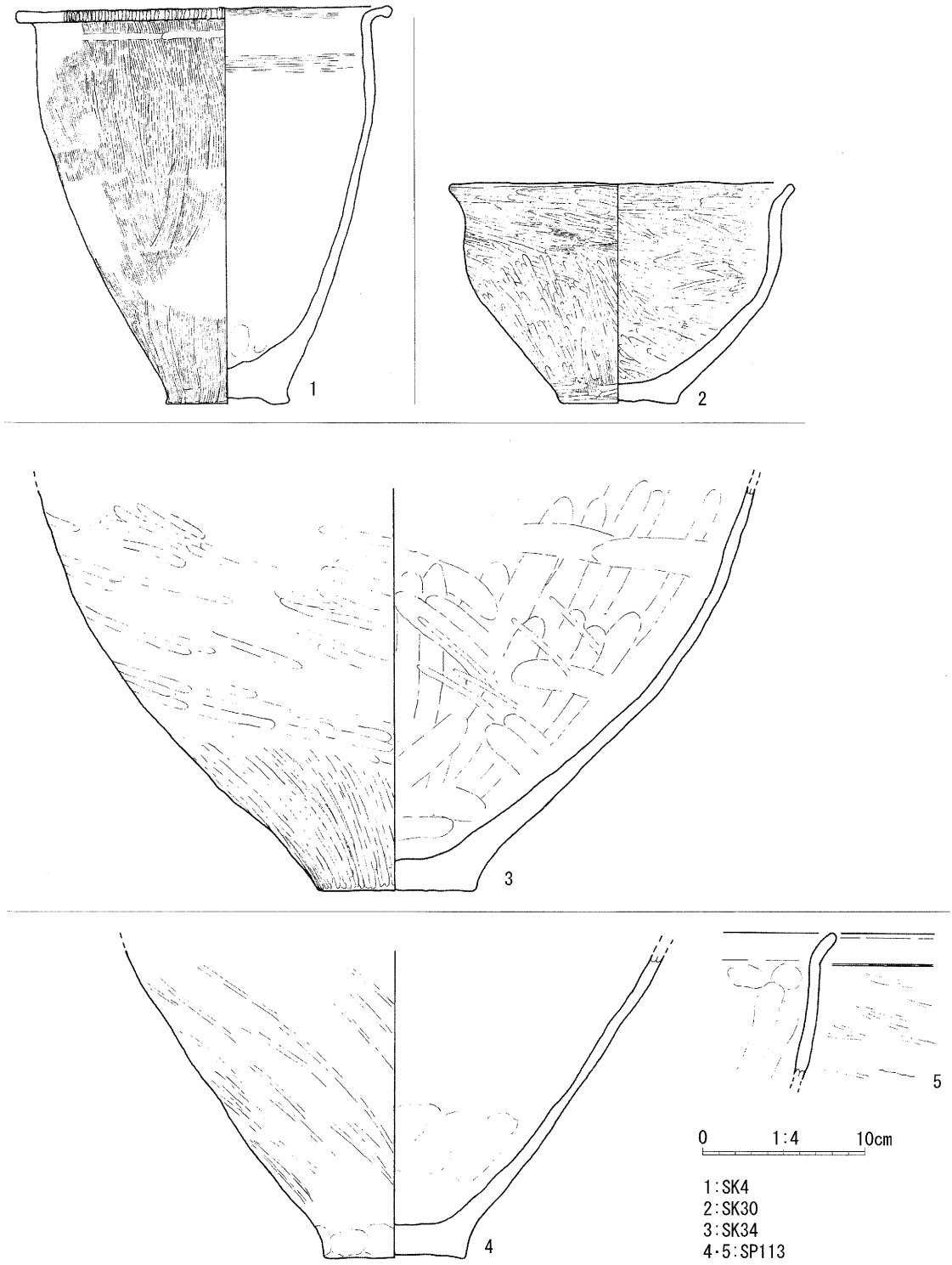


図 17　Ⅲｂ層上面遺構出土土器実測図６（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図13-1	弥生壺	5YR7/4 にぶい橙	精良	良好	口径(19.2) 現存高18.8	3/10	SD32 下層	外面ミガキ後ヘラ描き沈線 内面ナデ、ミガキ 紐孔あり
図13-2	弥生壺	5YR8/3 淡橙	密	良好	頸部上端径11.8 現存高16.1	頸部 7/10	SD32 下層	外面縦位ナデ後横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面縦位ナデ後横位ナデ、左上がりハケ
図13-3	弥生壺	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	底径8.1 胴部最大25.0	底部 7/10	SD32 下層	外面縦位ナデ後横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面横位ナデ
図13-4	弥生壺	2.5YR5/2 灰赤	精良	良好	口径(21.8) 現存高5.0	1/6	SD32 下層	外面横位ミガキ後ヘラ描き沈線 内面横位ミガキ
図13-5	弥生壺	2.5YR4/3 にぶい橙	粗	良好	頸部上端径(10.0) 現存高6.9	頸部 1/4	SD32 下層	外面横位ミガキ後ヘラ描き沈線 内面縦位ナデ後横位ミガキ 貼付突帯あり
図13-6	弥生壺	5YR8/3 淡橙	やや密	良好	現存高29.0	破片	SD32 下層	外面板ナデ、横位ミガキ 内面縦ナデ後横位ナデ・横位ミガキ
図13-7	弥生壺	5YR7/4 にぶい橙	精良	良好	現存高7.2	破片	SD32 下層	外面縦位板ナデ後横位ミガキ・ヘラ描き沈線 内面ミガキ
図13-8	弥生壺	2.5YR6/6 橙	やや密	良好	現存高5.0	破片	SD32 下層	外面ナデ後左上がりミガキ 内面横位ミガキ
図13-9	弥生壺	2.5YR7/3 淡赤橙	精良	良好	現存高5.8	破片	SD32 下層	外面横位ナデ後横位ミガキ 内面ハケ 貼付突帯
図13-10	弥生壺	5YR8/4 淡橙	粗	良好	底径7.4 現存高7.6	底部 3/5	SD32 下層	外面横位ミガキ 内面ナデ後左上がりミガキ
図13-11	弥生壺	5YR8/4 淡橙	やや粗	良好	底径8.1 現存高6.3	底部 3/5	SD32 下層	外面横位板ナデ後左上がりミガキ 内面縦位ナデ後横位ミガキ
図13-12	弥生壺	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	底径7.4 現存高4.2	底部 4/5	SD32 下層	外面ミガキ 内面左上がりミガキ
図13-13	弥生壺	2.5YR7/3 淡赤橙	やや密	良好	底径10.2 現存高10.2	底部 完存	SD32 下層	外面縦位板ナデ後縦位ミガキ 内面ナデ
図13-14	弥生壺蓋	5YR8/3 淡橙	密	良好	天井部径1.6 裾部径(12.0)	3/10	SD32 下層	外面縦位ミガキ 内面左上がりミガキ 紐孔あり
図13-15	弥生壺蓋	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	ツマミ径1.3 裾部径12.0	1/2	SD32 下層	外面右上がりミガキ 内面ナデ、指頭圧 紐孔あり
図13-16	弥生壺蓋	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良好	裾部径(6.6) 現存高2.3	3/10	SD32 上層	外面横位ミガキ 内面左上がりミガキ 紐孔あり

表7　Ⅲb層上面遺構出土土器観察表2

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図14-1	弥生甕	2.5YR6/3 にぶい橙	やや密	良好	口径(15.6) 現存高10.4	1/5	SD32 上層	外面ハケ後ナデ・ヘラ描き沈線 内面横位ナデ、横位ハケ 口縁端部に刻目
図14-2	弥生鉢	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	口径23.0 現存高10.9	7/10	SD32 上層	外面縦位板ナデ 内面指頭圧
図14-3	弥生鉢	10YR7/4 にぶい黄橙	密	やや良好	口径19.9 器高7.7 高台径5.6	1/3	SD32 上層	外面横位ミガキ 内面横位ナデ 高台に穿孔、全面的に朱彩
図14-4	弥生甕	2.5YR5/3 にぶい赤褐	やや密	良好	口径26.5 現存高20.8	7/10	SD32 下層	外面横位ハケ後ヘラ描き沈線 内面横位ナデ 口縁端部に刻目
図14-5	弥生甕	2.5YR7/4 淡赤橙	精良	良好	口径18.6 現存高13.0	1/6	SD32 下層	外面左上がり板ナデ後ヘラ描き沈線 内面左上がりナデ
図14-6	弥生甕	5YR8/3 淡橙	やや粗	良好	底径7.2 現存高6.2	底部完存	SD32 下層	外面縦位ミガキ 内面調整不明
図14-7	弥生甕	5YR8/2 灰白	やや密	良好	底径7.0 現存高4.9	底部9/10	SD32 下層	外面左上がりミガキ 内面ナデ
図14-8	弥生甑	10R6/6 赤橙	やや密	良好	底径6.8 器高5.4	底部完存	SD32 下層	外面左上がり板ナデ 内面ナデ 底部穿孔
図14-9	弥生甕	2.5YR7/4 淡赤橙	やや密	良好	底径7.2 現存高10.0	底部完存	SD32 下層	外面ハケ 内面左上がりナデ
図14-10	弥生甕	2.5YR5/2 灰赤	やや粗	良好	現存高10.4	破片	SD32 下層	外面左上がりハケ後ヘラ描き沈線 内面ケズリ
図14-11	弥生甕	5YR7/4 にぶい橙	やや密	良好	現存高10.8	破片	SD32 下層	外面調整不明 内面横位板ナデ、横位ハケ
図14-12	弥生甕蓋	2.5YR7/4 淡赤橙	精良	良好	天井部径6.2 現存高6.6	天井部完存	SD32 下層	外面板ナデ 内面ナデ
図15-1	弥生壺	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良好	口径36.4 現存高23.9	口頸部完存	SK23	外面ハケ後貼付突帯、ヘラ描き沈線 内面ナデ、板ナデ 口縁端部に綾杉文
図15-2	弥生壺	5YR6/6 橙	やや密	良好	口径15.6 現存高9.6	1/2	SK23	外面縦位ハケ後ナデ 内面ナデ、指頭圧
図15-3	弥生鉢	5YR6/6 橙	密	良好	口径(20.8) 底径6.6 器高14.7	1/2	SK23	内外面横位ハケ

表８　Ⅲｂ層上面遺構出土土器観察表３

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	残存率(口縁)	出土地点	調整・施文
図16-1	弥生甕	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良好	口径(36.0) 現存高8.0	1/6	SK42	内外面横位ナデ 口縁端部刻目
図16-2	弥生甕	2.5YR6/6 橙	やや密	良好	口径(18.4) 現存高6.6	1/4	SK42	外面横位ハケ 内面右上がりナデ
図16-3	弥生甕	5YR5/1 褐灰	精良	良好	口径(24.4) 現存高4.2	1/10	SK42	外面横位ナデ後ヘラ描き沈線 内面左上がりナデ 口縁端部に刻目
図16-4	弥生甕	5YR5/3 にぶい赤褐	精良	やや軟	底径(8.4) 現存高8.4	1/3	SK42	外面縦位板ナデ 内面右上がりナデ
図16-5	弥生大型壺	10YR6/1 褐灰	密	やや良好	口径(52.4) 現存高10.7	1/8	SK42	内外面横位ミガキ
図16-6	弥生大型壺	5YR8/3 淡橙	密	良好	現存高24.6	破片	SK42	内外面横位ミガキ後ヘラ描き沈線
図16-7	弥生壺	2.5YR7/6 橙	やや密	良好	口径(19.4) 現存高18.2	1/2	SK42	外面縦位ハケ後横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面縦位ナデ後横位ミガキ
図16-8	弥生壺	2.5YR5/1 黄灰	密	良好	底径7.0 胴部最大19.3 現存高20.3	底～胴部完存	SK42	外面横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面ナデ、横位ミガキ
図16-9	弥生壺	10YR5/2 にぶい黄橙	密	やや良好	口径(20.4) 現存高10.6	1/3	SK42	外面横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面ナデ、横位ミガキ
図16-10	弥生壺	5YR5/2 灰褐	密	良好	口径(14.4) 現存高7.6	1/4	SK42	外面横位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面横位ミガキ
図16-11	弥生壺	7.5YR4/2 灰褐	精良	良好	口径(18.0) 現存高4.4	1/10	SK42	外面ミガキ、ヘラ描き沈線 内面ミガキ
図16-12	弥生壺	7.5YR5/2 灰褐	密	やや良好	口径13.4 現存高5.3	1/2	SK42	外面横位板ナデ後縦位ミガキ、ヘラ描き沈線 内面横位ミガキ、指頭圧 紐孔あり
図17-1	弥生甕	2.5YR7/4 淡赤橙	精良	良好	口径22.6 器高24.6	3/5	SK4	外面縦位ハケ後ヘラ描き沈線 内面横位ハケ、指頭圧 口縁端部に刻目
図17-2	弥生鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	密	やや良好	口径21.2 底径7.2 器高13.7	1/2	SK30	外面ハケ後ミガキ 内面横位ミガキ
図17-3	弥生壺	2.5YR6/6 橙	やや密	やや良好	底径9.6 現存高25.0	底部完存	SK34	外面縦位ミガキ後左上がりミガキ 内面ナデ後横位ミガキ
図17-4	弥生壺	5YR8/3 淡橙	やや密	良好	底径(8.4) 現存高19.0	1/2	SP113	外面左上がりミガキ 内面ナデ、指頭圧
図17-5	弥生甕	5YR8/3 淡橙	やや密	良好	現存高9.2	破片	SP113	外面左上がりミガキ 内面縦位ナデ、指頭圧

表９　Ⅲｂ層上面遺構出土土器観察表４

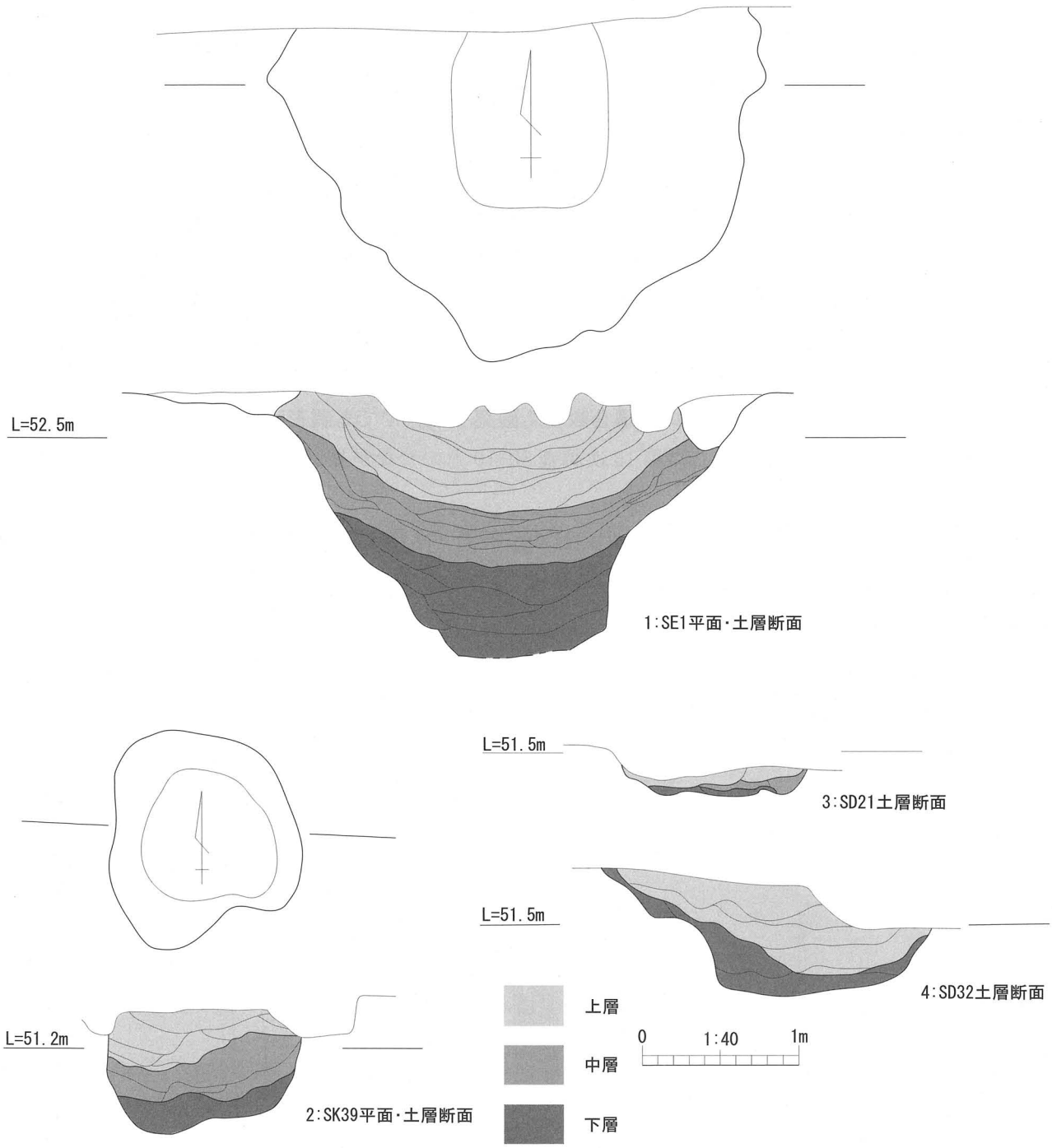


図 18　個別遺構平面・土層断面図（S＝1/40）

Ⅲ　まとめ

以下、第27次調査の成果を箇条書きしてまとめとする。

① Ⅱ層上面では、坪内を南北に2分する大溝と素掘溝群を検出した。これらの遺構からは、11世紀末～12世紀初頭の土器群が出土しており、調査地周辺における条里施行の実態を考える資料となった。

② Ⅲa層上面では、弥生時代中期から古代までの遺構を数多く検出した。大部分は弥生時代中期の範疇で捉えられるものであり、調査地周辺に当該期の遺構が濃密に存在することを確認した。一方で、弥生時代後期以降の遺構・遺物は極めて希少であり、調査地周辺が主な遺構分布域から外れていくことをも、あわせて確認している。その中で、中世大溝やⅡ層に混入した状況で出土した埴輪片の存在は、周辺に古墳が存在することを示唆するものである。とりわけ、中世大溝埋土から出土した円筒埴輪片からは前期古墳の存在が示唆され、周辺における今後の調査において注意を要する。

③ Ⅲb層上面では、弥生時代前期の遺構を数多く確認した。中でも調査区東端付近で出土した2条の大溝は、調査地の北東側で実施した第13次調査SD-10とのつながりが追えるものであり、前期後半段階での環濠と目される遺構である。

なお、今回の調査では、ここに示したもののほかに石器・木器・動物遺体などが出土しているが、時間的制約から整理・掲載に至らなかった。これらについては、改めて報告の機会をもちたい。

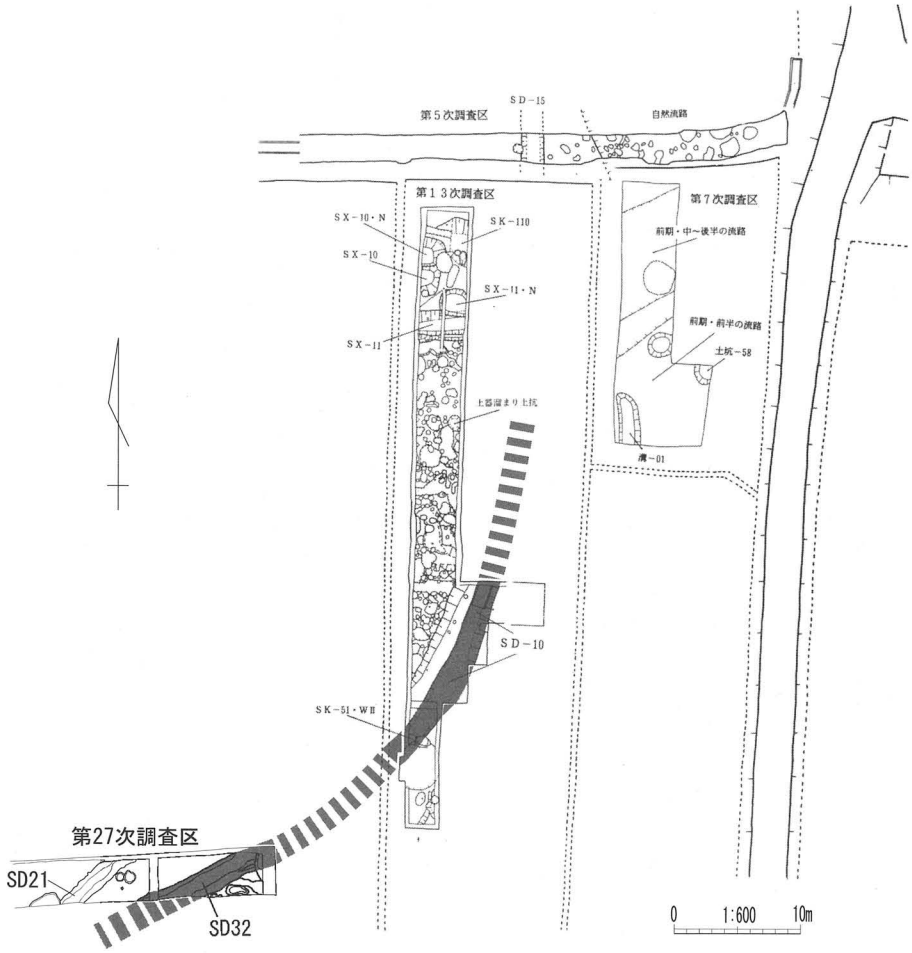


図19　第13次調査SD10と第27次調査SD32の位置関係想定図（S＝1/600）

※『天理市埋蔵文化財調査概報（平成５年度・国庫補助調査）』の図８に加筆

4．成願寺遺跡（第13次）－ 成願寺町

Ⅰ．はじめに

成願寺遺跡は、天理市南部の中山町・萱生町周辺の丘陵上から西側下方の成願寺町一帯にかけて所在する弥生～古墳時代にかけての広域な遺物散布が知られる遺跡である。遺跡の範囲内には、前期古墳群である大和（萱生）古墳群が重複、立地しており、古墳出現前後の時期にかかる遺跡の存続期間から有機的な関連が想起される遺跡でもある。

当遺跡においては、これまでに天理市教育委員会による小規模な発掘調査が10数箇所で実施されており、各所で縄文後・晩期や弥生中・後期の土器・石器類とともに庄内・布留式期の土器類が多く出土しているが当該期の明確な集落関連遺構は検出されていない。近年、奈良県立橿原考古学研究所により県道天理環状線道路の建設を契機とした発掘調査が相次いで実施され、マバカ古墳やノムギ古墳、ヒエ塚古墳など前期古墳墳丘裾付近における新知見が多く得られている（註）。

註）当遺跡における既往の調査については北口2009文献において調査次数を付して整理されている。

北口聡人 2009　「第２章 平成19年度 史跡整備事業に伴う調査・範囲確認調査の概要　成願寺遺跡（第15次）」『天理市文化財調査年報 平成19年度』天理市教育委員会

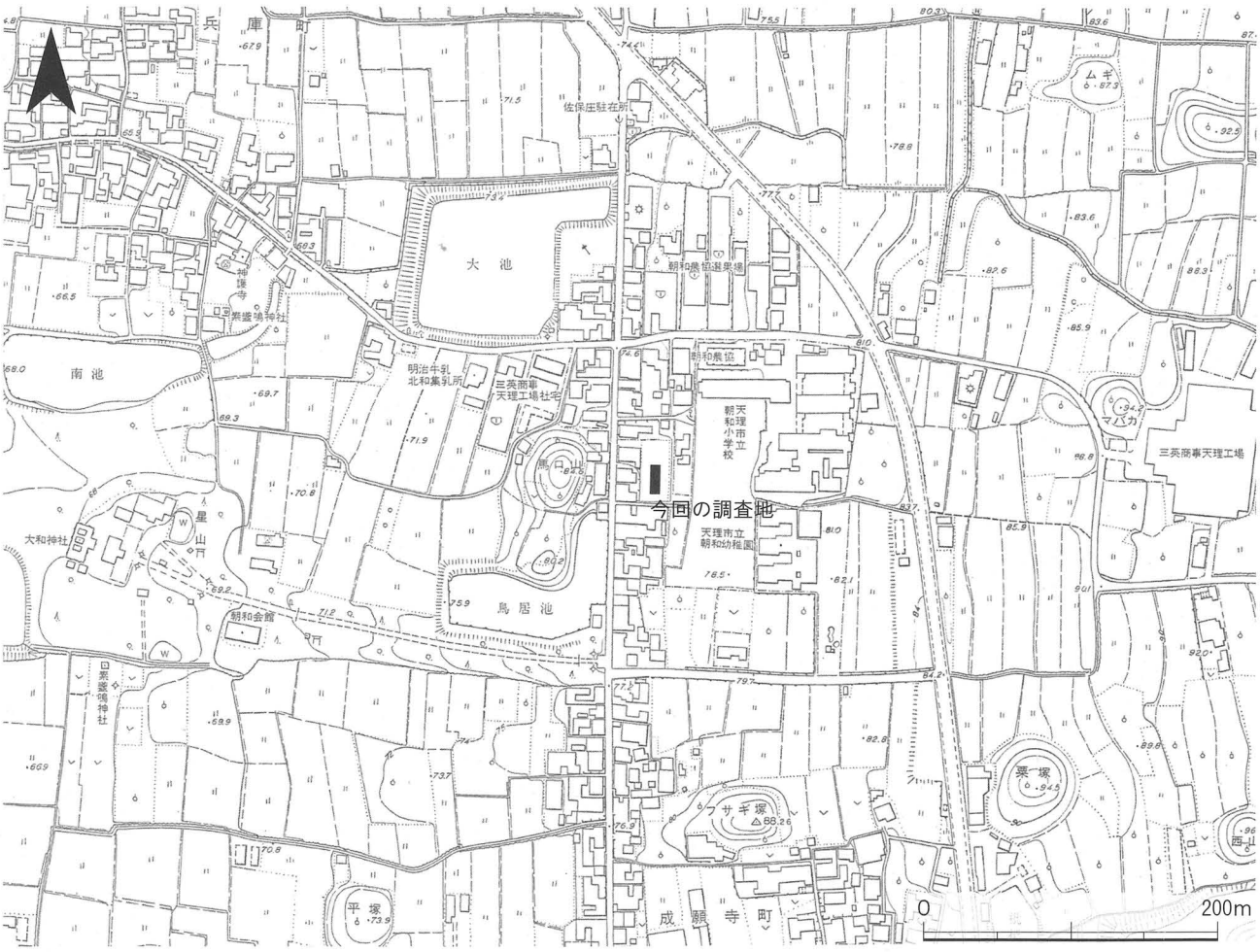


図１　調査地点位置図（S＝1/5000）

Ⅱ．調査の契機と経過

１．調査の契機

今回の調査は、天理市児童福祉課による学童保育所建設工事を契機として実施した事前の確認調査である。調査対象地付近には、北側に特殊器台片が採集されたことから初期の古墳と考えられている馬口山古墳や古代の官道である上ツ道(上街道)等が近在するため、敷地内における遺構、遺物包含層の有無確認を目的に調査を進行した。

２．調査の方法と経過

調査地の現状は畑地であり、一部畑の残る北側耕作地を除く敷地内に調査区を設定して発掘調査を実施した。調査では、東西幅６ｍ、南北長18ｍの調査区を設定し、現地表面下0.6ｍまでの耕作土および床土層までの上部堆積層を重機掘削により掘り下げ、以下を人力による掘削とベルトコンベア使用での排土を併用して地山面までを目標に調査を進めた。

なお、具体的には後述するが、調査の途中に調査区南半において旧来の原地形を反映する流路状の落ち込みを検出し、その覆土より縄文後期遺物の出土を見たが、この流路については完掘を断念したためすべて地山面までの掘削が完遂できたわけではなかった。

現地における調査は、平成18年２月６日より開始し、同年２月27日にすべての調査にかかる作業を終了した。総調査面積は108㎡であった。

Ⅲ．調査の概要

１．層序

調査区における基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層:耕作土

第Ⅱ層:旧耕作土

第Ⅲ層:遺物包含層（褐灰～暗褐色砂混じり粘質土）

第Ⅳ層:溝状落ち込み（自然河道NR01埋土）

第Ⅴ層:基盤層（地山）

現地表面下0.6ｍ前後までに耕作に伴う上部堆積層（第Ⅰ層および第Ⅱ層）があり、直下に遺物包含層（第Ⅲ層）が層厚0.1～0.2ｍの厚さで遺存する。この層の上面では南北方向の素掘り小溝群が検出され、下面の第Ⅳ・Ⅴ層を遺構検出面として後述の遺構群を検出するに至っている。

なお、調査区の北側のみ黄橙色粘土の基盤層（第Ⅴ層）が見られ地山面を確認できたが、南側では同一面で第Ⅳ層灰色粗砂・砂礫土堆積となり、上部に灰色粘土層が堆積する東西方向の凹凸（自然）が見られた。

２．検出遺構

調査では、調査区の北半の第Ⅳ・Ⅴ層上面において、東方から西向きに傾斜して堆積する砂礫土層の落ち込みSX01と東西大溝SD01を検出している。また、第Ⅴ層の基盤層が下降する調査区南半においては第Ⅲ層（遺物包含層）と第Ⅳ層の間に介在する灰色微砂・シルトを埋土とする自然河道NR01も調査区東西両測縁の深掘りトレンチにより確認している。

図２　調査区平面・土層図（S＝1/100）

落ち込みSX01

調査区中央東側から北西方向に傾斜し、後述の溝SD01に流れ込むように連なる落ち込みである。調査区北西隅に向かって収束するような平面形を呈し、西側縁辺では底面で溝状を成している。おそらく水流による自然な溝状の落ち込みであり、旧来の地形を反映したものと考えられる遺構である。

埋土は上部が黄灰～褐色の微砂・シルトの互層堆積、下部では南辺溝状底面へ落ち込む灰～灰褐色細砂・粗砂層が最深部で0.5m程度の堆積を呈していた。埋土より器面摩滅のすすむ土器片が出土しているが、ほとんどは南辺から西辺寄り下方への堆積層からである。

溝SD01

調査区北辺で検出した東西方向の溝である。溝の南岸のみ検出したに留まり、幅1.8～2.8m程度を確認したに過ぎない。北岸が調査区外におよぶために明確な溝幅は不明である。

埋土は上面覆土となる第Ⅲ層（遺物包含層）以下で、上半上部には前述の落ち込みSX01埋土と同等の黄灰～褐色の微砂・シルトのブロック堆積の混じる灰褐色細砂層が層厚0.2～0.4mで堆積し、以下は溝底面までに灰色粗砂～砂礫が0.5m程度の深さで見られた。いずれも水流を伴う堆積層と思われ溝底は西側に傾斜して下降する。これらの埋土中には溝底付近から上部堆積層にまで器面摩滅の著しい土器片が多く含まれていた。

下層自然流路

調査区南半の東西縁辺深堀トレンチと土層断面により断片的に確認した下層の自然流路である。深さは、第Ⅲ層（遺物包含層）下面の遺構検出面から最深部までで約0.5mである。埋土は灰色微砂・シルト・粘土で、遺物は極めて少ないが砂粒を多く含む縄文後・晩期のものと思われる低温焼成の土器片やサヌカイト剥片などが出土している。下面には調査区北で確認した基盤層上に部分堆積を成す灰色砂礫層が確認されている。

３．出土遺物

今回の調査では、第Ⅲ層（遺物包含層）および各遺構埋土から古墳前期初頭の土器を主体とした遺物が出土している。総数は遺物コンテナにして約５箱程度である。

以下、図示したものについて概観することにする。

土器類（図３～４中段・表１～２）

１は、調査区中央南寄り西側縁辺の中世溝出土の土師質羽釜である。精良な胎土の白色系の土器であり、概ね中世後期前半頃に帰属する。

２～26はいずれも第Ⅱ層（床土）下部～第Ⅲ層（遺物包含層）より出土している。

２は須恵器壺の口縁部小片である。やや大型の広口壺と思われる。

３～10は埴輪片である。焼成は良好なものが多く一部に須恵質のものも含まれる。外面にヨコハケの残るものもあり、全体としては５世紀末～６世紀代にかけてのものである。

11は有段口縁の小型壺である。口縁端を短く外側に屈曲させる点が特徴的である。12の直口壺は口縁端の内面肥厚した形状により布留式土器の特徴が見られるものである。

13の甕形土器では、短く屈曲外反した口縁部と内面ケズリが特徴となるが、形態的に北陸北東部系の要素が見える外来系土器である。

14・15はいずれも庄内式後半～末頃の庄内型甕である。口縁端部の形状には幾つかの形態差が認められるが、基本的に内面ヘラケズリにより器壁は薄く仕上げられている。

16は受け口状口縁の近江系甕である。口縁部の細部形状と胎土の特徴から湖東地域からの搬入品で

あると思われる。。

17は大型鉢の口縁部片である。口縁端部は斜めに垂下して面をもつ。

18・19は高杯脚部片である。脚柱部の残る18では庄内式の高杯の形態が見られ、19の脚裾部片には外面のミガキと内面のハケ調整が明瞭である。

20は脚裾部を欠く小型器台である。受部の外面にはケズリが施されている。典型的な庄内式土器の器台である。

21～26は底部片である。21には底部に穿孔が認められる。23・24はおそらく壺の底部である。22・25は外面に右上がりのタタキが残る弥生後期型叩き甕の底部である。26はおそらく大型壺の底部となるものであるが、高台のように粘土帯を貼付けた底部の製作手法に特色が見える。

27～38は落ち込みSX01の埋土より出土した土器群である。庄内式土器の新相を呈する土器が多数を占める。

27はかなり大型の壺である。内傾直立の頸部形状から瀬戸内系の有段複合口縁壺かと思われる。

28・29・31はいずれも庄内式土器新相の甕型土器である。28・29は外面ハケ調整の布留傾向型甕、口縁端を欠く破片の31は庄内大和型甕である。31には庄内大和型甕のみに稀に認められる矢羽根状タタキ目が施されている。30の小片は受け口状口縁の近江系甕である。

32・33は甕あるいは壺の底部片、35～38は各種高杯の破片である。

36・37は庄内式土器に特有な椀型低脚杯である。

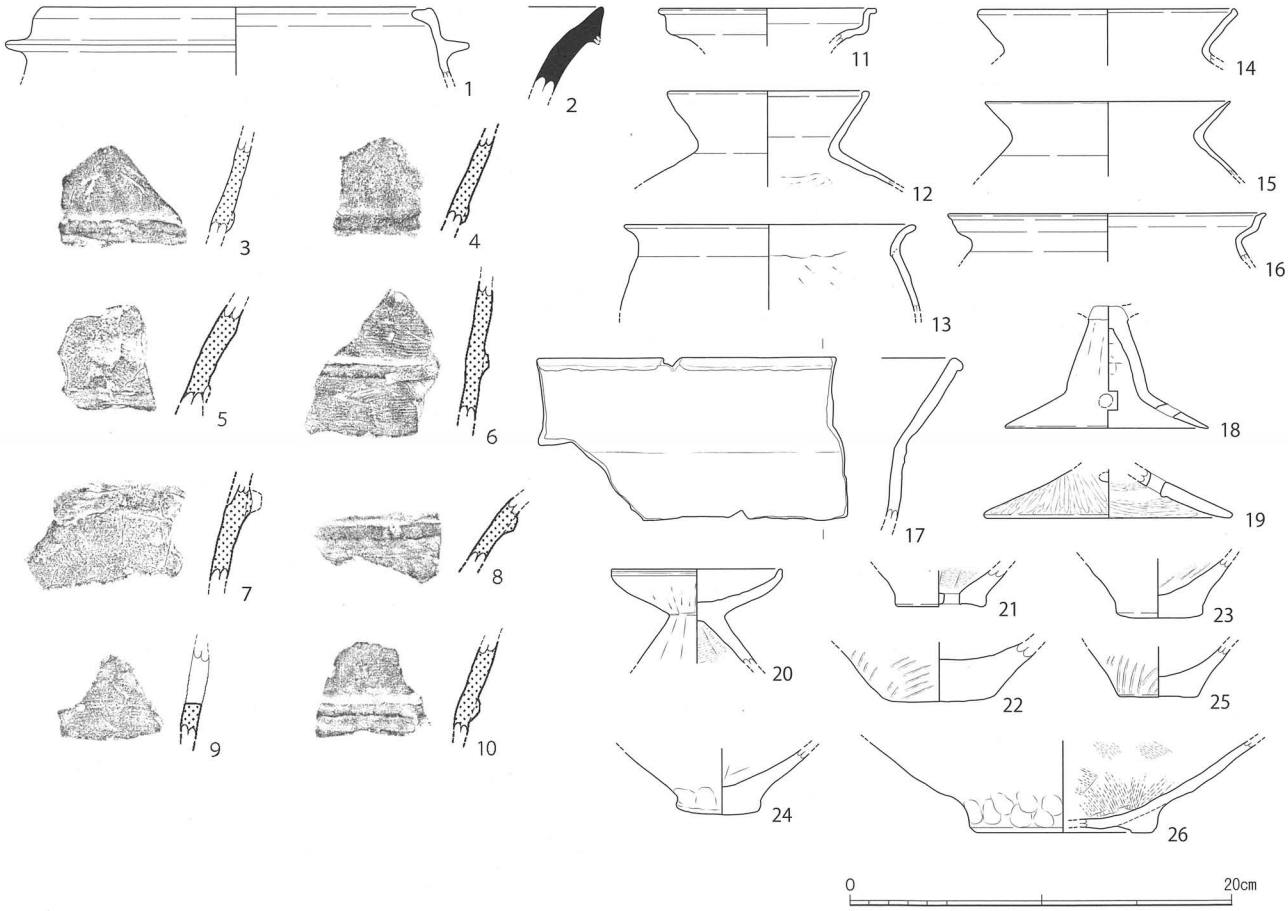


図３　出土遺物実測図１（S＝1/4）

34は扁平な形態の丸底鉢である。布留式初頭の小型丸底壺に近い器形を呈するもので粗製品である。

39～54は溝SD01の埋土出土土器である。弥生後期型の叩き甕や平底の底部も含まれ、落ち込みSX01出土土器群よりも古相の土器を若干量含む土器群と考えられる。

39～40は布留式傾向型甕である。いずれも内面には明確なケズリ調整が施され器壁は薄い。39にのみ外面のハケ調整が残る。

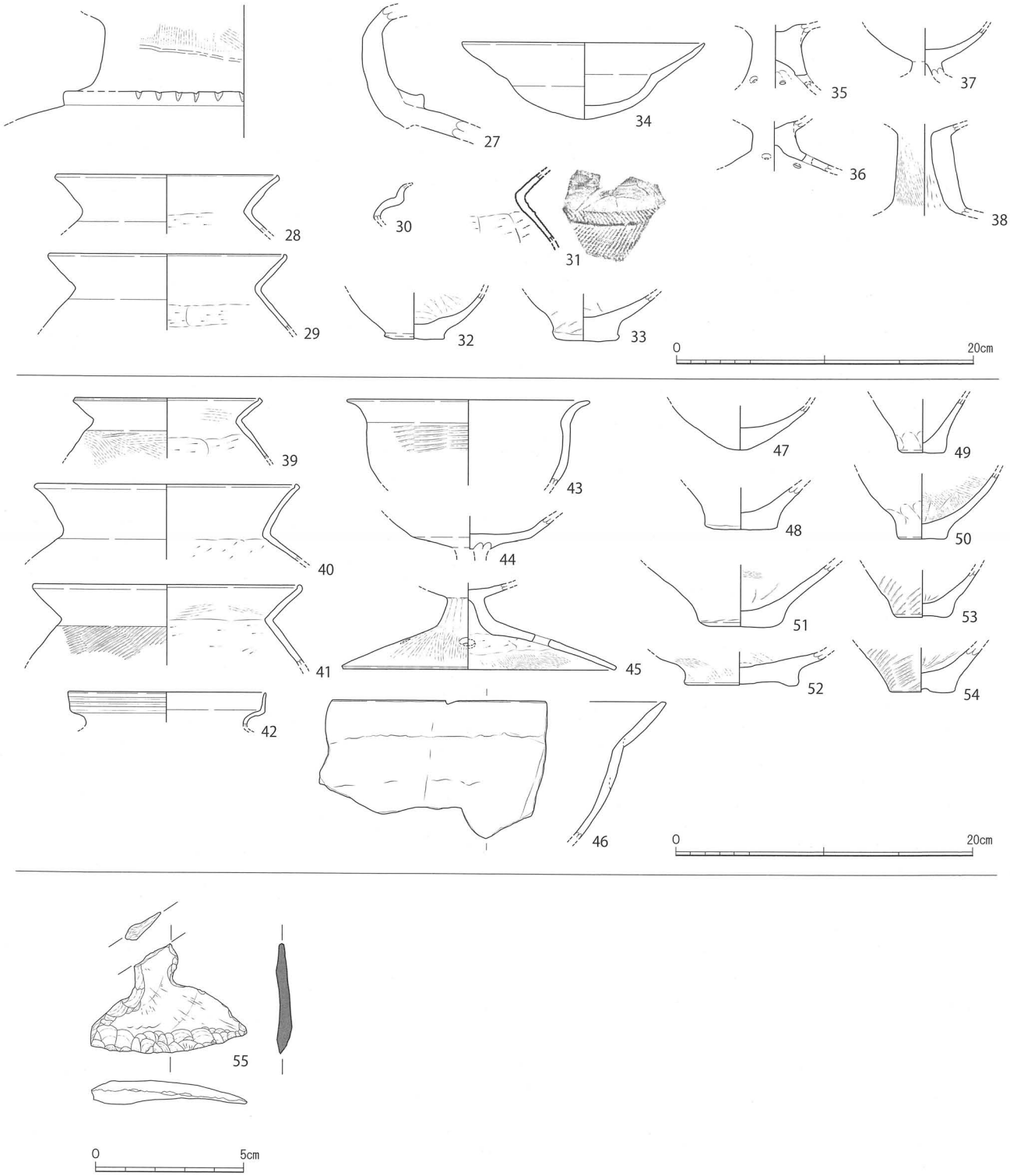


図４　出土遺物実測図２（S＝1/4）

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率	備考
					口径・底径	器高(現存高)		
1	土師質羽釜	2.5Y8/2 灰白	密	良好	20.2	3.5	口縁部 1/6	中世土器（15C初）
2	須恵器 壺	N6/ 灰	密	良好	—	—	—	
3	円筒埴輪	7.5YR7/6 橙	密	良好	—	—	—	
4	円筒埴輪	7.5YR8/6 浅黄橙	密	良好	—	—	—	
5	円筒埴輪	5YR6/6 橙	密	良好	—	—	—	一部剥離
6	円筒埴輪	7.5YR8/8 黄橙	密	良好	—	—	—	内面指頭圧痕有り
7	円筒埴輪	10YR8/6 黄橙	密	良好	—	—	—	
8	円筒埴輪	10YR8/2 灰白	密	良好	—	—	—	
9	円筒埴輪	10YR8/4 浅黄橙	密	良好	—	—	—	円形の透かし孔 内面指頭圧痕有り
10	円筒埴輪	10YR8/3 浅黄橙	密	良好	—	—	—	内面指頭圧痕有り
11	二重口縁壺	10YR8/4 浅黄橙	密	良好	11.2	2.0	口縁部 1/4	
12	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良好	10.2	5.0	口縁部 1/5	
13	甕	10YR8/2 灰白	密	良好	15.0	4.5	口縁部 1/12	北陸北東部系？
14	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良好	13.2	3.0	口縁部 1/5	布留式傾向型甕
15	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密	良	22.8	3.9	口縁部 1/5	布留式傾向型甕
16	甕	2.5Y8/2 灰白	密	良好	16.5	2.5	口縁部 1/12	近江系受口状口縁甕
17	大型鉢	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良好	46.4	8.6	口縁部 1/16	
18	高杯	5YR6/6 橙	密	良好	10.6	6.5	脚柱部 完存 脚裾部 1/3	３方向に円孔
19	高杯	7.5YR6/4 にぶい橙	密	良好	12.6	2.6	底部 3/8	円孔有り
20	小型器台	10YR8/4 浅黄橙	密	良好	8.9	5.0	口縁部 1/4	
21	底部	10YR6/6 明黄褐	密	良好	4.6	1.9	底部 ほぼ完存	底部に穿孔
22	底部	10YR8/1 灰白	密	良好	5.9	3.2	底部 完存	
23	底部	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	やや良	4.5	3.1	底部 1/2	
24	底部	10YR8/3 浅黄橙	密	良好	4.1	3.5	底部 完存	
25	底部	2.5YR7/6 橙	密	良好	4.0	2.7	底部 1/2	
26	底部	10YR7/4 にぶい黄橙	密	良好	9.0	4.8	底部 1/3	
27	大型壺	10YR7/4 にぶい橙	やや密	良好	—	9.0	頸部 1/8	西部瀬戸内系

表１　出土遺物（土器類）観察表１

28	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	密	良好	14.7	3.9	口縁部　1/5	布留式傾向型甕
29	甕	7.5YR7/8 黄橙	やや密	良	15.7	5.1	口縁部　1/3	布留式傾向型甕
30	甕	7.5YR8/1 灰白	密	良好	—	—	—	近江系受口状口縁甕
31	甕	10YR8/3 浅黄橙	密	良好	—	—	頸部　1/8	庄内大和型甕　外面矢羽根状叩き目
32	底部	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	3.8	3.1	底部　完存	
33	底部	7.5YR8/3 浅黄橙	密	良好	4.5	3.2	底部　ほぼ完存	
34	小型丸底鉢	10YR8/3 浅黄橙	密	良好	16.3	5.2	口縁部　1/3	
35	高坏脚部	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密	良好	—	4.3	脚柱部　完存	３方向に円孔
36	高杯脚部	10YR8/2 灰白	密	良好	—	3.4	脚柱部　完存	円孔有り
37	高杯坏部	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良好	—	3.2	杯部下半　完存	
38	器台脚部	10YR7/3 にぶい黄橙	密	良好	—	6.2	脚柱部　完存	
39	甕	10YR5/3 にぶい黄褐	密	良好	12.4	4.1	口縁部　1/4	布留式傾向型甕
40	甕	7.5YR6/6 橙	密	良	17.6	5.1	口縁部　1/4	布留式傾向型甕
41	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良	17.7	5.6	口縁部　1/8	庄内河内型甕
42	甕	7.5YR8/6 浅黄橙	やや密	良好	13.2	2.4	口縁部　1/4	吉備系甕
43	鉢	10YR6/2 灰黄褐	密	良好	16.2	5.9	口縁部　1/12	
44	高杯杯部	5YR6/8 橙	密	良好	—	2.2	杯底部のみ完存	
45	高杯脚部	10YR8/1 灰白	密	良好	18.1	5.9	脚裾部　1/3	４方向に円孔
46	大型鉢	7.5YR7/4 にぶい橙	密	良好	—	9.4	口縁部　1/16	
47	鉢	10YR7/2 にぶい黄橙	密	良好	—	3.0	底部　完存	
48	底部	10YR8/3 浅黄橙	密	良好	4.8	2.8	底部　完存	
49	底部	7.5YR7/8 黄橙	密	良好	3.1	3.6	底部　完存	
50	底部	10YR8/2 灰白	密	良好	3.4	4.4	底部　完存	
51	底部	10YR7/2 にぶい黄橙	やや密	良	5.5	4.2	底部　完存	
52	底部	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良好	7.7	2.3	底部　ほぼ完存	
53	底部	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	良	3.8	3.2	底部　ほぼ完存	
54	底部	10YR5/2 灰黄褐	やや密	良好	4.5	3.0	底部　ほぼ完存	

表２　出土遺物（土器類）観察表２

41は角閃石と雲母を含む胎土をもつ生駒西麓産の庄内河内型甕である。外面には細筋の右上がりタタキが見られ、庄内式でも新相に位置付けられる特徴を示す。

42は吉備地方からの搬入による有段口縁甕である。やや直立気味の口縁部形態と外端面の擬凹線より庄内式期前半頃に併行する時期の土器と思われる。

外面タタキの鉢43は弥生後期型の鉢である。後述の叩き甕底部とともに溝SD01出土土器でも古相の遺物となる。

44の高杯は杯底部の径が小さく、明瞭な稜を境に立ち気味に開く杯部形状のものである。庄内式期末～布留式初頭に多い形態である。

脚台部分のみ残る45は椀形低脚杯となる。脚柱部の稜が明瞭な形態的に庄内式でも新相を呈するものである。

46の断片は、単純な屈曲口縁の大型鉢である。外面には粘土紐接合痕とナデ調整が残る。

47～54は底部片である。47～52は外面の調整と形態からおそらく壺の底部となる。47のみ小さな平底を残す。53・54は叩き甕の底部で内面には板ナデ工具圧痕が見られる弥生後期型甕である。

石器類（図４下段）

石器では、第Ⅲ層（遺物包含層）、下層自然流路埋土上部よりサヌカイト製の剥片、成品がわずかながら出土している。ここでは１点のみ図示した。

55は石匙である。全体的に灰色がかかった色調を呈し、若干の器面風化が認められる。上端面には素材となるサヌカイトの礫面が残り、基部の下端付近には打ち欠きによる抉りが整形される。刃部は両面からの調整剥離によりやや弧状に仕上げられている。形態的な特徴からおそらく縄文後・晩期頃のものと考えられる。第Ⅲ層（遺物包含層）より出土している。

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、谷状の自然地形を主としながらも旧地形を反映し、古墳出現期の庄内・布留式土器を包含する砂層堆積や溝状遺構が検出されている。

集落としての機能を示す遺構はほとんど確認されることが無かったが、西方に近接した馬口山古墳との関連という視点では同時期性が窺える基盤集落の存在を想起させる結果が得られたと言える。

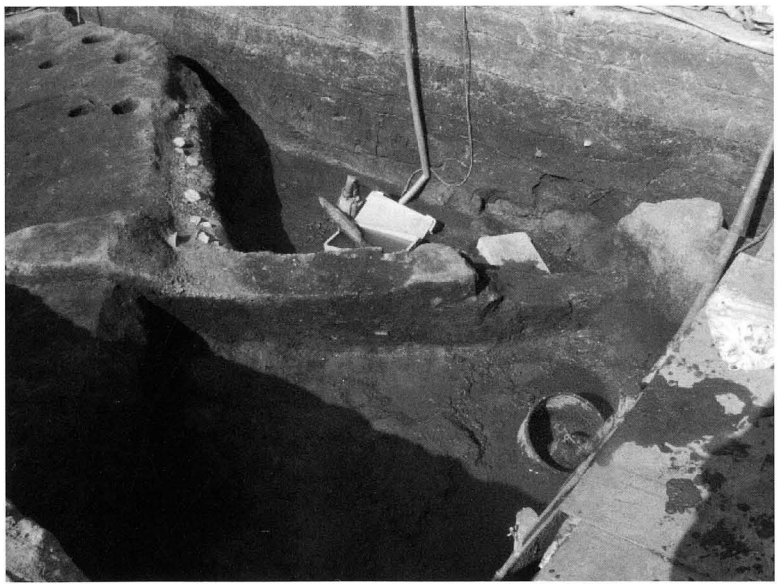
具体的には、調査地の東方緩斜面上での集落の立地と展開が想定されるが、そうした初期古墳築造前後の時期における地形、環境等の変化についても新たな知見が得られたと言えよう。

西調査区全景（北から）

西調査区全景（南から）

大溝ＷＳＤ02と
上面の土坑ＷＳＫ002検出状況（南から）

土坑ＷＳＫ002遺物出土状況（西から）

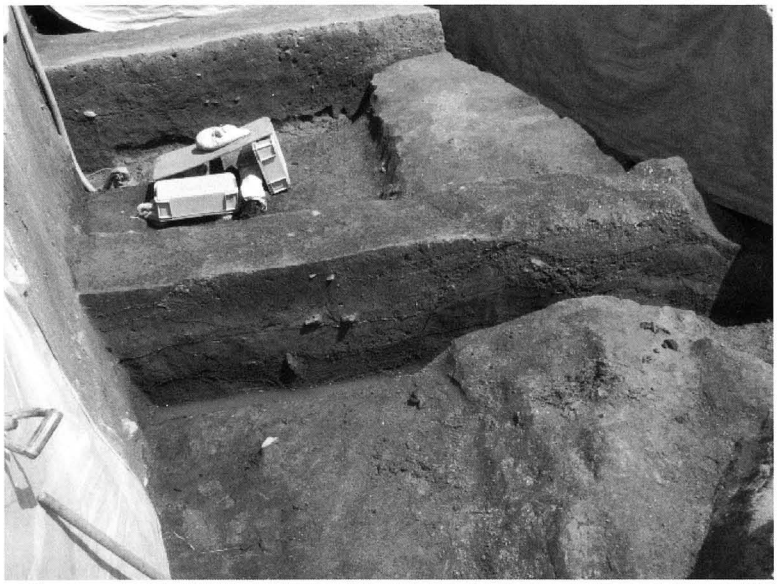


大溝ＷＳＤ02完掘状況（南西から）

西調査区北半　遺構検出状況（北から）

西調査区北半　遺構検出状況（南から）

大溝ＷＳＤ01完掘状況（北から）



自然河道ＷＮＲ01完掘状況（北から）

自然河道ＷＮＲ01完形土器出土状況（東から）

西調査区東壁土層断面（西南から）

井戸ＷＳＫ003断ち割り状況（南から）

井戸ＷＳＫ003掘り方底面の状況（南西から）

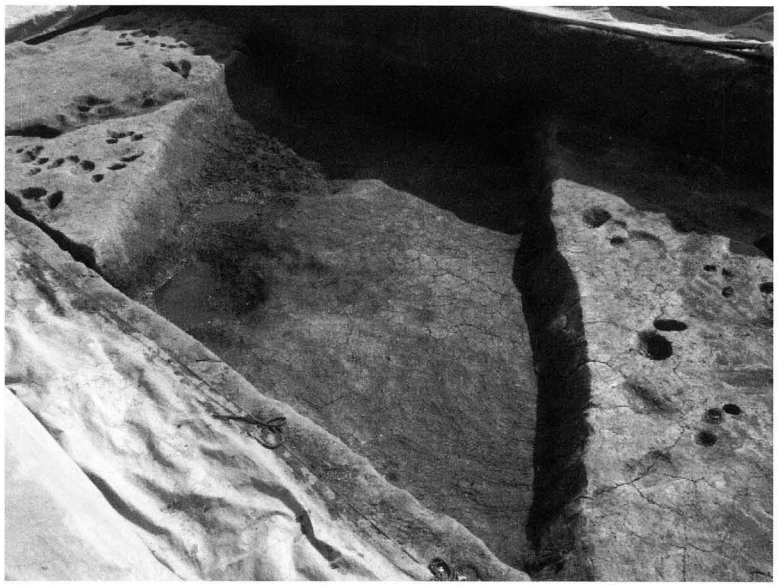
井戸ＷＳＫ003断ち割り・完掘状況（南西から）

東調査区全景（南から）

東調査区遺構検出状況（北から）

古墳周濠ＳＸ01検出状況（北から）

古墳周濠ＳＸ01完掘状況（南西から）



大溝ＥＳＤ02完掘状況（北東から）

大溝ＥＳＤ01完掘状況（南西から）

大溝ＥＳＤ03遺物出土状況（西から）

大溝ＥＳＤ03
底面付近の遺物出土状況（西から）

大溝ＥＳＤ03
底面付近の遺物出土状況（西北から）